山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第185集

塩瀬下原遺跡

―桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査―

2000.12

山梨県教育委員会
山梨県土木部

塩瀬下原遺跡

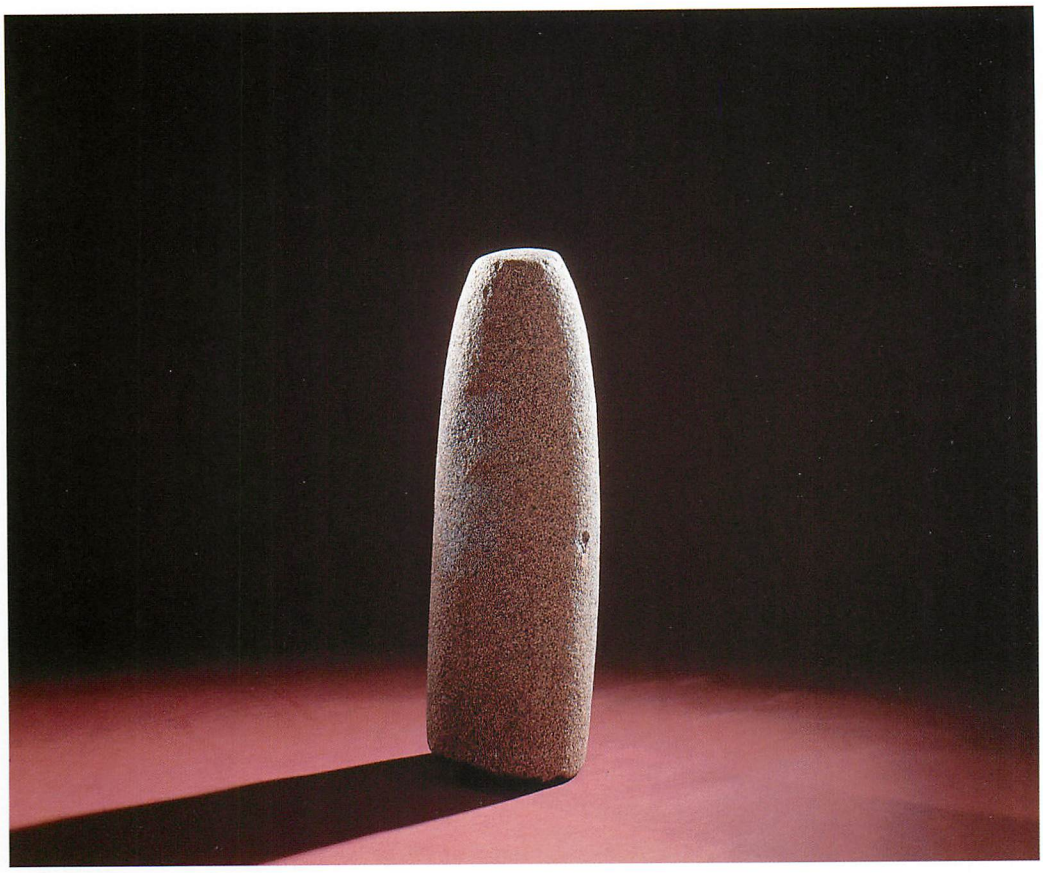
― 桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査 ―

2000.12

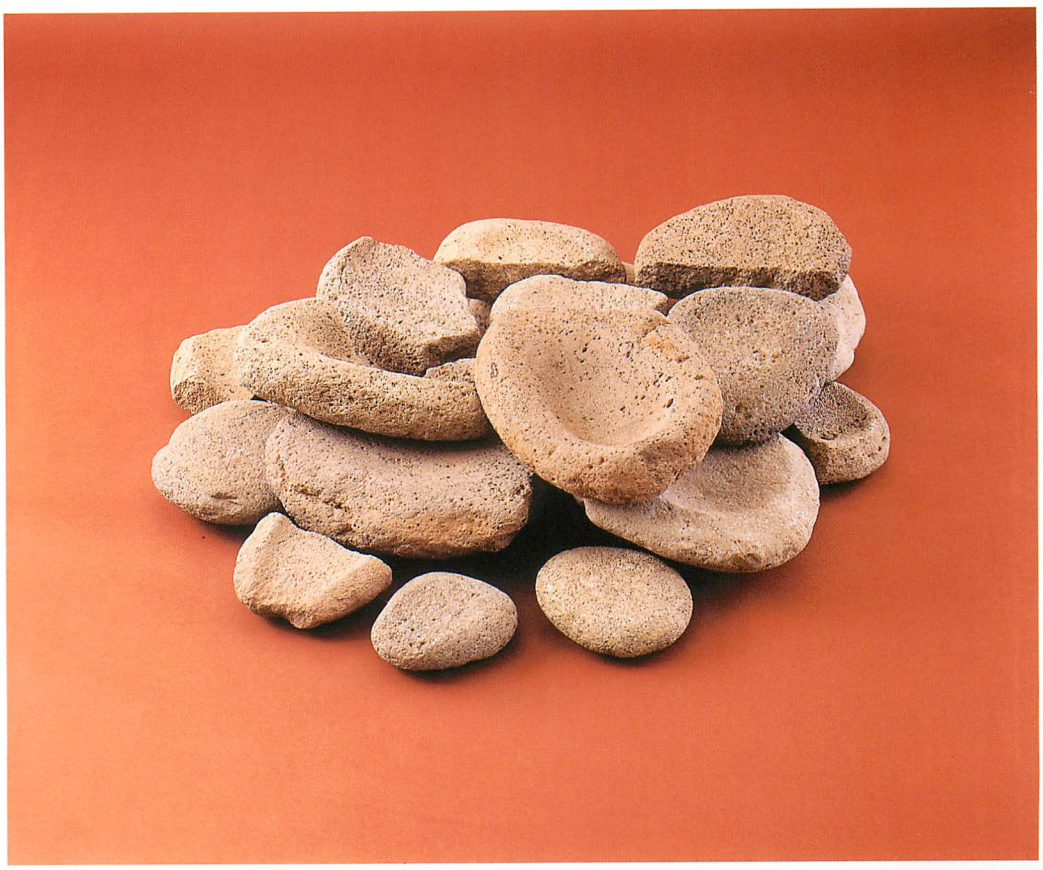
山梨県教育委員会
山梨県土木部

埋設土器類

石斧・石匙類



大型石棒



石皿類

序　文

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成７・８・９年度に発掘調査を実施した桂川流域下水道終末処理場建設に伴なう塩瀬下原遺跡の発掘調査報告書であります。

遺跡は山梨県東部の大月市梁川町塩瀬字下原に所在し、忍野八海周辺を源として途中、相模川と名前を変化させ相模湾に注ぐ桂川の右岸に形成された大規模な河岸段丘の中位に位置しております。この桂川流域には大規模な縄文時代遺跡が点在するところとして古くから知られており、中でも中谷遺跡や大月遺跡などは数次に渡る調査がなされ、そこから検出された多くの出土などは縄文時代研究に強い影響を与えたと言っても過言ではありません。こうした中、今回の塩瀬下原遺跡の発掘調査では、縄文時代中期後半から後期にかけての大小の配石遺構や埋設土器、土器・石器類などが多数発見され各方面から注目を集めました。これらの資料をみてみますと甲府盆地と西関東周辺の文化の中間地点にあたるためか双方の影響が如実に現れているように思われます。果たしてこれらは如何なる意味を持っていたのか非常に興味深い問題であると言えるでしょう。今後、この報告書の成果が多くの研究の一助になれば幸甚であります。

末筆ではありますが、数々の御協力を賜りました関係機関各位、地元の方々並びに発掘調査と整理作業に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2000年12月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　大　塚　初　重

例言・凡例

1　本報告書は、1995･1996・1997年度（平成７・８・９年度）に桂川流域下水道終末処理場建設に伴い発掘調査された、大月市塩瀬下原遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡は、大月市梁川町塩瀬地区にあり、さらに遺跡が展開される段丘中位の字名が下原であることから名称を塩瀬下原（しおせしたっぱら）遺跡とすることとした。

3　発掘調査は、山梨県土木部の委託を受けて山梨県教育委員会が実施した。

4　発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターで行い、吉岡弘樹・深沢容子が担当した。

5　本報告書の編集は吉岡が担当した。

6　写真は、遺構を吉岡・沢登正仁・大庭　勝・萩原孝一が遺物は塚原明生が撮影した。

7　発掘調査に伴う委託事業および委託先は次のとおりである。
　写真測量：株式会社パスコ
　出土遺物写真撮影：塚原明生（塚原フォトスタジオ）

8　発掘調査および整理作業においては、次の方々・機関よりご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略・順不同）
　大月市教育委員会　志村勝之　志村和善　矢羽根賢　上條弥三郎　鈴木武雄　小俣文雄　民宿やまみち

9　本報告書の挿図等に関する指示は下記のとおりである。
　主要な遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に次のとおりであるが、資料などの大きさにより適宜、縮尺に変化を持たせてある。また、これ以外の遺物ドットマークなどの指示については図中に示してある。
　遺構　住居跡：１／60　土坑：１／30　炉址：１／20　埋設土器：１／20
　　配石：１／40　１／60
　遺物　土器類および拓影：１／３　１／６　石器類：１／４　１／６

10　本報告書に関わる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

目　　次

序

例言

第１章　調査の経緯と組織 …… 1

　第１節　調査にいたる経緯 …… 1

　第２節　調査組織 …… 1

第２章　遺跡の概観 …… 2

　第１節　地理的環境 …… 2

　第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査方法と基本層序 …… 4

　第１節　調査方法 …… 4

　第２節　基本層序 …… 6

第４章　発見された遺構と遺物 …… 7

　第１節　住居跡 …… 7

　第２節　土　坑 …… 30

　第３節　集石土坑 …… 66

　第４節　炉　址 …… 70

　第５節　埋設土器 …… 81

　第６節　配　石 …… 105

　第７節　石器製作址 …… 124

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　試掘調査トレンチ開口位置図
第３図　調査区全体図
第４図　基本層序柱状図
第５図　住居跡配置図
第６図　第１号住居跡
第７図　第１号住居跡出土遺物
第８図　第２号住居跡
第９図　第３・４号住居跡１
第10図　第３・４号住居跡２
第11図　第３・４号住居跡炉
第12図　第３・４号住居跡微細図
第13図　第３号住居跡出土遺物１
第14図　第３号住居跡出土遺物２
第15図　第４号住居跡出土遺物
第16図　第５号住居跡
第17図　第５号住居跡炉
第18図　第５号住居跡出土遺物１
第19図　第５号住居跡出土遺物２
第20図　第６号住居跡
第21図　第６号住居跡炉
第22図　第５号住居跡出土遺物
第23図　第７・８号住居跡
第24図　第７・８号住居跡埋甕
第25図　第７・８号住居跡炉
第26図　第７・８号住居跡上配石
第27図　７・８号住居跡出土遺物
第28図　第９号住居跡
第29図　第９号住居跡炉
第30図　第９号住居跡出土遺物１
第31図　第９号住居跡出土遺物２
第32図　第10号住居跡
第33図　第10号住居跡
第34図　第10号住居跡炉
第35図　第10号住居跡敷石
第36図　第10号住居跡　出土遺物１
第37図　第10号住居跡　出土遺物２
第38図　第11号住居跡
第39図　第11号住居跡炉
第40図　第11号住居跡　出土遺物
第41図　第12号住居跡
第42図　土坑配置図
第43図　第１～６号土坑
第44図　第７号土坑
第45図　第７号土坑出土遺物
第46図　第８～12号土坑
第47図　第13～15号土坑
第48図　第13号土坑出土遺物
第49図　第14・15号土坑出土遺物
第50図　第16～23号土坑
第51図　第18号土坑出土遺物
第52図　第24～29号土坑
第53図　第24号土坑出土遺物
第54図　第30～37号土坑
第55図　第30号土坑出土遺物
第56図　第31号土坑出土遺物
第57図　第33号土坑出土遺物
第58図　第30号土坑出土遺物１
第59図　第30号土坑出土遺物２
第60図　第35～41号土坑
第61図　第37号土坑出土遺物
第62図　第39号土坑出土遺物
第63図　第42～50号土坑
第64図　第43号土坑出土遺物
第65図　第51～57号土坑
第66図　第58～63号土坑
第67図　第60号土坑出土遺物
第68図　第64～70号土坑
第69図　第64号土坑出土遺物
第70図　第71～76号土坑
第71図　第71号土坑出土遺物
第72図　第77～86号土坑
第73図　第87～95号土坑
第74図　第86～90号土坑出土遺物
第75図　第91号土坑出土遺物
第76図　第93号土坑出土遺物
第77図　第94・95号土坑出土遺物１
第78図　第94・95号土坑出土遺物２
第79図　第96～100号土坑
第80図　第98号土坑出土遺物
第81図　第101号土坑
第82図　第102・103号土坑
第83図　第104号土坑
第84図　第105～107号土坑
第85図　第108・109号土坑
第86図　第110・111号土坑
第87図　第112号土坑
第88図　第112号土坑出土遺物
第89図　第113号土坑
第90図　第113号土坑出土遺物
第91図　集石土坑配置図
第92図　第１～３号集石土坑
第93図　第４・５号集石土坑
第94図　第５号集石土坑出土遺物
第95図　第６号集石土坑
第96図　炉址配置図
第97図　第１～５号炉
第98図　第２号炉出土遺物

第99図　第６・７号炉
第100図　第８～10号炉
第101図　第11・12号炉
第102図　第13・14号炉
第103図　第15・16・17号炉
第104図　第15号炉出土遺物
第105図　第18・19号炉
第106図　第20・21号炉
第107図　第20号炉出土遺物
第108図　第21号炉出土遺物
第109図　埋設土器配置図
第110図　第１・２号埋設土器
第111図　第３～６号埋設土器
第112図　第７～12号埋設土器
第113図　第１～９号埋設土器
第114図　第13～15号埋設土器
第115図　第16～20号埋設土器
第116図　第21号埋設土器
第117図　第22～24号埋設土器
第118図　第10～22埋設土器
第119図　第25～27号埋設土器
第120図　第28～31号埋設土器
第121図　第32～34号埋設土器
第122図　第35～37号埋設土器
第123図　第23～37号埋設土器
第124図　第38号埋設土器
第125図　第39号埋設土器
第126図　第40～43号埋設土器
第127図　第38～43埋設土器
第128図　配石配置図
第129図　第１～７号配石
第130図　第１～７号配石
第131図　第４号配石出土遺物
第132図　第８号配石
第133図　第９号配石
第134図　第９号配石出土遺物
第135図　第10号配石
第136図　第11号配石
第137図　第11号配石出土遺物
第138図　第12号配石
第139図　第13号配石
第140図　第１～３号配石墓出土遺物１
第141図　第３号配石墓出土遺物
第142図　第14号配石
第143図　第14号配石出土遺物
第144図　第15・16号配石
第145図　第17号配石
第146図　第17号配石内埋甕
第147図　第17号配石出土遺物
第148図　第18号配石
第149図　第19号配石
第150図　第20号配石
第151図　第20号配石出土遺物１
第152図　第20号配石出土遺物２
第153図　石器製作址配置図
第154図　石器製作址１
第155図　石器製作址２
第156図　石器製作址出土遺物１
第157図　石器製作址出土遺物２
第158図　石器製作址出土遺物３
第159図　遺構外出土遺物１
第160図　遺構外出土遺物２
第161図　遺構外出土遺物３
第162図　遺構外出土遺物４
第163図　遺構外出土遺物５
第164図　遺構外出土遺物６
第165図　遺構外出土遺物７
第166図　遺構外出土遺物８
第167図　遺構外出土遺物９
第168図　遺構外出土遺物10
第169図　遺構外出土遺物11
第170図　遺構外出土遺物12
第171図　遺構外出土遺物13
第172図　遺構外出土遺物14
第173図　遺構外出土遺物15
第174図　遺構外出土遺物16
第175図　遺構外出土遺物17
第176図　遺構外出土遺物18
第177図　遺構外出土遺物19
第178図　遺構外出土遺物20
第179図　遺構外出土遺物21
第180図　遺構外出土遺物22
第181図　遺構外出土遺物23
第182図　遺構外出土遺物24
第183図　遺構外出土遺物25
第184図　遺構外出土遺物26
第185図　遺構外出土遺物27
第186図　遺構外出土遺物28
第187図　遺構外出土遺物29
第188図　遺構外出土遺物30
第189図　遺構外出土遺物31
第190図　遺構外出土遺物32
第191図　遺構外出土遺物33
第192図　遺構外出土遺物34
第193図　遺構外出土遺物35
第194図　遺構外出土遺物36
第195図　遺構外出土遺物37
第196図　遺構外出土遺物38
第197図　遺構外出土遺物39
第198図　遺構外出土遺物40

写　真　目　次

写真１　表土剥ぎ風景（平成８年度）
写真２　Ａ地点トレンチ

写真図版目次

写真１　調査地遠景　調査区域
写真２　調査区域
写真３　調査対象地　他
写真４　住居跡
写真５　住居跡
写真６　住居跡
写真７　土　坑
写真８　土　坑
写真９　土　坑
写真10　土坑　集石土坑　炉
写真11　炉　埋設土器
写真12　埋設土器
写真13　埋設土器　配石
写真14　配石　石器製作址
写真15　調査風景　他
写真16　住居跡出土遺物
写真17　住居跡出土遺物
写真18　住居跡　土坑出土遺物
写真19　土坑出土遺物
写真20　土坑出土遺物
写真21　埋設土器
写真22　埋設土器
写真23　埋設土器
写真24　埋設土器　配石出土遺物
写真25　配石出土遺物
写真26　配石　石器製作址出土遺物
写真27　遺構外出土遺物
写真28　遺構外出土遺物
写真29　遺構外出土遺物
写真30　遺構外出土遺物
写真31　遺構外出土遺物

第１章　調査の経緯と組織

第１節　調査にいたる経緯

平成５年に全体計画が策定され平成22年の完成を目指した桂川流域下水道終末処理場建設に伴って、1994年1月17日～24日・10月24日～12月28日の二次にわたる試掘調査がなされた（第２図）。その結果として第１～第５地点での土層観察では、縄文時代中期から後期の非常に多量な土器片や２基の土坑などが検出された（第一次試掘調査）。また、沢を挟んで東側のエリアでは、第６～第21まで16箇所で土層の観察を実施した（第二次試掘調査）。この地区は、戦後かなりの規模で土地の改修が行われたことが要因となり、良好な土層の確認や遺物・遺構の検出は認められなかった。これによって朧気ながらではあるが第１～第５地点の大月市梁川町塩瀬地内に約20,000㎡にわたる縄文時代中期から後期の遺跡が展開されることが確認された。ここから得られたデータを参考として1995年より３年間、総面積12,800㎡にもおよぶ第一次発掘調査が開始されることとなった。調査は未買収地に影響を及ぼさないよう考慮しながら東側の買収の終了した区域から順次、実施された（第３図・95年度－1995年５月15日～1996年３月29日・第Ⅰ・Ⅱ地点－5,065㎡、96年度－1996年５月15日～12月26日・第Ⅲ・Ⅳ地点－6,320㎡、97年度－1997年４月22日～12月25日・第Ⅴ・Ⅵ地点－4,960㎡）。

なお、整理作業は1998年４月～2000年３月までの二箇年間実施され、報告書は翌年度の2000年度に印刷された。

第２節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　（山梨県埋蔵文化財センター　文化財主事）

	1995年度	1996年度	1997年度
吉岡弘樹	○	○	○
沢登正仁	○		
大庭　勝		○	
萩原孝一			○

調査員　永田勤昭　奥山和久

作業員　甘利文代　天野きみ子　天野美津子　奥秋英子　天野サヨ子　甘利とよ子　甘利森枝　小笠原ヨウ子　天野サヨ子　天野駿一　秋山幸良　天野亀一　石塚義弘　石塚敏子　小俣孝子　甘利清臣　天野宇吉　天野カツヨ　天野春善　天野藤吉　小俣初枝　久嶋由美子　上條邦子　小林悦子　久嶋スミ　小林重成　佐々木さゆり　清水末子　鈴木忠男　佐野洋介　鈴木信子佐々木くに子　佐々木八重子　佐藤イネ　杉田イト江　佐藤明信　坂本ふく代　坂本君子　志村とし子　佐藤久義　佐藤美千代　田代光男　田代久子　山崎公江　渡辺和子　渡辺慶子　平本香代

整理員　天野亀一　天野きみ子　天野駿一　小俣靖子　米山美智子　名取洋子　長田久江　内藤由紀子　斉藤永司　西室智津子　平本香代　長田美香　長田綾　田中めぐみ　市川路　小菅春江

第２章　遺跡の概観

第１節　地理的環境

大月市は、山梨県東部地域第二を誇る人口約３万４千人の都市である。東端は、海抜1.311ｍの権現山から上野原町に、西は大菩薩山系の支脈である小金沢山系と、三ッ峠より北上する支脈によって東八代郡、東山梨郡、塩山市と境界を接している。南方は、御坂山塊の支脈を形成する高川山などと桂川に平行して東西方向に連なる九鬼山、倉岳山とによって都留市、南都留郡と境界している。さらに北側は、大菩薩山系から東に延びる支脈によって小菅村と接している。また、その広さは東西27.1㎞・南北19.8㎞・面積280.4㎢と広域で山梨県総面積の6.4％を占めている。しかし、その広域な面積も約80％は山林や原野であり、残り約20％が耕作地や住宅地等に利用されているに過ぎない。塩瀬下原遺跡は、この大月市の東端部に当たる梁川町塩瀬字下原（海抜約237.5ｍ）に所在している。梁川町地域は、忍野八海付近を源とし、相模湖を経由して平塚市から相模湾に注ぐ桂川（相模川）によって右岸に大規模な河岸段丘が発達している様子が手に取るように分かる所として古くから花井重次氏をはじめ古くから多くの研究者によって研究が進められ、地理の教科書などの書籍で紹介されてきた。

桂川本流に沿って分布する河岸段丘は、段丘面の高度、堆積物の特徴などから、高位段丘・中位段丘・低位段丘に区分されている。高位段丘（大椚面・葛原面）の分布は、桂川本流沿いにはほとんどみることができない。わずかに梁川町網之上の対岸海抜約235ｍに分布しているのみである。中位段丘は、第Ⅰ面である鳥沢面・上野原面と中位段丘Ⅱ面と三つに分類でき、各地域において良好な発達が観察できる。特に、鳥沢面は、広域に渡り、梁川町地区では下流部から新倉、金畑・塩瀬、網之上、彦田・斧窪と続く。低位段丘は、桂川沿いに上流より猿橋まで分布する大月面と梁川町清水地区段下や強瀬、浅利などに広がる鶴島面に大別されている。これらの段丘を土地利用の面からみてみると、約50年前の状況では水利を生かして水田経営に多く利用されている低位段丘、水利が充分でなかったために畑地や桑畑として利用されてきた中位段丘と利用状況が異なっていた様子が分る。しかし、20年ほど前から養蚕などの衰退から大月市の耕地が占める割合が減少し始めこれまでの耕作地が放棄されていく傾向がみられはじめている。

遺跡のある梁川町塩瀬下原地域からの様子をみてみることとする。遺跡のある段丘平坦部は、桂川に急峻な傾斜を持って下る幾筋かの深い沢によって分断されている。周囲に目を向けると南東から南西方向にかけて丹沢山塊の西端にあたり、かつ御坂山系の支脈を形成する山々が連なっている。ここには、戦後まで使用されていた寺下峠を経由し秋山村に抜ける街道があり現在でも軽登山客で賑わっている。北側には、眼下にみえる桂川を挟んで甲斐武田氏の狼煙台跡が頂上部にある網之上御前山（海抜約568ｍ）が遺跡地を凝視している。

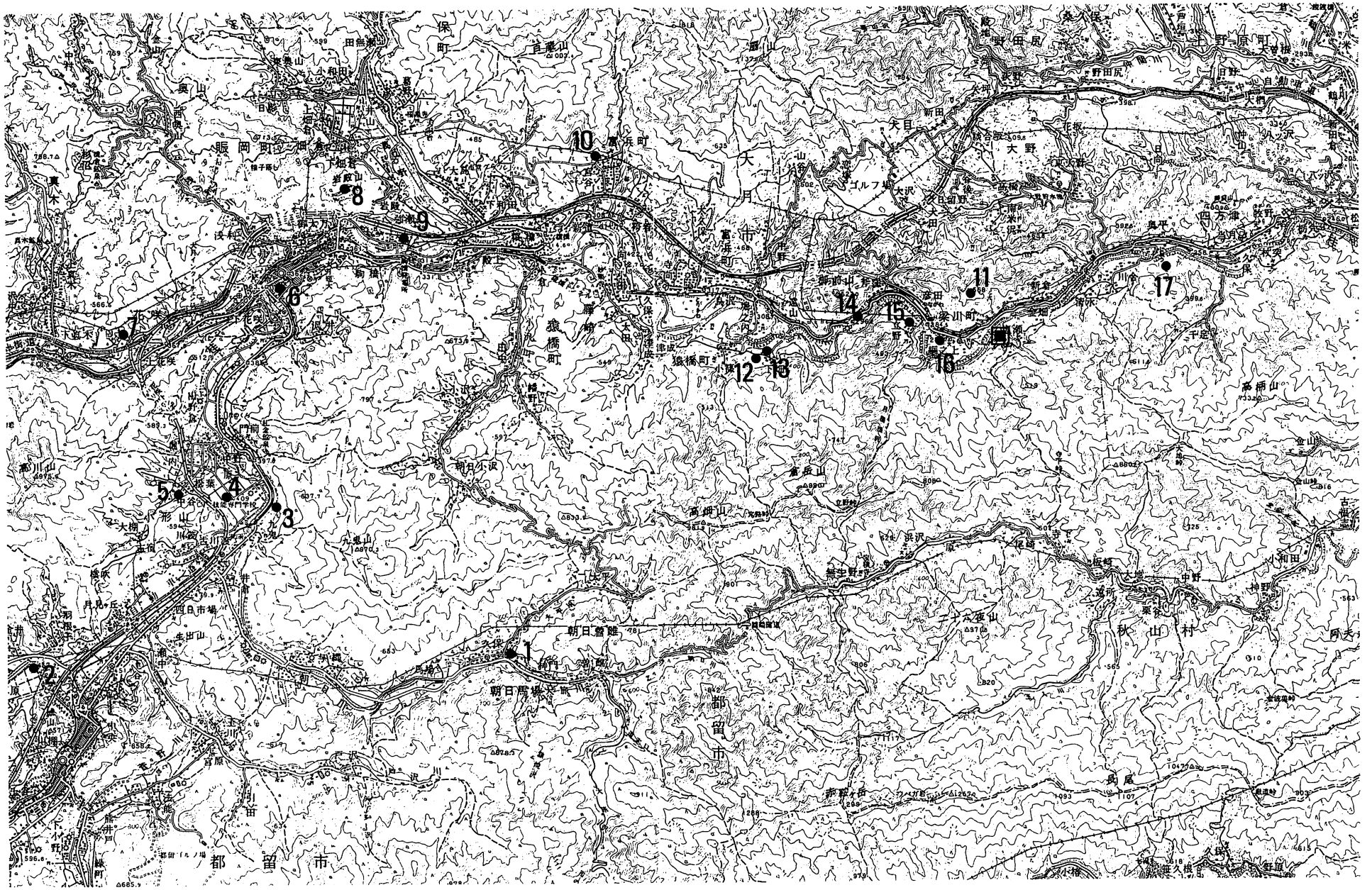
第２節　歴史的環境

遺跡の存在する大月市や桂川流域は、多数の縄文時代をはじめとする多数の遺跡が存在する地域でもある。古くから多くの研究者によって盛んに発掘調査が行われてきた場所であるが、大規模な調査が実施され始めたのは最近のことである。ここでは、地域を桂川流域と限定し、主要な遺跡について触れていきたい（第１図）。

１は、尾咲原遺跡である。桂川の支流にあたる朝日川に南側を大平川に西側を挟まれた洪積台地上に立地している。昭和34年に小学校校舎拡張によって配石などが発見され脚光を浴びた。さらに昭和57年に体育館・プール建設に伴い調査され縄文時代中期～晩期の住居跡、晩期の配石・石棺墓などが検出されている。

2の牛石遺跡は、桂川とその支流である大幡川が合流する地点に位置している。この地域は、古くから考古資料の採集できる所として知られていたが、昭和54・55年と発掘調査が実施された。特に55年の調査では、直径50ｍにもおよぶ縄文時代中期末葉に位置付けられる環状配石が検出されている。

3（九鬼Ⅱ遺跡）・4（中溝遺跡）・5（中谷遺跡）はいずれも山梨リニア実験線建設に伴って調査された小形


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
都留市
大月市
秋山村
朝日馬場
朝日小沢
猿橋町
梁川町
富浜町
四日市場
大野
新田
矢目
上野原町
桑久保
野田尻
保町
岡町
真木
下花咲
上花咲
大柳
月見ヶ丘
生出山
九鬼山
高畑山
高柄山
金山
古槙
板崎
大地
中野
神野
小和田
四方津
牧野
鳥尾
久保
浅利
下谷
上谷
門前
新倉
清水
千足
梁川
大月
下和田
上和田
大和田
大沢
日留野
ゴルフ場
富士見
中野
猿橋
小篠
桂野
鳥沢
浅川
桂川
中央線
中央高速道路
国道20号
国道139号
国道413号
国道139号
国道413号
国道139号
国道413

山地区の遺跡である。九鬼Ⅱ遺跡は、平成5年に調査され、結果縄文時代前期から中期、平安時代の集落が確認された。また、中溝遺跡は、桂川左岸の大原台地上の中心に占地しており、既に昭和47・48年の調査で縄文時代中期中葉の新道式や藤内式の住居跡が検出されている。平成５年度のリニア関連調査においては、平安時代および縄文時代早期末から前期初頭にかけての集落跡が発見された。さらに、全国的にも最古群として捉えられる玦状耳飾りも出土している。中谷遺跡は、高川山を西に背負う位置にあり、全面には高川が桂川に向かって蛇行しながら流下している。調査は、昭和39・46・54年と平成5・6年に実施されている。縄文時代中期後半から晩期前半にかけての集落跡が検出され、特に晩期前半の清水天王山式に伴う耳飾りを付けた土偶は各界の注目を集めた。

桂川を下った笹子川との合流地点周辺では、県立都留高校付近にある大月遺跡（6）と原平遺跡（7）が挙げられよう。大月遺跡の名が登場したのはかなり古く明治34年にまで遡る。しかし、本格的な調査は、昭和２年に仁科義男氏が行ってから以後、平成７年まで６次におよぶ調査が実施されている。その結果、縄文時代中期から後期と奈良・平安時代の集落の存在が明らかとなった。また、原平遺跡は縄文時代早期から前期の集落跡として知られている。

市街の右岸には県指定史跡でもある中世城郭の岩殿城跡（8）や市内で唯一状態良く残存している子の神古墳（9）が存在している。さらに、富浜町周辺では昭和47年に縄文時代中期末の住居跡が発見された宮谷遺跡（10）がある。

塩瀬下原遺跡のある梁川町地域では戦国期武田氏の狼煙台跡とされる綱之上御前山（11）のほか大月市史には、縄文時代中期を中心とする本郷遺跡（12）・下原遺跡（13）・腰遺跡（14）・立野遺跡（15）・綱之上遺跡（16）が掲載されている。また、下流域では、本遺跡と同じ右岸の河岸段丘上にある川合遺跡（17）は、昭和62年から63年にかけて調査され、縄文時代中期後半の住居跡や土坑が検出されている。

第３章　調査方法と基本層序

第１節　調査方法

平成６年１月および10～12月の２次からなる試掘調査（第２図）によって試掘調査地の西側部分に縄文時代中期後半から後期を主体とする集落が展開されることが予測された。この結果から、第３図に示される約18.200㎡を本調査対象地と定めた。しかしながら当地区は土地未買収地が多かったため買収の早期終了した東側区域より３箇年計画で発掘調査が計画された。

平成７年度	Ⅰ・Ⅱ	5,065㎡
平成８年度	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	6,320㎡
平成９年度	Ⅵ	4,960㎡

本調査は、遺構検出面まで油圧シャベルによって土砂を除去し、その後は人力による掘り下げを行い遺構検出を実施した。グリッドは５ｍの設定とし、南から北にＡＢＣＤ...、東から西に１２３４... と番号を振り分けた。

なお、調査中は当埋蔵文化財センター安全衛生基準を遵守し危険防止等に努めたことを付け加えておく。

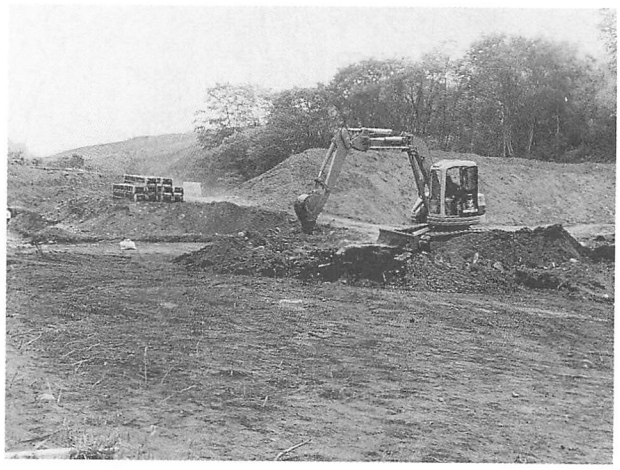
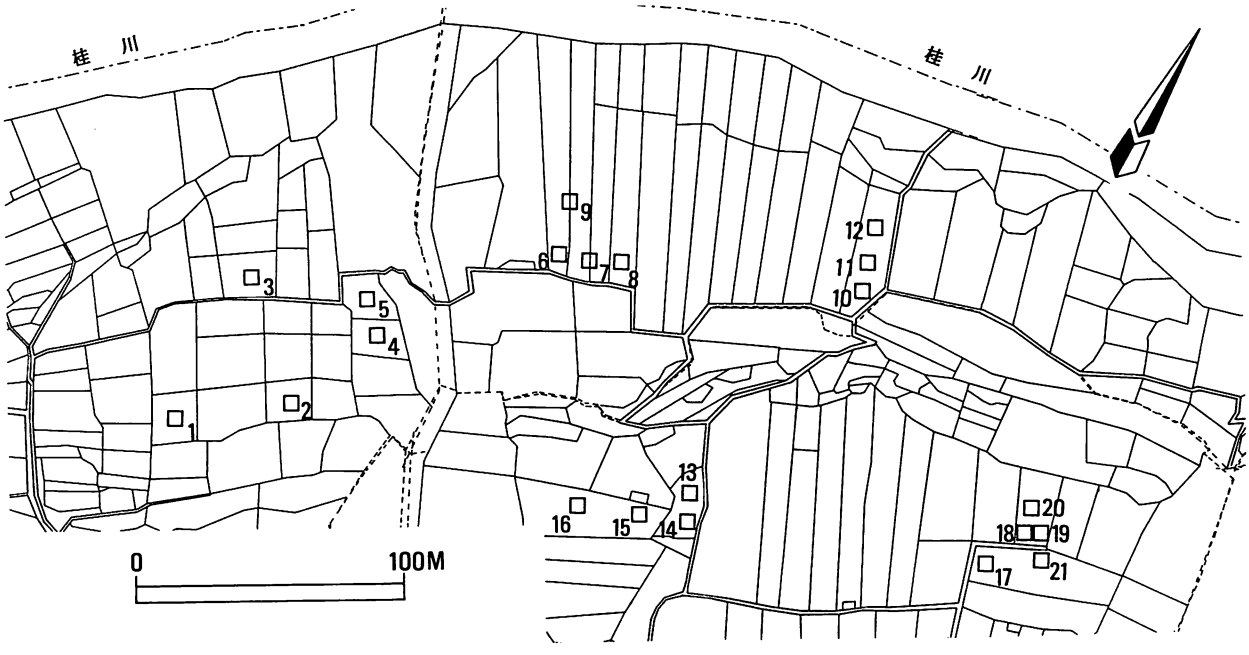
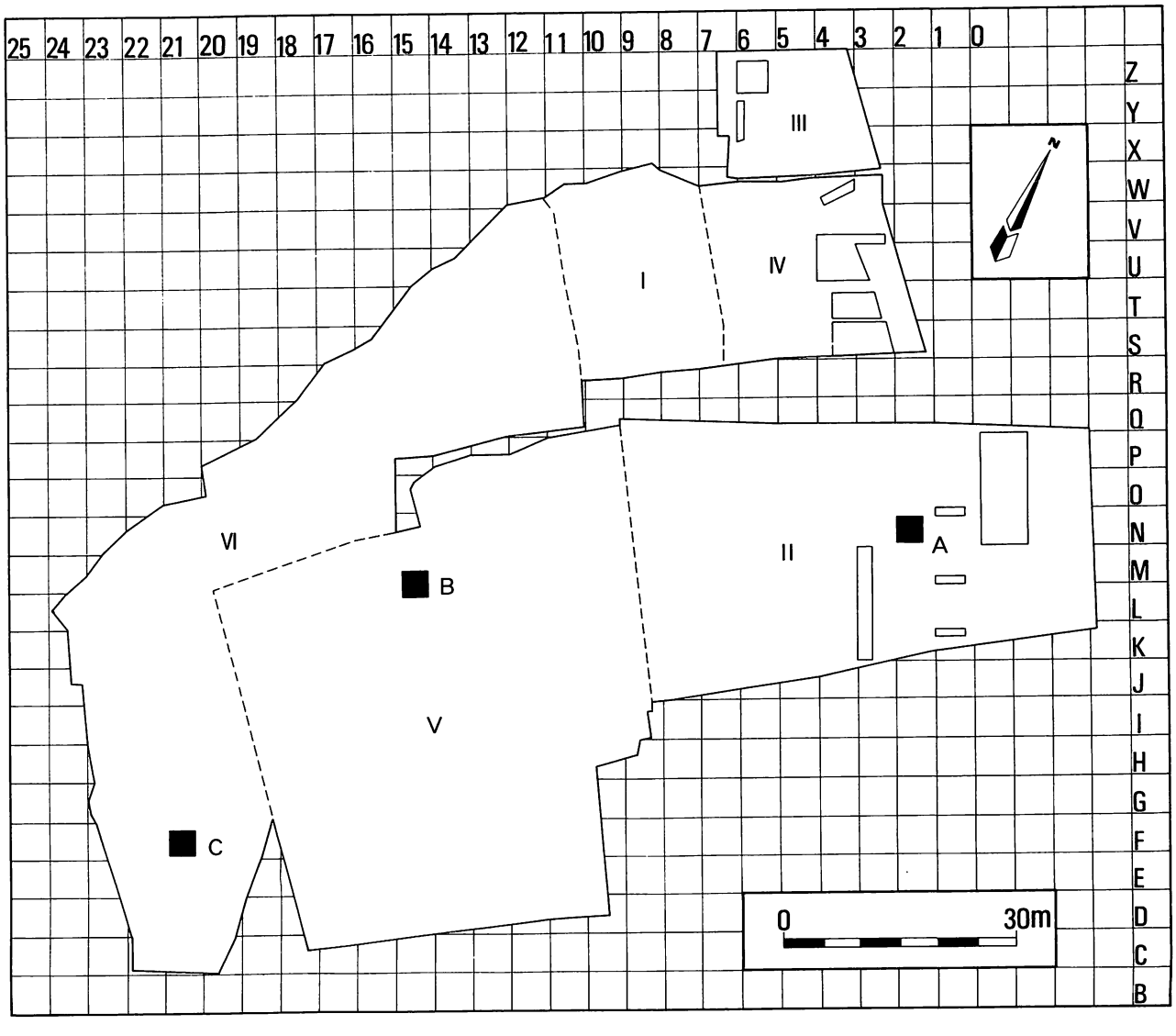


写真１　表土剥ぎ風景
（平成８年度）



第２図　試掘調査トレンチ開口位置図



第３図　調査区全体図

第２節　基本層序

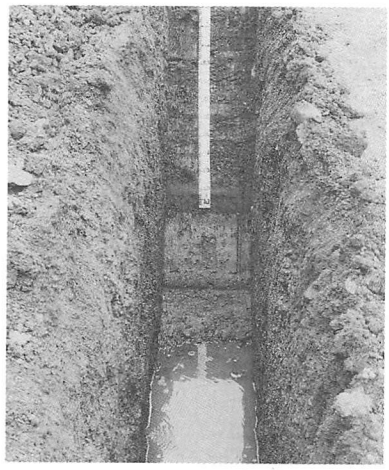
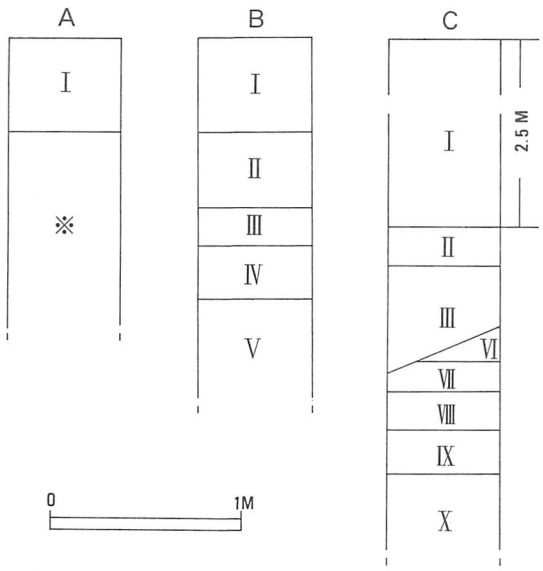


写真２　Ａ地点トレンチ

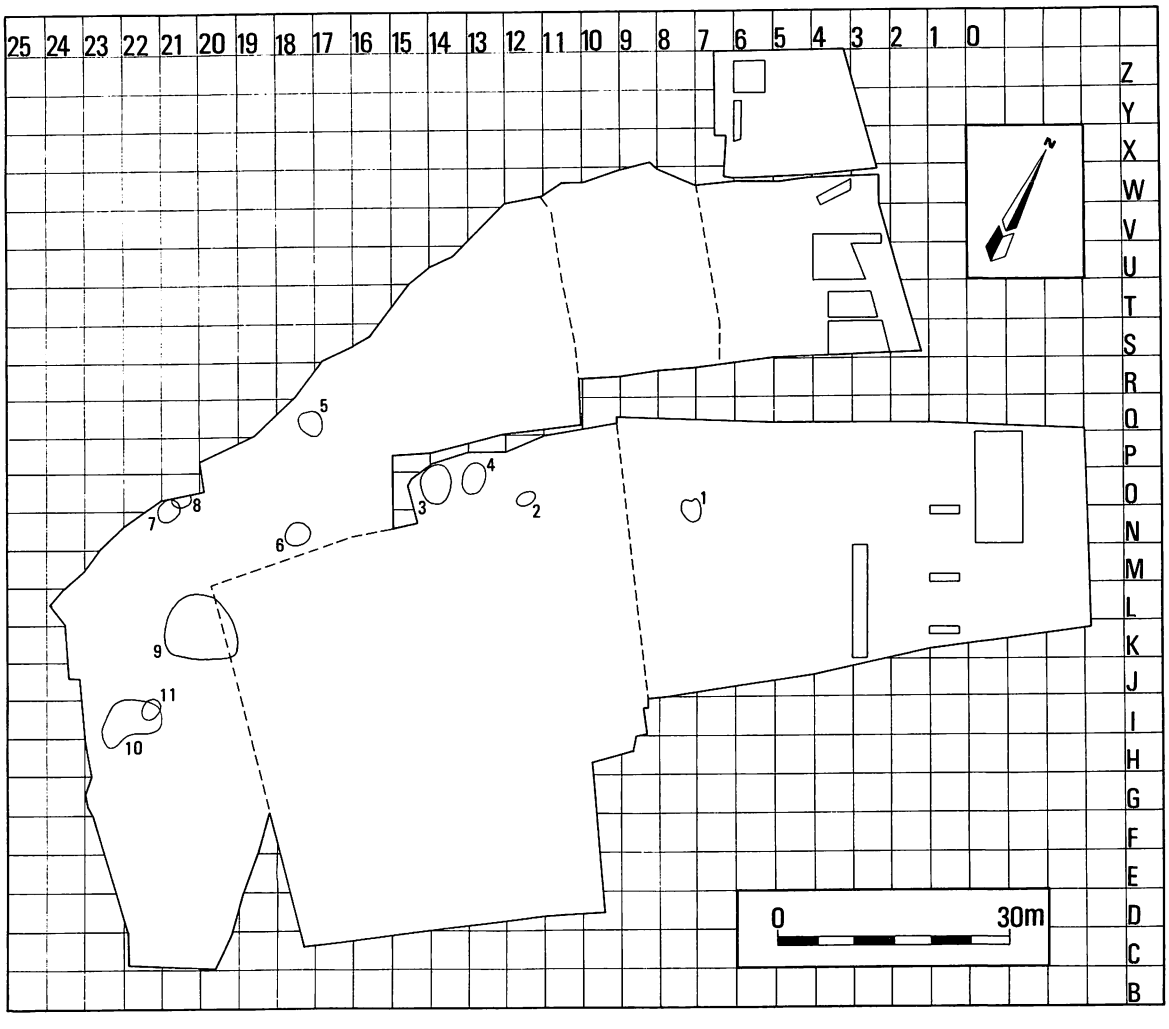
本遺跡においては第３図Ａ・Ｂ・Ｃの３地点から基本的な層序が観察できた。Ａ地点付近は、遺跡地東に深いＶ字を刻んで桂川に下る沢の影響を強く受けており、表土層直下から砂礫層が検出された。Ｂ地点では、縄文時代後期の堀之内・加曽利Ｂ式期に位置づけられるⅡ・Ⅲ層、縄文時代中期後半の曽利式期を主体とするⅣ層の２面の文化層が確認されている。しかし、これらの層の堆積状況は安定しておらず角礫の混入が各所でみられる。これは段丘上面方向からの遺構をも押し流す土砂の流れ込みであり、遺跡地が大規模な土石流に見舞われたと想定できる。Ｃ地点においてもⅡ～Ⅳ層でＢ地点同様の流れ込みが認められた。Ⅵ層より下方においては安定した堆積が観察できたが遺構・遺物の検出はなかった。



第４図　基本層序柱状図

Ⅰ層　表土＋耕作土
Ⅱ層　茶褐色土層
Ⅲ層　明茶褐色土層　縄文時代後期
Ⅳ層　暗黄褐色土層　縄文時代中期後半代
Ⅴ層　礫層　段丘形成時の河床面
Ⅵ層　黒褐色土層
Ⅶ層　橙茶褐色土層
Ⅷ層　暗灰褐色土層
Ⅸ層　橙灰褐色粘質土層
Ⅹ層　青灰色粘質土層
※　砂礫層

第４章　発見された遺構と遺物



第５図　住居跡配置図

第１節　住居跡

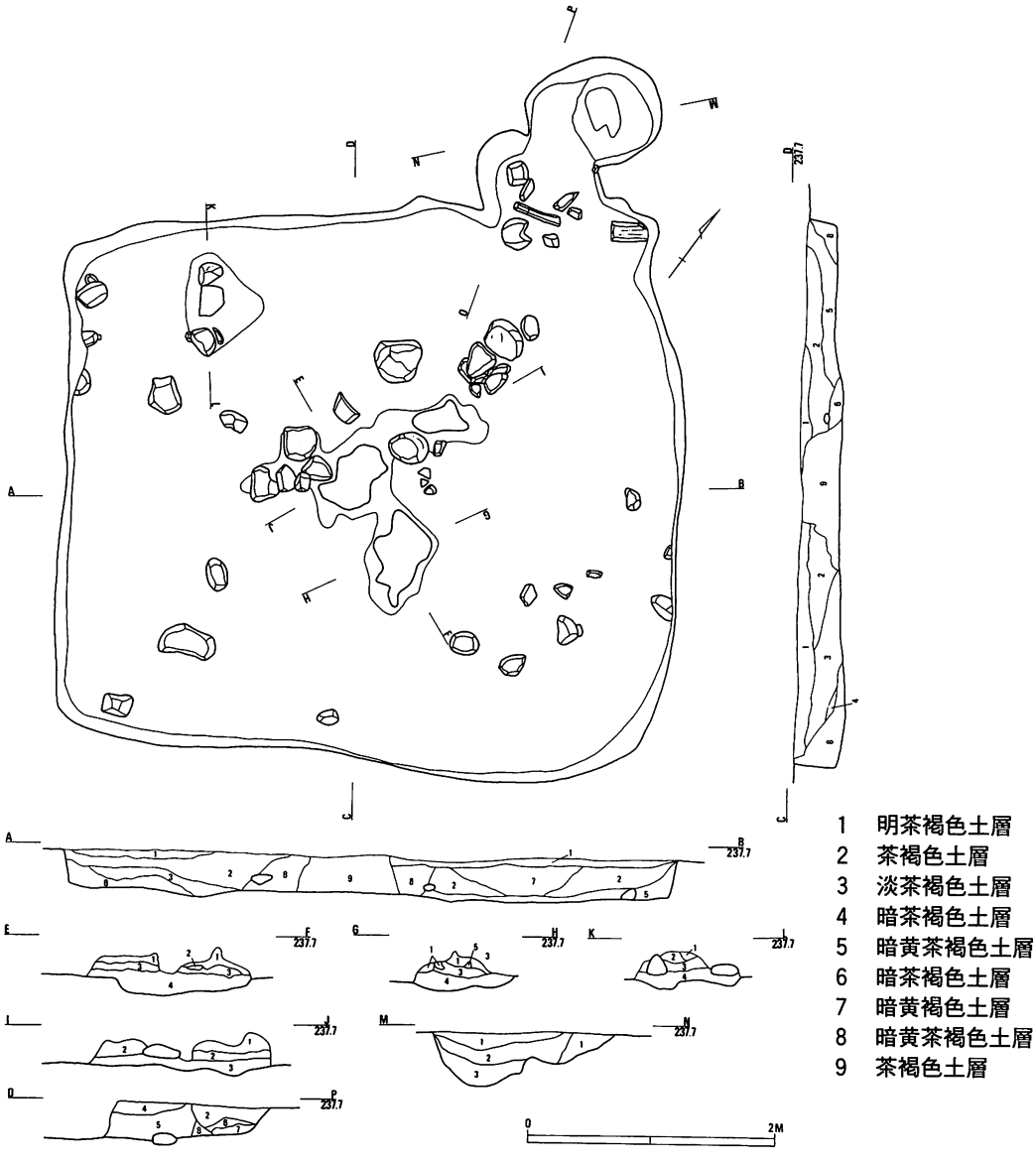
第１号住居跡（第６・７図）

Ｎ－７・８、Ｏ－７・８区において検出された本遺跡で唯一の平安時代住居跡である。他の住居跡との重複はないが第１・２・３号土坑を北側コーナー部分において切っている。形状は長方形を呈し、断面形状は箱形を示す。また、その規模は、長軸4.96m、短軸4.33m、深度28.3cmを測る。貼床は明確には検出されなかったが各所に僅かに硬化した部分がみられた。壁溝や柱穴は確認されなかった。竈についても確認はされなかったが住居中央付近と北西コーナー近くに火熱を受けたとみられる黄褐色粘質土が検出されている。遺物は土師坏（１・２）が２点出土している。双方ともに外面体部に「入？」の墨書がなされている。

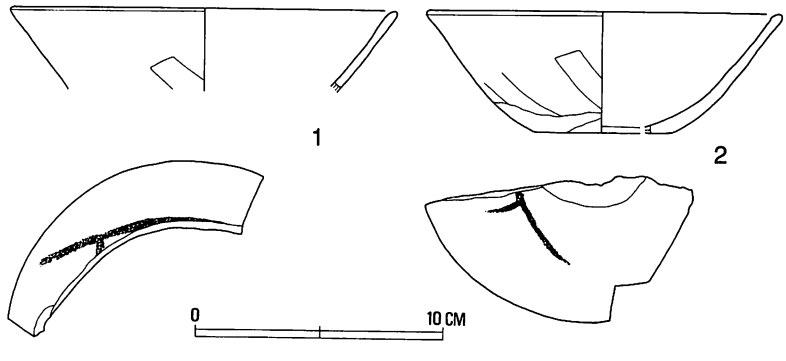
第２号住居跡（第８図）

Ｏ－13区において検出された柄鏡形の敷石住居跡であり、近接した同レベルでいくつかの配石が確認されている。主軸は北東－南西方向に求められ北東側に入口部を有する。残存状況は必ずしも良好とは言えず、入り口部と居住部の敷石であろうと推測できる扁平な自然石が数石存在しているに過ぎない。

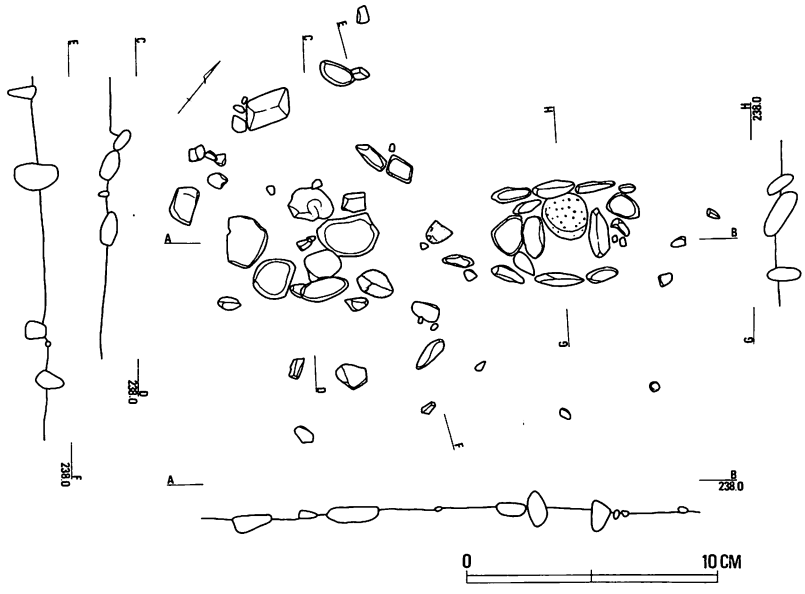
入り口部の造りは、設置された縁石の間に30～40cmの敷石を貼っている。また、居住部との間仕切りとなる石は検出されなかった。その規模は、検出状況から最大74.5cm幅と言うことしか求められない。



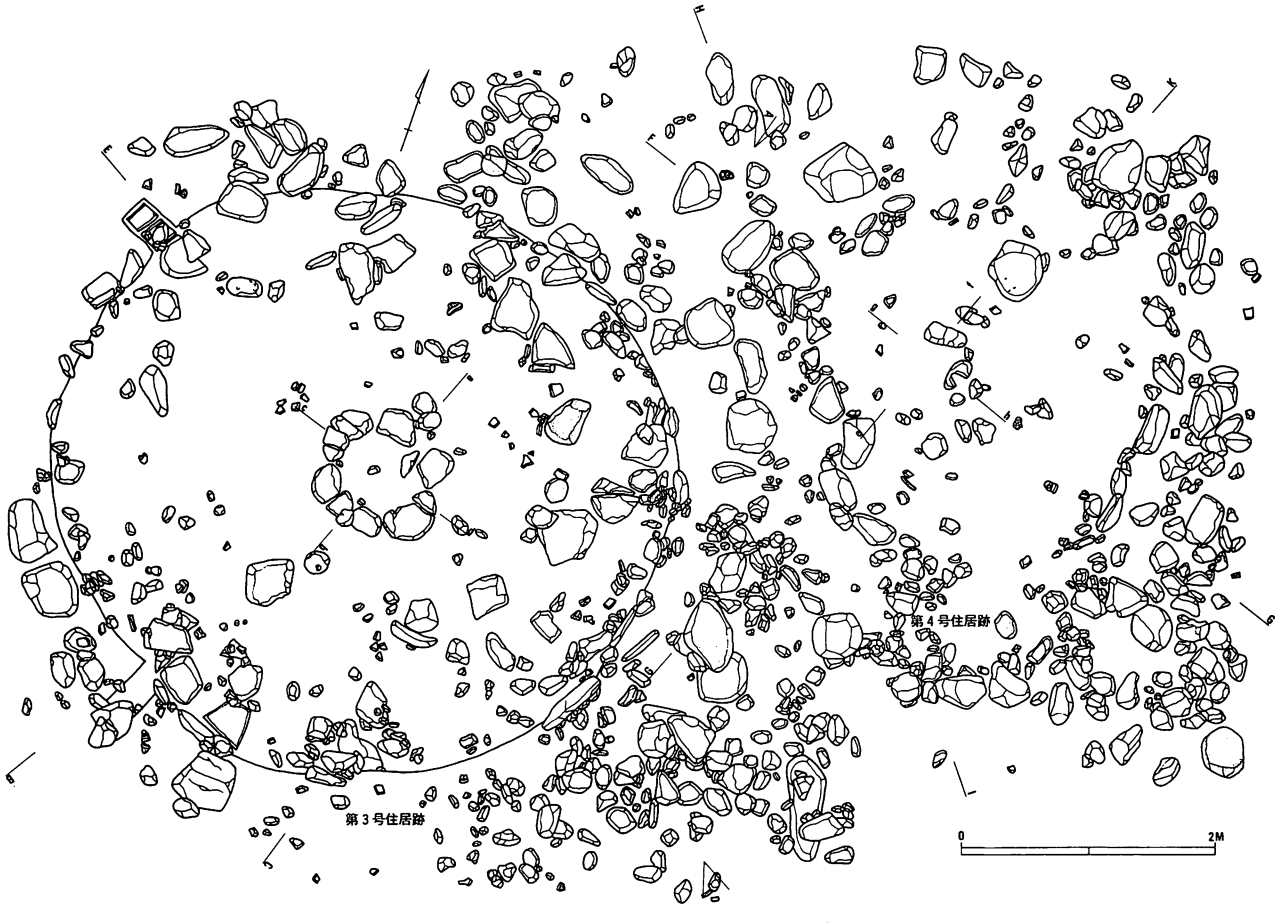
第6図　第1号住居跡



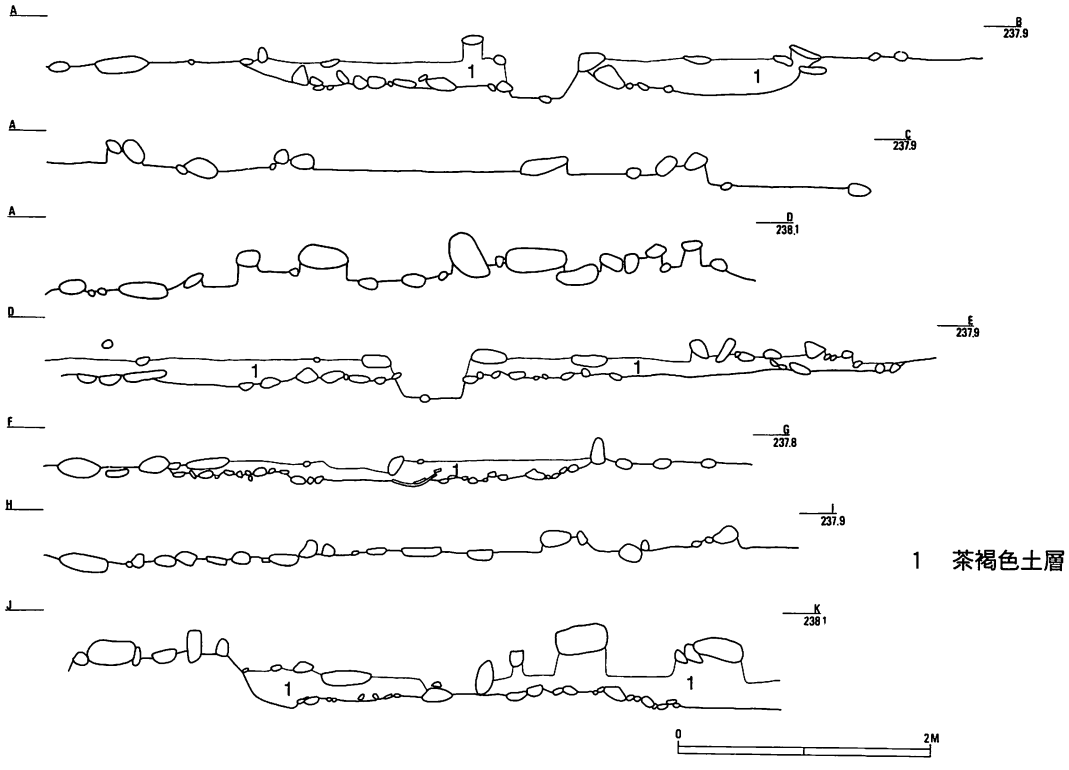
第7図　第1号住居跡出土遺物



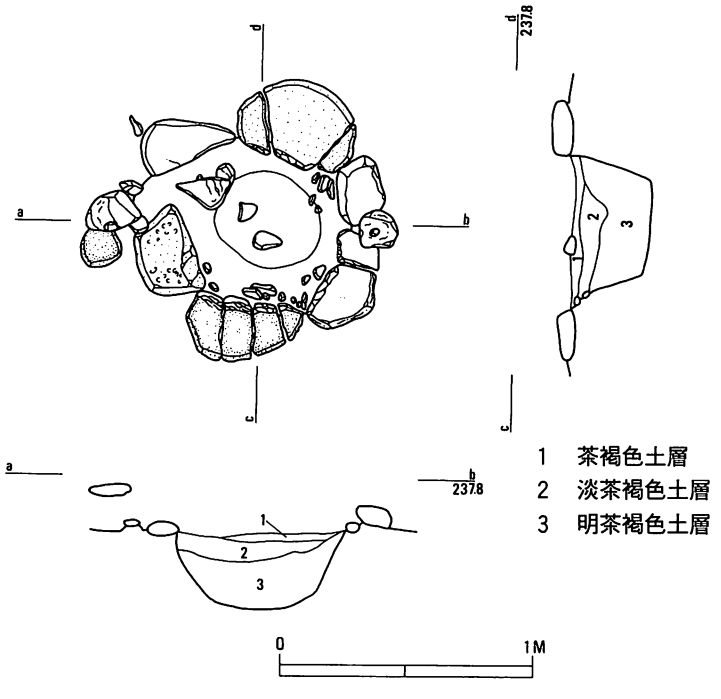
第8図　第2号住居跡



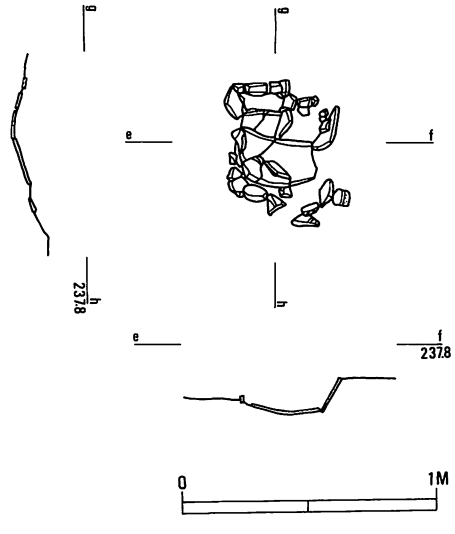
第9図　第3・4号住居跡1



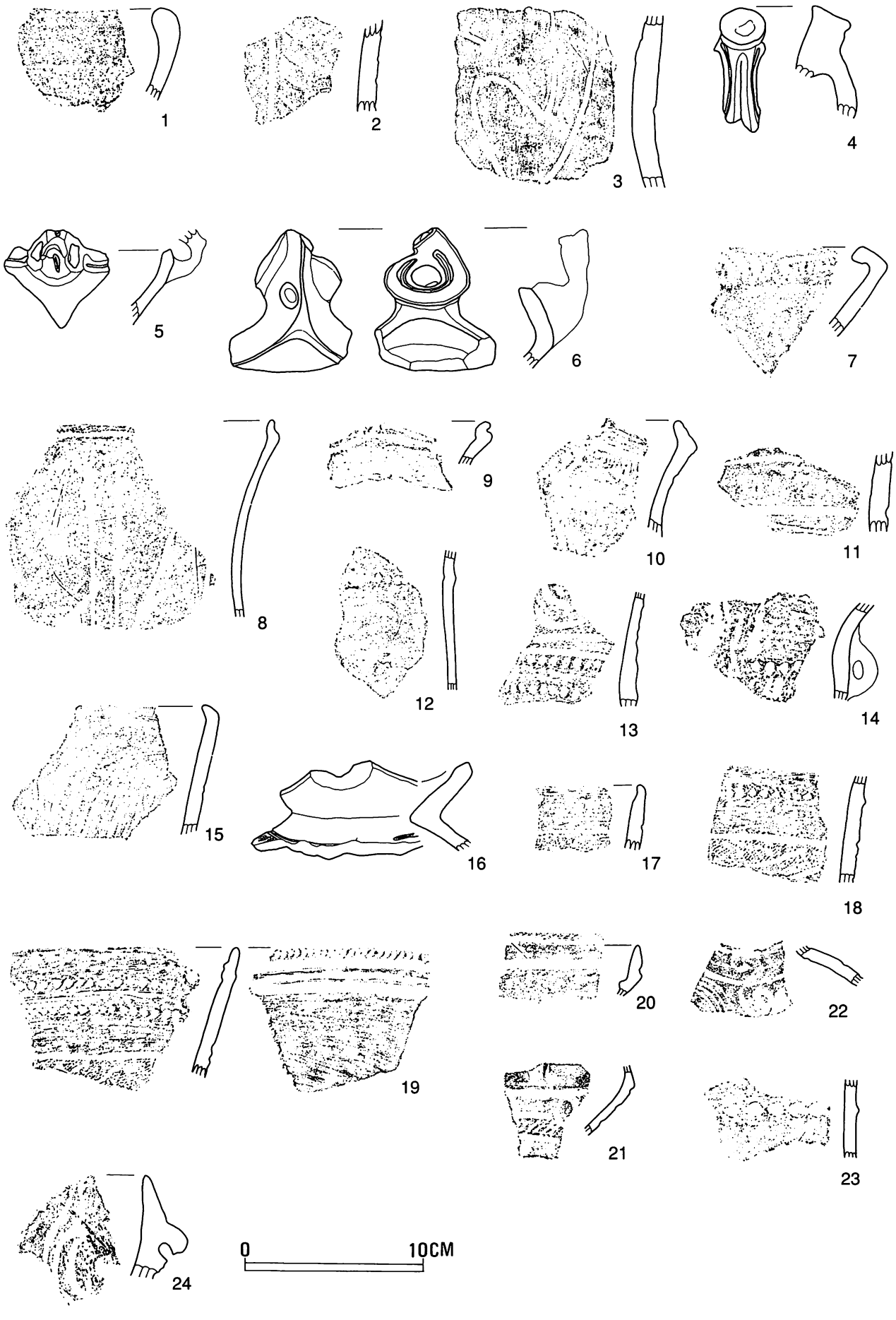
第10図　第３・４号住居跡２



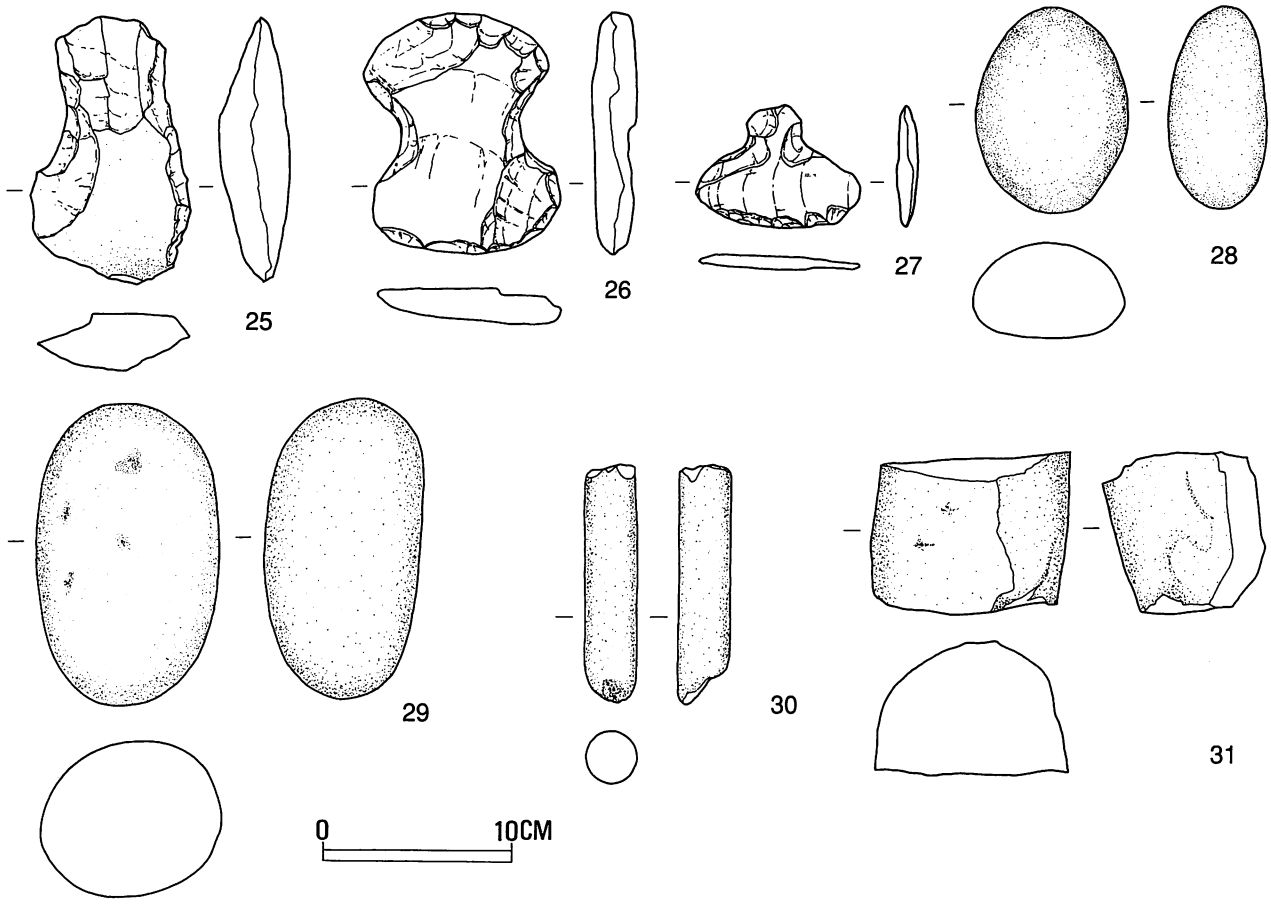
第11図　第３・４号住居跡炉



第12図　第３・４号住居跡微細図



第13図　第３号住居跡出土遺物１



第14図　第３号住居跡出土遺物２

また調査の終了時には、縁石や敷石を除去して周囲の状況を確認したが柱穴などは検出されなかった。

遺物は、希薄であり図示し得るものはない。本住居跡の構築時期は、縄文時代中期後半代以降に帰属されるものと考えられる。

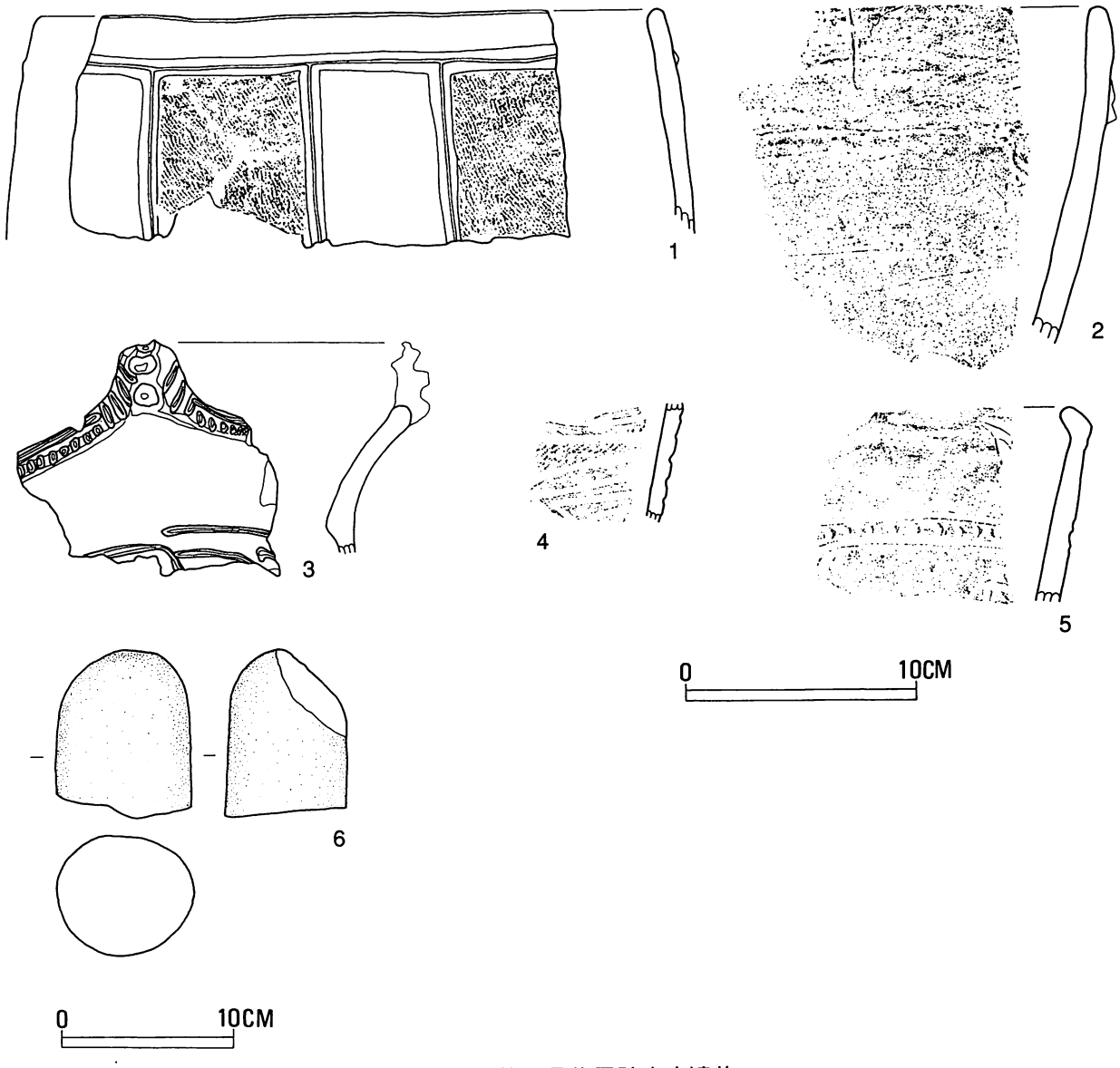
第３号住居跡（第９～14図）

Ｏ－14・15、Ｐ－14・15に位置しており、東側の非常に近接した位置に第４号住居跡が確認されている。他の住居跡と同様に土石流の大きな影響を受けている。このため、住居内の状況は、残存している縁石も少なく敷石もその周辺に散在して検出されたに過ぎない。

居住部は楕円形を呈しており、中央部に石囲炉が設置してある。入り口部分の位置や形状は前述のとおり土石流による撹乱ではっきりしない。居住部の規模は、5.04×4.57ｍを測る。縁石は、北－東方向にやや良好に残存している。敷石は、直径30㎝程の扁平な安山岩系の自然石を用いている。なお、柱穴は検出されなかった。

炉は、６枚の偏平な自然石を連結させて構築した石囲炉であり他の住居跡と比較しても非常に丁寧な造りである。その規模は1.13×0.92ｍ、深度約45㎝を測る。

出土遺物は土器類の小破片が多い。１・２は曽利式期、３は称名寺式期新段階から堀之内１式期古段階に位置付けられる過渡期的な深鉢形土器であろう。４～14は堀之内１式期に比定されるものである。また、15は堀之内１～２式期にあたる。続いて16～19は堀之内２式期となるものである（16は注口土器、17は粗製土器）。さらに20～22は加曽利Ｂ１式期となろう。23については詳細な時期判断に苦しむが堀之内２式期以降の粗製深鉢形土器であろう。それ以外の遺物としては堀之内１式期の蓋が１点出土している（24）。石器類は打製石斧（25・26）、石匙（27）、磨石（28・29）、石棒（30・31）が計７点ほど検出されている。



第15図　第４号住居跡出土遺物

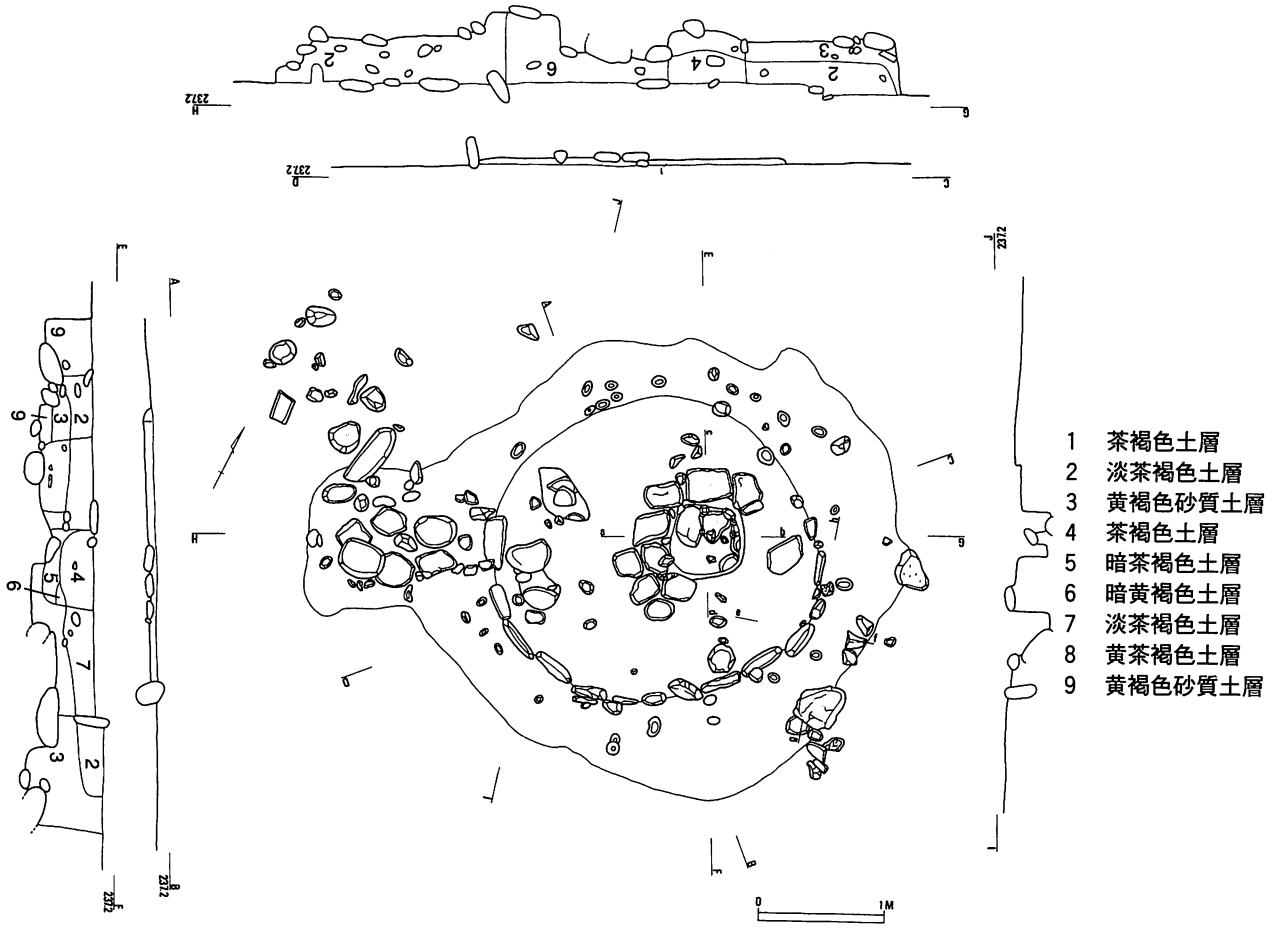
第４号住居跡（第９～12・15図）

第３号住居跡に近接したＯ－13・14、Ｐ－13、14区より確認された。検出状況はやはりこの地点も他の箇所と同様に土石流の影響を大きく受けており、住居跡の範囲がかろうじて判断できる程度であった。周囲に残存する扁平な自然石や東側に若干残っている縁石などから、本来の形状は居住部に縁石と敷石を持った住居であったことが伺える。また、その規模は直径４ｍ前後であったろうと想定できる。なお、明確に本住居跡に帰属されるであろうと判断できる遺物は次のとおりである。土器類は全て深鉢形土器の破片である。１・２は縄文時代中期末葉から後期初頭の加曽利Ｅ式期系、３・４は堀之内１式期、５は詳細な時期は不明であるが後期と考えられるものであろう。また、石器類としては、石棒の頭部（６）が出土している。

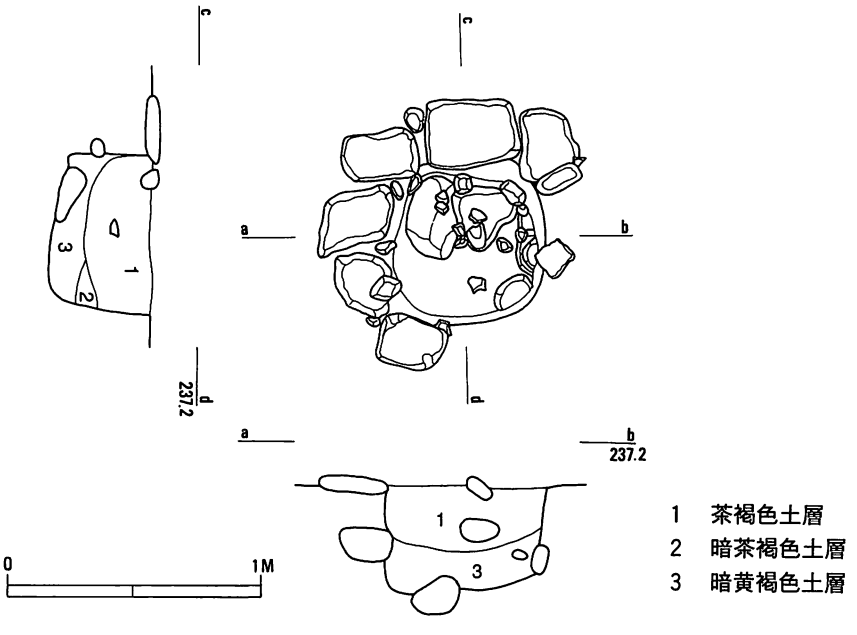
第５住居跡（第16～19図）

Ｐ－18・Ｑ－17・Ｒ－18区に跨って検出された柄鏡形の敷石住居跡である。主軸は、大まかに東－西に求められ西方（倉岳山方向）に入口部を有する。残存状況は、本遺跡から検出された全住居跡の中で最も良好なものであったが、遺構確認面から居住部敷石面まで10～15cmと浅かったため遺物類の出土は非常に少なかった。

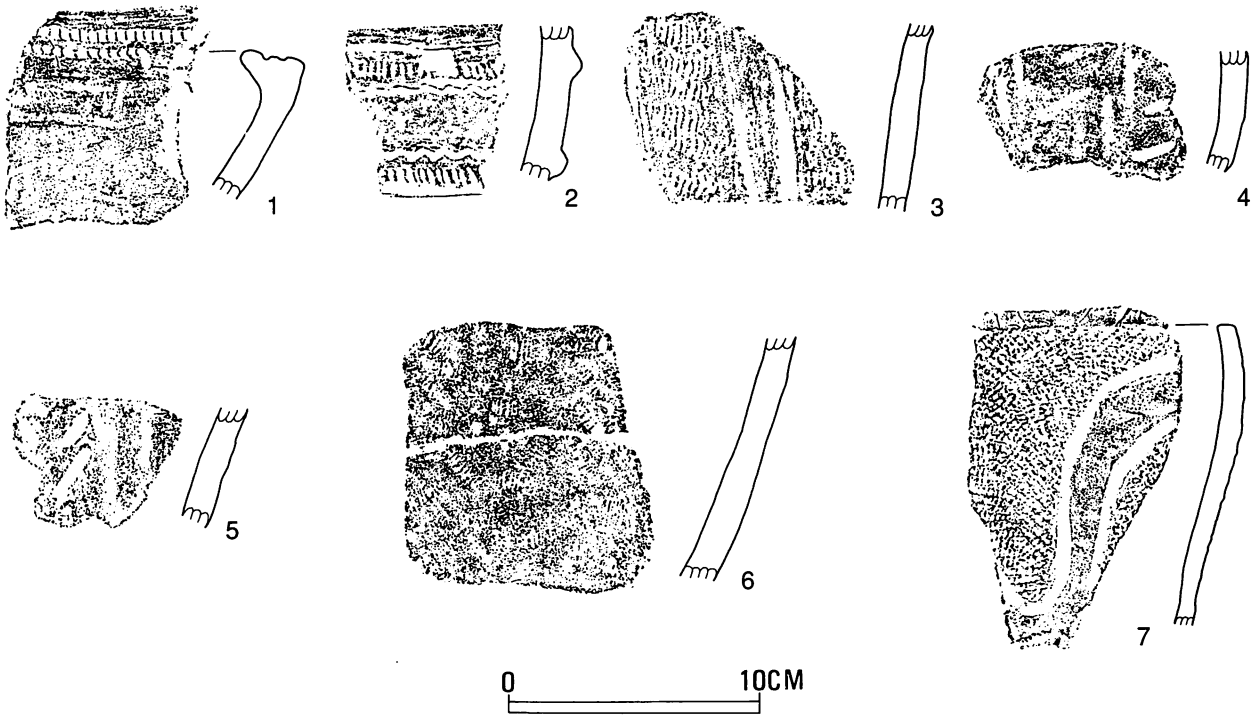
入口部は、石棺状にはならず30cm程の扁平な自然石を６石程敷いた簡素な造りをみせる。入口部と居住部は間仕切りの石によって区画を別にしている。確認された石は43cmの法量を持ち、この１石で仕切っていたと思



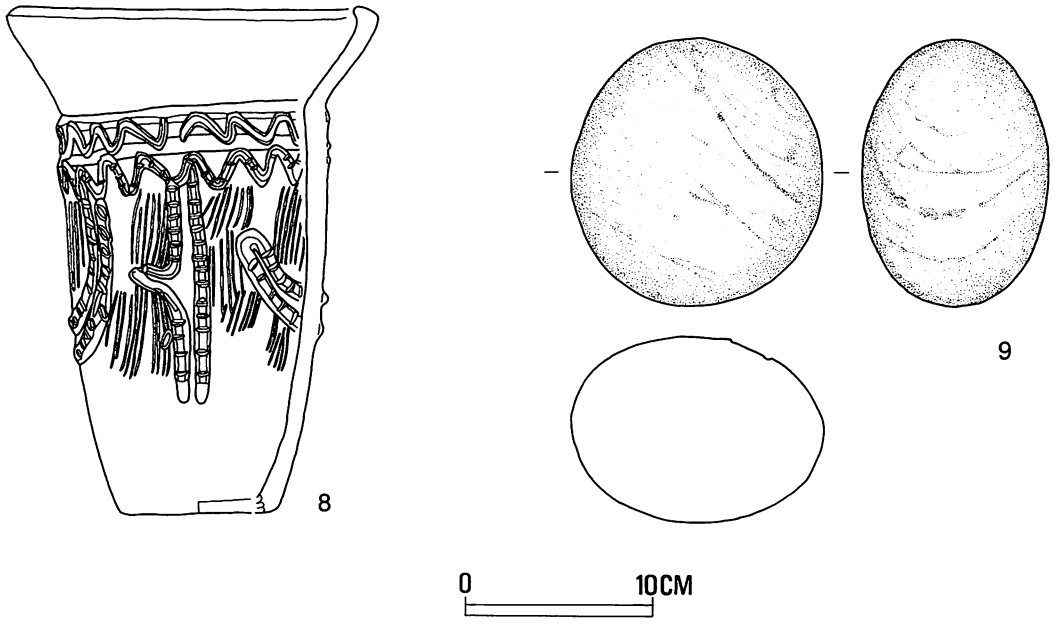
第16図　第５号住居跡



第17図　第５号住居跡炉



第18図　第５号住居跡出土遺物１

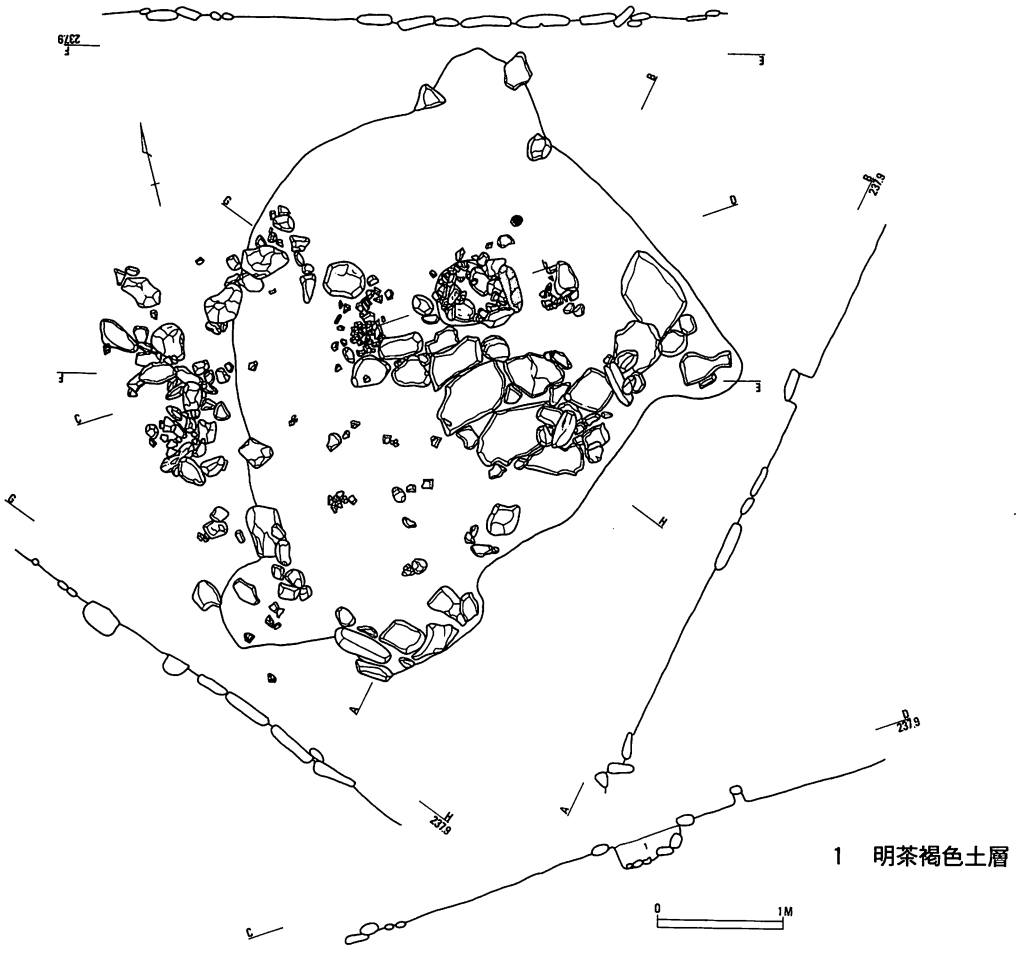


第19図　第５号住居跡出土遺物２

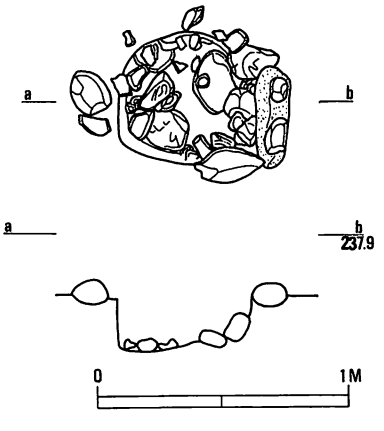
われる。

居住部は、縁石が半周ほど検出され、長軸2.67m、短軸2.37mの僅かに楕円形状を呈している。敷石は、炉の周辺に配されている。その他の部分では、転圧された痕跡はみられず敷石が剥ぎ取られた可能性を強めている。炉は、中央やや奥から61×60cmの規模で検出された。検出時の状況から、本来は炉石を持つ石囲炉であったが住居の廃絶時に炉石は抜き取られたとも推測される。居住部内の柱穴は、入り口部分と連結部近くに２箇所検出された。柱穴の形状は、双方ともに不整形を呈しており、必ずしも円形や楕円形となるものではない。法量は、55×30cm、深度約30cmを計る。

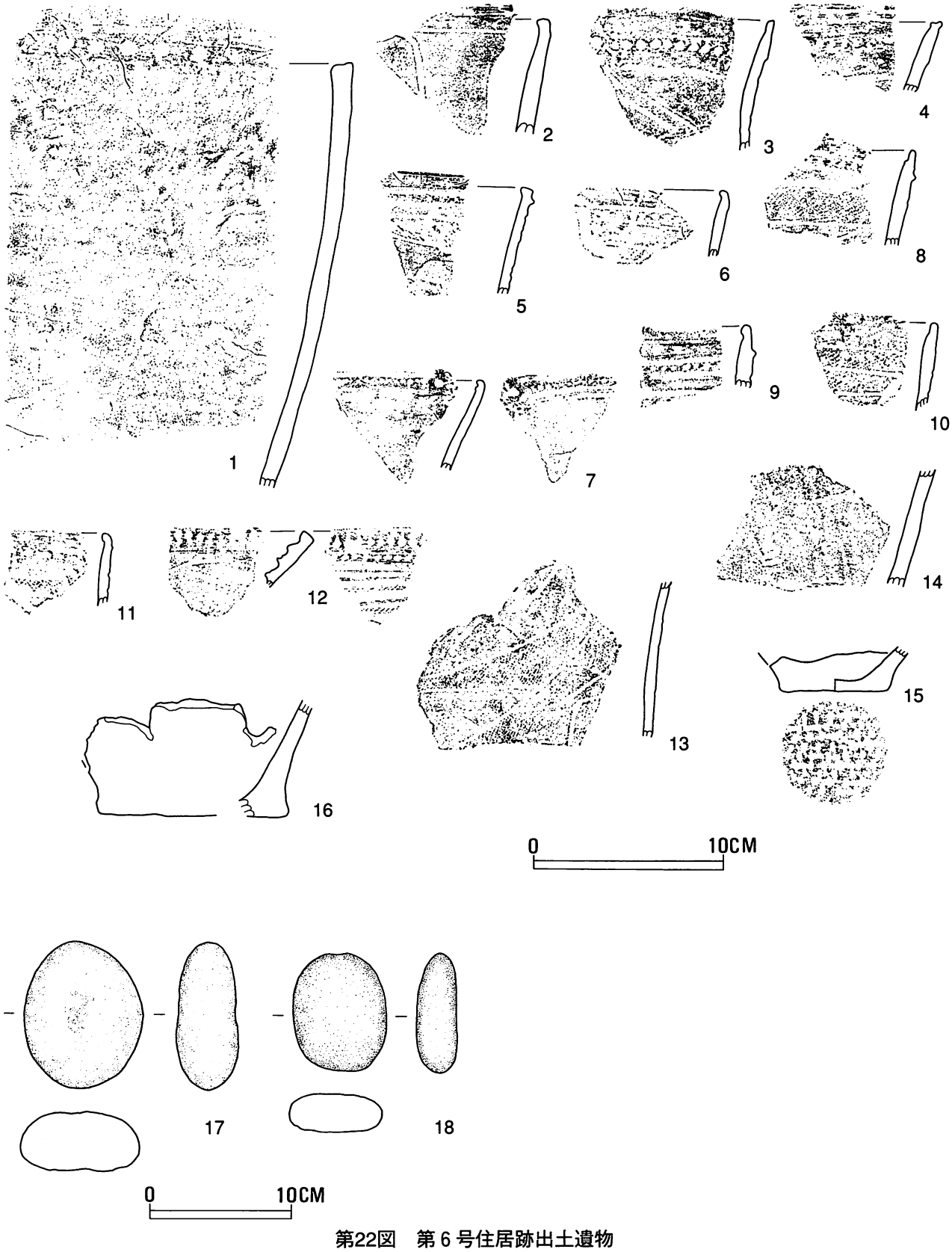
このほかに特筆される点として、掘り込みの壁に巡らされた石の外側に補助柱穴が検出されたことが挙げら



第20図　第６号住居跡



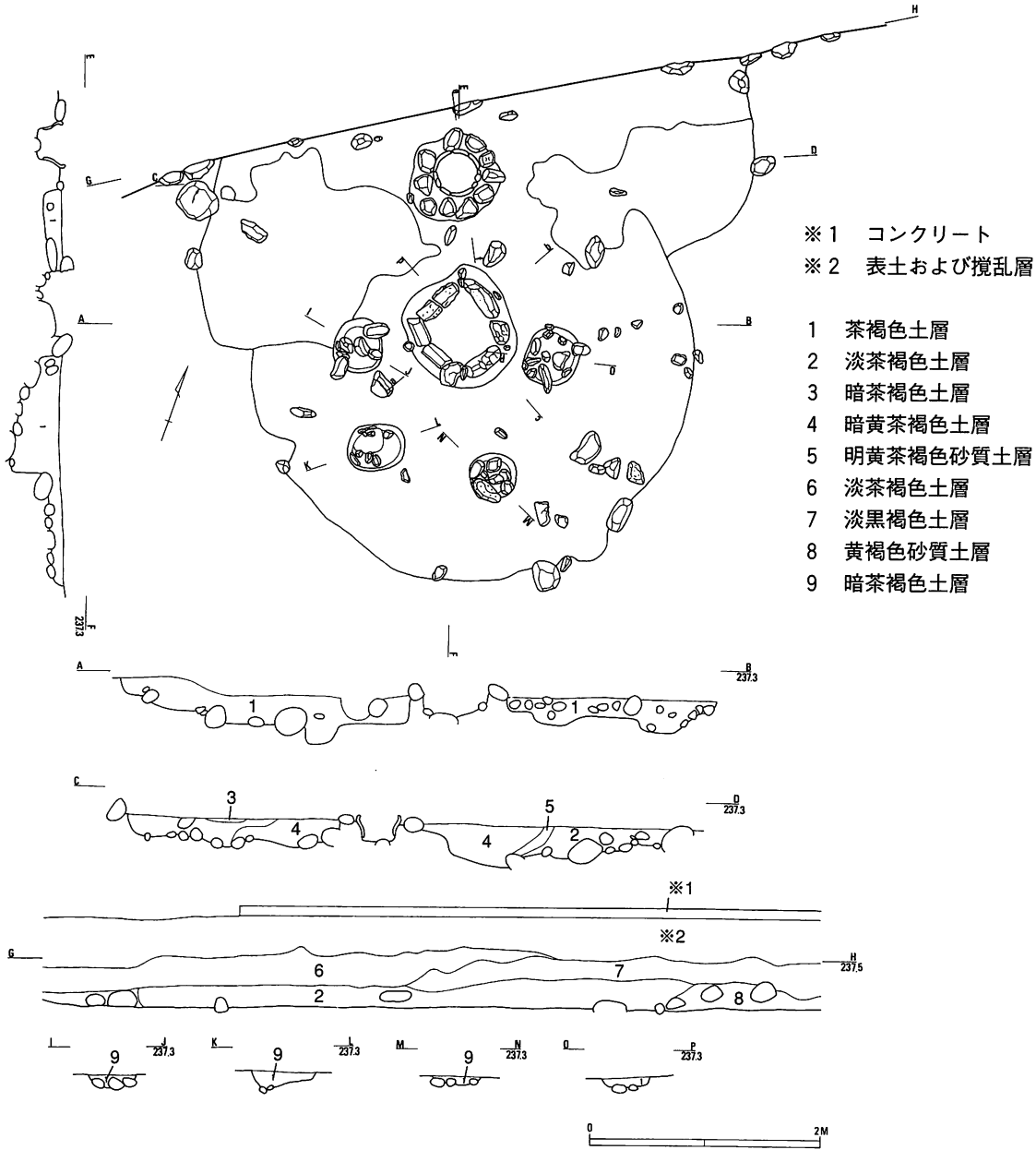
第21図　第６号住居跡炉



第22図　第６号住居跡出土遺物

れよう。検出された補助柱穴の配列は不規則であり、その数は30にのぼる。法量は、ほとんどが15cm前後の直径を持ち、10～25cmの深度を計る。

本住居の掘り方は、約50cmと深く、段丘形成時の自然礫層を掘り抜いている。覆土はやや締まりがあり、若干の転圧が加えられたと考えられる。また、奥側より逆位の状態で伏せられた縄文時代中期に位置付けられる



第23図　第７・８号住居跡

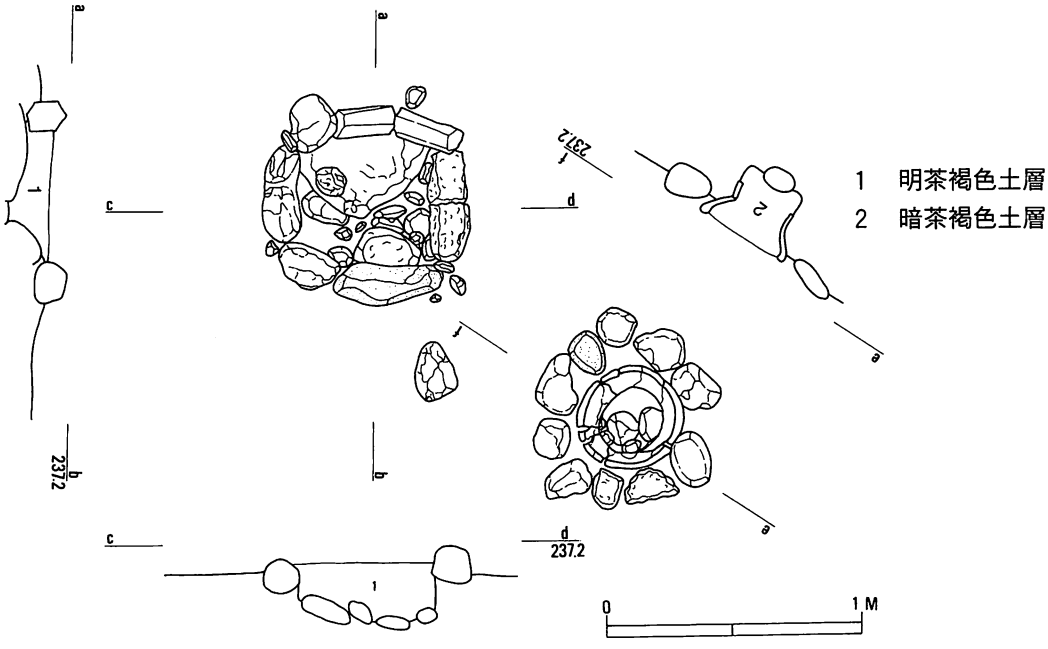
埋甕が完形で検出されているが住居との時期差が感じられるものである。

遺物の検出は、前述のとおり非常に少なくそのほとんどが土器の破片資料である。１は浅鉢形土器、２は深鉢形土器で双方ともに勝坂期に位置付けられるものである。３～６は曽利式期、７は加曽利Ｅ式期の深鉢形土器である。また、８は曽利Ⅱ式期の埋設土器である。石器は９の磨石が検出されたのみである。

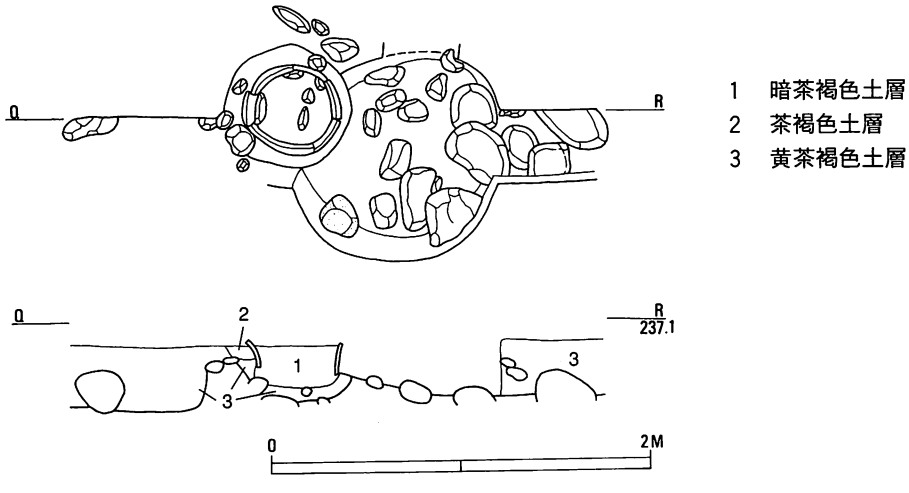
第６号住居跡（第20～22図）

Ｎ－３区の縄文時代後期とされる面において検出された敷石住居跡である。本地点も縄文時代後期中葉以降に発生したと考えられている土石流の影響を非常に大きく受けており、炉とその南東側周辺に設置された敷石しか残存していなかった。このため住居の形態も良く分からない。しかしながら、南－西－北方向において大まかな約４×4.5ｍの掘り込みのプランが確認されている。なお、柱穴や埋甕などの施設は検出されなかった。敷石は、本遺跡の縄文時代中期後半に位置付けられる住居跡のものと大きく違い30～80㎝の板状に剥離された礫を組み合わせるように配置している。

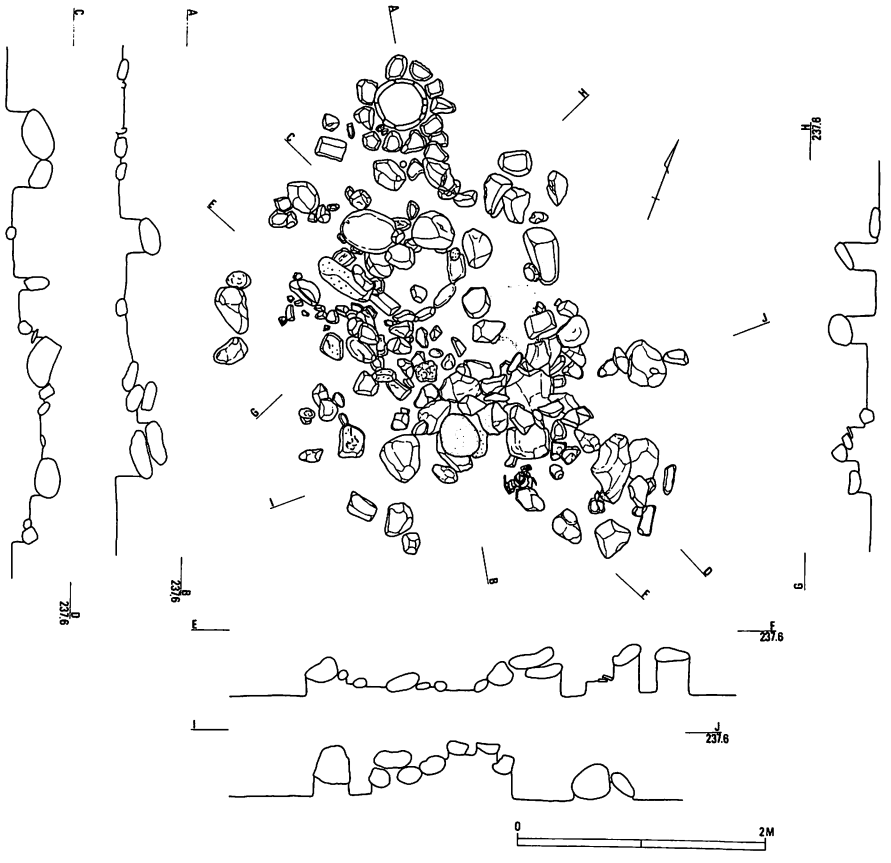
炉は、炉石が２石程残された状態で検出された。本来は、全てに炉石が巡っていた石囲炉と考えられる。規



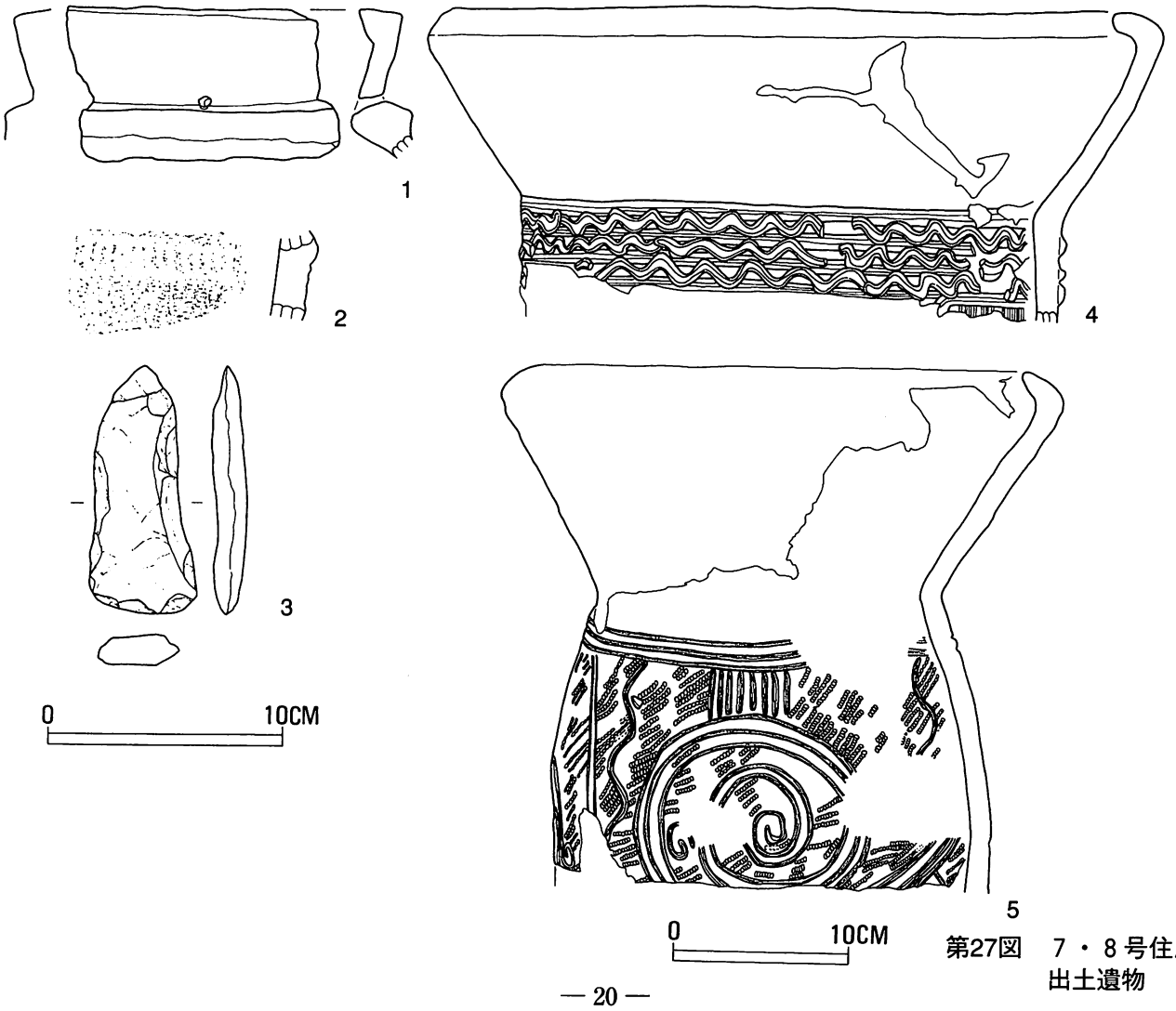
第24図　第７・８号住居跡埋甕



第25図　第７・８号住居跡炉



第26図　第７・８号住居跡
上配石



第27図　７・８号住居跡
出土遺物

模は、長径68.6㎝、短径50.8㎝、深度21.5㎝を計る。形状は、長方形を呈する。

遺物の出土は少ない。土器類（１～16）は全て堀之内２式期に位置付けられるものである。この内１・14の２点は粗製土器である。石器類は磨石（17・18）が２点出土しているのみである。

第７・８号住居跡（第23～27図）

２軒ともＮ－21・22、Ｏ－21・22区において検出された竪穴式住居跡である。当地点は、遺跡が展開される段丘の縁辺部にあたる。

第７号住居は、直径約3.8ｍの円形のプランを呈しており、８号住居を切る関係にある。住居内からは、敷石は検出されず、代わって堅く転圧された貼床が検出された。柱穴は、通常よりやや位置がずれると感じるものの直径40～55㎝の規模で４箇所より検出された。

炉は、約90×100㎝の長方形の形状を持つ。深度は、29.3㎝を計る。炉石は、大型の自然石で掘り込みを囲っているが、被熱による変色がみられ、クラックが生じている。底部には、段丘形成時の礫床が確認される。

遺物は少なく縄文時代中期の有孔鍔付土器（１）、勝坂期の深鉢形土器（２）、打製石斧（３）が出土している。

第８号住居は、７号住居に切られる位置にあり、直径約4.8ｍの規模を持つと推測される。当住居においても敷石は検出されず、炉の左右に良く叩き締められた貼床が検出された。なお、柱穴などは、確認できなかった。

炉は、縄文時代中期後半の深鉢形土器の頸部やや下から口縁部までを正位に堀り方に沿って埋め込み、その上縁部に扁平な掌大の自然石を隙間無く配した石囲埋甕炉（４）である。直径約83㎝、深度約25㎝を計る。また、埋甕（５）の存在も確認された。

第９号住居跡（第28～31図）

Ｋ－20・21、Ｌ－20・21に位置している。第10号住居跡と同様に段丘の上段より流れ込んできた礫に一面が埋め尽くされていた。その礫を除去していったところ4.5×3.0ｍの範囲に掌大の扁平な緑色岩の敷石が検出された。しかし、破損がひどく全容は明らかにできなかった。敷石のほとんどが赤変していたことなどから火災にあったことが推測される。炉は1/2程破損した状態で検出された。その規模は、おおよそ直径76㎝、深度23㎝を測る。なお、柱穴などは確認されなかった。

出土土器は、おおよそ堀之内２式期にあたるものであるが図示し得るものはない。石器は、磨石（１・２・３）石皿未製品（４・５）が検出された。

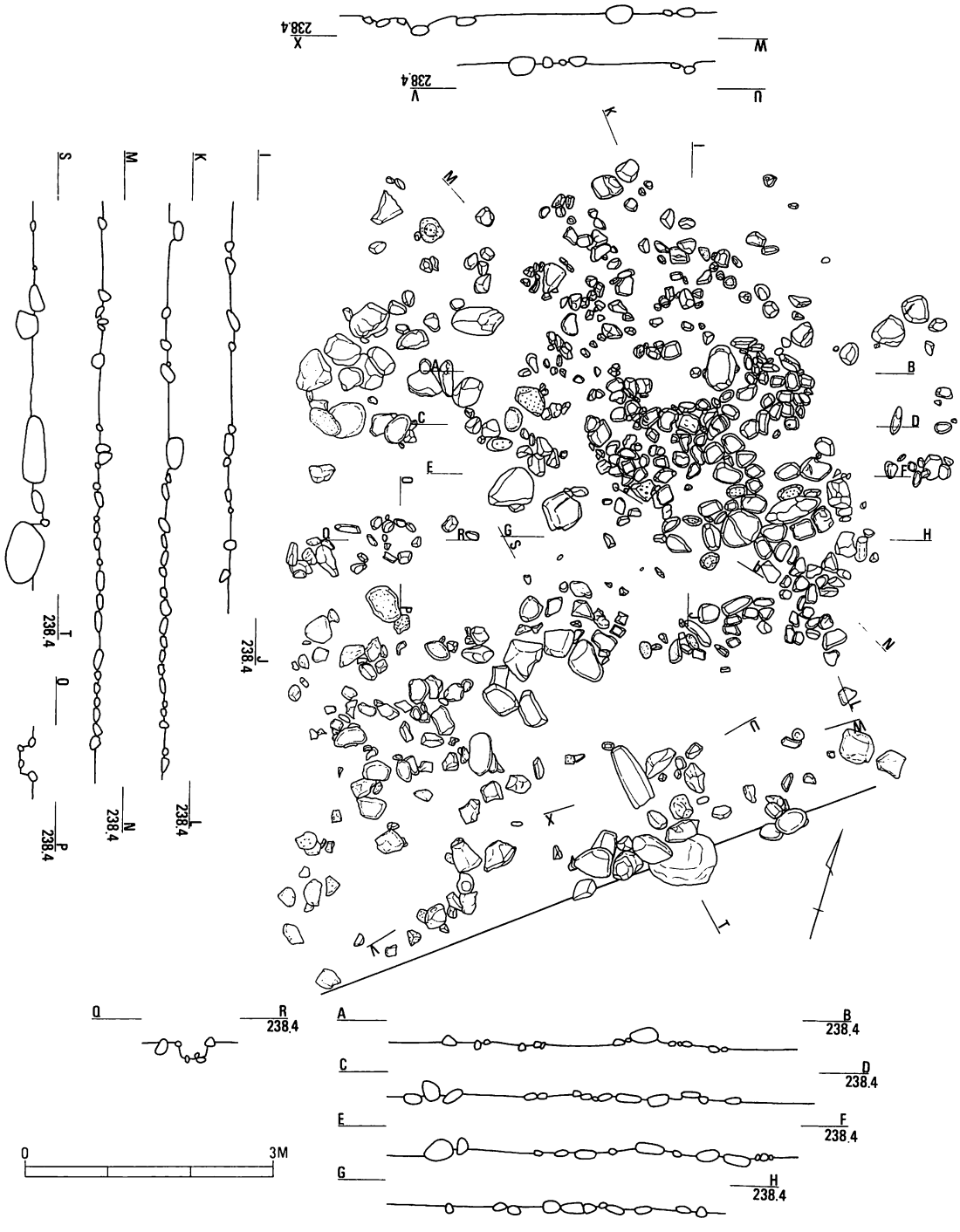
第10号住居跡（第32～37図）

Ｈ－23・Ｉ－22・23区において検出された。周囲には段丘の上段から流入してきた30～50㎝程の礫が多くみられそれらを除去した間にかなり破損した状態で確認された。敷石は掌大の扁平な緑色岩を隙間なく敷き詰めている。また、その敷石のいくつかは熱を受けたためか僅かに赤変していた。炉は約1/2破損していたが直径約50㎝、深度約20㎝の堀り込みを有しいてる。

遺物の出土は多い。土器類は後期のものが12点出土している。１・２は堀之内１式期、３～９は堀之内２式期、10～12は堀之内２式期新段階から加曽利Ｂ１式期古段階に位置付けられる。石器類は８点出土している。13は軽石製石製品である。円柱状に加工された上に熱を受け全体が赤変している。14～17は磨石、18～20は石皿片である。

第11号住居跡（第38～40図）

Ｓ－12区より検出された。当区域は遺構検出面が耕作や土石流による撹乱で非常に荒れている箇所のひとつである。このため検出時の状況では炉のみしか確認されなかった。しかし、精査を繰り返したところ所々に床



第28図　第９号住居跡

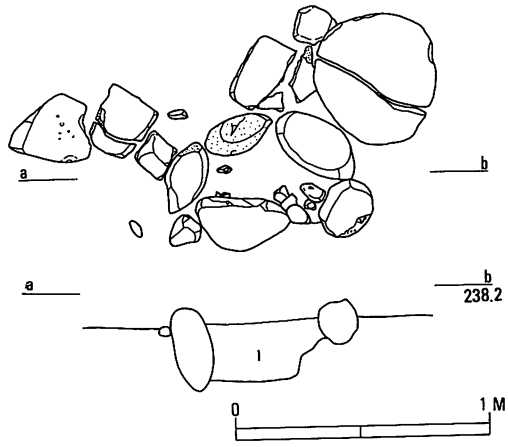
面と思われる僅かな硬化面が検出されたため住居跡と認定した。なお、ピットなどは検出できなかった。

炉は、６枚の扁平な自然石を組み合わせた石囲炉であり、激しく火熱を受けたため１枚にはクラックが生じている。その規模は1.14×0.92m、深度約30cmを測る。

出土遺物は炉の東部分に多くが集中している。１は勝坂式期の蛇頭状突起が施された深鉢型土器の口縁付近である。また、２～９は曽利式期に位置付けられる深鉢形土器である。10は曽利式期に並行する連弧文系と推される。石器は打製石斧（10～16）、磨製石斧（17）、磨石（18～21）が出土している。

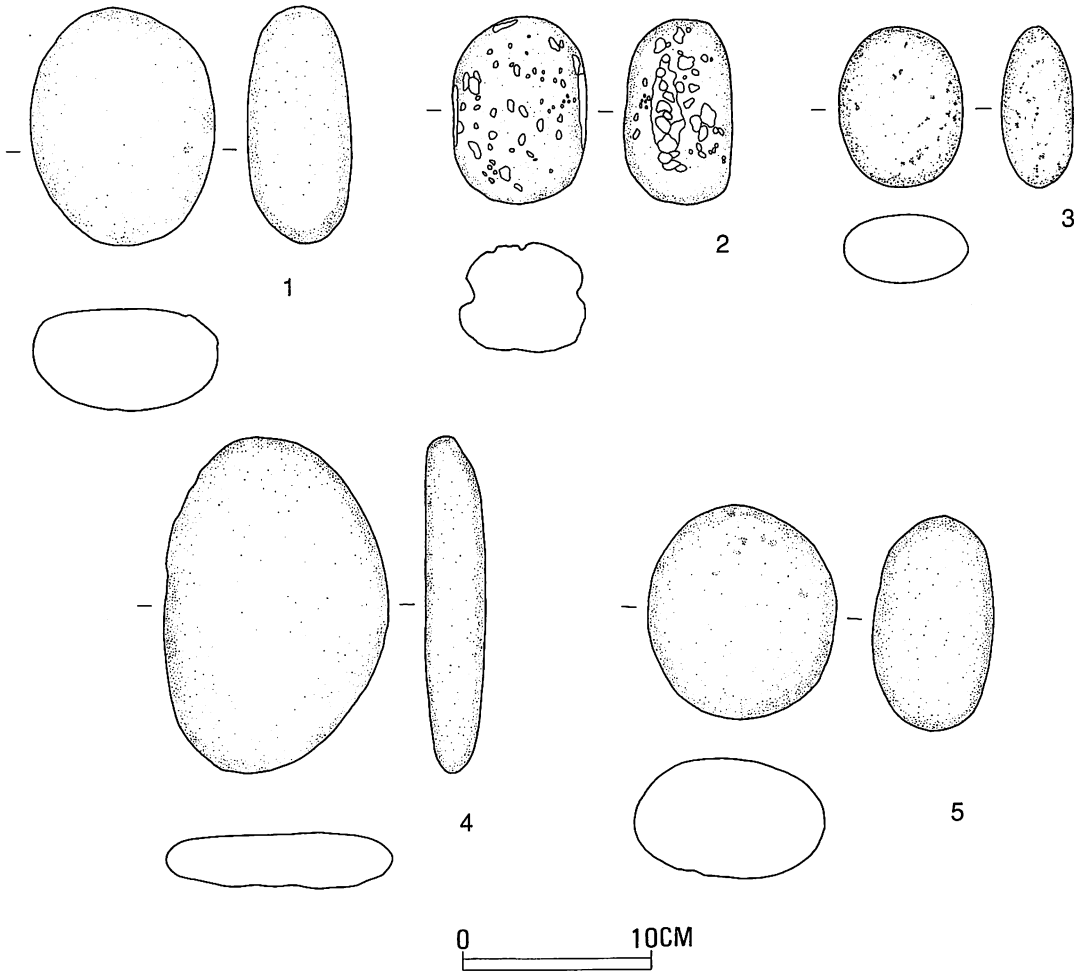
第12号住居跡（第41図）

Ｎ－５区において検出された。非常に残存状態が悪く当初は屋外炉として調査された。しかし、炉に接した

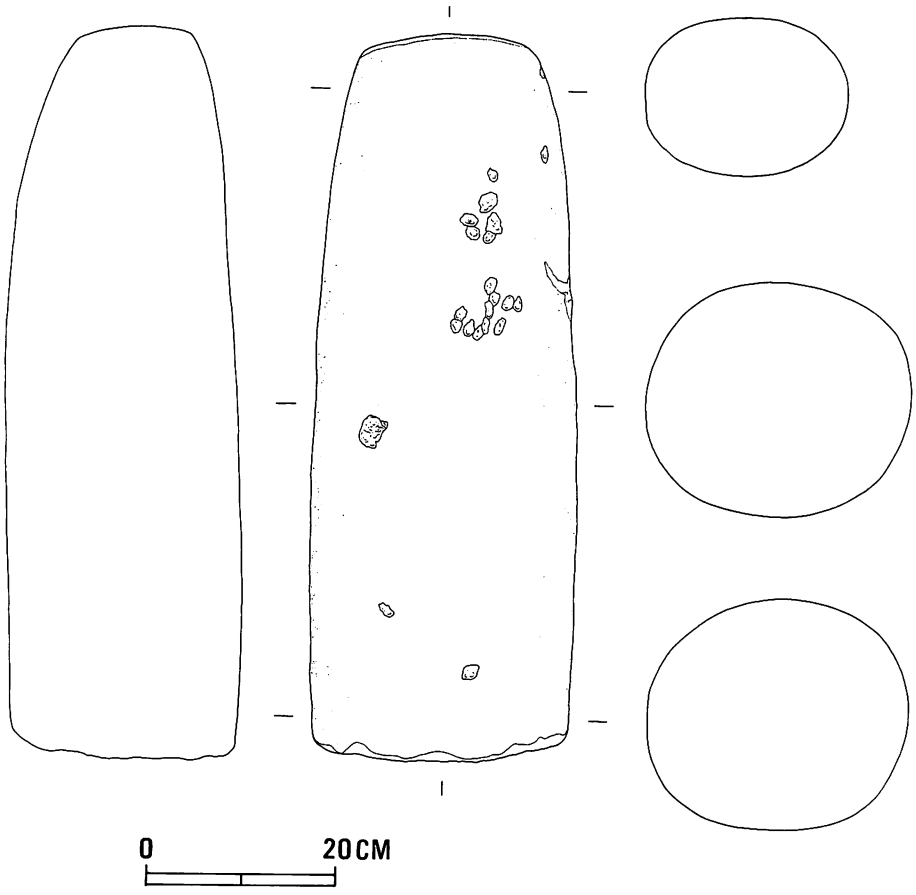


1　明茶褐色土層

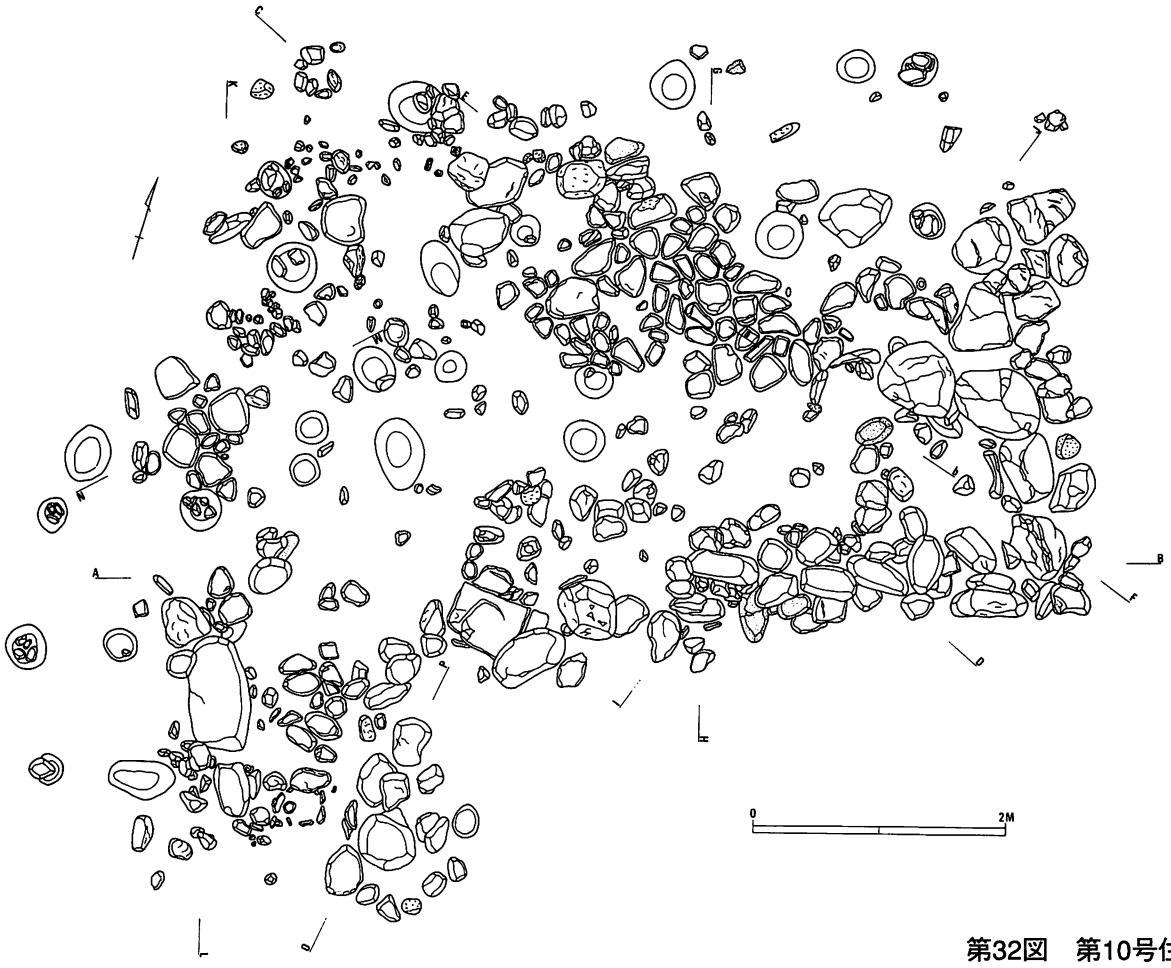
第29図　第９号住居跡炉



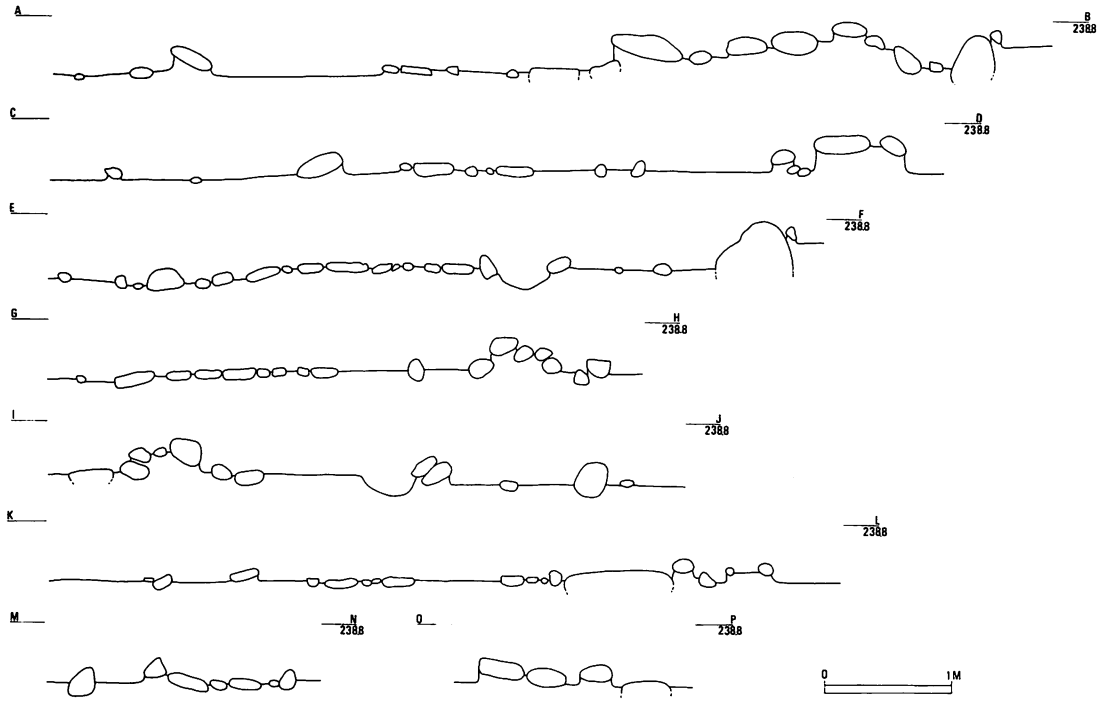
第30図　第９号住居跡出土遺物１



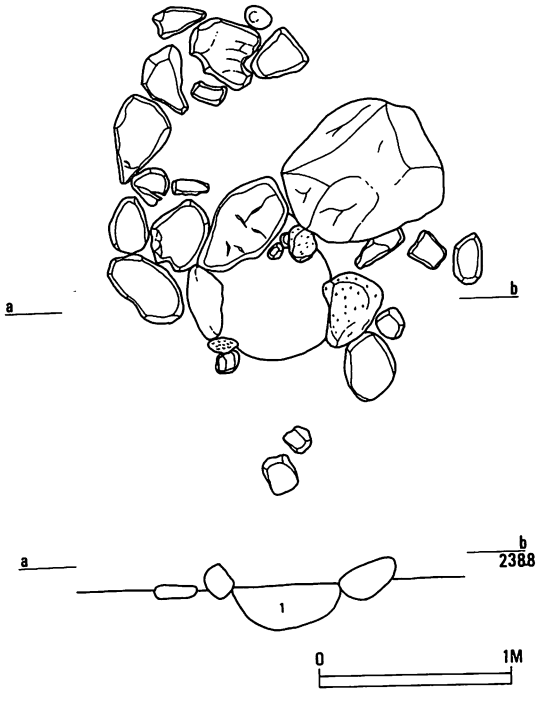
第31図　第 9 号住居跡
出土遺物 2



第32図　第10号住居跡



第33図　第10号住居跡

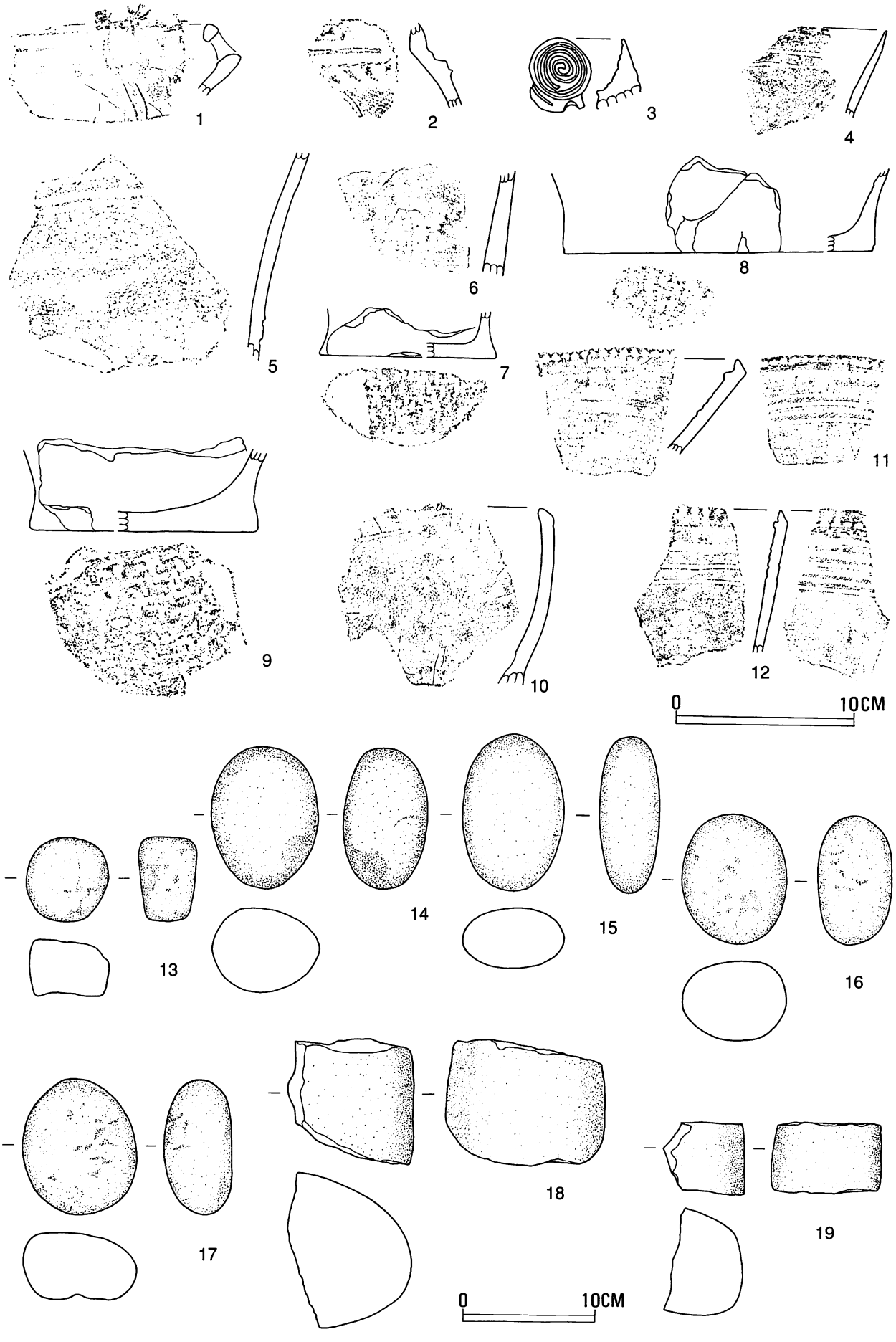


1　薄茶褐色土層

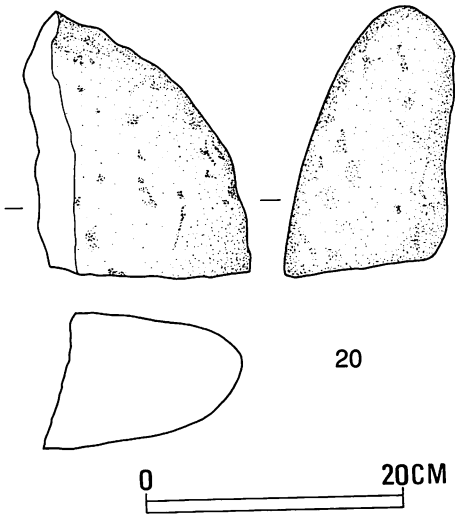
第34図　第10号住居跡炉

• 赤変

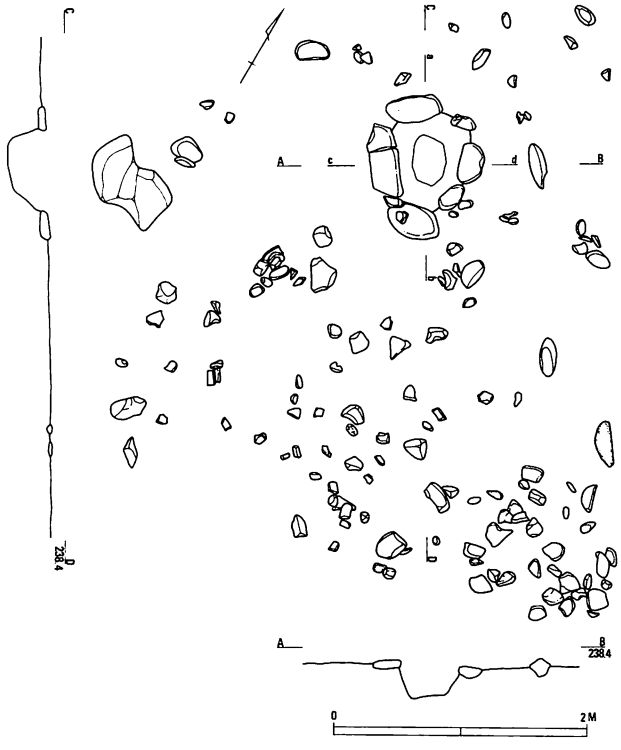
第35図　第10号住居跡敷石



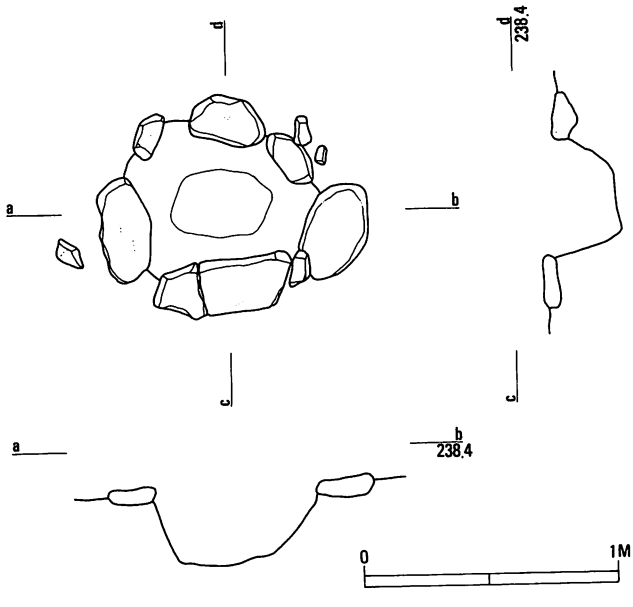
第36図　第10号住居跡出土遺物１



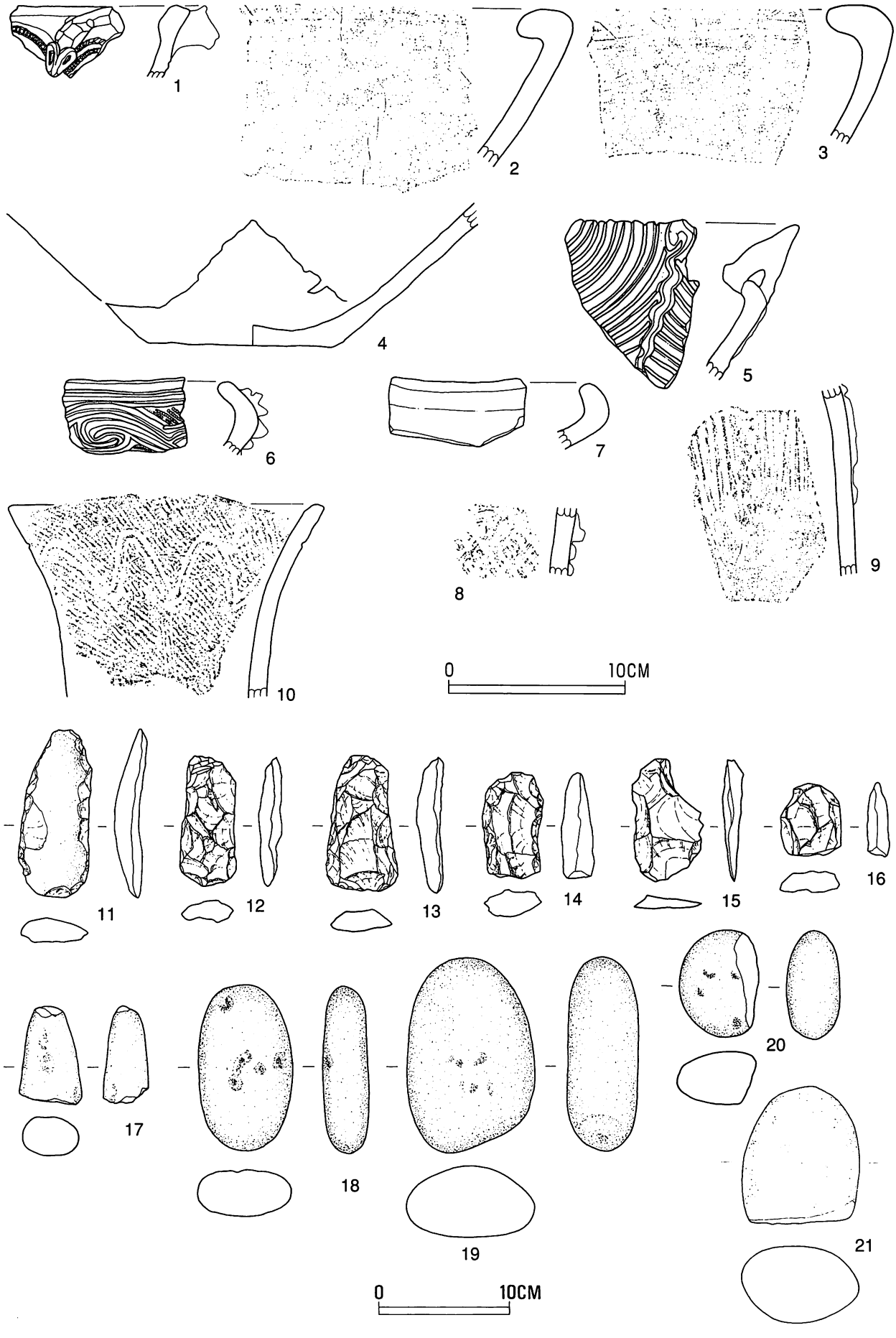
第37図　第10号住居跡出土遺物 2



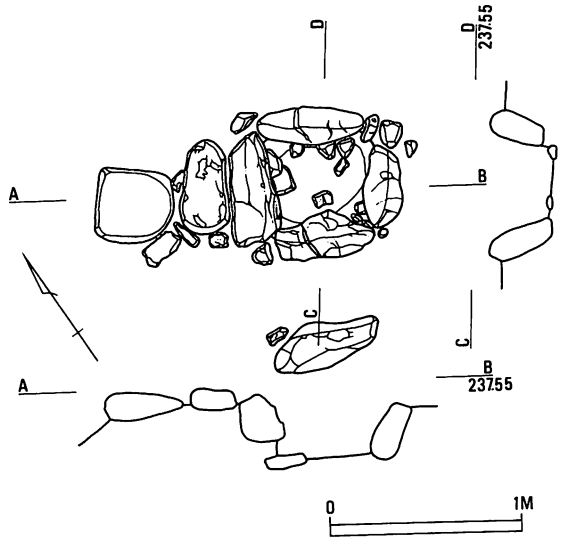
第38図　第11号住居跡



第39図　第11号住居跡炉



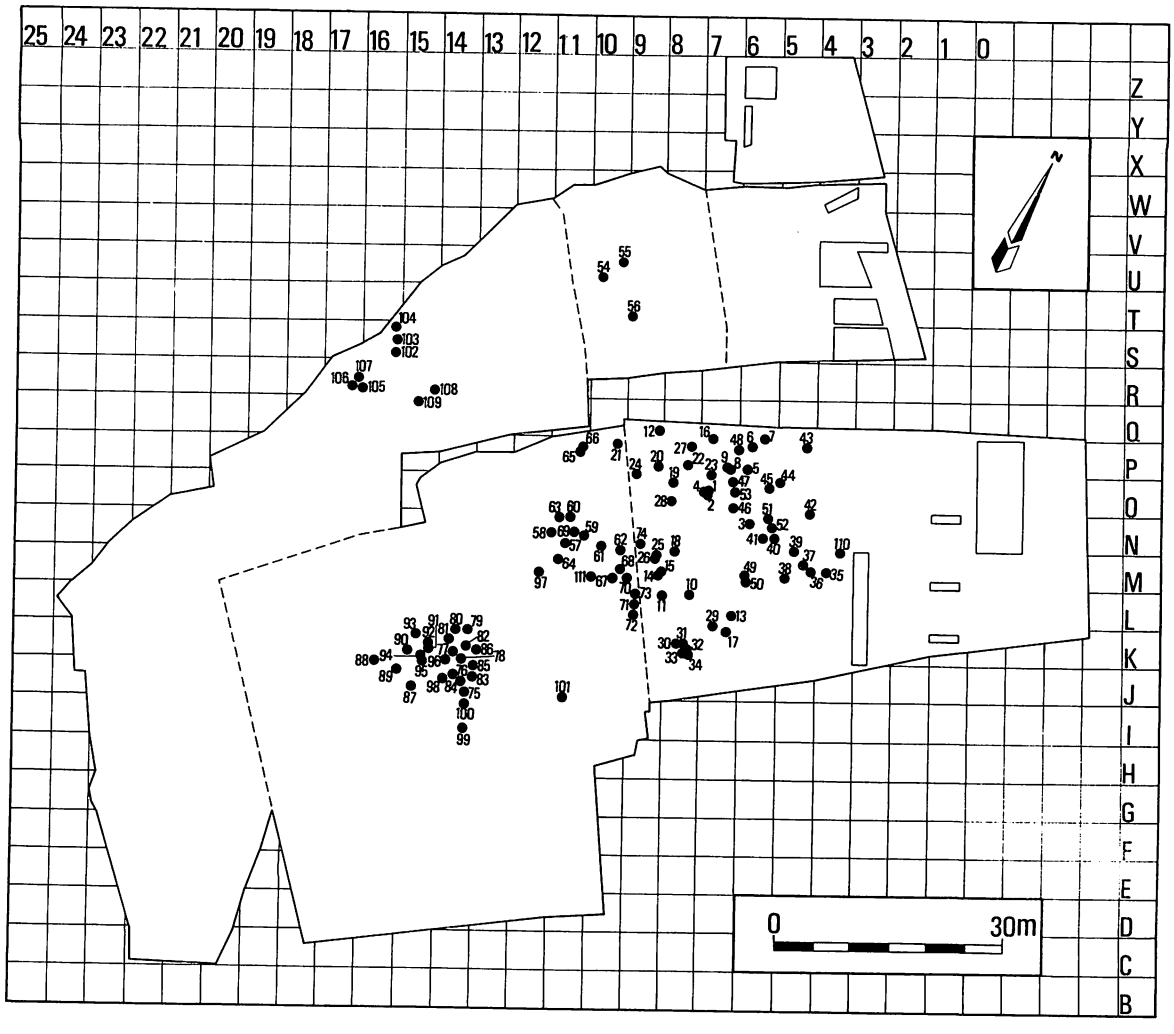
第40図　第11号住居跡出土遺物



第41図　第12号住居跡

位置に敷石が検出されたため住居跡と判断された。敷石は、40～50cmほどの扁平な自然石の間を10～15cmの小型の自然石によって充填させている。炉は、40～55cmの自然石を４石用い、コーナー部分には、10cm程の小型礫を配している。平面形は、長方形を呈しており、長軸90.4cm、短軸79.9cm、深度35.1cmの規模を有する。また、炉石には、被熱痕が残存しており各所にクラックが生じている。炉覆土からは、２～３cmの角礫が多く混入していたほかは、焼土・炭化粒子などは検出されなかった。本住居跡の位置付けであるが決め手となる遺物の出土はなかったが炉の形状から縄文時代中期後半代に比定されるものと思われる。

第2節　土　　坑



第42図　土坑配置図

1・2・4号土坑（第43図）

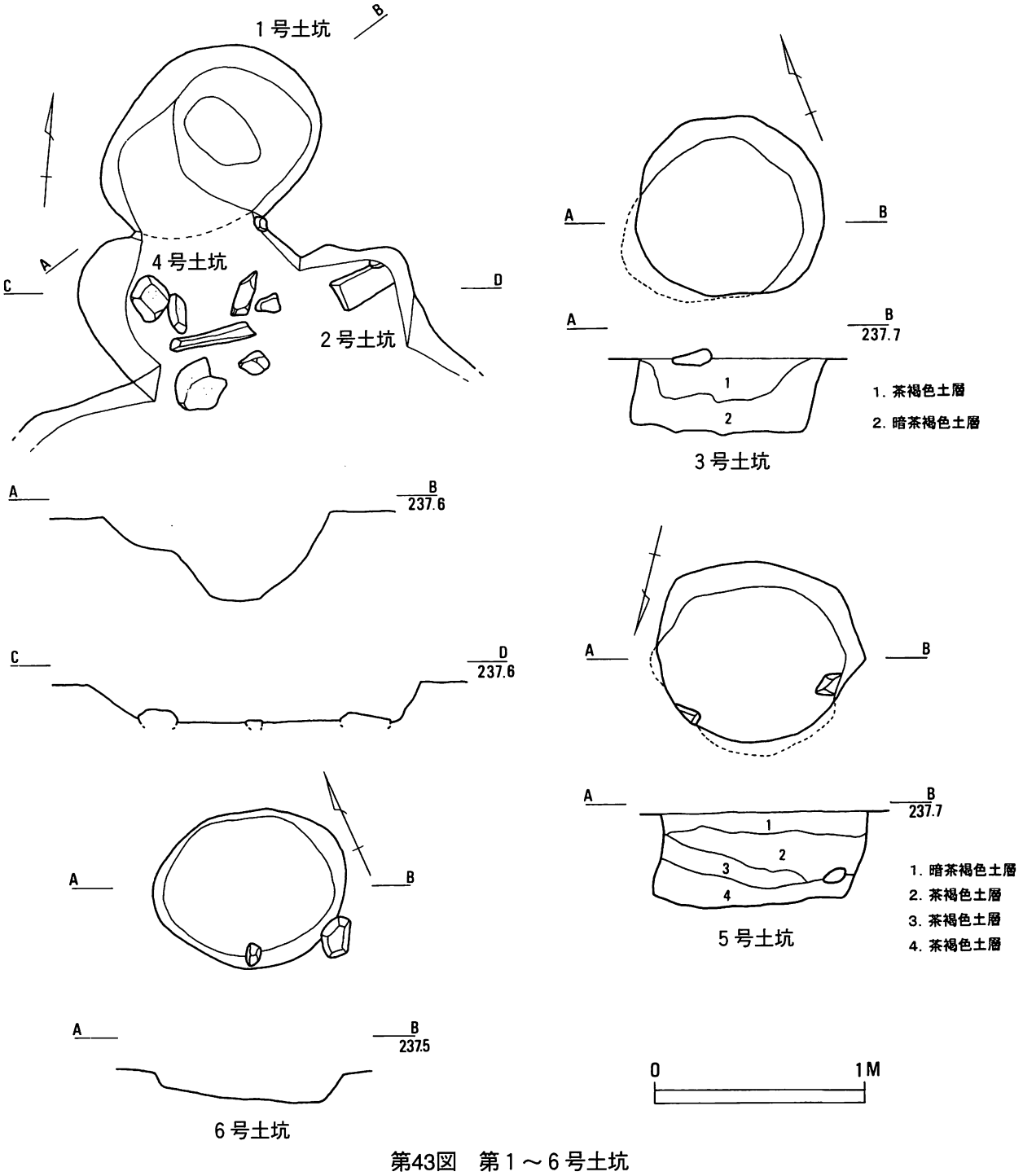
O－7・O－8に跨って1号住居跡に切られる形で3基の土坑が確認された。

1号土坑は、上縁部では楕円形を呈する形状を持っている。坑内の状況は、西方において61×45cm程のテラス状に広がりを持つ平坦面を有する。また、底面の形状は、不整楕円形状を取る。各部の法量は、長径110.5cm、短径85.3cm、深さ42.6cmを計る。遺物は出土していない。新旧関係は、4号土坑を1号土坑が切っているようである。

2および4号土坑は、1号土坑の南側にあり調査当初は1基の土坑とされていたが完掘された状態から2基の土坑と認定された。新旧関係は不明である。また、その規模についても正確に判断できるのは深度のみである（2号－20.6cm・4号－18.9cm）。なお、土器などの遺物は出土していない。

3号土坑（第43図）

N－6区に位置する。やや円に近い隅丸方形状の平面形を呈する。各部の法量は、長径91.5cm、短径86.3cm、深さ37.6cmを計る。また底部は、ほぼ平坦であるが西方において約12cmのオーバーハングをみせている。なお、坑内からは、数点の礫の混入がみられたものの土器などの遺物は検出されなかった。



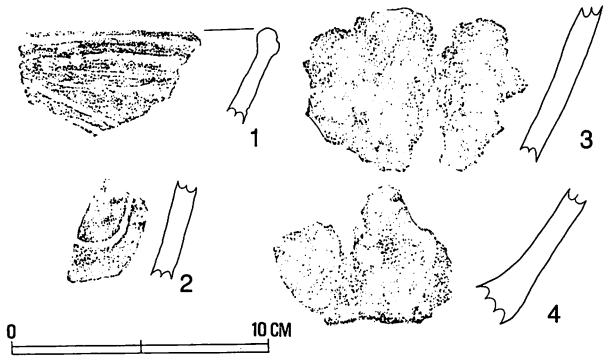
第43図　第1～6号土坑

5号土坑（第43図）

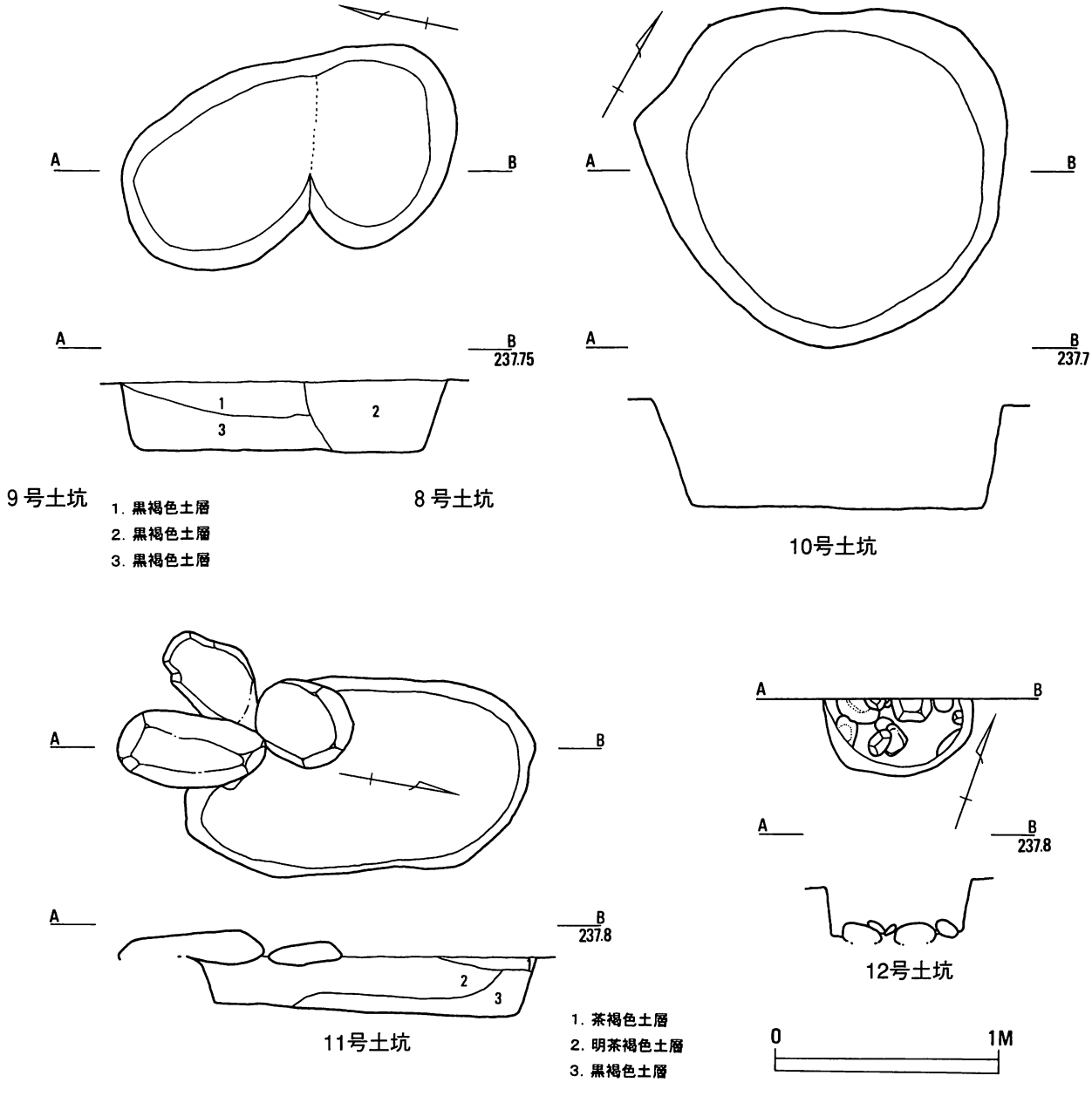
P－6区に位置する。ほぼ正円形を呈し、長径98cm、短径74cm、深さ45cmを計る。1／3ほど底部においてオーバーハングがみられる。内部からは、拳大の自然石が検出されたのみで土器類などは出土していない。

6号土坑（第43図）

P－6区に位置している。7号土坑より、南方に約1mと近接している。形状は、上縁、坑底ともに正円形に近い。法量は、長径94cm、短径76cm、深度18cmを計る。坑内からは、10cmほどの自然石のほかに図示し得ない縄文時代中期と推定される土器の小破片が2点出土している。



第45図　第７号土坑出土遺物



第46図　第８～12号土坑

7号土坑（第44・45図）

Ｐ－６・Ｑ－６区に跨り検出された。形状は長楕円形を呈し、長径148.5cm、短径80cm、深さ16cmを計る。底面は平坦である。坑内からは、10～20cmほどの自然石のほか４点の土器類が出土している。１・２は、縄文時代後期前葉に位置付けられる深鉢の破片である。また、３・４は、時期の詳細は掴めないが胎土などから後期と判断できるものである。

８・９号土坑（第46図）

Ｐ－７区に位置しており、双方が連結した状態で検出されたが、切り合い関係は、９号が８号を切っている様である。８号土坑は、長径91cm、短径推定64cm、深度32cmを計り、形状は、楕円形を呈する。９号土坑は、長径推定100cm、短径78cm、深度32cmを計り形状は長楕円形を呈する。出土遺物はない。

10号土坑（第46図）

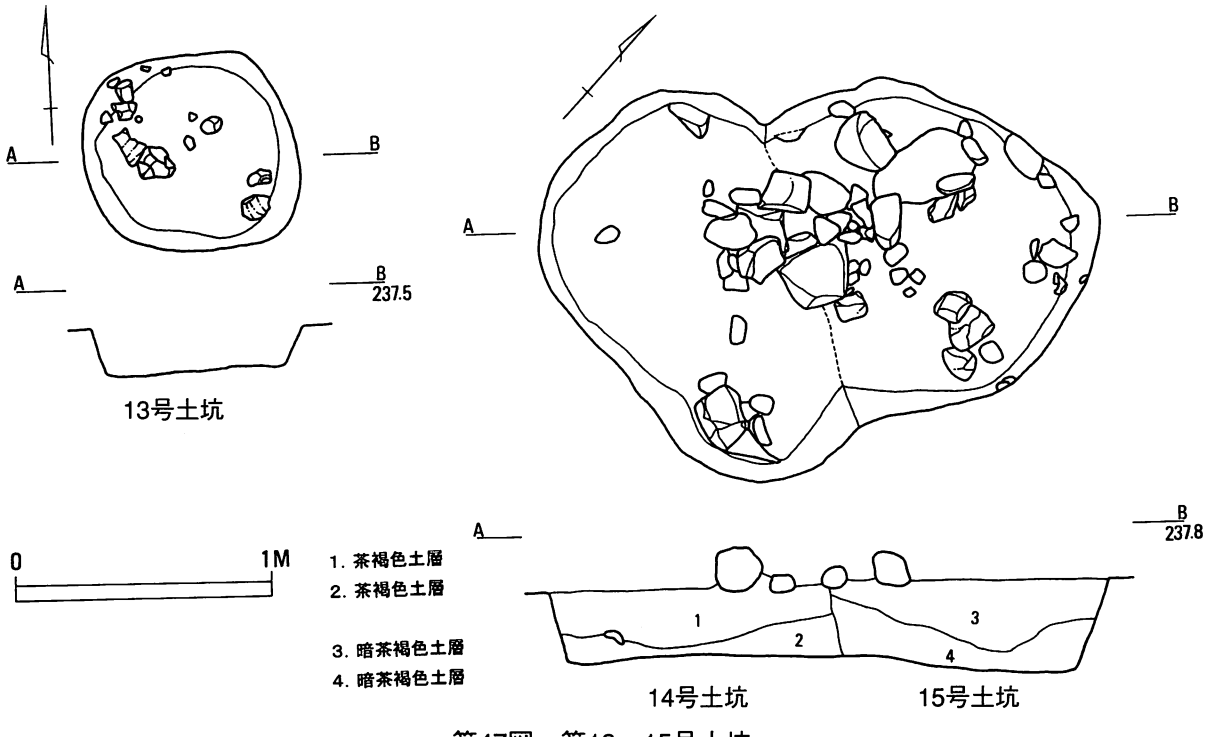
Ｌ－８区に位置している。上縁にはやや歪みがみられるが、坑底ともに正円形に近い形状をとる。法量は、長径168cm、短径150cm、深度47cmを計る。坑内からの出土遺物は検出されなかった。

11号土坑（第46図）

Ｌ－８・Ｍ－８区に検出された。上縁、坑底ともに長楕円形を呈している。法量は、長径162cm、短径87cm、深度28cmを計る。西方隅に45～70cmあまりの扁平な自然石が面的にみられるが、これは土坑埋没後に配置された配石の残骸の可能性がある。なお、出土遺物はない。

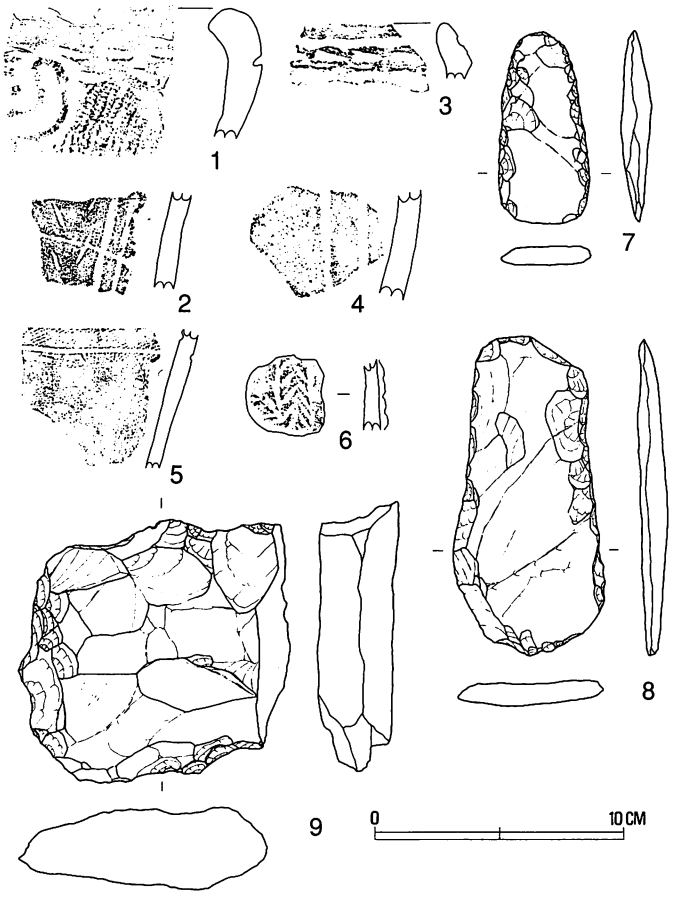
12号土坑（第46図）

Ｑ－９区に位置している。１／２しか検出されていないため明確な形状は不明であるがほぼ正円形に近い形態をとるものと想定できよう。法量は計測可能部分で長径67cm、深度24cmを計る。なお、坑底に自然石が充填されているように見えるがこれは、当遺跡の遺構確認最終面である段丘中位の礫床である。遺物は出土していない。



第47図　第13～15号土坑

第48図　第13号土坑出土遺物



第49図　第14・15号土坑出土遺物

13号土坑（第47・48図）

Ｌ－７区に位置している。平面形は隅丸方形を呈しており法量は、長径90.5㎝、短径77㎝、深度19㎝を計る。当土坑からは、拳大の自然石のほか土器が１点が出土している。これは、縄文時代後期前葉に位置付けられるものである。

14・15号土坑（第47・49図）

Ｍ－８・９区に位置している。切り合い関係は、15号が14号を切っている。法量については、14号は長径163㎝、短径推定105㎝、深度29㎝を計る。15号は短径131㎝、深度37㎝を計る。また、双方ともに、10～30㎝ほどの礫のほか土器５点、土製円盤１点、打製石斧３点の混入がみられる。土器は、１・２が縄文時代中期後半、３～５は後期前葉に位置されよう。また、６の土製円盤は、中期中葉の所産である。

16号土坑（第50図）

Ｑ－７区に位置している。調査区画外に１／２ほど延びていると推定できる土坑である。坑内の状況は、上部においては攪乱がみられるが、下半では、安定した層位が観察でき15～20㎝程度のやや扁平な自然石の混入をみることができる。形状は、検出された状況から上縁および坑底ともにほぼ正円形を推定することができよう。壁は、東側を垂直に近く、西

方はやや開きながら立ち上がっている。法量は、残存部で直径111cm、深度46cmを計る。遺物は出土していない。

17号土坑（第50図）

K－7区に位置している。円形に近い形状を上縁および坑底にみることができる。壁はやや開き気味に立ち上がる。法量は、長径72.5cm、短径58.5cm、深度29cmを計る。遺物は出土していない。

18号土坑（第50・51図）

M－8・N－8区に位置する。隅丸方形に近い平面形を有する。壁の立ち上がりは垂直に近く、壁面および坑底には10～20cmの礫が確認された。法量は、長径104cm、短径91.5cm、深度38cmを計る。覆土は、層位的にみても非常に安定した堆積を観察できる。出土遺物は、中期後半の深鉢口縁部が出土している。

19号土坑（第50図）

O－8区に位置している。平面形は上縁・坑底ともに正円形に近く、断面形は鍋底型を呈する。規模は、長径92cm、短径86cm、深度17cmを計り、東側端に長楕円形の浅いピット（長径49cm、短径28.5cm、深度11cm）を有する。壁の立ち上がりはピット側は垂直に他方はややなだらかに立ち上がる。遺物の出土はなかった。

20号土坑（第50図）

Q－9区に位置する。平面形は、上縁・坑底ともに正円形に近い形状を呈する。壁は、全体になだらかな傾斜を持って立ち上がる。法量は、長径82.5cm、短径67.2cm、深度37.5cmを計る。坑底や壁にみられる小礫は、最終遺構確認面の礫床が露出したものである。なお、遺物の出土はなかった。

21号土坑（第50図）

P－8区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに円形を呈し、壁はなだらかな立ち上がりを見せている。規模は当遺跡から検出された土坑の中では小型で長径80cm、短径58.7cm、深度37.5cmを計る。坑底や壁には最終遺構確認面の礫床が露呈している。遺物は出土していない。

22号土坑（第50図）

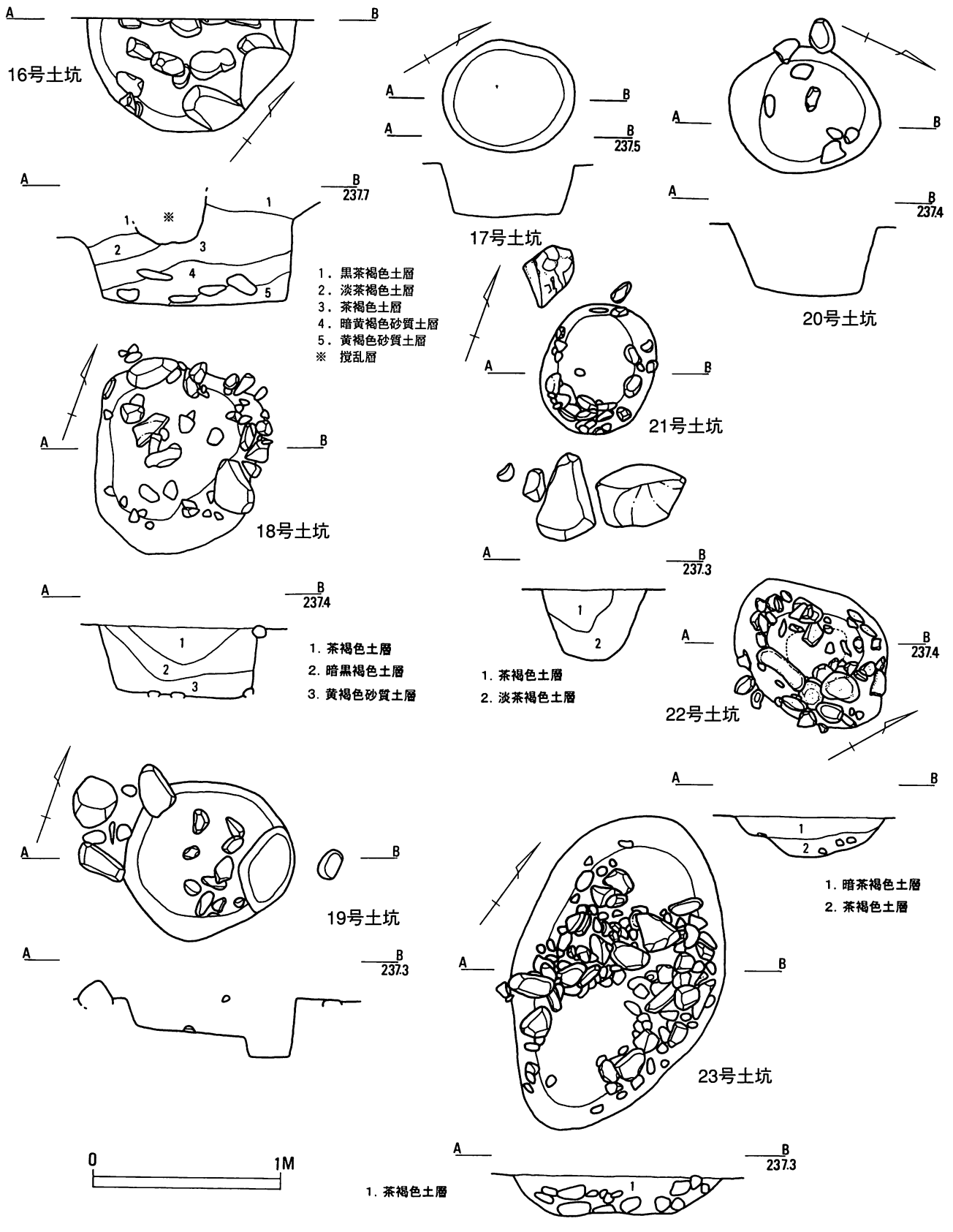
P－8区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに隅丸方形を呈し、壁は非常になだらかな立ち上がりを見せている。法量は、長径90.8cm、短径75.1cm、深度21.2cmを計る。坑底や壁には最終遺構確認面の礫床が露呈している。出土遺物はない。

23号土坑（第50図）

P－7区より検出された。覆土過半のほか坑底や壁には最終遺構確認面の礫床が露呈している。壁は、なだらかに立ち上がる形状をみせる。規模は、長径178.4cm、短径110.7cm、深度22cmを計る。出土遺物はない。

24号土坑（第52・53図）

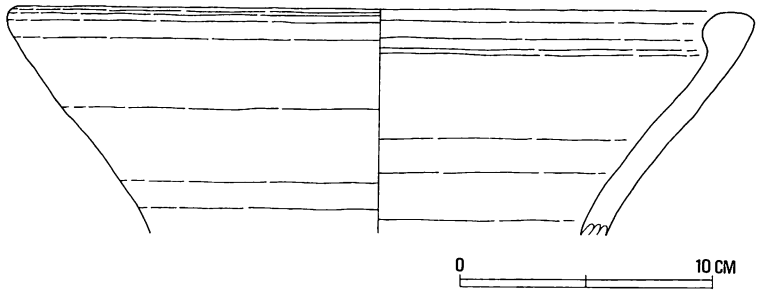
O－9・P－9区に位置している。上縁・坑底ともに円形を呈する平面形を持つ。また、断面形はすり鉢状を呈している。法量は、長径79.3cm、短径64.1cm、深度26cmを計る。上縁・坑底や壁には最終遺構確認面の礫床が露呈している。出土遺物は、土器類2点が出土している。1は、縄文時代中期後半、2は後期前葉に位置付けられる。



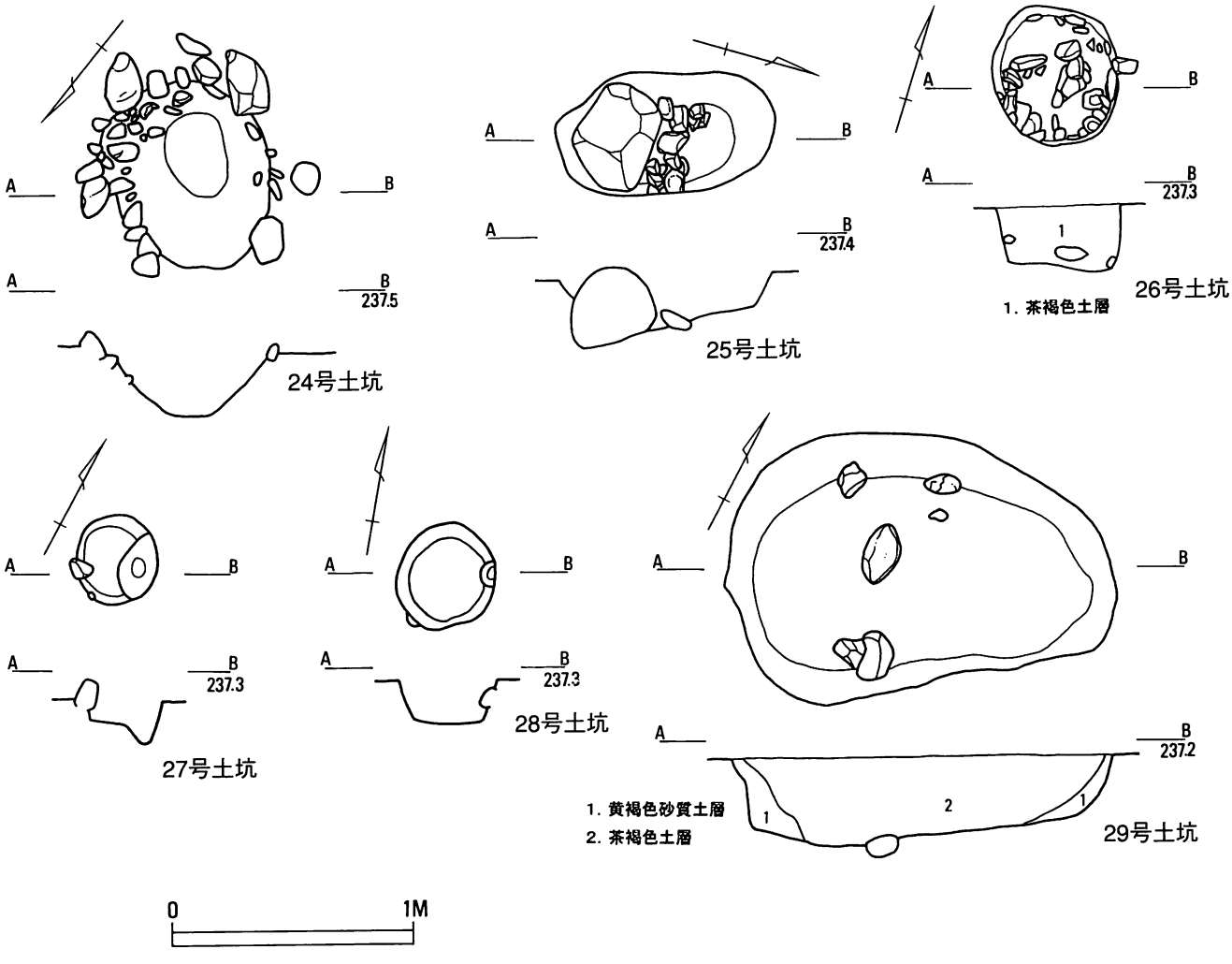
第50図　第16～23号土坑

25号土坑（第52図）

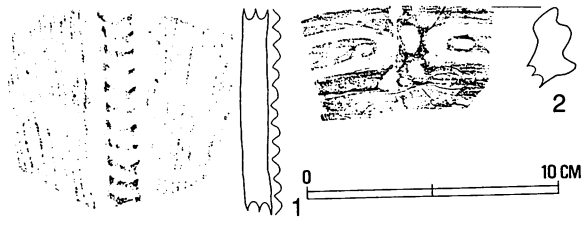
M－9区に位置している。上縁・坑底ともに楕円形を呈する平面形を持つ。壁の立ち上がりは、なだらかである。坑内には、45cmほどの礫がみられるが人為的なものではなく土坑埋没時に混入したものと推測できる。坑底部には、他の土坑にみられるような最終遺構確認面の礫床が一部で観察できる。規模は、長径93.4cm、短径



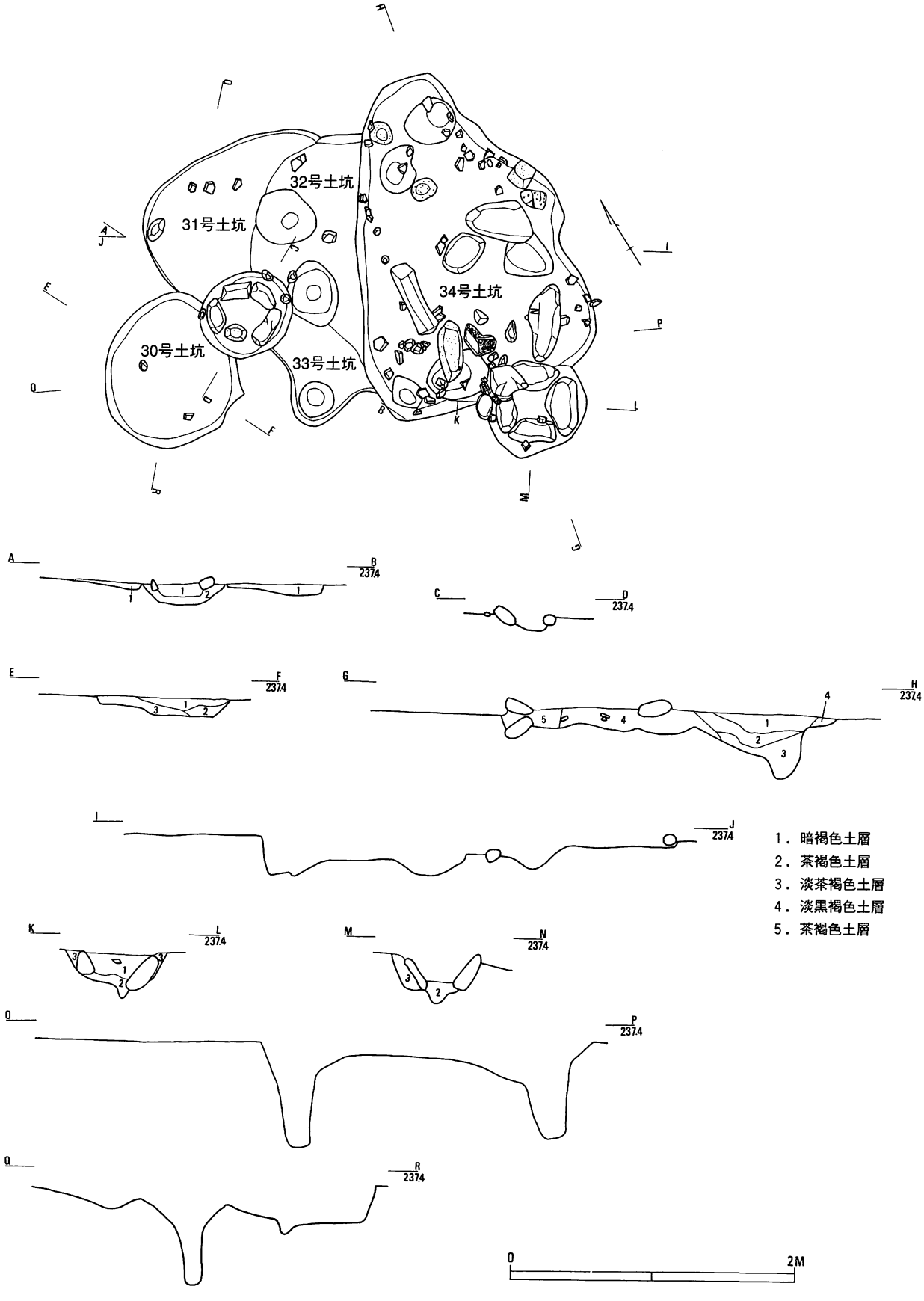
第51図　第18号土坑出土遺物



第52図　第24～29号土坑



第53図　第24号土坑出土遺物



第54図　第30～34号土坑

51.5cm、深度22.5cmを計る。出土遺物はなかった。

26号土坑（第52図）

M－9区に位置している。上縁のごく一部分を撹乱で欠損しているが円形の平面形を見て取ることができる。また、断面形は鍋底状を呈する。坑底部や壁にみられる小礫は、最終遺構確認面の礫床が露出したものである。規模は、長径60.4cm、短径52.2cm、深度27.6cmを計る。遺物は、出土していない。

27号土坑（第52図）

P－8区に位置する。平面形は、上縁・坑底ともに円形を呈する。また、東側に擂鉢状に立ち上がるピット（長径28cm、短径17cm、深度10cm）を有する。規模は小型であり、長径38.4cm、短径34.1cm、深度16.9cmを計る。出土遺物はない。

28号土坑（第52図）

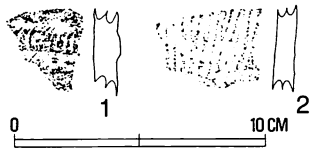
O－8区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに円形を呈している。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。規模は小型であり、長径46.3cm、短径41.2cm、深度19.1cmを計る。出土遺物はない。

29号土坑（第52図）

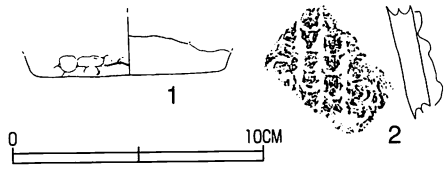
L－7・K－7区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに楕円形を呈し、壁はやや傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径163.4cm、短径110cm、深度37.5cmを計る。坑底部に6点ほどの礫が検出されたが土器類などの遺物の出土はなかった。

30·31·32·33·34号土坑（第54～59図）

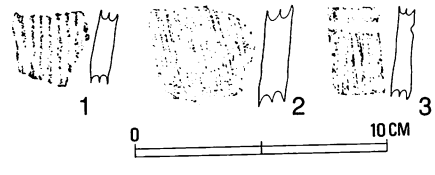
L－8区に5基の土坑と2基の屋外炉が切り合って検出された。



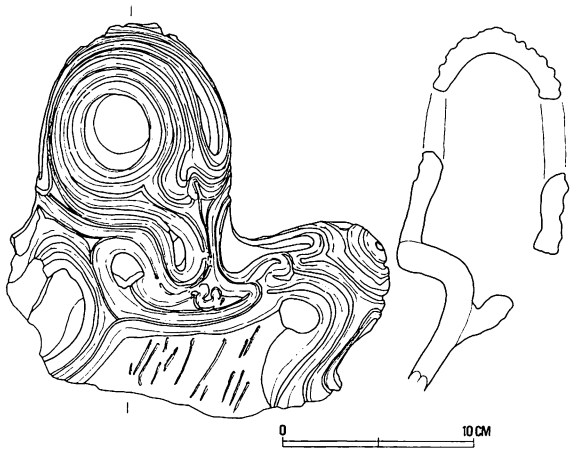
第55図　第30号土坑出土遺物



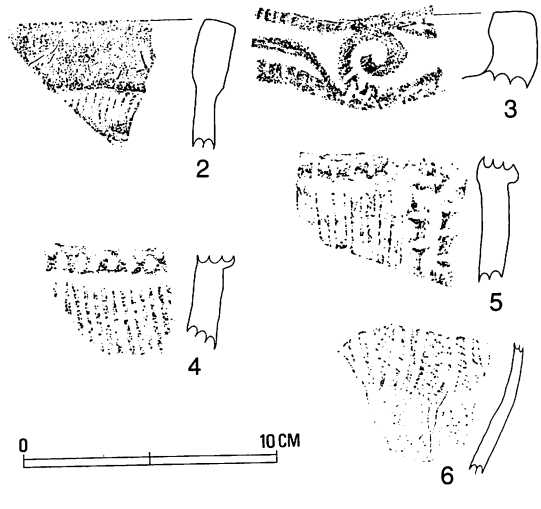
第56図　第31号土坑出土遺物



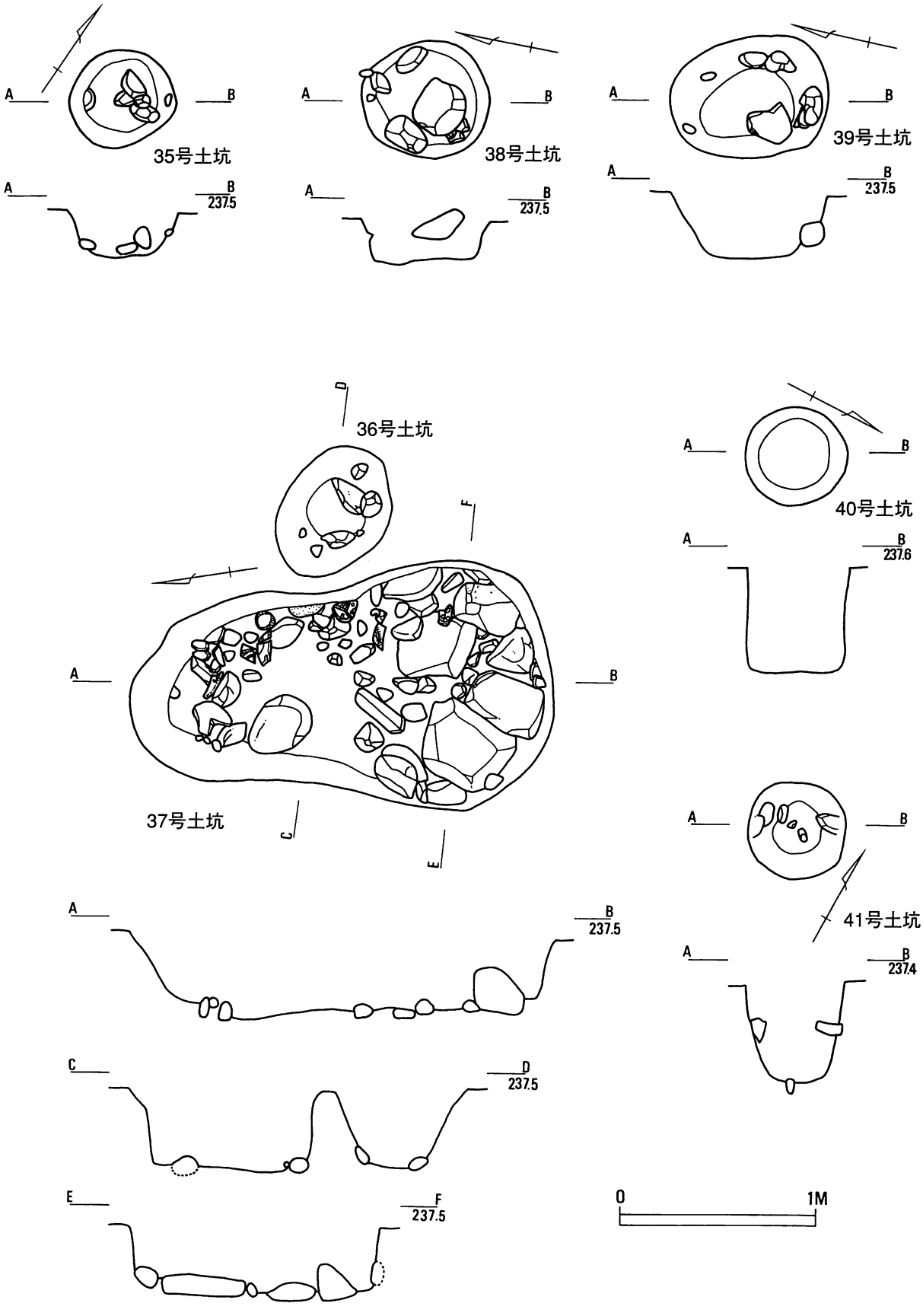
第57図　第33号土坑出土遺物



第58図　第34号土坑出土遺物1



第59図　第34号土坑出土遺物2



第60図　第35～41号土坑

30号土坑は、31号土坑に接しており、仮称95－5号屋外炉に切られている。平面形は円形に近く断面形は、浅い鍋底状を呈している。規模は、長径110.5cm、短径94.4cm、深度12.8cmを計る。遺物は、土器が2点出土している。1は、縄文時代中期中葉、2は、中期後半に位置付けられるものである。

31号土坑は32号土坑と屋外炉に大きく切られて検出された。このため、平面形状を判断するのは難しいものがある。規模は、長径推定150cm以上、短径推定100cm以上、深度10cmを計る。遺物は、２点の出土が確認された。１は縄文時代中期と考えられる深鉢形土器の底部である。また、２は中期後半の深鉢形土器の頸部破片である。

32号土坑は、31号土坑を切り屋外炉・33・34号土坑に切られている関係にある。31号土坑と同様に平面形状を判断するのは難しい。その規模は、長径推定130cm以上、短径推定75cm以上、深度8.2cmを計る。また、坑内には直径約47cm、深度約53.8cmと、直径約43.3cm、深度約15.1cmを計る２基のピットを有する。遺物は、中期中葉の土器小破片が数点出土したがいずれも図示し得るものではない。

33号土坑は、屋外炉に切られ32号土坑を切っている。また、34号土坑と接している。規模や形状を推定するのは不可能である。また、坑内には直径約27cm、深度約13cmのピットが１基検出されている。遺物は、深鉢形土器の胴部の破片が３点出土している。１は縄文時代中期中葉、２・３は中期後半に比定されるものである。

34号土坑は、屋外炉に若干切られている。また、32号土坑を大きく切り33号土坑に接している。形状は、楕円形を呈しており、規模は、長径233cm、短径169cm、深度9.2cmを計る。遺物の出土は、やや豊富である。１は、深鉢形土器に付けられるドーム型把手で４・５とともに縄文時代中期後半に位置付けられるものである。また、２・３は中期中葉、６は後期前半の所産である。

35号土坑（第60図）

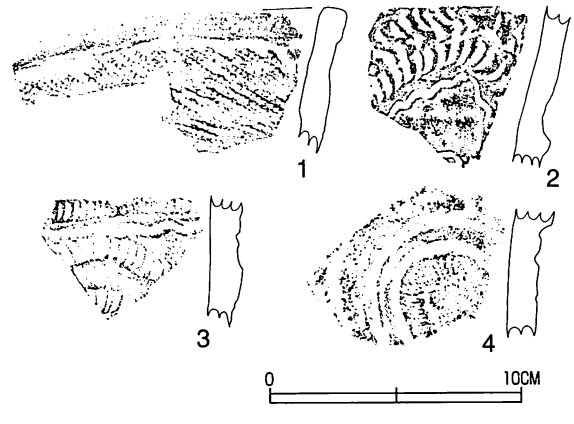
Ｍ－４区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともにほぼ円形を呈し、壁はやや傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径55.8cm、短径49.0cm、深度25.6cmと小さい。坑底に6点ほどの拳大の礫が検出されているのみで土器等の遺物は出土していない。

36号土坑（第60図）

Ｍ－５区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに瓢形を呈し、壁は北側ではやや傾斜を持って、他方ではほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、長径240.8cm、短径129.2cm、深度36.4cmを計る。坑底部には50cmから拳大ほどの礫が多数検出されたが、図示し得る土器などの遺物は出土していない。

37号土坑（第60・61図）

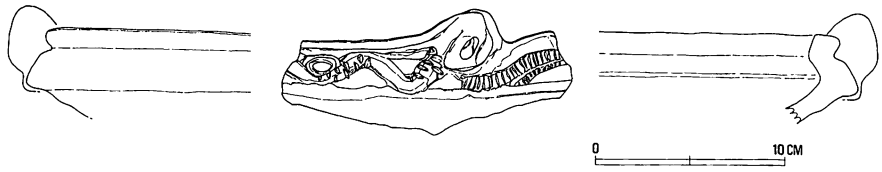
Ｍ－５区において検出された。また、36号土坑の東側に近接している。規模は、長径74.0cm、短径53.9cm、深度42.4cmを計る。形状は、上縁・坑底ともに楕円形を呈する。遺物の出土は土器類のみである。１～４は、ともに縄文時代中期中葉の深鉢形土器の破片である。



第61図　第37号土坑出土遺物

38号土坑（第60図）

Ｍ－５区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともにほぼ円形を呈し壁はやや傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径58.0cm、短径61.1cm、深度19.1cmを計る。坑内からは、10点ほどの３～30cmの礫が検出されているほか土器類などの遺物は出土していない。



第62図　第39号土坑出土遺物

39号土坑（第60・62図）

M－5・N－5区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに楕円形を呈し、壁はやや傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径82.1cm、短径68.0cm、深度38.0cmを計る。坑内からは、数点ほどの礫が検出されているほか土器類などの遺物出土は縄文時代中期深鉢形土器口縁部破片の1点のみである。

40号土坑（第60図）

N－6区に位置している。平面形は上縁・坑底ともに正円形に近く、壁は垂直に立ち上がる。規模は、長径53.2cm、短径51.1cm、深度54.0cmを計る。坑内からは、土器類などの遺物は出土していない。

41号土坑（第60図）

N－6区より検出されたもので40号土坑に近接した位置取りをしている。平面形は、上縁・坑底ともに円形を呈している。壁はやや急峻な傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径50.9cm、短径50.0cm、深度51.3cmを計る。坑内からは、6点の礫が確認されたが土器類などの遺物は検出されなかった。

42号土坑（第63図）

O－5・N－5区に位置している。平面形は、楕円形を呈している。また、当土坑の特徴的なこととして西方においてテラス状の平坦面を有していることがあげられよう。壁は、なだらかな傾斜を持って立ちあがっている。規模は、長径107.1cm、短径92.6cm、深度35.2cmを計る。テラス状の平坦面の深度は9.6cmである。数点の自然石が検出されたほか遺物は出土しなかった。

43号土坑（第63・64図）

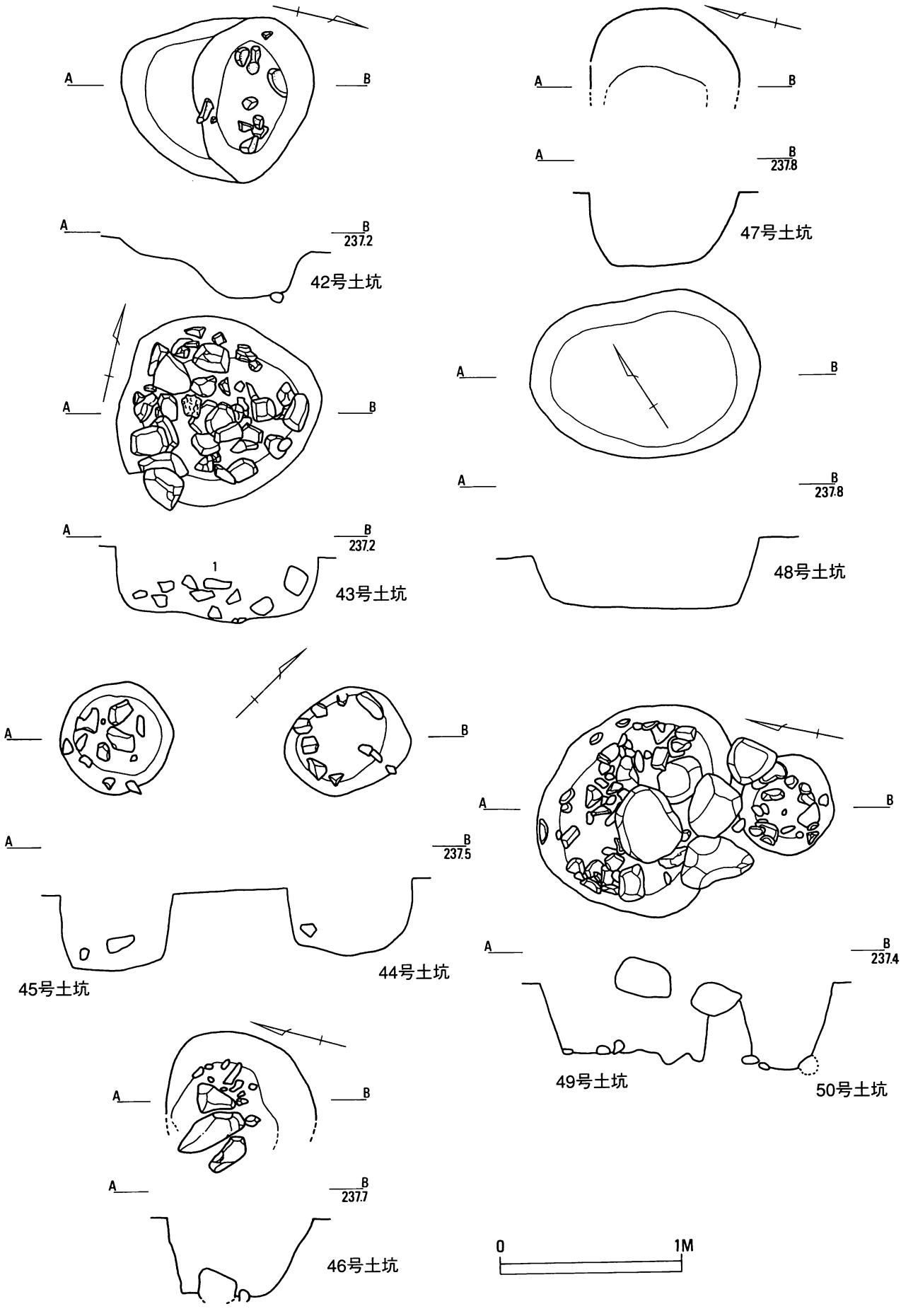
P－5区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに円形に近く、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、長径115.2cm、短径104.0cm、深度40.1cmを計る。坑内からは、多くの礫が検出されているがこれは、最終遺構確認面の礫床が露出したものと考えられる。遺物は多く8点が出土している（1～7は、深鉢形土器、8は土製円盤)。時代は、いずれも縄文時代中期中葉に比定されるものであろう。

44号土坑（第63図）

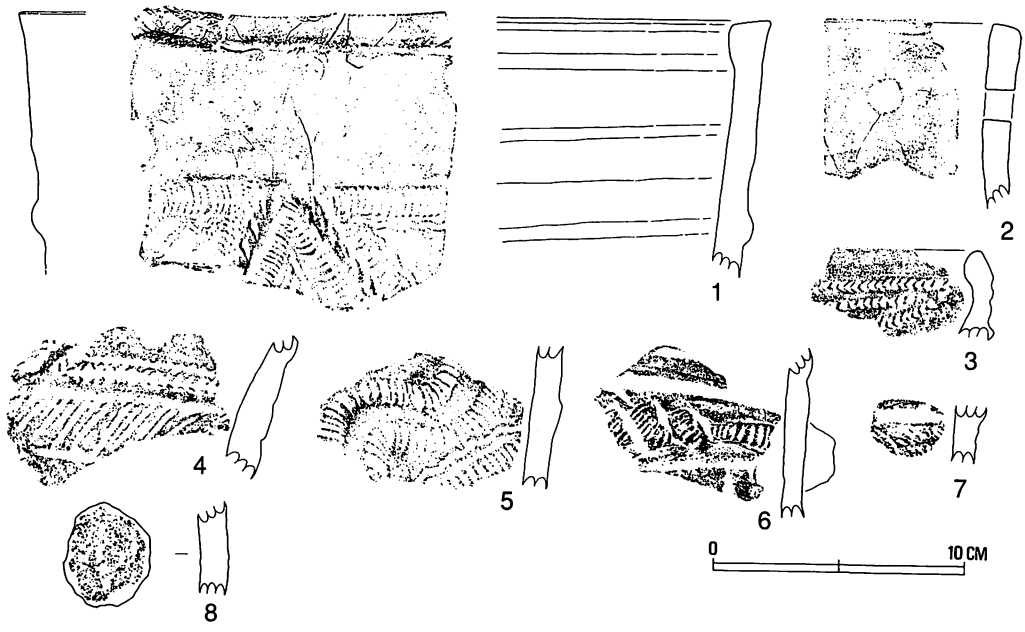
O－5・6区に位置している。45号土坑に近接している。平面形は上縁は隅丸方形、坑底は楕円形に近い形状をとる。壁は、垂直に近い傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径71.8cm、短径57.2cm、深度40.0cmを計る。遺物は出土していない。

45号土坑（第63図）

O－6区において検出された。44号土坑に近接した位置関係にある。平面形は上縁・坑底ともに円形に近い形状をとる。壁は、垂直に近い傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径69.9cm、短径61.1cm、深度42.2cmを計る。坑内からは、4点の礫が確認されたほかは遺物の出土はなかった。



第63図　第42～50号土坑



第64図　第43号土坑出土遺物

46号土坑（第63図）

Ｏ－７区に位置している。調査区の端部より確認されたもので全体の1/2が検出された。このため形状については、判断が難しいが上縁は楕円形を坑底部では不整円形を呈するものと思われる。壁は、　側では急勾配で、他方ではやや緩やかに立ち上がっている。坑底部付近には、最終遺構確認面が露出したものと考えられる礫床が確認された。規模は、短径83.1cm、深度43.2cmを計る。なお、遺物の出土はない。

47号土坑（第63図）

Ｏ－７区に位置している。46号土坑と同様に調査区の端部より確認されたもので全体の1/3程が検出された。形状は上縁・坑底ともに楕円形を呈するものと推定される。壁は、なだらかに開きながら立ち上がっている。各部の法量は、短径推定83.0cm、深度41.5cmを測定するにとどまった。遺物の出土はない。

48号土坑（第63図）

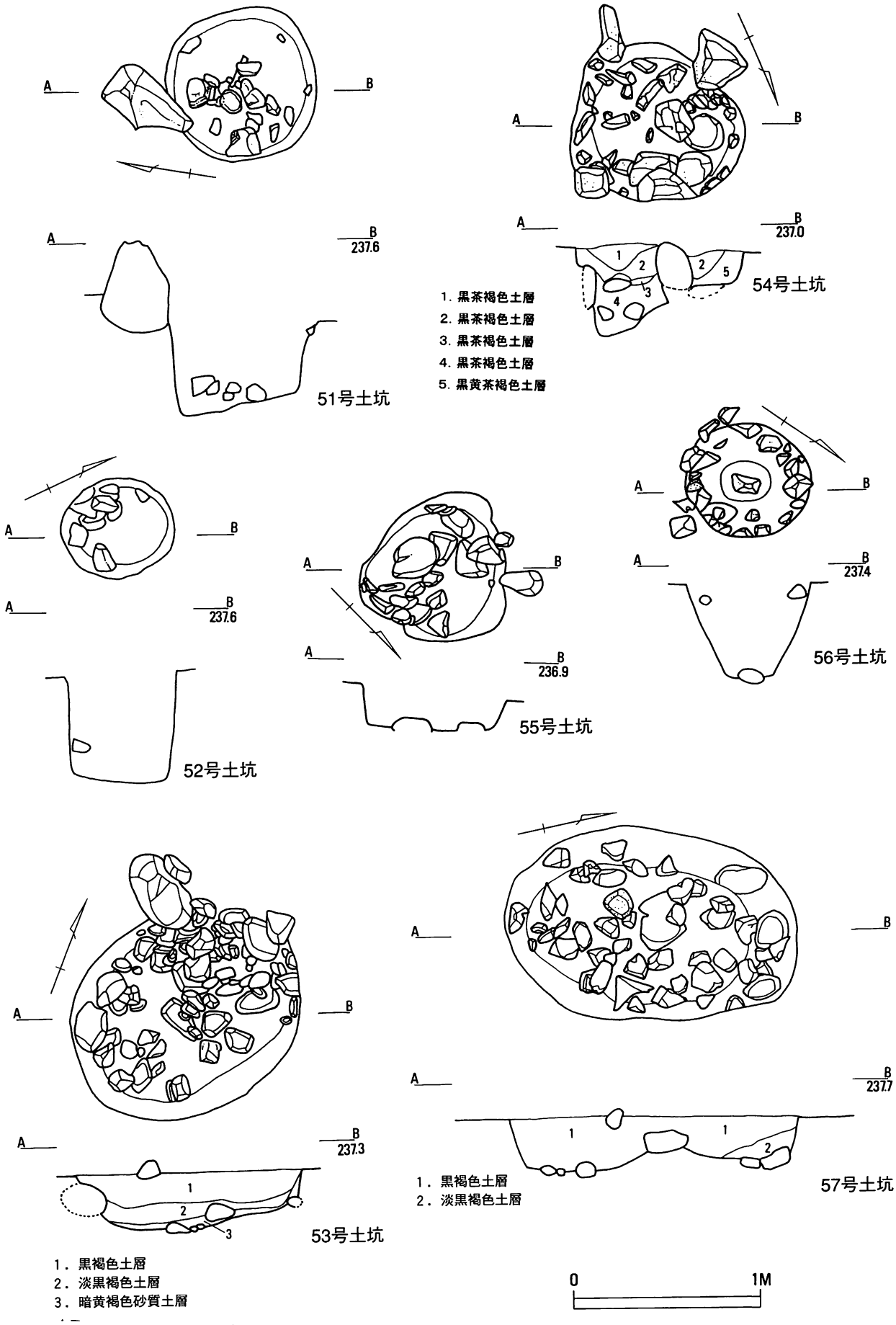
Ｐ－６・７区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに卵状を呈している。また、坑底は平坦であり、壁は傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径128.2cm、短径90.6cm、深度46.5cmを計る。坑内からの遺物の出土はなかった。

49号土坑（第63図）

Ｍ－６区にあり、50号土坑と近接した位置にある。上縁・坑底ともにほぼ円形に近い形状を呈している。また、坑底は平坦であり、壁は急傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径120.6cm、短径96.0cm、深度39.8cmを計る。上縁部付近には、40cm前後のやや扁平な自然石がみられるが単なる流れ込みか人為的に配置された配石の一部なのかは判断に苦しむ。坑底より検出されている拳大の礫は、最終遺構確認面の礫床の露出である。遺物の出土はなかった。

50号土坑（第63図）

Ｍ－６区にあり、49号土坑と約20cmと近接した位置関係にある。上縁・坑底ともにほぼ円形に近い形状を呈している。坑底はわずかに丸みを帯びている。壁は急傾斜を持って立ち上がる。49号土坑と比較するとかなり小振りになっており、その規模は、長径56.3cm、短径52.5cm、深度48.0cmを計る。坑底より検出されている拳大



第65図　第51～57号土坑

の礫は最終遺構確認面の礫床の露出である。遺物の出土はなかった。

51号土坑（第65図）

Ｎ－６区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに円形を呈している。また、坑底は平坦であり、壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径86.9cm、短径80.8cm、深度66.6cmを計る。坑底部にみられる礫は、最終遺構確認面の礫床の上部であろう。また、坑内からの遺物の出土はなかった。

52号土坑（第65図）

51号土坑と同じＮ－６区において確認された。双方の距離は、約40cmと近い。形状は、上縁・坑底ともに円形を呈している。また、坑底はわずかに傾斜を感じるがほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がっている。法量は、長径63.0cm、短径54.4cmを計る。また、深度は59.5cmと規模の割に深い。坑底部にみられる礫は最終遺構確認面の礫床の上部である。坑内からの遺物の出土はなかった。

53号土坑（第65図）

Ｏ－７区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに隅丸方形状を呈している。壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径134.5cm、短径108.2cm、深度31.2cmを計る。壁の一部や坑底部には、多量な最終遺構確認面の礫床がみられる。坑内からの遺物の出土はなかった。

54号土坑（第65図）

Ｕ－10区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに円形に近い形態をとる。また、坑底部には傾斜がみられる。壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径91.4cm、短径86.1cm、深度49.3cmを計る。覆土中にみられる礫は、土坑埋没時の流れ込みと想定できる。また、坑底部や壁際にみられる礫は、最終遺構確認面の礫床の一部であろう。坑内からの遺物の出土はなかった。

55号土坑（第65図）

Ｕ－10区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに不整円形を呈している。壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がる。坑底部は、礫が露呈しているものの平坦である。規模は、長径80.5cm、短径79.0cm、深度22.0cmを計る。坑底部には多量な最終遺構確認面の礫床がみられる。遺物の出土はない。

56号土坑（第65図）

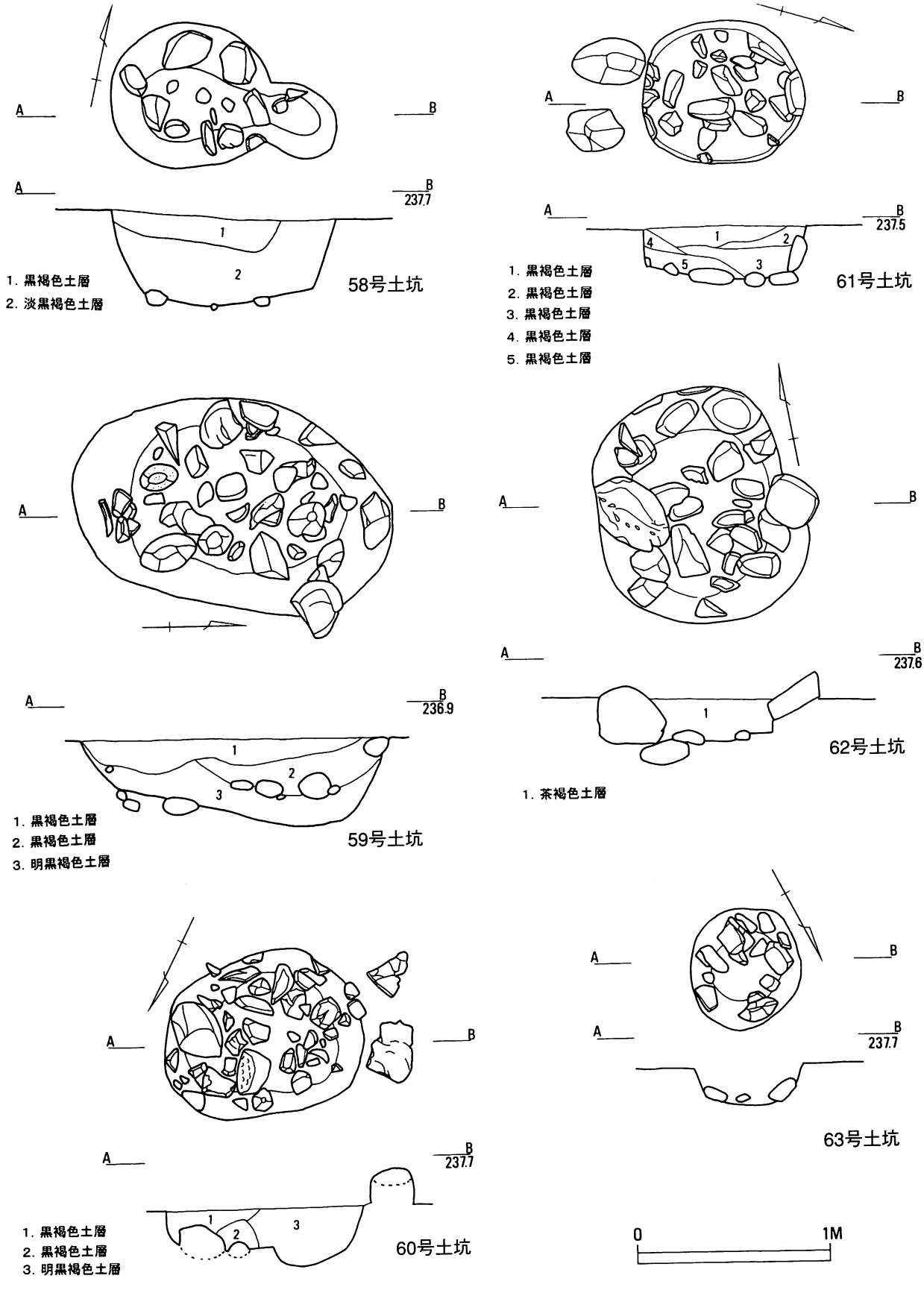
Ｔ－９・10区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに円形を呈している。壁は緩やかな傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径69.4cm、短径63.0cm、深度54.1cmを計る。坑底部や壁には多量な最終遺構確認面の礫床がみられる。遺物の出土はない。

57号土坑（第65図）

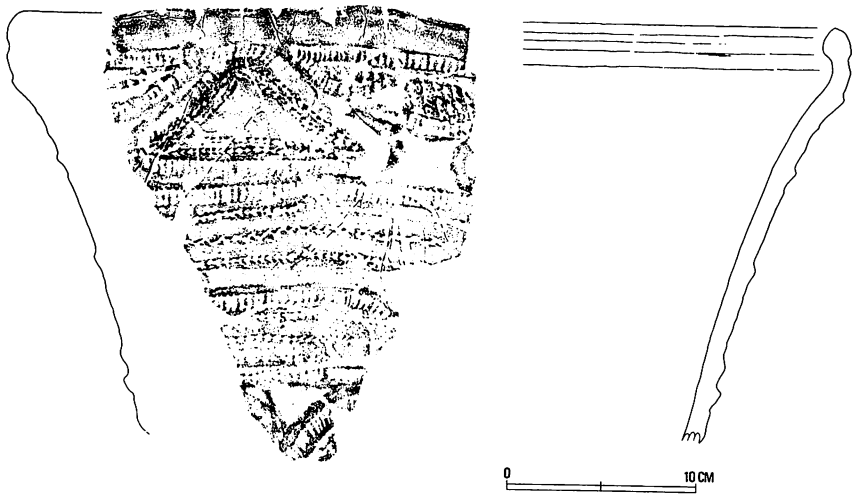
Ｎ－11区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに楕円形を呈している。壁は急傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径159.6cm、短径106.7cm、深度29.8cmを計る。坑底部の形状は、中心がやや盛り上がる他の土坑にはない特徴を見せている。壁の一部や坑底部には、多量な最終遺構確認面の礫床がみられる。坑内からの遺物の出土はなかった。

58号土坑（第66図）

Ｎ－11・12区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに瓢形を呈している。坑底は平坦であり、壁は傾斜



第66図　第58～63号土坑



第67図　第60号土坑出土遺物

を持って立ち上がる。規模は、長径121.2cm、短径77.7cm、深度46.5cmを計る。壁や坑底部には最終遺構確認面の礫床の一部がみられる。遺物の出土はない。

59号土坑（第66図）

N－11区に位置している。覆土の状況は中層あたりに20cmほどの自然石の流入がみられるものの非常に安定している。形状は、上縁では楕円形を坑底では隅丸方形を呈している。壁は、全体にやや開きながら立ち上がっている。法量は、長径171.1cm、短径108.4cm、深度45.6cmを計る。坑底部には、最終遺構確認面の礫床の一部がみられる。遺物の出土はない。

60号土坑（第66・67図）

N－11区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに隅丸方形状に近い。坑底にはかなりの起伏がある。壁は傾斜を持って立ち上がる。規模は、長径106.3cm、短径85.7cm、深度31.5cmを計る。壁や坑底部には最終遺構確認面の礫床の一部がみられる。出土遺物は、覆土内ではないが上縁部際より縄文時代中期中葉の深鉢型土器の大型破片が１点出土している

61号土坑（第66図）

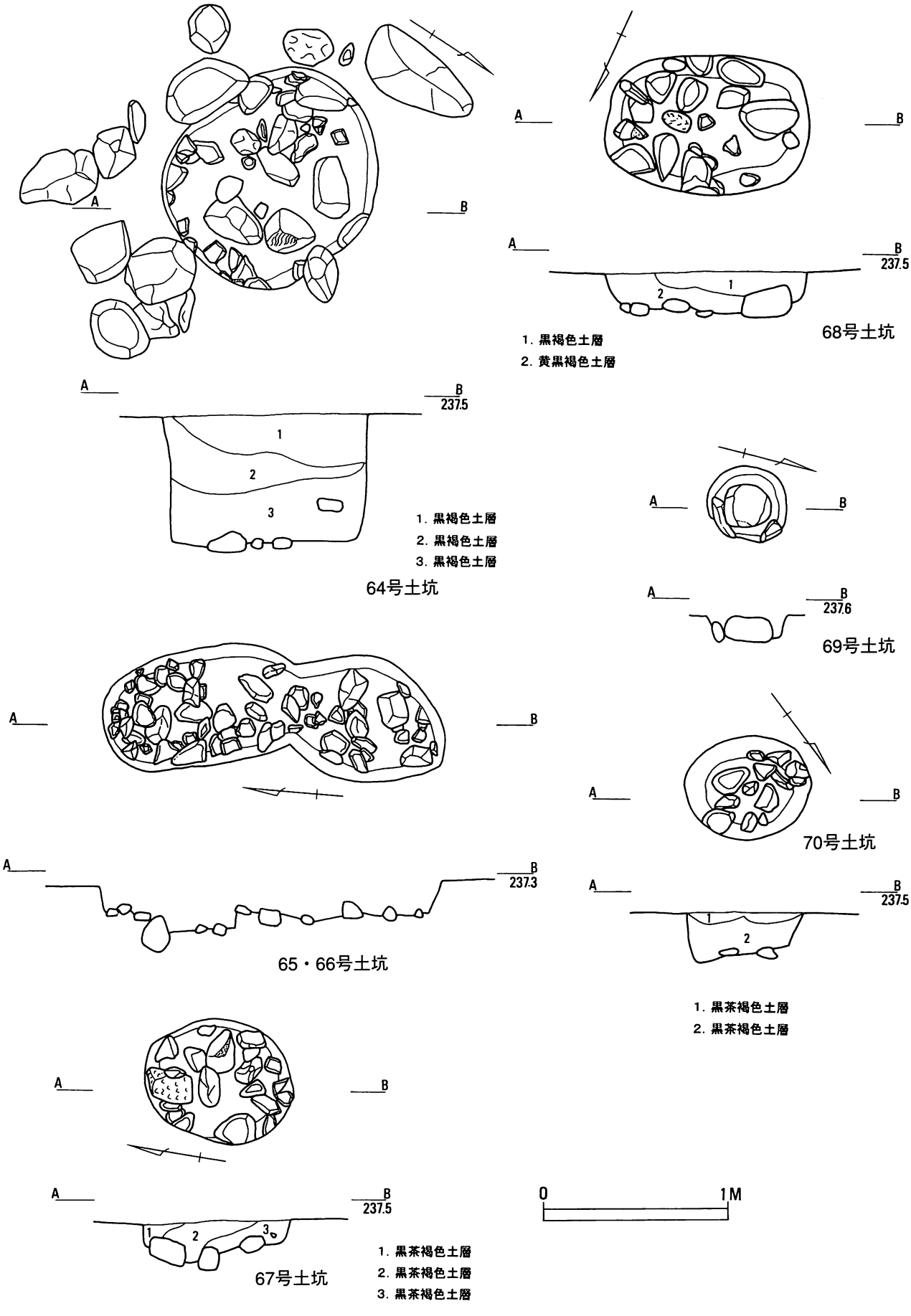
N－10区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに円形に近い。坑底は、平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、長径85.8cm、短径75.4cm、深度27.8cmを計る。壁や坑底部には最終遺構確認面の礫床の一部がみられる。出土遺物はない。

62号土坑（第66図）

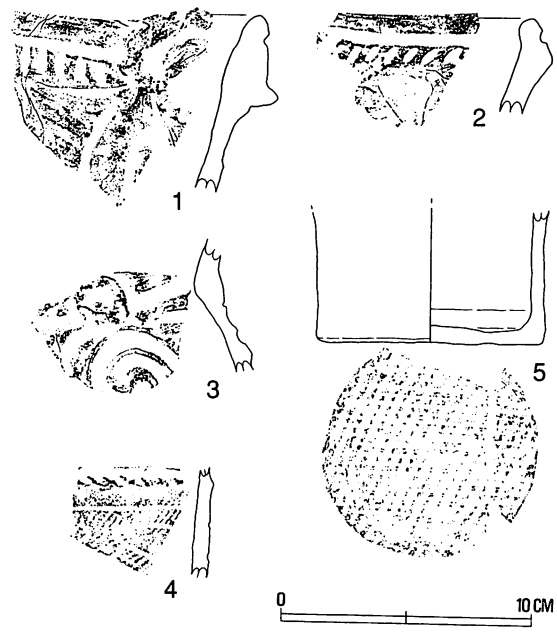
M－10・N－10区に位置している。平面形は、上縁・坑底ともに隅丸方形に近く、壁は礫の混入が著しいため判断しにくいがやや開きながら立ち上がる傾向が所々に見受けられる。規模は、長径124.0cm、短径98.2cm、深度22.0cmを計る。坑底や壁際からは、多くの礫が検出されているがこれは、最終遺構確認面の礫床が露出したものと考えられる。遺物は出土していない。

63号土坑（第66図）

N－11区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに円形を呈している。坑底は、わずかに丸みを帯びている。壁は開きながら立ち上がっている。規模は、長径66.9cm、短径57.6cm、深度21.4cmを計る。壁や坑底部から



第68図　第64～70号土坑



第69図　第64号土坑出土遺物

は、最終遺構確認面の礫床の一部が確認された。出土遺物はない。

64号土坑（第68・69図）

Ｍ－11区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに隅丸方形に近い形状を呈している。坑底は、平坦で断面形はタライ状を取っている。このため、壁は垂直に立ち上がる。規模は、長径121.6cm、短径106.5cm、深度69.5cmを計る。壁や坑底部からは、最終遺構確認面の礫床の一部が確認されている。出土遺物は５点が確認されている。１～４は、縄文時代後期前葉に、５の深鉢形土器の底部は底面に網代痕が残るもので後期前葉から中葉に位置付けられるものである。

65・66号土坑（第68図）

Ｐ－11区において連結された状態で検出された。法量については、65号土坑は、長径推定80cm以上、短径69.9cm、深度20.3cmを、66号土坑は、長径推定110cm以上、短径64.3cm、深度26.0cmを計る。形状はともに長楕円形を呈しており、壁や坑底部からは最終遺構確認面の礫床の一部が確認されているのみで出土遺物はない。切り合い関係は判断しかねる。

67号土坑（第68図）

Ｍ－10区に位置している。形状は、上縁・坑底ともにやや楕円形に近い形状を呈している。壁は垂直に近い傾斜で立ち上がる。規模は、長径84.3cm、短径66.6cm、深度21.5cmを計る。坑底部からは、最終遺構確認面の礫床の一部が確認されている。出土遺物はない。

68号土坑（第68図）

Ｍ－10区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに隅丸長方形を呈している。壁は開きながら立ち上がっている。規模は、長径110.2cm、短径77.7cm、深度22.6cmを計る。坑底部からは、最終遺構確認面の礫床の一部が確認されている。出土遺物はない。

69号土坑（第68図）

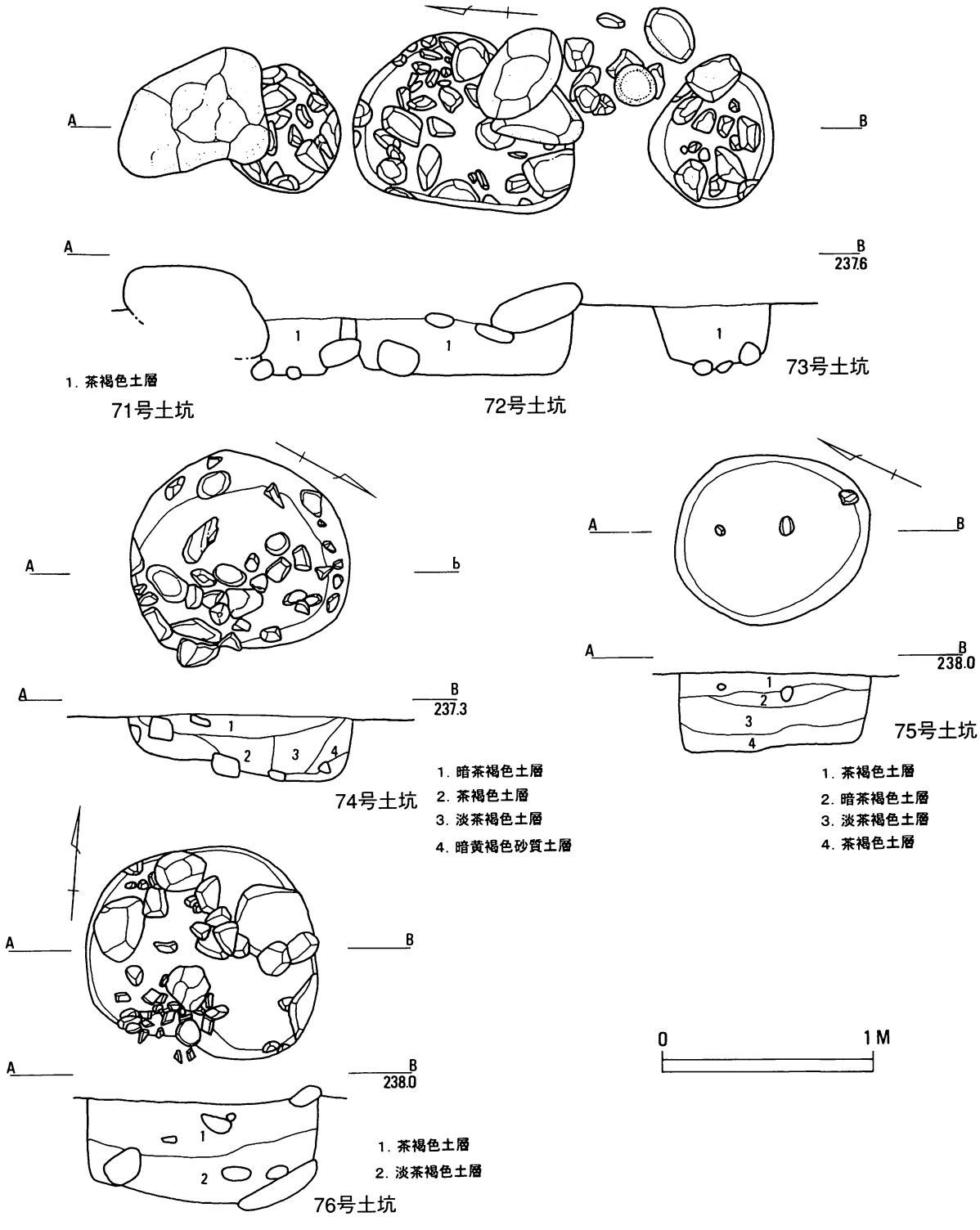
Ｎ－11区に存在が確認され、59号土坑に約40cmと隣接した位置にある。非常に小型の土坑で内部には、直径約30cmの自然石が落とし込まれていた。壁は垂直に近い傾斜で立ち上がる。法量は、長径43.3cm、短径40.2cm、深度15.0cmを計る。形状は、上縁・坑底ともに円形を呈している。出土遺物はない。

70号土坑（第68図）

Ｍ－９・10区に位置している。形状は、上縁・坑底ともにやや楕円形を呈している。壁は開きながら立ち上がっている。規模は、長径70.0cm、短径56.9cm、深度27.5cmを計る。坑底部からは、最終遺構確認面の礫床の一部が確認されている。出土遺物はみられない。

71号土坑（第70・71図）

Ｌ－９区に位置している。72・73号土坑と直列している。直径約80cmの大型自然石が上縁部に流入しており

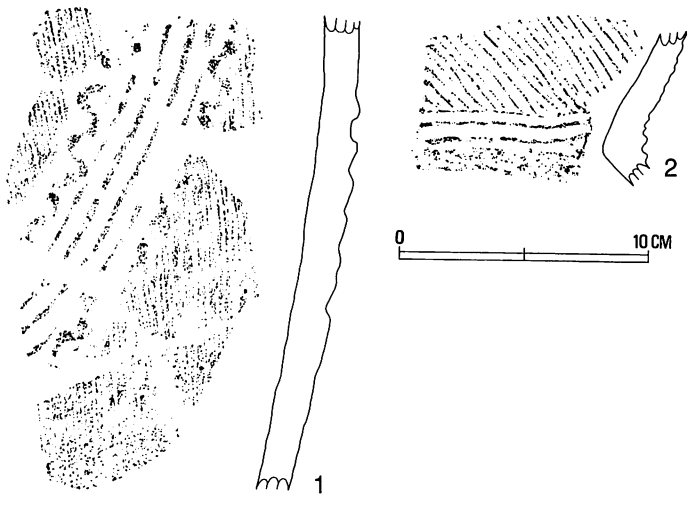


第70図　第71～76号土坑

正確な形状は推定でしか判断できない。上縁・坑底ともにやや円形を呈していると思われる。壁は垂直に立ち上がっている。規模は、長径60cm以上、短径54.5cm、深度27.1cmを計る。坑底部からは、最終遺構確認面の礫床の一部が確認されている。遺物は縄文時代中期後半の深鉢形土器破片（1・2）が２点出土している。

72号土坑（第70図）

Ｌ－９区に位置している。71・73号土坑と直列している。形状は、上縁・坑底ともに不整な楕円形を呈している。壁は垂直に近い形で立ち上がっている。規模は、長径107.9cm、短径82.2cm、深度33.6cmを計る。坑底部



第71図　第71号土坑出土遺物

からは、最終遺構確認面の礫床の一部が確認されている。遺物の出土はない。

73号土坑（第70図）

Ｌ－９区に位置している。71・72号土坑と直列している。形状は、上縁・坑底ともに円形を呈している。壁は垂直に近い形でやや開きながら立ち上がっている。規模は、長径56.1cm、短径57.8cm、深度29.2cmを計る。坑底部からは、最終遺構確認面の礫床の一部が確認されている。なお、遺物の出土はなかった。

74号土坑（第70図）

Ｎ－９区に位置している。形状は、上縁・坑底ともにやや楕円形を呈している。壁はわずかに開きながら立ち上がっている。規模は、長径105.3cm、短径94.6cm、深度31.1cmを計る。遺物はない。

75号土坑（第70図）

Ｊ－14区に位置している。形状は、上縁・坑底ともにほぼ円形に近い。坑底は、平坦で断面形は、タライ状を呈している。壁は垂直に立ち上がる。覆土は非常に安定した堆積を見せている。規模は、長径96.1cm、短径82.4cm、深度38.0cmを計る。坑内からは拳大以下の礫が数点検出された以外、土器・石器類の出土はなかった。

76号土坑（第72図）

Ｊ－14区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに円に近い隅丸方形を呈する。坑底は、平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は、20～40cmの大振りの自然石が多く混入しているが安定した堆積を見せている。規模は、長径116.8cm、短径103.6cm、深度46.5cmを計る。坑内からは、多くの最終遺構確認面の礫のほか、土器などの遺物は検出されなかった。

77号土坑（第72図）

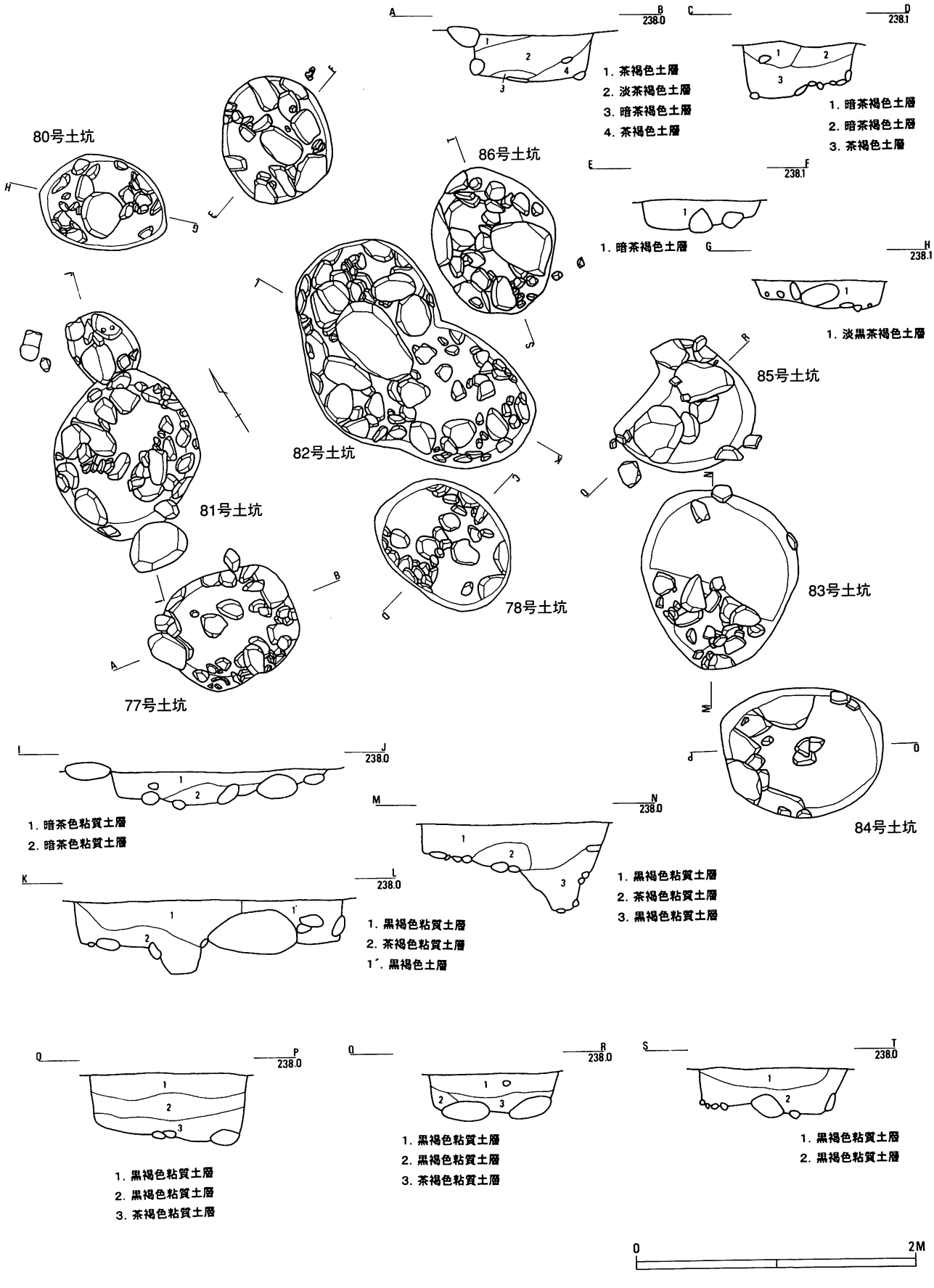
Ｋ－14区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに隅丸方形を呈する。坑底は、平坦で壁は垂直に立ち上がる。規模は、長径96.0cm、短径81.9cm、深度33.3cmを計る。坑内からは多くの最終遺構確認面の礫のほか、土器などの遺物は検出されなかった。

78号土坑（第72図）

Ｊ－14・Ｋ－14区に位置しており、82号土坑に約10cmと近接している。形状は、上縁が楕円、坑底が隅丸方形を呈している。坑底には多少の起伏がみられる。壁はわずかに角度を付けて立ち上がっている。規模は、長径107.0cm、短径82.1cm、深度41.1cmを計る。坑内からの遺物は確認できなかった。

79号土坑（第72図）

Ｋ－14区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに楕円形を呈している。坑底には多少の起伏がみられる。壁は、わずかに角度を付けて立ち上がっている。規模は、長径91.0cm、短径77.9cm、深度22.3cmを計る。坑内からは、土坑埋没時に流入した礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認された。なお、遺物の出土はなかった。



第72図　第77～86号土坑

80号土坑（第72図）

Ｋ－14区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに楕円形を呈している。坑底は、若干の起伏が感じられるもののほぼ平坦といって良いだろう。壁はやや開きながら立ち上がっている。規模は、長径96.4cm、短径68.3cm、深度21.5cmを計る。坑内からは、土坑埋没時に流入した礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物は出土していない。

81－1号土坑（第72図）

Ｋ－14区に位置しており、81－2号土坑を切っている。形状は、上縁・坑底ともに楕円形を呈している。坑底は、ほぼ平坦であり、壁はやや開きながら立ち上がっている。規模は、長径122.1cm、短径106.2cm、深度24.0cmを計る。坑内からは、土坑埋没時に流入した礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物は出土していない。

81－2号土坑（第72図）

Ｋ－14区に位置しており、81－1号土坑に切られている。形状は、上縁・坑底ともに隅丸方形を呈していると推定できる。坑底の状況は、流入している礫の影響を多く受けていることにより判断しがたい。壁は緩やかに開きながら立ち上がっている。各部の規模は、長径推定55cm、短径45.6cmを計る。また、深度は11.1cmと浅い。坑内からは、土坑埋没時に流入した礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。なお、遺物は出土していない。

82－1号土坑（第72図）

Ｋ－14区に位置しており、82－2号土坑と切り合っているが双方の関係は判断に苦しむ。形状は、上縁・坑底とも円形を呈していると推定できる。坑底の状況は、流入している礫によって判断しがたいが、ほぼ平坦な形状を取るものと思われるが一部に20cmほどの落ち込みも確認できた。壁は垂直に近い状態で立ち上がっている。各部の規模は、測定できる部位のみであるが短径97.3cm、深度52.6cmを計る。坑内からは、土坑埋没時に流入した大型の礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物はない。

82－2号土坑（第72図）

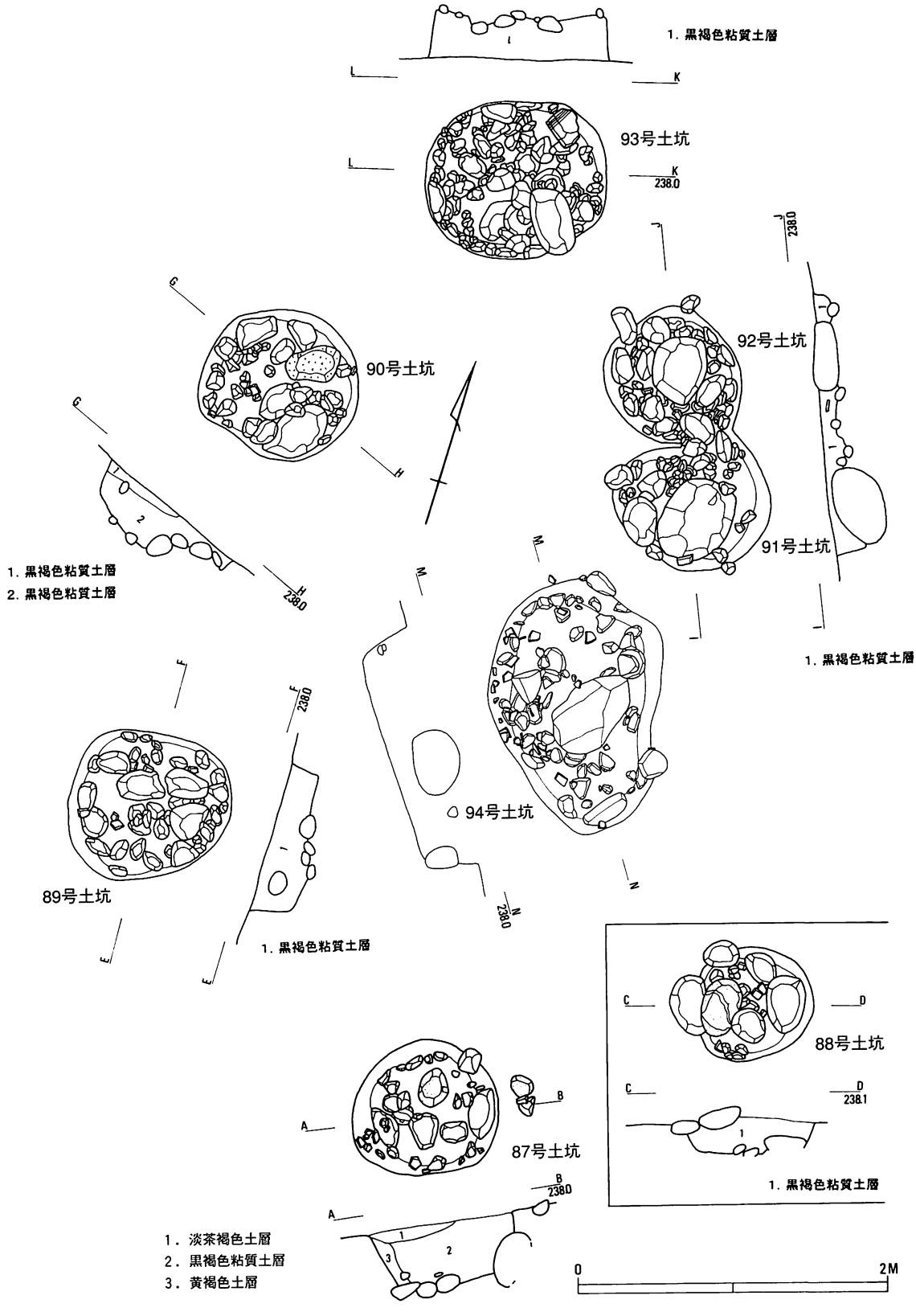
Ｋ－14区に位置しており、82－1号土坑と切り合っているが双方の関係は判断に苦しむ。形状は、上縁・坑底とも隅丸長方形を呈していると推定できる。坑底の状況は、流入している礫によって判断しがたいが、ほぼ平坦な形状を取るものと思われる。壁は垂直に近い状態で立ち上がっている。各部の規模は、長径151.4cm、短径102.6cm、深度32.4cmを計る。坑内からは、土坑埋没時に流入した大型の礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物は出土していない。

83号土坑（第72図）

Ｊ－14区にあり、84・85号土坑に挟まれた位置にある。形状は、楕円形を呈している。坑底部の状況は、全体の約60％を占める平坦面を持つほかに、直径35cmのピットを１基有している。壁は、ピット側においては傾斜を持って、他方においてはほぼ垂直に立ち上がる。各部の規模は、長径130.2cm、短径112.5cm、深度63.5cmを計る。坑内からは、土坑埋没時に流入した大型の礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物の出土は認められなかった。

84号土坑（第72図）

Ｊ－14区に位置している。上縁・坑底ともに隅丸長方形状を取っている。坑底部は平坦であり、壁はほぼ垂

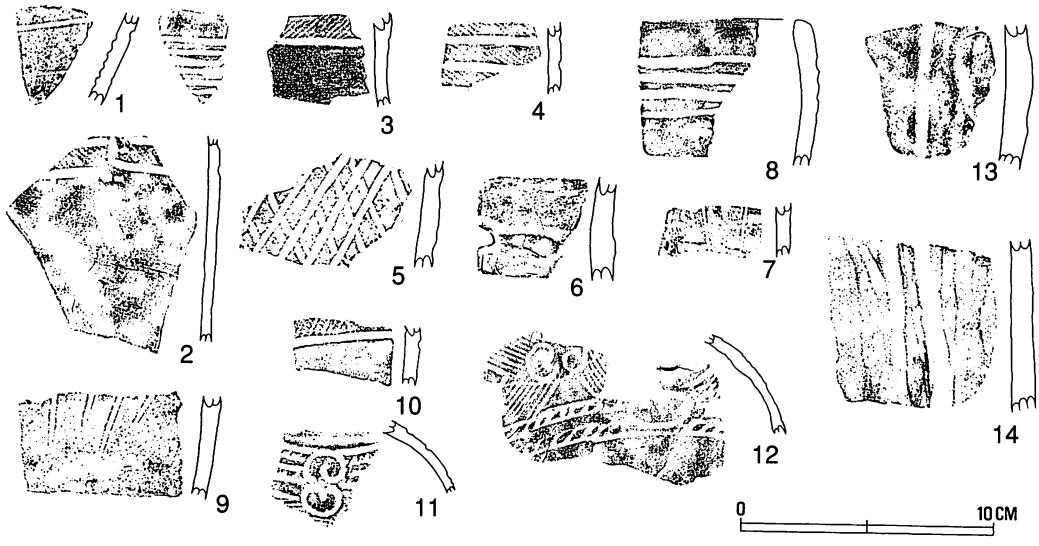


第73図　第87～95号土坑

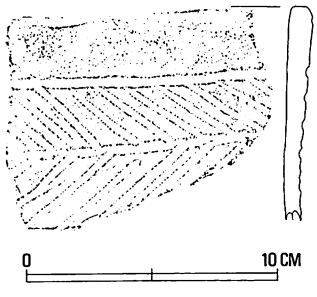
直に立ち上がっている。各部の法量は、長径115.0cm、短径94.3cm、深度48.0cmを計る。坑内からは、土坑埋没時に流入した大型の礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物の出土はない。

85号土坑（第72図）

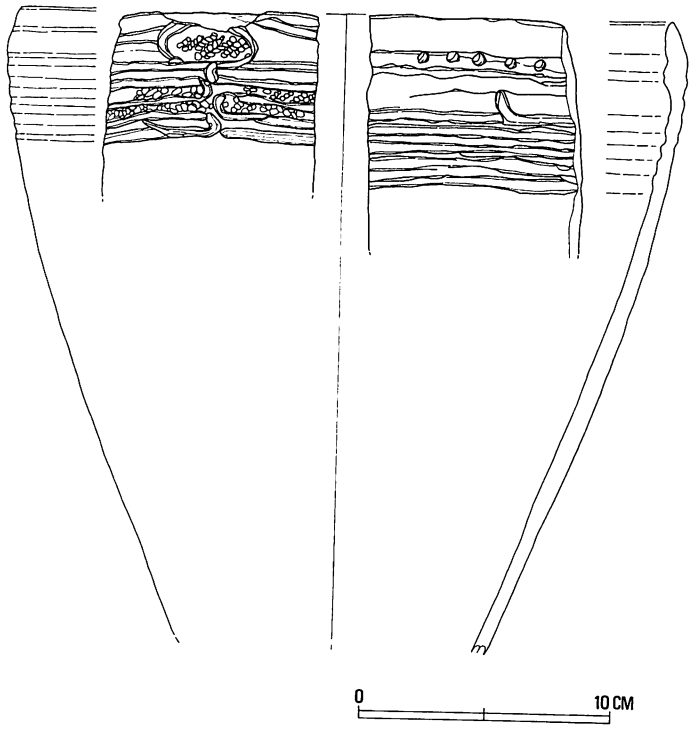
Ｊ－13・14区に位置している。上縁・坑底ともに不整形を呈している。坑底部には、２石の自然石が検出さ



第74図　第86～90号土坑出土遺物



第75図
第91号土坑出土遺物



第76図　第93号土坑出土遺物

れて、面積の40％ほどを占めている。壁は、垂直に近い状態でわずかに開きながら立ち上がっていく。法量は、長径94.8cm、短径94.0cm、深度27.4cmを計る。また、最終遺構確認面の礫も確認されている。なお、遺物は検出されなかった。

86号土坑（第72・74図）

K－13・14区にあり、82－1・2号土坑に隣接して検出された。形状は、楕円形に近い。坑底には、若干の起伏があるが最終遺構確認面の礫床のためである。壁は、やや傾斜を持って立ち上がっていく。法量は、長径110.0cm、短径91.1cm、深度33.2cmを計る。出土遺物は、縄文時代後期前葉の深鉢形土器が１点出土したのみである（1）。

87号土坑（第73・74図）

Ｊ－15区に位置し、形状は上縁・坑底ともに円形を呈している。坑底は平坦であるが、最終遺構確認面の礫床のため若干の起伏がみられる。壁は、やや傾斜を持って立ち上がっていく。各部の規模は、長径100.0㎝、短径87.9㎝、深度39.8㎝を計る。覆土の下方からは、土坑埋没時に流入した礫のほか多くの最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物は７点の土器類の出土をみた。全ての器形は深鉢形土器である。２～４は、縄文時代後期中葉の精製土器、５～７は粗製土器である。６については、晩期終末の様相を示すものといえよう。

88号土坑（第73・74図）

Ｊ－16・Ｋ－16区に位置し、上縁・坑底ともに円形に近い形状を呈している。坑底は平坦である。壁は、やや傾斜を持って立ち上がっていく。各部の規模は、長径80.3㎝、短径72.9㎝を計る。覆土の下方からは、土坑埋没時に流入したと思われる扁平な自然石や最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物の出土は、縄文時代後期中葉の粗製深鉢形土器の胴部破片（9）１点にとどまる。

89号土坑（第73・74図）

Ｊ－15・16区に位置し、上縁・坑底ともに隅丸方形に近い形状を呈している。坑底はほぼ平坦である。壁は、垂直に近いがやや傾斜を持って立ち上がっていく。各部の規模は、長径105.2㎝、短径98.5㎝、深度31.0㎝を計る。覆土の中程から下方にかけては、土坑埋没時に流入したと思われる扁平な自然石や最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物の出土は、縄文時代後期中葉の土器類が３点程認められた。10は深鉢形土器、11・12は双方ともに注口土器であり同一個体の可能性がある。

90号土坑（第73・74図）

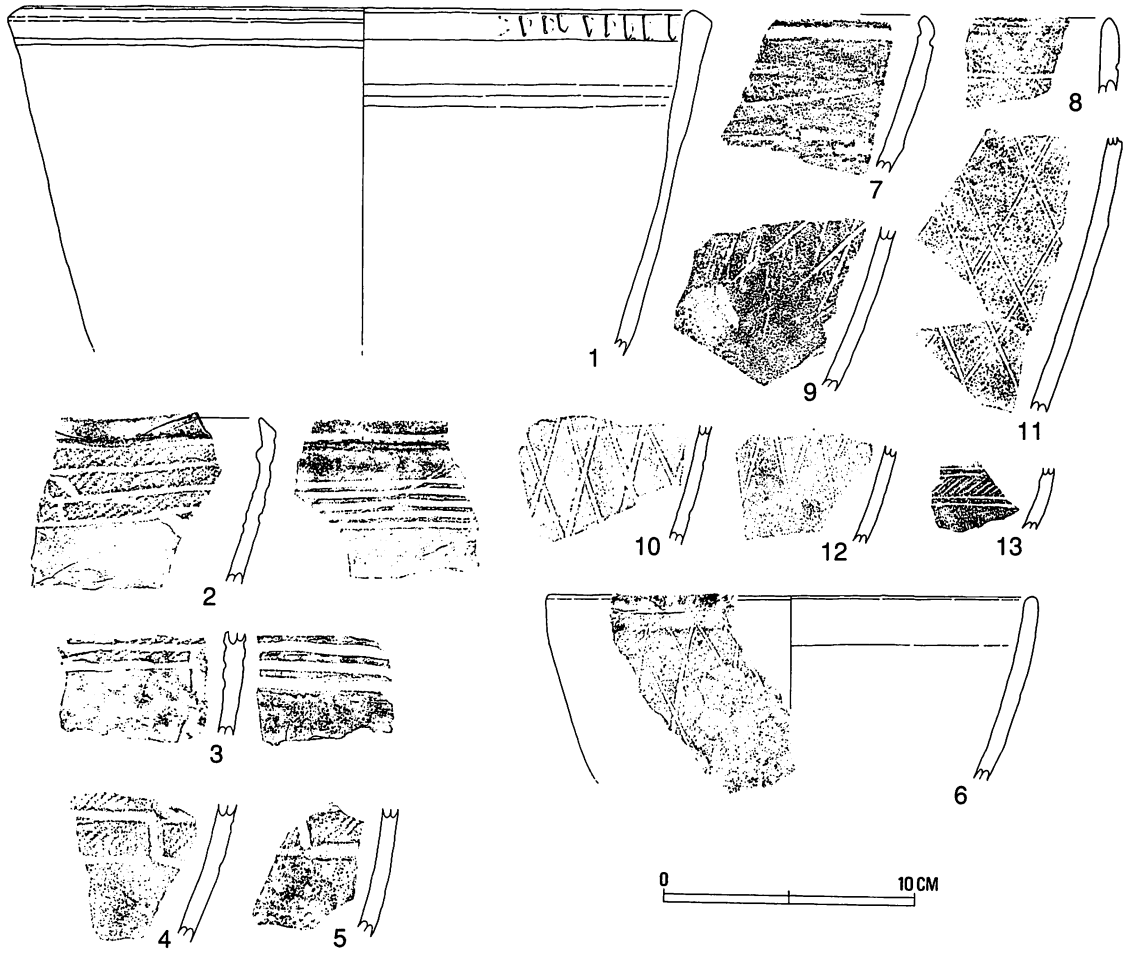
Ｋ－15区にあり、91～93号土坑に近接した位置取りをしている。上縁・坑底ともに隅丸方形に近い形状を呈している。坑底の状況は、起伏に富んでいたようだが本来はほぼ平坦であったと推測できる。壁は、やや開きながら傾斜を持って立ち上がっていく。各部の規模は、長径101.9㎝、短径94.0㎝、深度31.3㎝を計る。覆土の下方においては、土坑埋没時に流入したと思われる扁平な自然石や最終遺構確認面の礫も確認されている。遺物は、縄文時代中期後半に比定される深鉢形土器の破片２点が出土している（13・14）。

91号土坑（第73・75図）

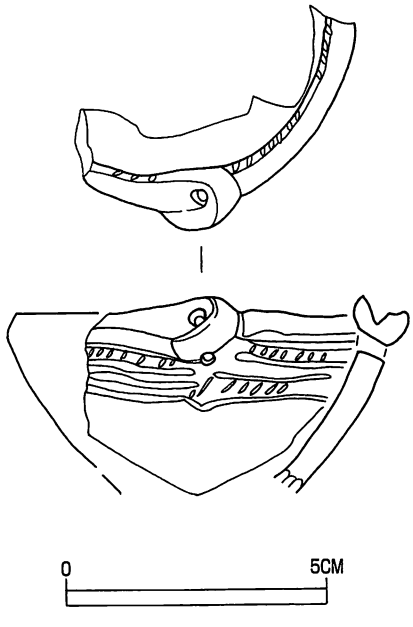
Ｋ－15区にあり、90・93号土坑に近接した位置取りをしている。また、92号土坑とは切り合っているが、非常に浅い状態で検出されたため新旧関係は掴めない。坑底部の状態は非常に悪く直径50㎝程の自然石が中央に流入している。平面形は、上縁・坑底ともに楕円形を呈している。壁は垂直に近いがやや開き気味に立ち上がる状況を見せている。規模は、長径104.5㎝、短径約80㎝、深度21.0㎝を計る。遺物は、縄文時代後期中葉と推測される深鉢形土器の口縁部が１点出土している。

92号土坑（第73図）

Ｋ－15区にあり、90・93号土坑に近接した位置取りをしている。また、91号土坑とは切り合っているが、非常に浅い状態で検出されたため新旧関係は掴めない。平面形は、上縁・坑底ともに隅丸方形を呈している。また、中央部からは、直径約45㎝の扁平な自然石が確認されているが流入したものか設置されたものか判断に苦しむ。覆土の下方からは、最終遺構確認面の礫も確認されている。各部の法量は、長径約90㎝、短径82.6㎝、深度12.8㎝を計る。遺物の出土はない。



第77図　第94・95号土坑出土遺物１



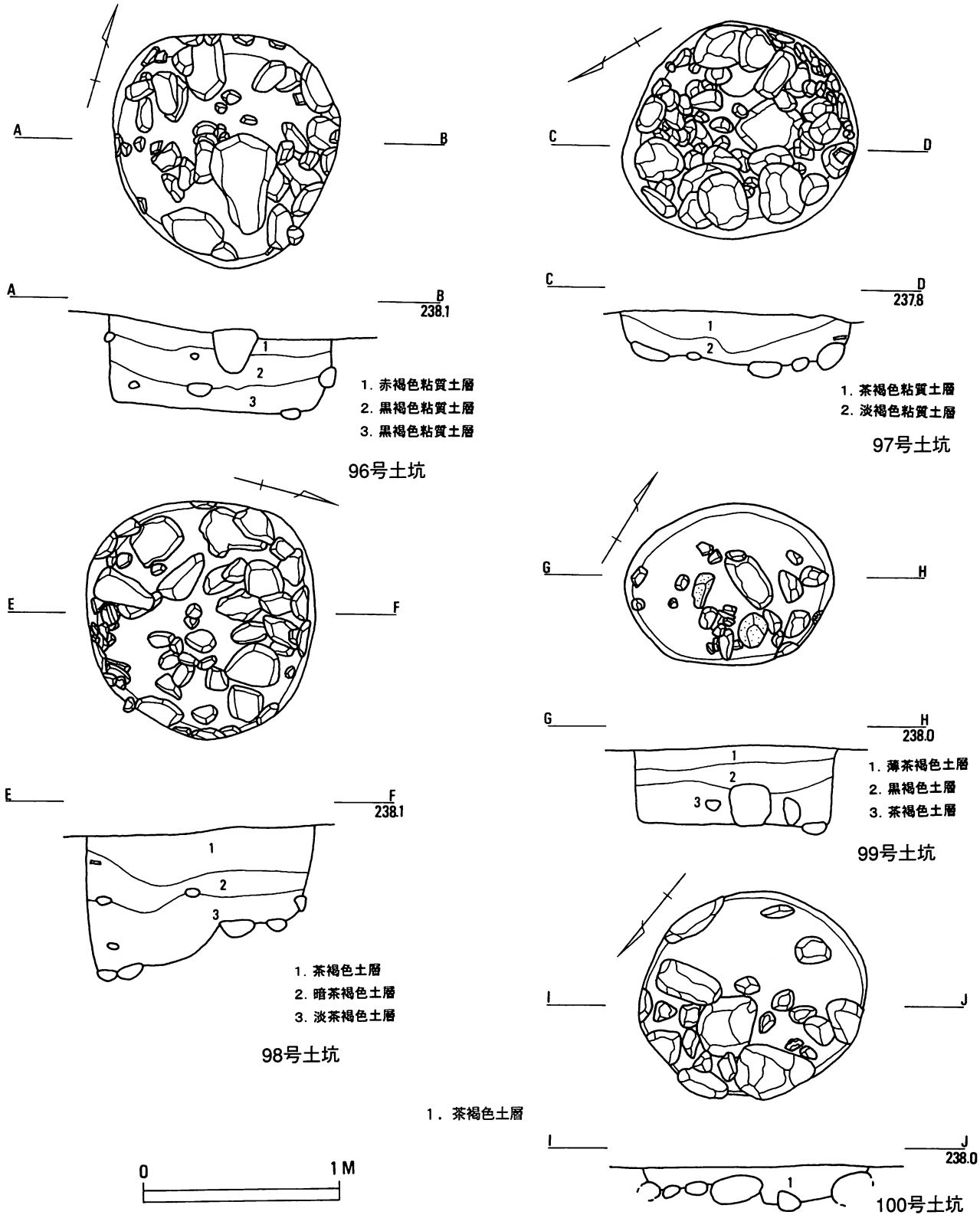
第78図　第94・95号土坑出土遺物２

93号土坑（第73・76図）

Ｋ－15区にあり、92号土坑に近接している。平面形は、上縁・坑底ともに楕円形を呈している。壁や覆土の下方からは、最終遺構確認面の礫が確認されており坑底面に起伏を造り出している。壁は、垂直に近い状況でわずかに開きながら立ち上がっている。各部の法量は、長径139.5cm、短径101.9cm、深度31.3cmを計る。遺物は、縄文時代後期中葉の深鉢形土器の大型破片が１点出土している。

94・95号土坑（第73・77・78図）

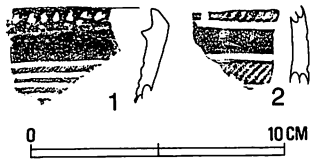
Ｊ－15・Ｋ－15区にあり、91号土坑に近接している。切り合い状況は明確にはできないが、調査時に明らかに2基の土坑が連結したものと判断できたため別の土坑番号を付することとした。このため個々の形状を詳細に述べることは難しい。ここでは、連結した状態での法量等を記することとする。形状は、不整楕円形を呈している。長径166.8cm、短径121.5cm、深度37.0cmを計る。壁は、やや開きながら立ち上がっている。当土坑でも最終遺構確認面の礫が確認されており、坑底面などに若干の起伏を造り出している。遺物は、全て縄文時代後期中葉のもので１～11は深鉢形土器で内、１～４は精製、５～12は粗製である。13は小型鉢形土器、14は注口土器胴部破片である。



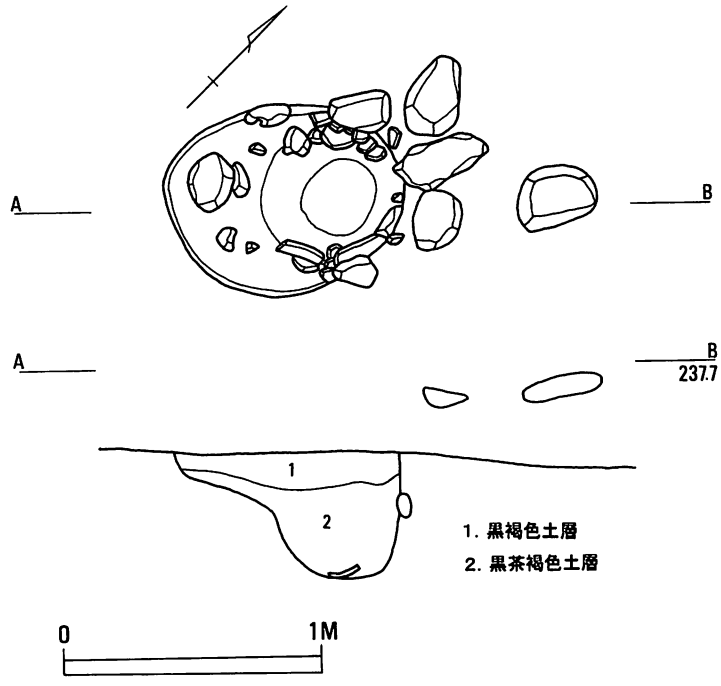
第79図　第96～100号土坑

96号土坑（第79図）

Ｊ－14・Ｋ－14区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに不整円形を呈しており、坑底面は最終遺構確認面の礫床の一部を司る自然石が多くみられるものの非常に安定した平坦面が造られている。壁は、全体に垂直に近い立ち上がりを見せている。各部の法量は、長径120.6cm、短径117.0cm、深度44.3cmを計る。遺物は出土していない。



第80図　第98号土坑出土遺物



第81図　第101号土坑

97号土坑（第79図）

Ｍ－12区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに不整円形を呈してる。坑底面や壁際には、最終遺構確認面の礫が多くみられ、かなり多くの起伏が生じている。壁は、なだらかに立ち上がりを見せている。各部の法量は、長径121.1cm、短径111.5cm、深度21.3cmを計る。遺物の出土はない。

98号土坑（第79・80図）

Ｊ－14区に位置しており、その形状は、上縁・坑底ともに不整円形を呈してる。坑底面や壁際には、最終遺構確認面の礫が多くみられる。このためか坑底部付近においてかなり多くの起伏が生じている。壁は、全体に垂直に近い立ち上がりを見せている。法量は、長径125.6cm、短径117.1cmを計る。また、深度は周囲より確認された土坑の中では一番深く68.0cmをとる。遺物は、覆土全体から土器類が２点出土している。１は縄文時代後期前葉から中葉、２は後期中葉に位置付けられるものである。器形は双方ともに深鉢形土器である。

99号土坑（第79図）

Ｉ－14区に位置している。上縁・坑底ともに不整楕円形状をとる。壁は、垂直に近い立ち上がりを見せている。各部の法量は、長径107.7cm、短径83.5cm、深度41.3cmを計る。特に、坑底部にみられる幾つかの自然石は最終遺構確認面の礫床の一部である。遺物の出土はない。

100号土坑（第79図）

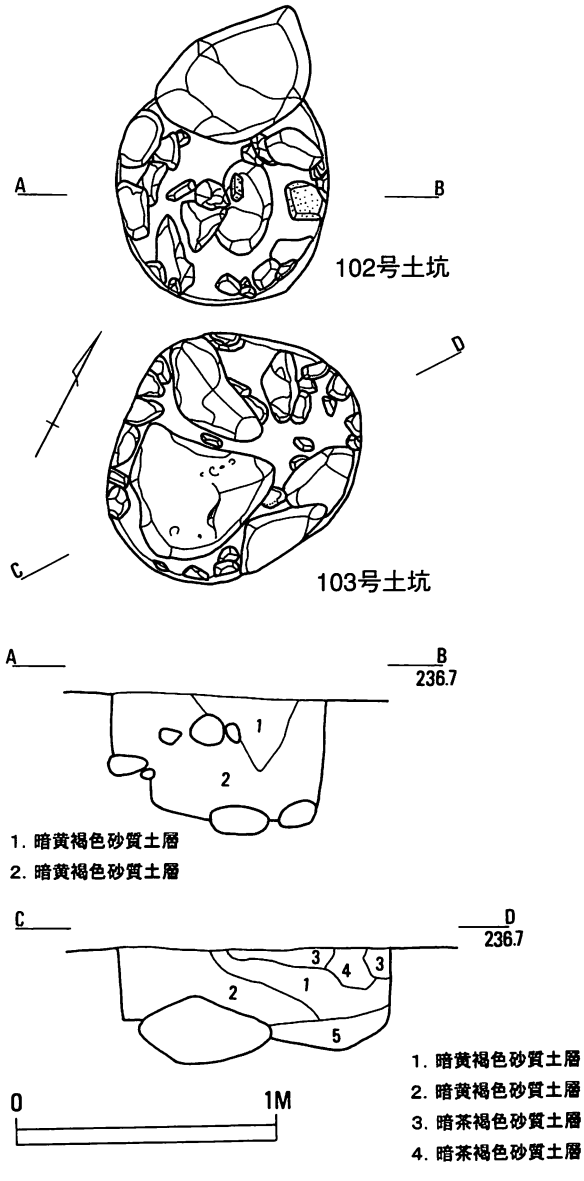
Ｉ－14区に位置しており、その形状は上縁・坑底ともに不整円形を呈してる。坑底面や壁際には、最終遺構確認面の礫が多くみられる。このためか坑底部付近においてかなり多くの起伏が生じている。壁は、なだらかな立ち上がりを見せている。法量は、長径118.1cm、短径104.0cm、深度19.6cmを計る。なお、遺物は出土していない。

101号土坑（第81図）

Ｉ－11・Ｊ－11区に位置している。形状は、楕円形を呈し、坑内の南側にテラス状の平坦面を持つ。壁は、テラス側では緩やかに他方では、垂直に近い立ち上がりを見せている。各部の法量は、長径94.0cm、短径74.1cm、深度48.9cmを計る。なお、テラス部分の深度は約10～20cmである。坑底部や壁際からは、最終遺構確認面の礫床の一部であろう自然石が確認されている。遺物は出土していない。

102号土坑（第82図）

Ｓ－16区にあり、103号土坑に約15cmという非常に近接した位置に確認された。その形状は、上縁・坑底とも



第82図　第102・103号土坑

に不整楕円形を呈している。壁は、垂直に立ち上がっており、坑底部は最終遺構確認面の礫がみられるもののやや平坦である。各部の法量は、長径105.5cm、短径91.9cm、深度39.8cmを計る。遺物の出土は認められない。

103号土坑（第82図）

S－16区にあり、102号土坑に近接した位置に確認された。その形状は、上縁・坑底ともにほぼ円形を呈している。壁の状況は、垂直に立ち上がっている。また、上縁部には直径約65cmの自然石がみられるが土坑埋没後に他所から流入してきたものと考えられる。さらに、坑底部や壁際には最終遺構確認面の礫がみられる。各部の規模は、長径推定85cm、短径82.8cm、深度46.9cmを計る。出土遺物はない。

104号土坑（第83図）

S－16区に位置している。形状は、上縁・坑底ともに円形を呈している。壁は、垂直に近い立ち上がりを見せている。しかし、直径約50cmほどの扁平な自然石が壁際に落とし込まれて緩やかな傾斜を造っている箇所もある。各部の法量は、長径65.6cm、短径53.3cm、深度36.2cmを計る。特に、坑底部にみられる幾つかの自然石は最終遺構確認面の礫床の一部である。遺物は出土していない。

105号土坑（第84図）

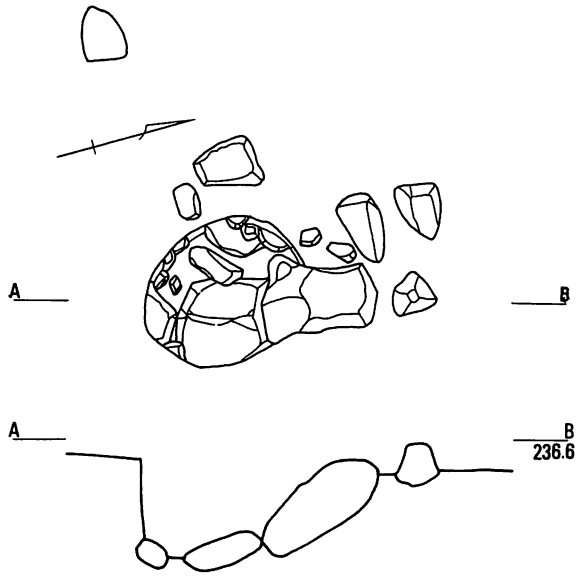
R－16・17区に位置しており、106・107号土坑とは距離1m以内の近接した関係にある。形状は、上縁・坑底ともにわずかに楕円形を呈している。坑底部は丸みを持っており、壁は下半においてはなだらかに上部では垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。また、上縁部からは直径55cm程の扁平な自然石が検出されたが性格は不明である。規模は、長径87.4cm、短径75.0cm、深度42.1cmを計る。坑底部や壁際にみられる大小の自然石は、最終遺構確認面の礫床の一部である。遺物は出土していない。

106号土坑（第84図）

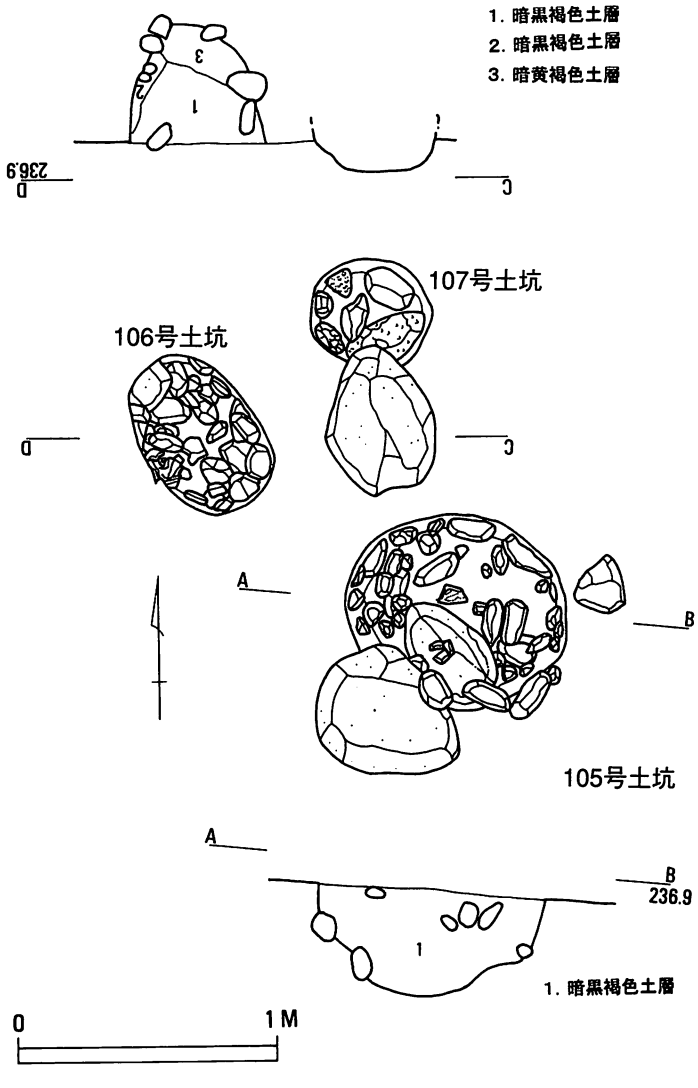
R－17区に位置しており、105・107号土坑とは距離1m以内の近接した関係にある。形状は、上縁・坑底ともに楕円形を呈している。丸底状の坑底部を持ち壁はやや開きながら角度を有しながら立ち上がる。各部の法量は、長径65.5cm、短径44.0cm、深度46.7cmを計る。坑底部にみられる自然石は最終遺構確認面の礫床の一部である。遺物は出土していない。

107号土坑（第84図）

R－17区に位置しており、106・107号土坑とは距離1m以内の近接した関係にある。形状は、上縁・坑底と



第83図　第104号土坑



第84図　第105～107号土坑

もに円形を呈している。平坦な坑底部を持ち、壁はわずかに開きながら立ち上がっている。法量は、長径46.2cm、短径41.3cm、深度20.0cmを計る。坑底部にみられる自然石は最終遺構確認面の礫床の一部である。遺物は出土していない。

108号土坑（第85図）

R－15区に位置しており、109号土坑に近接しているが、それとの関わりは不明である。周囲には最終遺構確認面や他所から流入した礫などが多く形状を推定するのは困難であるが上縁・坑底ともに楕円形を呈するものと思われる。壁は、やや傾斜を持って立ちあがっている。法量は、長径93.2cm、短径63.0cm、深度33.9cmを計る。出土遺物はない。

109号土坑（第85図）

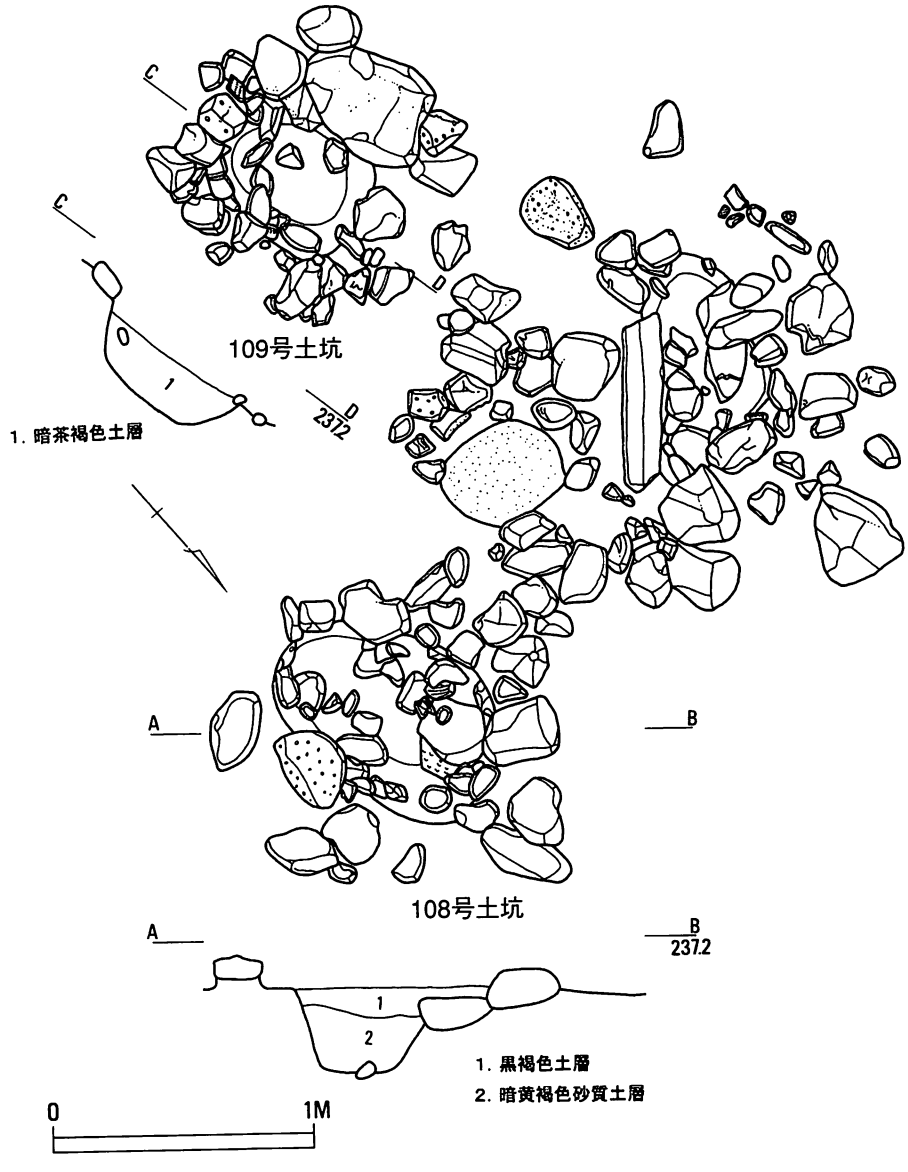
Q－15区に位置しており、仮称4号屋外炉および109号土坑に近接している。108号土坑と同様に周囲の遺構との関係などは不明である。形状は、上縁・坑底ともに不整楕円形を呈するものと推定できよう。壁は、なだらかに立ちあがっている。法量は、長径推定70cm、短径推定55cm、深度21.0cmを計る。出土遺物はない。

110号土坑（第86図）

M－4区に位置している。形状は、上縁がやや楕円形、坑底は隅丸方形を呈しており、今回調査された土坑中最も深い土坑である。壁は、垂直に近い傾斜でわずかに開ながら立ち上がっている。その規模は、長径93.9cm、短径86.6cm、深度96.2cmを計る。坑底部にみられる幾つかの自然石は最終遺構確認面の礫床の一部である。遺物は出土していない。

111号土坑（第86図）

M－10区に位置している。本遺跡の中でも小型のタイプに帰属するものである。形状は、上縁が不整円形、坑底は隅丸方形を呈しており、坑底に丸みを持つ。壁は、わずかに開ながら立ち上がっている。規模は、長径47.6cm、短径41.5cm、深度29.6cmを計る。また、小型でありながらも覆土は良く安定している。坑底部にみられる自然石は最終遺構確認面の礫床の一部である。遺物は出土していない。



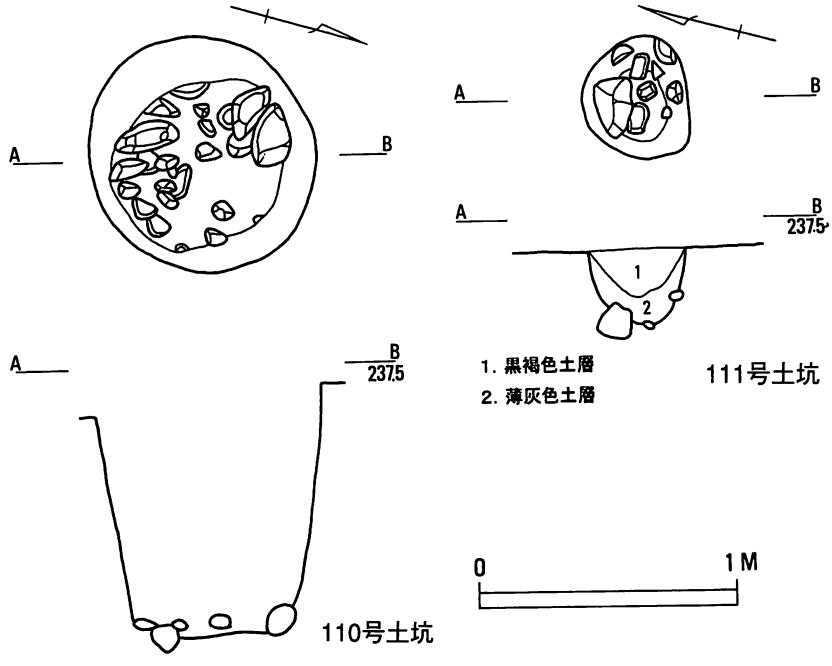
第85図　第108・109号土坑

112号土坑（第87・88図）

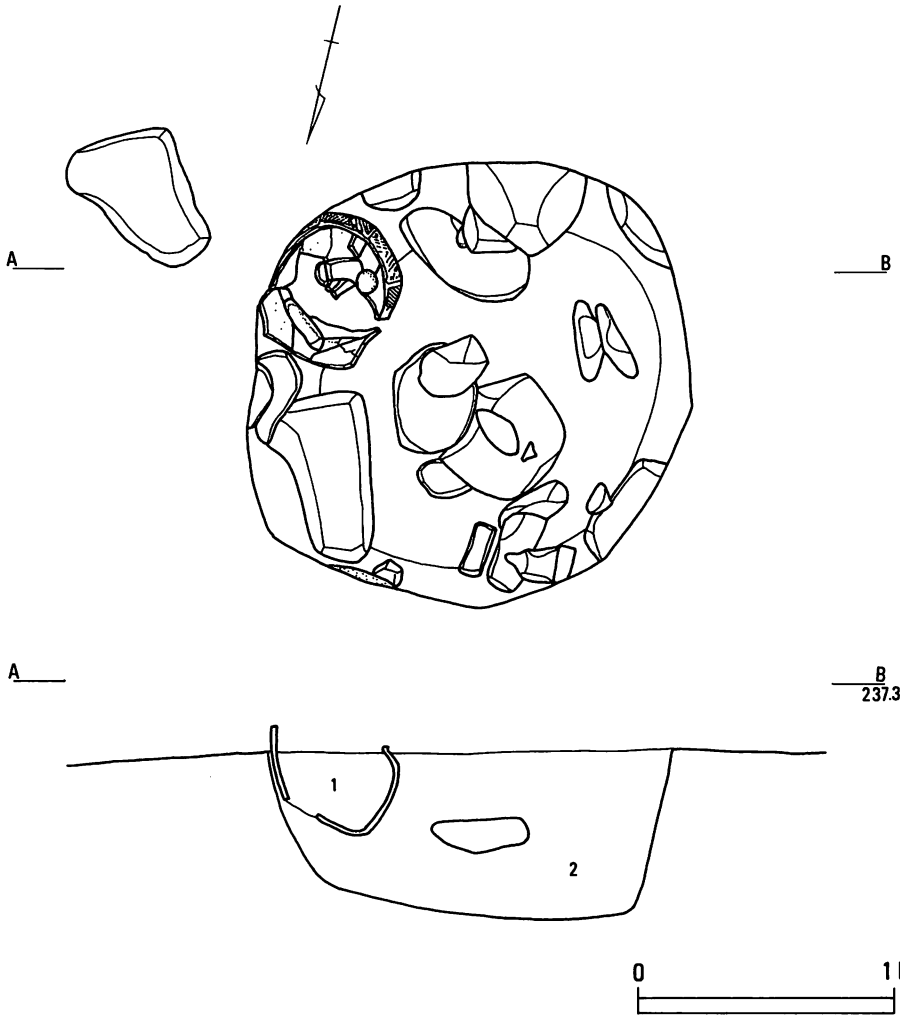
Q－14区に位置している。形状は、上縁・坑底ともにやや隅丸方形で、坑底は、わずかに西方に傾斜がみられるものの鍋底状を呈している。壁は、急角度をもって立ち上がっている。規模は、長径191.3cm、短径172.4cm、深度65.1cmを計る。なお、本土坑には、東側壁際に正位に縄文時代中期後半に位置付けられる深鉢形土器が埋納されていた。

113号土坑（第89・90図）

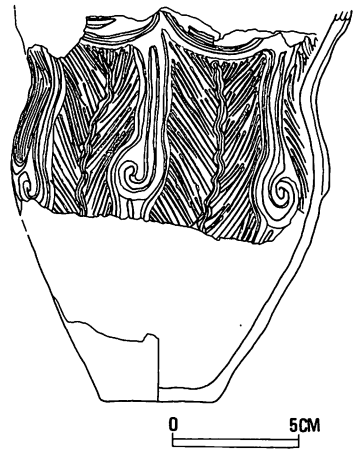
M－14区において検出された。当遺構が確認された地点は、段丘上方からの土石流によってかなり遺構検出面が荒れている箇所のひとつである。形状は、上縁・坑底ともにほぼ円形を呈しており、その規模は、長径184.1cm、短径155.9cm、深度61.2cmを計る。壁は、急傾斜を持って立ち上がっている。特筆すべき点として、土坑中心やや北寄りから逆位に縄文時代中期終末の脚付深鉢形土器が検出された。これは、甕被り葬の可能性を想定させている。



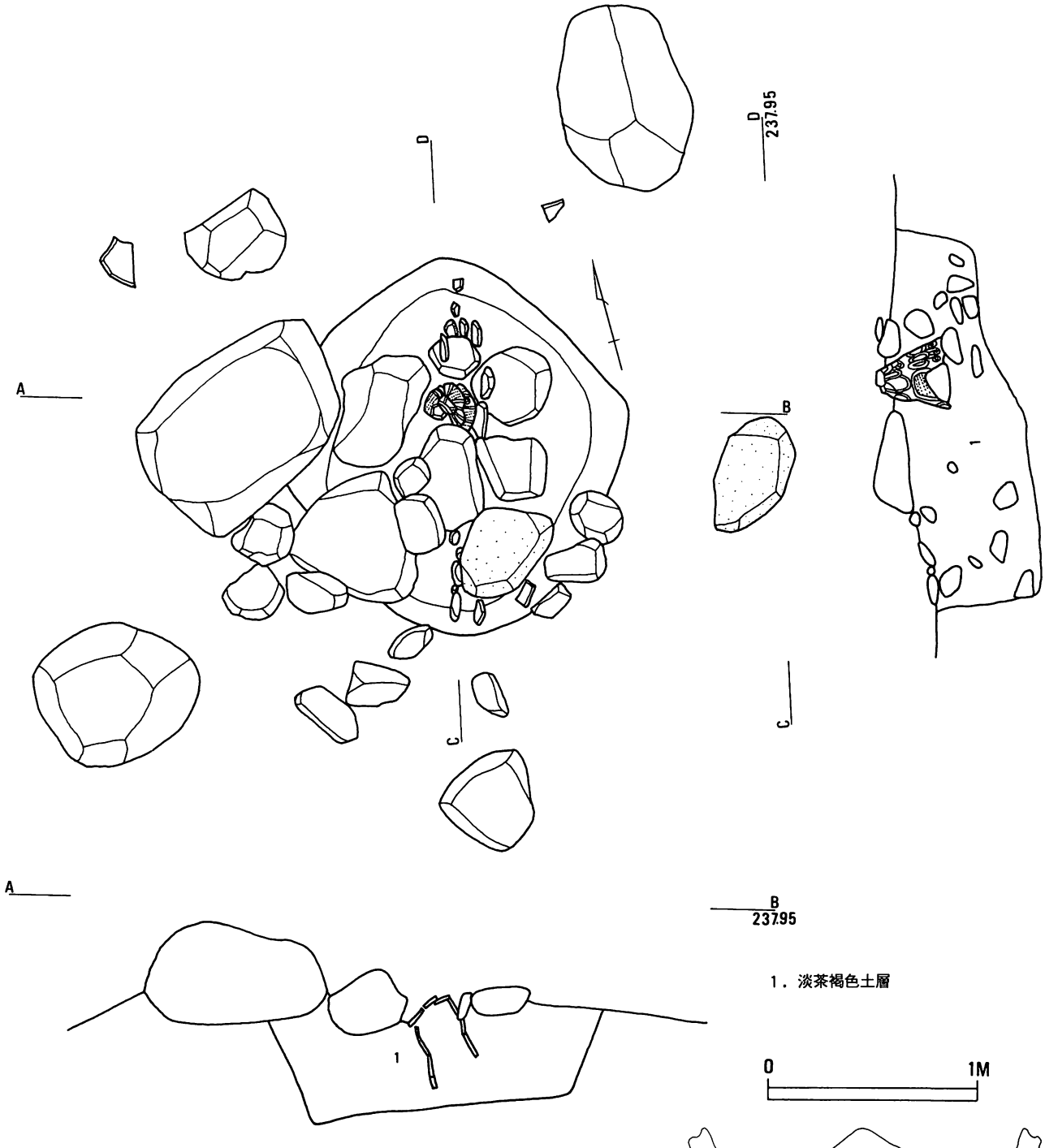
第86図　第110・111号土坑



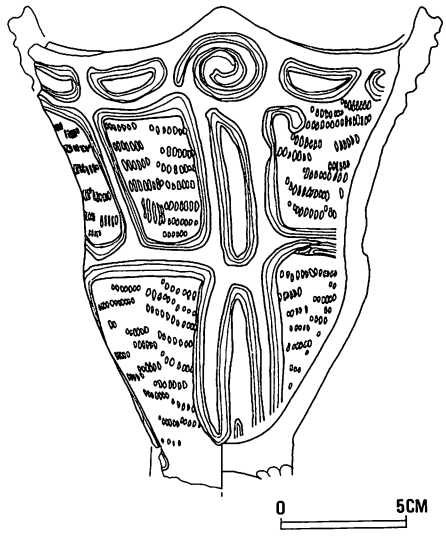
第87図　第112号土坑



第88図　第112号土坑出土遺物

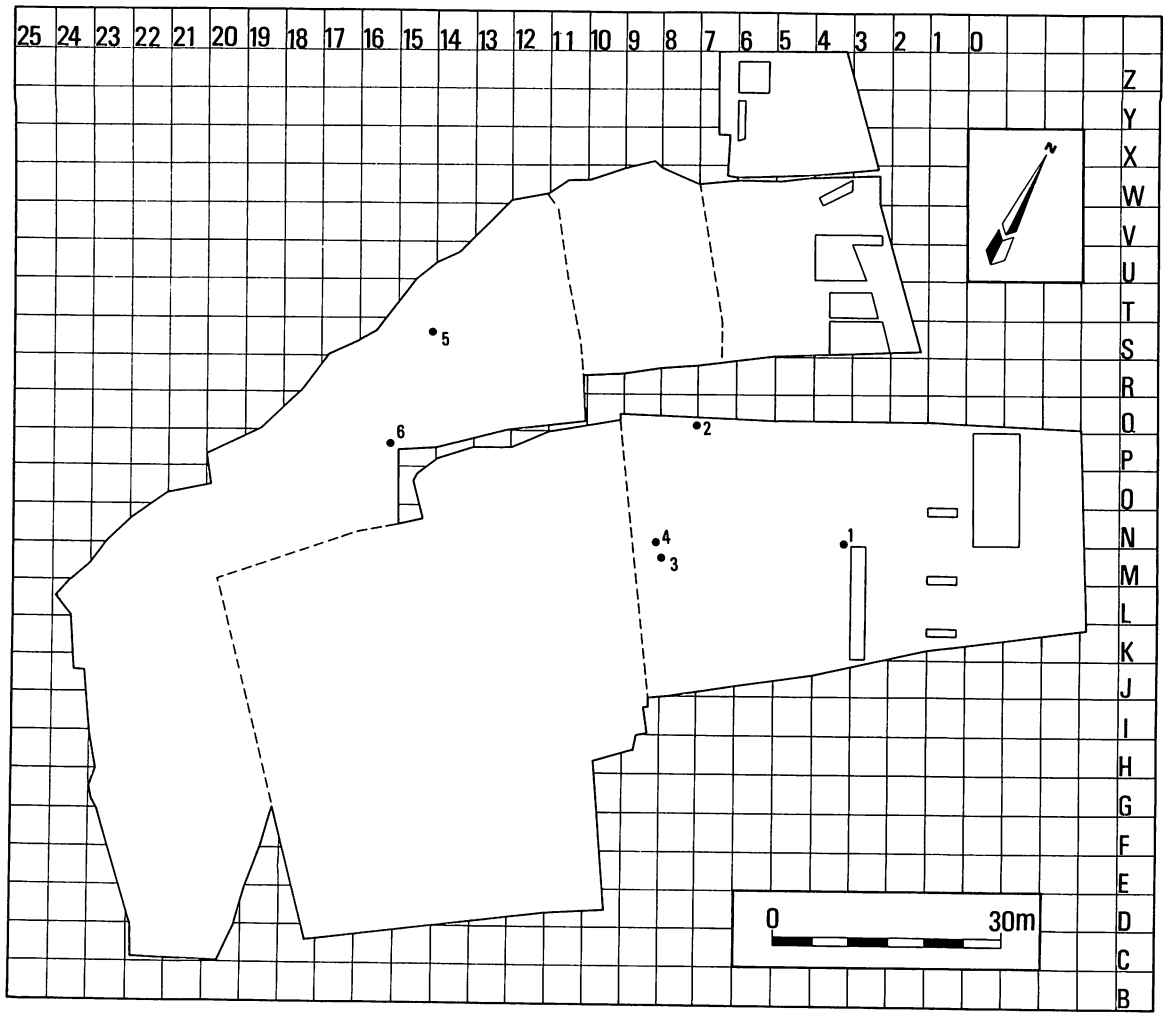


第89図　第113号土坑



第90図　第113号土坑出土遺物

第3節　集石土坑



第91図　集石土坑配置図

1号集石土坑（第92図）

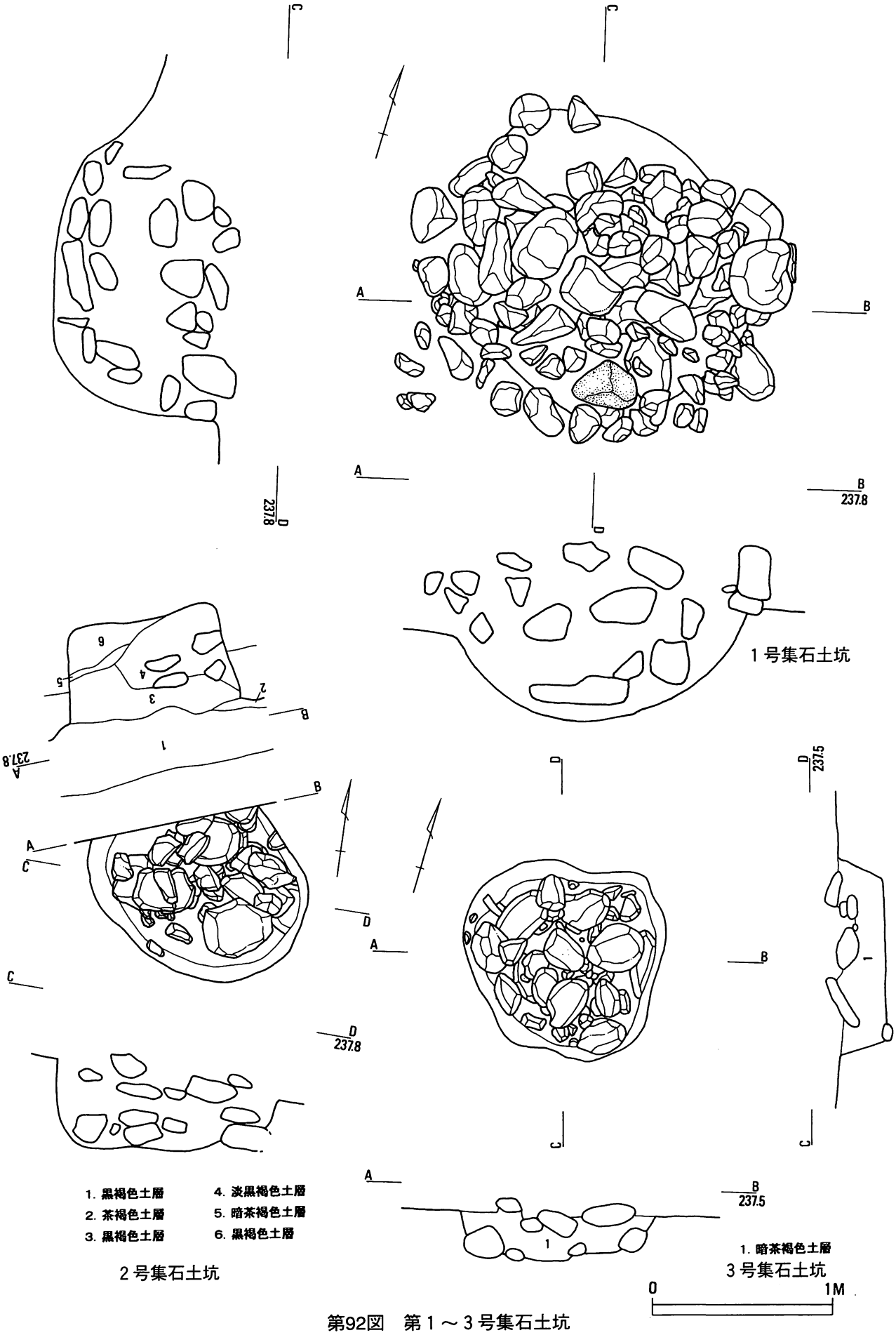
N－4区に位置している。平面形は、ほぼ円形を呈しており長径198cm、短径175cm、深度101.5cmを計る。掘り方は、すり鉢状を呈しており壁の立ち上がりは、上縁部に近づくにつれて急峻な角度を持っている。坑内には、拳大から30cmほどの礫がやや密に充填されていた。また、底面や壁面への礫の張り付けはほとんどみられない。なお、出土遺物は確認されなかった。

2号集石土坑（第92図）

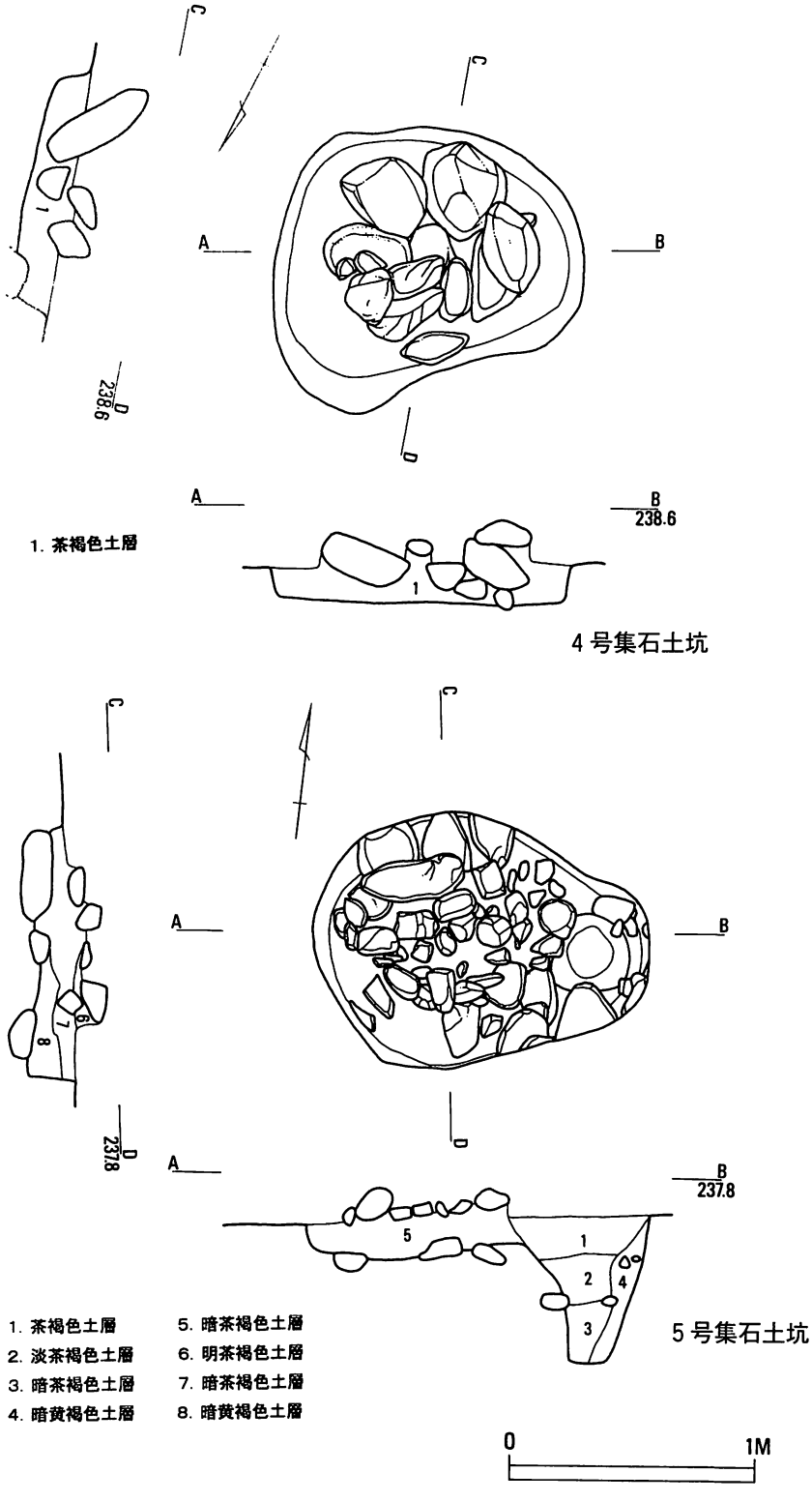
P－7・8区に位置している。形状は楕円形を呈しており、短径102.3cm、深度61.4cmを計る。掘り方は鍋底状で壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。坑内には、拳大から約40cmの自然石がやや密に充填されているが底部や壁際への礫の張り付けはみられない。また、炭化粒子や焼土などの混入はなかった。土器など遺物出土はない。

3号集石土坑（第92図）

M－8区において検出された。平面形は、不整形を呈しており、長径122.6cm、短径106.2cm、深度26.0cmを計る。礫は坑内の上層部分に約20cmのレベル差を持って確認され、底部や壁際への張り付けなどはみられない。



第92図　第1～3号集石土坑

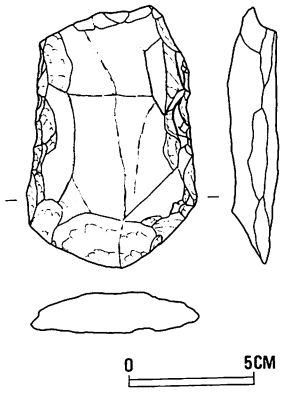


第93図　第4・5号集石土坑

なお、坑底部にみられる礫は、河岸段丘形成時に堆積したとみられる自然石と考えられる。遺物等の出土はなかった。

4号集石土坑（第93図）

N－9区より検出された。形状は、不整楕円形を呈している。法量は、長径131.5cm、短径104.9cm、深度15.0



第94図
第５号集石土坑出土遺物

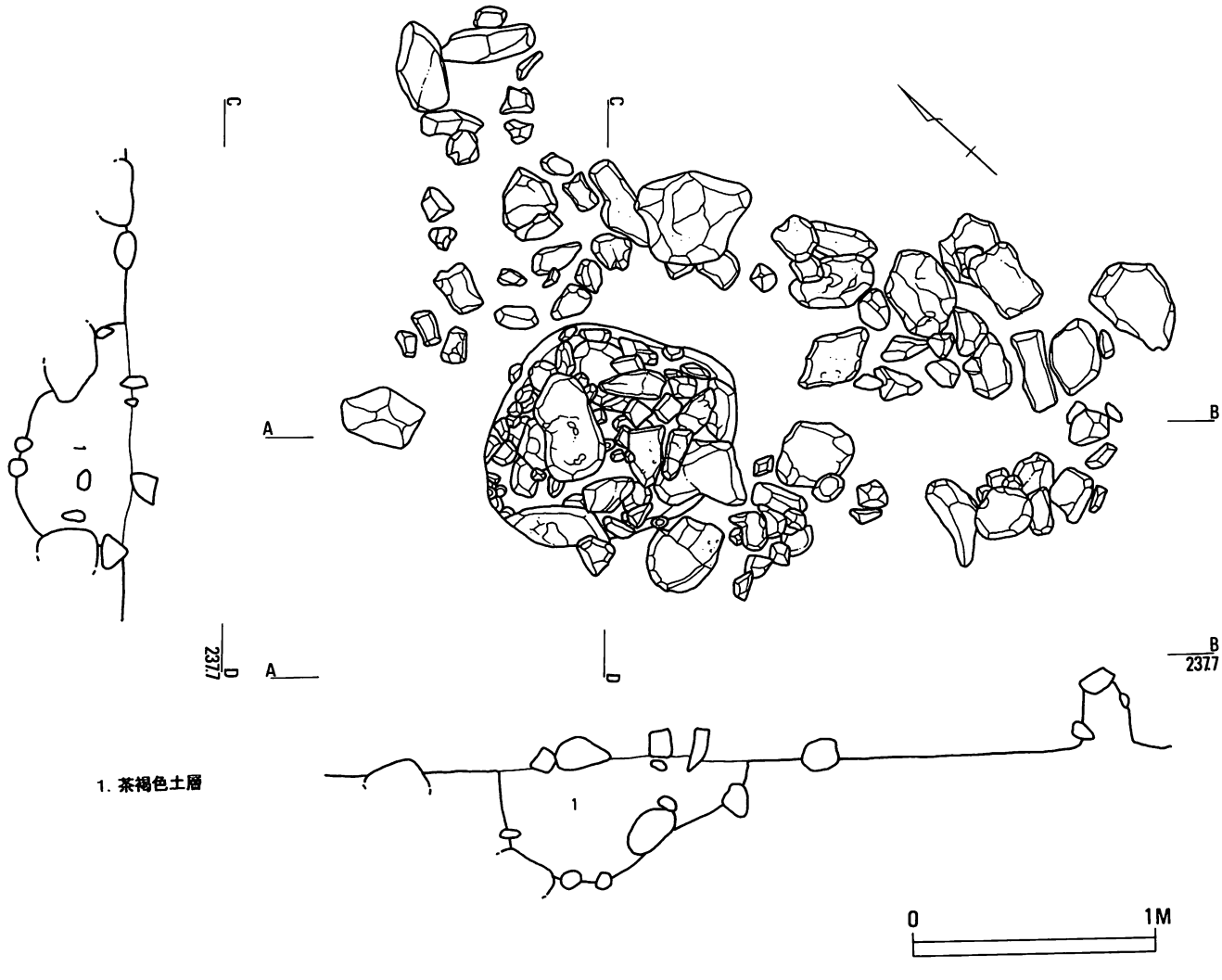
cmを計る。礫は、浅い土坑内の中央部に20～40cmの比較的選別されたといっても良い扁平な自然石をやや傾斜を付けて立たせるように設置している様子がうかがえる。また、炭化粒子や焼土、遺物などの混入はなかった。

５号集石土坑（第93・94図）

Ｓ－15区において検出された。その形状は楕円形を呈しており、長径139.6cm、短径105.6cm、深度21.2cmの規模を有している。また、坑内の東寄りには直径58.4cm、深度59.7cmのピットを持つ。約20～40cmの礫が坑内の上層に平面的に配置されており、坑底内にみられる河岸段丘形成時に堆積したとみられる自然石とは容易に区別される。遺物は、打製石斧の破片が１点出土している。

６号集石土坑（第95図）

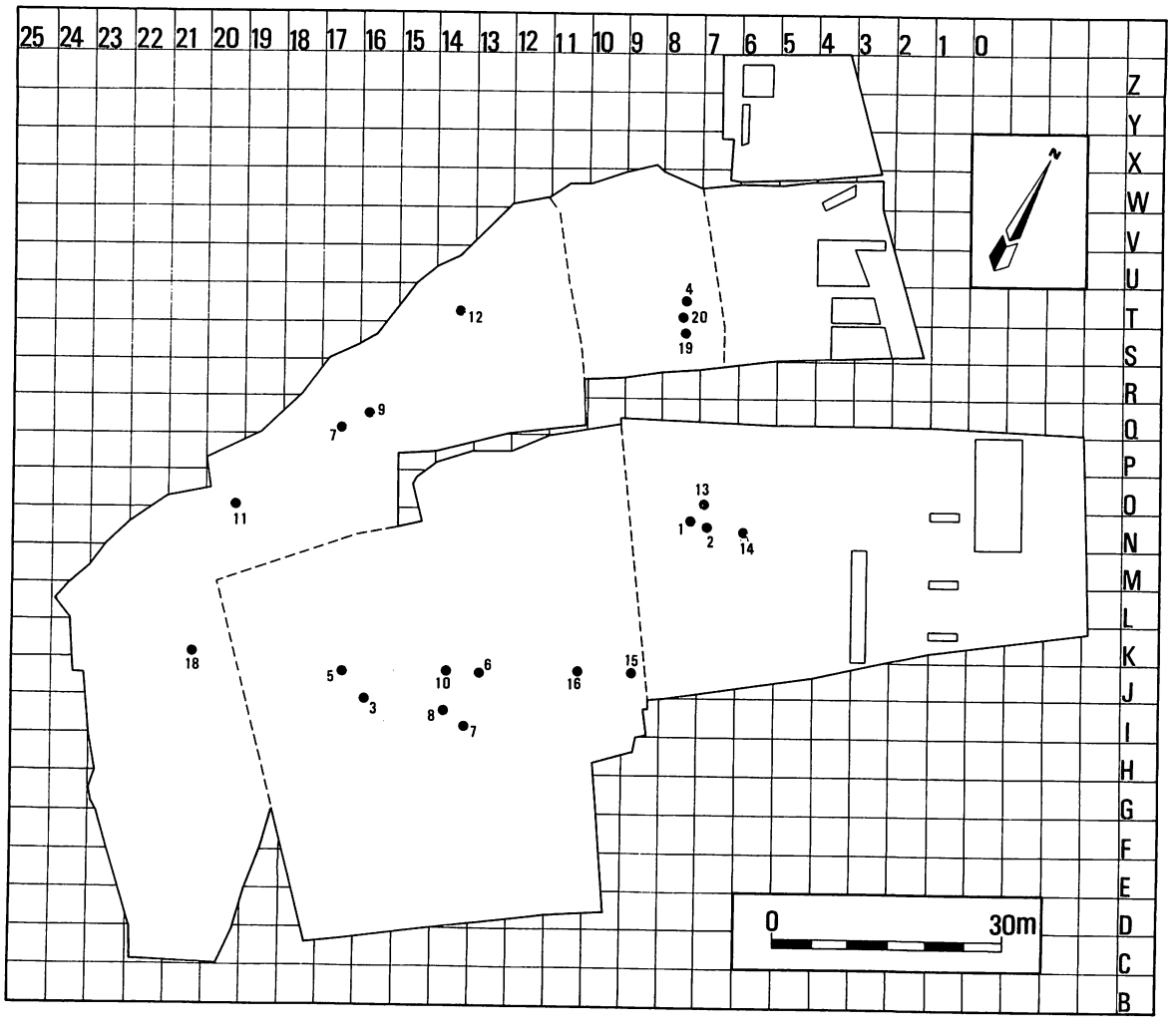
Ｐ－16区に位置しており、長径115.1cm、短径95.9cm、深度50.1cmの規模を有している。平面形は、不整楕円形を呈している。礫の混入は粗であり平坦な広がりをみせる。なお、坑底部や壁際にみられる礫は河岸段丘形成時に堆積した自然石と推測される。炭化粒子や焼土、遺物などの混入はなかった。



第95図　第６号集石土坑

第4節　炉　址

本遺跡より検出の遺構は、段丘上位からの土石流等によりかなりの割合で流出してしまっている。特に炉については、住居に伴っていたと十分に考えられても検出時に単体で調査されたものが少なくない。そこで、本報告書では混乱を防ぐため、それぞれを細分することなく炉址として扱うこととしたい。



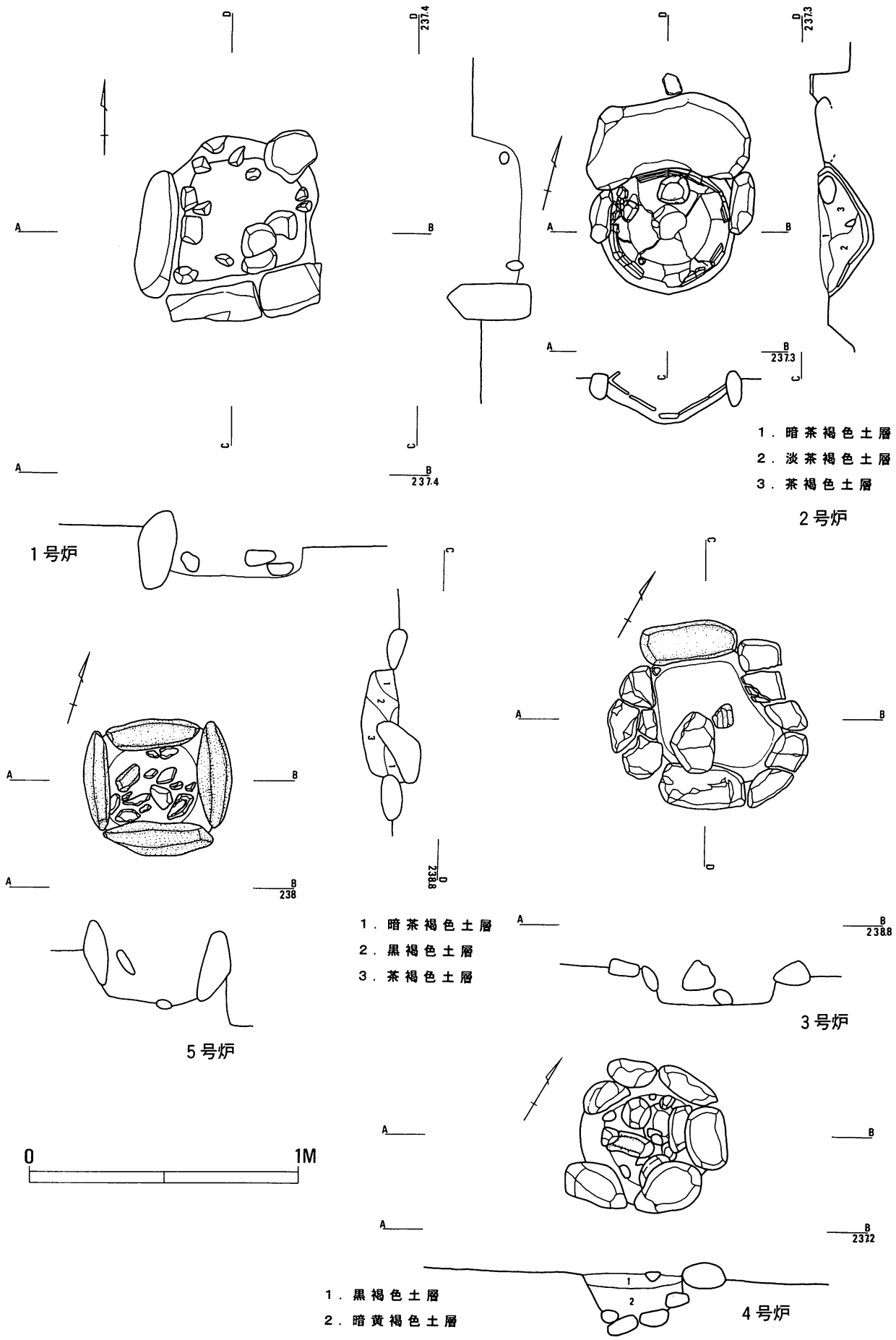
第96図　炉址配置図

1号炉（第97図）

N－8区において検出された石囲炉である。礫は、約50～60cmのものが南および西側より確認された。他の東・北側にも本来は礫は存在していたと考えられる。規模は、長径69.8cm、短径66.3cm、深度21.0cmを計る。覆土からは焼土および炭化粒子は確認できなかったが、残存している炉石には被熱の痕跡が認められた。遺物は、図示には耐えない縄文時代中期後半の深鉢形土器とみられる小破片が数点出土している。本炉は、周囲の状況ではうかがえないが、その大きさや出土遺物などから住居に付随した炉の可能性が強いものと思われる。

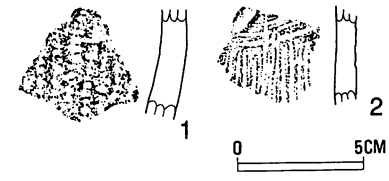
2号炉（第97・98図）

N－7区において検出された。扁平な約60×30cmの自然石をやや加工したと思われる礫を北側に、東西の二方には8×20cmの自然石を約15cmほど埋め込んでいる。さらにその内側に直径45cmほどの縄文時代中期後半の


1号炉
2号炉
3号炉
4号炉
5号炉
1．暗茶褐色土層
2．淡茶褐色土層
3．茶褐色土層
1．暗茶褐色土層
2．黒褐色土層
3．茶褐色土層
1．黒褐色土層
2．暗黄褐色土層
0
1M

第97図　第1～5号炉

浅鉢を設置している。浅鉢の設置においては、見込み部以下の底部を抜き、その抜いた部分を反転させ、本来の底部にはめ込むという特異な状況がみられた。規模は、長径71.5cm、短径61.2cm、深度20.1cmを計る。なお、炉石には、被熱によるものと推定できる変色がみられた。炉内部からは、約12cmの礫が検出されたほかは、焼土・炭化粒子などの混入がわずかに確認された。また、土器は2点が出土している。1は、縄文時代中期中葉、2は中期後半代に位置付けられるものであろう。



第98図　第2号炉出土遺物

3号炉（第97図）

H－16・I－16区に跨った形で検出された。13号炉と同様に壁際に40cm前後の自然石を立て掛け炉石としている。形状は、基本的には長方形を呈しているが東側では外圧が加わったためか歪な湾曲をみせている。炉内より検出された礫も本来は炉石のひとつを司っていたものが欠落したと考えられる。また、炉石のいくつかは被熱を受けたため激しくクラックが入っている。規模は、現状で長径73.2cm、短径70.1cm、深度は最深部で16.3cmを計る。遺物類の混入はなかったが、中層から上層部にかけて焼土が観察されている。本炉の性格については、周囲に遺構その他が検出されていないため屋外炉としておきたい。

4号炉（第97図）

T－8区より検出された炉で19・20号炉に類似した形態をとる。20～30cmの扁平に近い自然石を周囲に配置した石囲炉である。堀り方の形状は、正円形で底部にやや傾斜がみられる。また、炉内にはやや多くの礫の混入がみられるが底部にあるものは、遺構最終確認面である段丘形成時の礫床である。炉内からの遺物の出土はなかった。焼土および炭化粒子については、覆土上層においてわずかに確認されている。なお、当炉の性格であるが周囲に遺構や貼床の残存部の痕跡が見当たらなかったため屋外炉の可能性が強いと思われる。

5号炉（第97図）

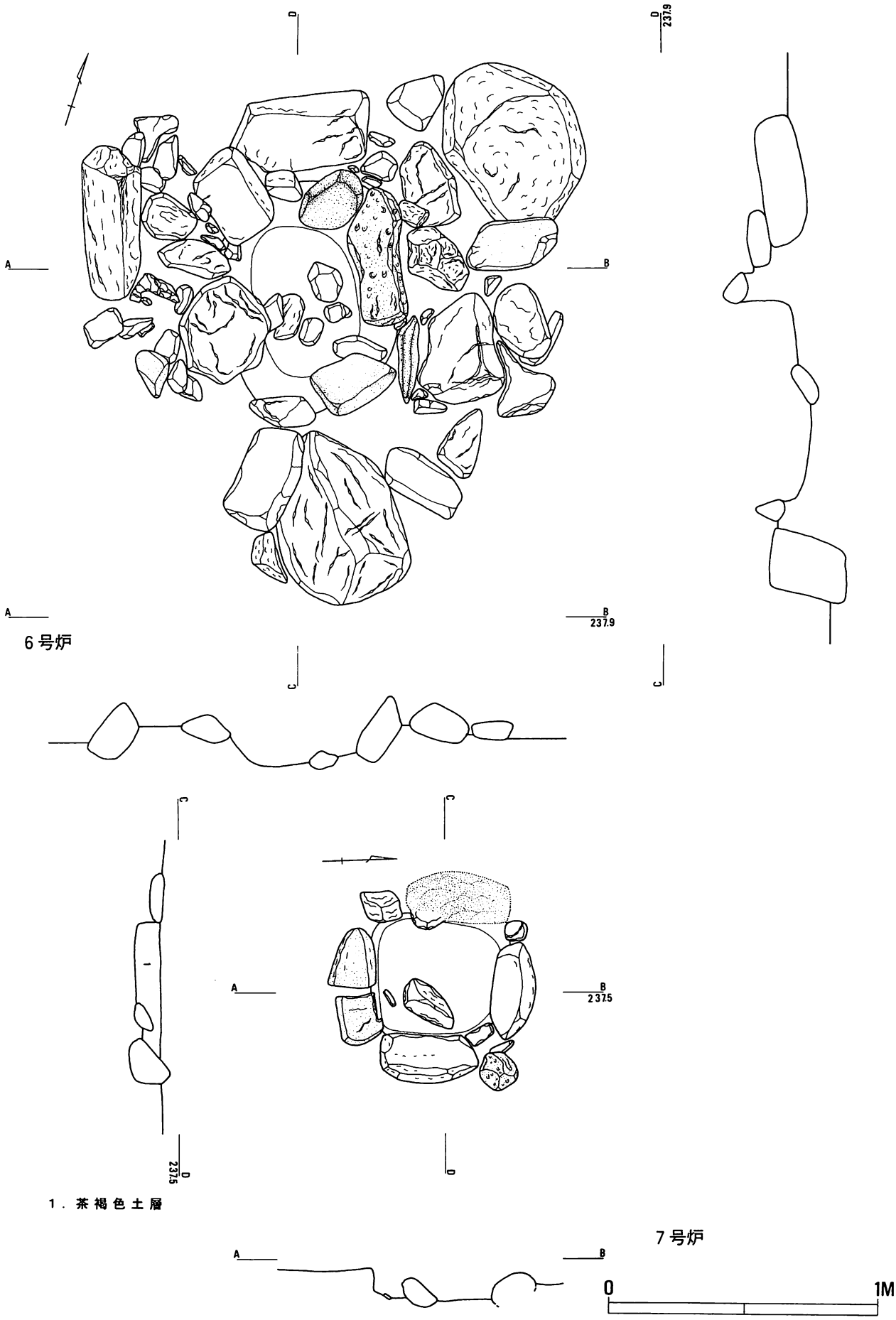
J－17区より存在が確認された。40cm程の自然石（溶岩）を段丘形成時の礫床面に4枚咬み合わせるように設置した石囲炉である。平面形は正方形を呈している。規模は、長径55.2cm、短径50.6cm、深度29.3cmを計る。炉石には被熱の痕跡がみられるが、内部からは焼土および炭化粒子は検出されなかった。また、土器などの遺物も検出されなかった。本炉については、礫床中の自然石を抜き取り炉石を構築している点や周囲の状況などから屋外炉の性格が強い。

6号炉（第99図）

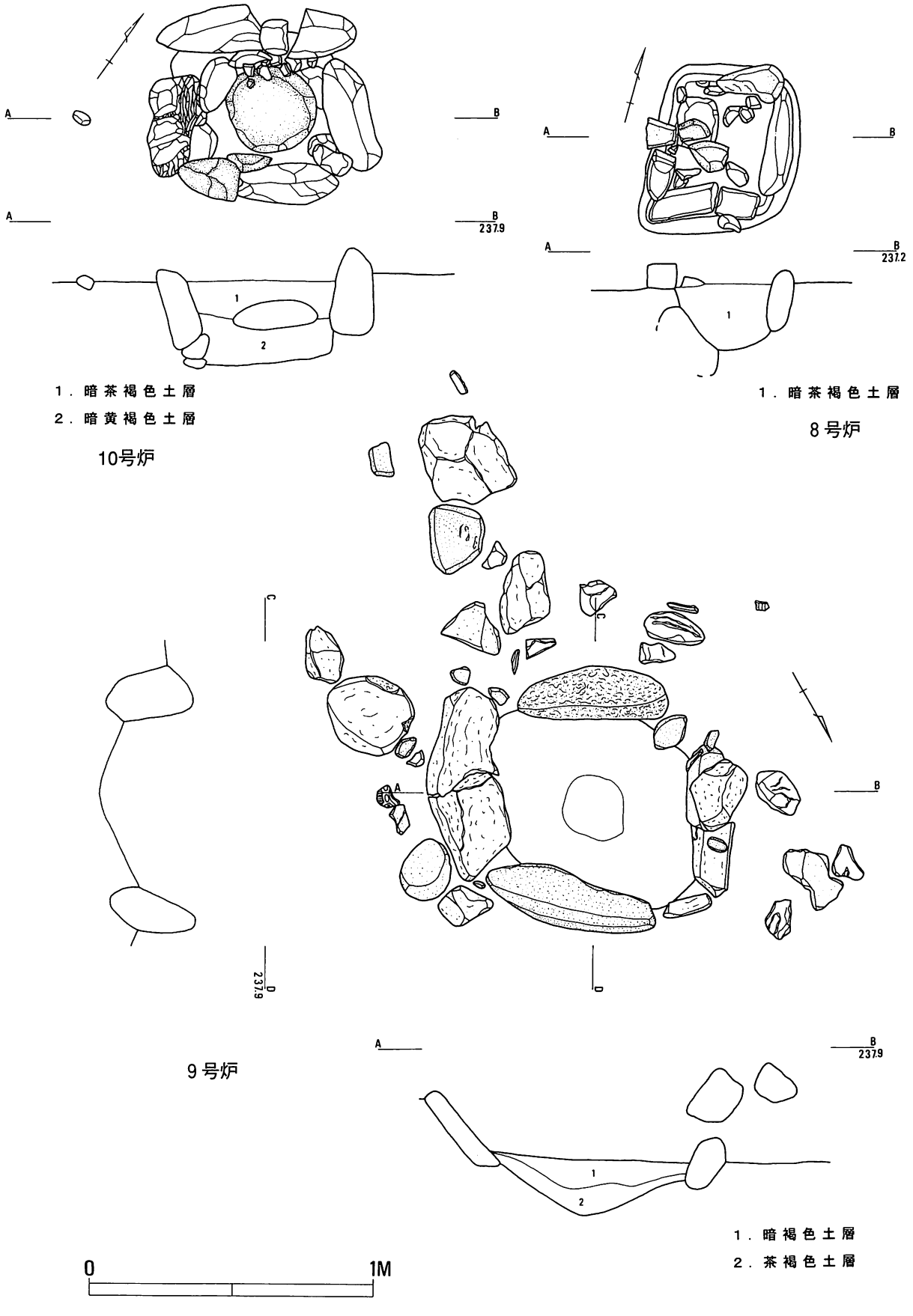
J－13区に検出された。長径83.4cm、短径64.1cmの堀り方の傾斜を持って立ち上がる壁際にもたれ掛けさせるように板状の自然石を設置している。なお、深度は最深部で26.3cmを計る。炉内からは遺物類の出土は認められない。また、焼土・炭化粒子の検出もなかった。周囲には、敷石ともとれる自然石などが散在しており、住居の可能性を強めている。しかし、その確証はない。

7号炉（第99図）

I－14区にて検出された。基本的に、40cm程の自然石を4枚組み合わせた構造を持って設置された石囲炉である。東南隅を除く三方のコーナーには、8～15cmほどの礫が隙間を埋めるように配置されている。全体の平面形は正方形を呈しており、その規模は、長径79.2cm、短径78.3cm、深度10.0cmを計る。炉石には被熱の痕跡がみられ、クラックが生じているものも見受けられる。炉内覆土からは焼土および炭化粒子は検出されなかった。また、土器などの遺物類も検出されなかった。本炉については、その大きさなどの構造から縄文時代中期後半



第99図　第6・7号炉



第100図　第8～10号炉

の住居跡にみられるものと類似しており住居の炉であった可能性を強めている。

8号炉（第100図）

Ｉ－14区より検出された。50～60cmの板状に近い形状の平石を立てるように配した石囲炉である。規模は、長径110.5cm、短径93.2cm、深度35.1cmを計る。炉石は、強く被熱を受けたためかクラックが生じている。炉内上層部からはわずかではあるが焼土粒子が確認されている。出土遺物は内部からは検出されなかった。本炉の性格は周囲に散在して検出された扁平に近い形状の自然石や、縄文時代中期後半の住居内炉に類似している点などから住居内の炉であった可能性が強い。

9号炉（第100図）

Ｑ－16区にて検出された。35～40cm程の自然石を組み合わせた構造の石囲炉である。外圧がかなり強く加わったためか北西から西側の炉石の一部は喪失したり炉内に転落してしまっている。残存している炉石には、被熱を受けた痕跡がみられ東側の一石を残してすべてにクラックが生じている。平面形は長方形を呈しており、長径59.8cm、短径51.5cm、深度21.2cmの規模を有している。炉覆土からは、やや多くの小礫のほか焼土・炭化粒子もわずかに検出されている。なお、土器・石器などの遺物類の出土はなかった。本炉の性格については不明である。

10号炉（第100図）

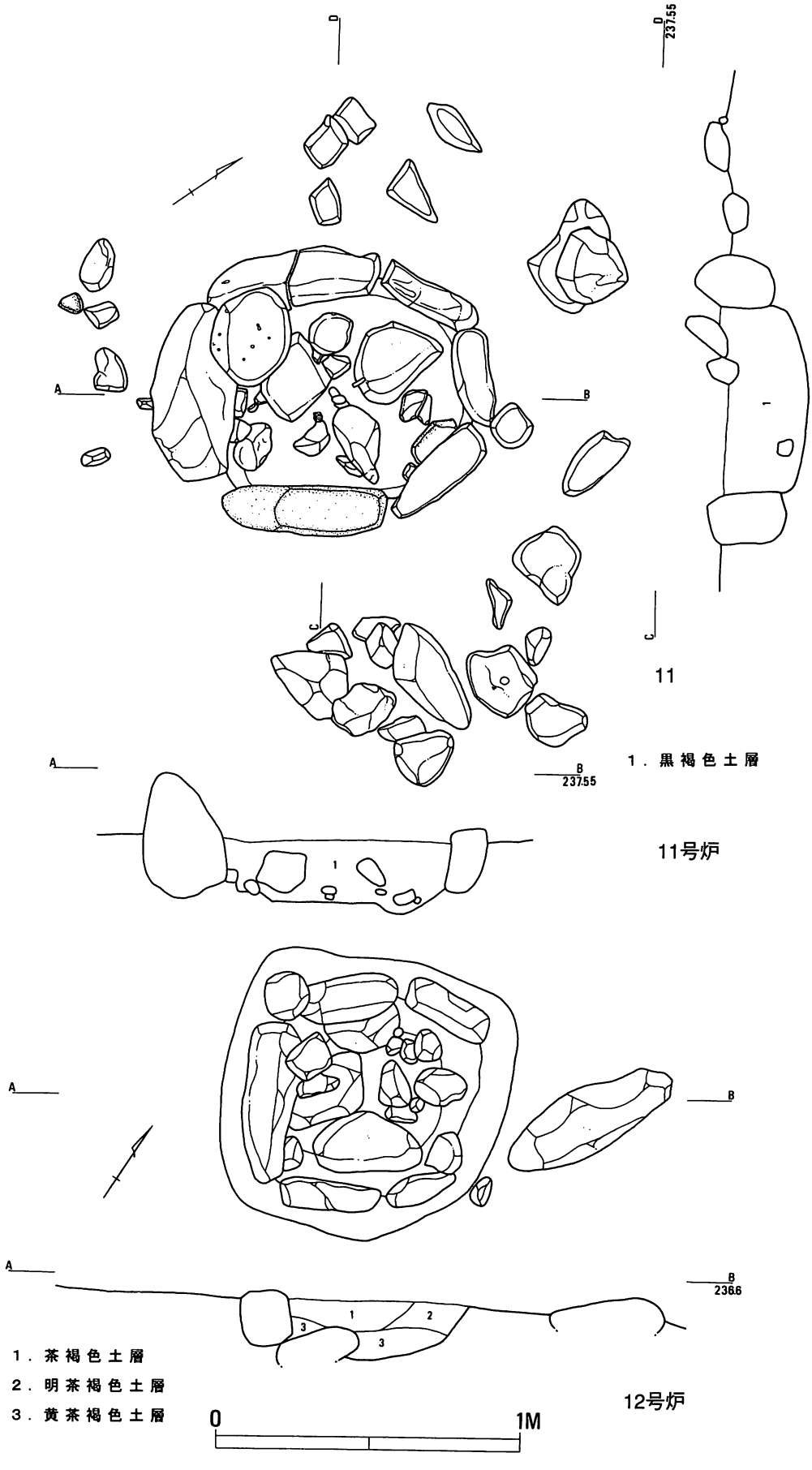
Ｊ－14区において検出された。35～55cmの自然石を堀り方壁際に接するように５石を設置している。それらには、著しい被熱の痕跡はみられないが北側に配されたものは1/2に割れてしまっている。そのほかの炉石についても細かなクラックが観察できる。また、北東コーナー部分には、隙間を埋めるために拳大の自然石がはめ込まれており、機能時にはほかのコーナー部にも同様に礫がはめ込まれていた可能性がある。平面形は、ほぼ正方形を呈しており、長径77.2cm、短径70.0cm、深度30.1cmの規模を有している。炉内からは、遺物の出土はなかったが、覆土上層からは、やや多くの焼土粒子とわずかに炭化粒子が観察された。本炉の特徴として炉中央部より廃絶儀礼のひとつと捉えられる直径約30cmの扁平な円礫が検出されたことがあげられる。しかし、周囲に住居跡を決定付ける遺構類が検出されなかったため、その性格付けは難しい。

11号炉（第101図）

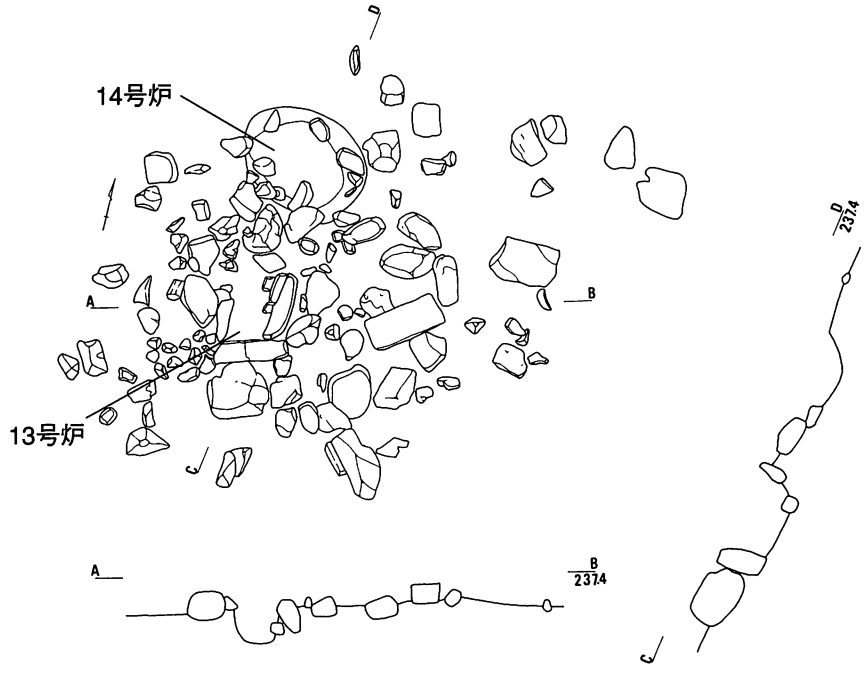
Ｏ－20区において検出された。33～58cmの自然石を６石使用した石囲炉である。平面形は、変形６角形を呈しており、長径113.9cm、短径92.3cm、深度26.1cmを計る。炉石の被熱痕はあまりみられなかったが２石にクラックが観察できた。覆土からは、多くの10cm以下の礫が混入しているが焼土・炭化粒子は確認されなかった。遺物は、縄文時代中期後半と推測される土器の小破片が数片出土したが図示し得るようなものではない。本炉の性格については、その大きさや炉周囲に散在する掌大の扁平な自然石などが住居跡の残骸である可能性を強めていよう。

12号炉（第101図）

Ｔ－14区において検出された。東側を除く三方より、24～52cmの自然石が５石、炉石として検出されたが、本来は、東側にも炉石が設置されていたと想定できる。規模は、長径93.2cm、短径91.2cm、深度19.6cmを測り平面形は、ほぼ正方形に近い形状を示している。また、炉底部まで荒らされており土器などの遺物類はもとより焼土・炭化粒子などは検出されなかった。本炉の性格については、その大きさなどが住居跡の可能性を示していようが周囲にピットや遺構などが検出されなかったため不明としておきたい。



第101図　第11・12号炉



第102図　第13・14号炉

13・14号炉（第102図）

Ｏ－７区において形状の違う２基が近接（約20cm）して検出された。周辺には、上方から流入してきたと考えられる礫が数多くみられる。

13号炉は、25～40cmの直方体に近い形状の角礫を使用して構築されている。２－２号炉寄りの一辺の炉石は既に失われていた。形状は、長方形を呈し、長径推定約50cm、短径38.8cm、深度21.2cmの規模を有している。覆土からは、土器類などの遺物や焼土・炭化粒子は検出されなかった。

14号炉は、当初、土坑と考えていたが覆土中にわずかな焼土粒子が確認されたことや堀り方壁際に残存している礫（炉石）に被熱痕があることから炉と認定した。堀り方の形状は、楕円形を呈し、長径68.0cm、短径55.8cm、深度18.1cmの規模を持つ。前述のとおり覆土中からわずかに焼土粒子が検出されたほかは、遺物類など何も出土していない。

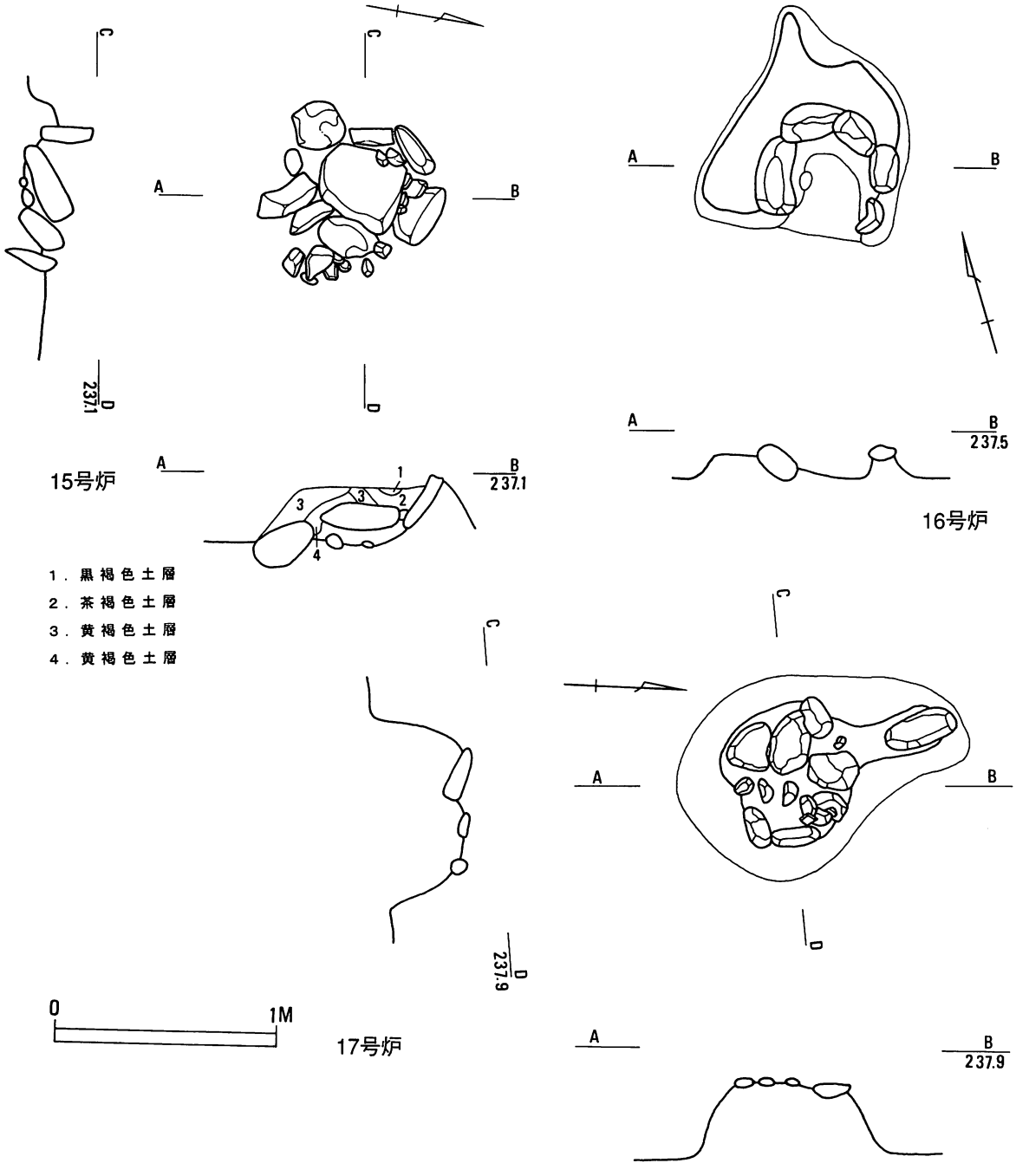
双方の性格については、現段階では住居に伴う炉とは考えにくく屋外炉としておきたい。

15号炉（第103・104図）

Ｎ－６区よりかなり破壊された状態で確認された。７石ほどの30cm大の扁平な礫が壁際に貼りつけられていたことが理解できる。形状は不整円形をとっている。規模は、推定ではあるが、長径80cm、短径70cm、深度30cmを計るものと思われる。また、中央部には直径約40cmの明らかに被熱された扁平な礫が落とし込まれていた。炉内からは、土器類などの遺物や焼土・炭化粒子は確認されなかった。なお、周囲には床を貼った痕跡などはみられなかったが中央部に礫が落とし込まれていたことなどは廃絶儀礼の一種と考えられ、本炉が住居内の炉であった可能性を持たせている。遺物は、縄文時代中期中葉に比定できる深鉢型土器の破片が２点出土している（1・2）。

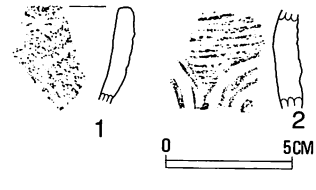
16号炉（第103図）

Ｊ－９区において南側を欠損した形で検出された。20～30cmの自然石を円形に近い形状で配置した石囲炉である。その規模は、残存部の直径で約65cmを計り、深度は約15cmと非常に浅い。炉内からは焼土および炭化粒



第103図　第15・16・17号炉

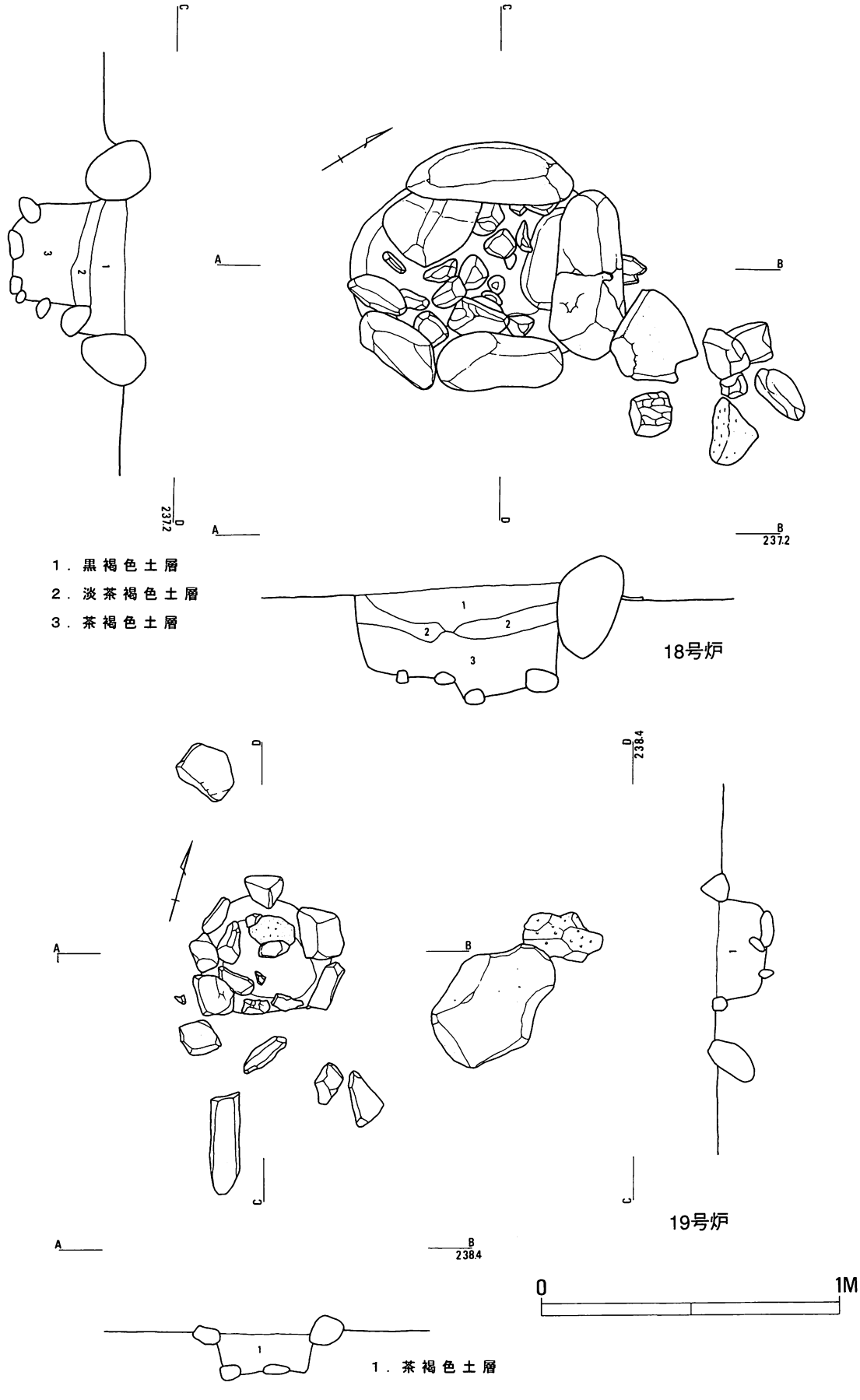
子は検出されなかった。また、遺物の出土もなかった。当炉の性格であるが周囲に遺構や貼床の残存部の痕跡が見当たらなかったため屋外炉の可能性が強いと思われる。



第104図　第15号炉出土遺物

17号炉（第103図）

Ｊ－11区より検出された。20～30cmの自然石を利用して構築された石囲炉であるが、残存状態が極めて悪く平面的にしか確認できなかった。その直径は推定で50～60cmを計るものと思われる。また、焼土・炭化粒子および土器などの遺物の検出はなかった。炉の性格についても不明である。



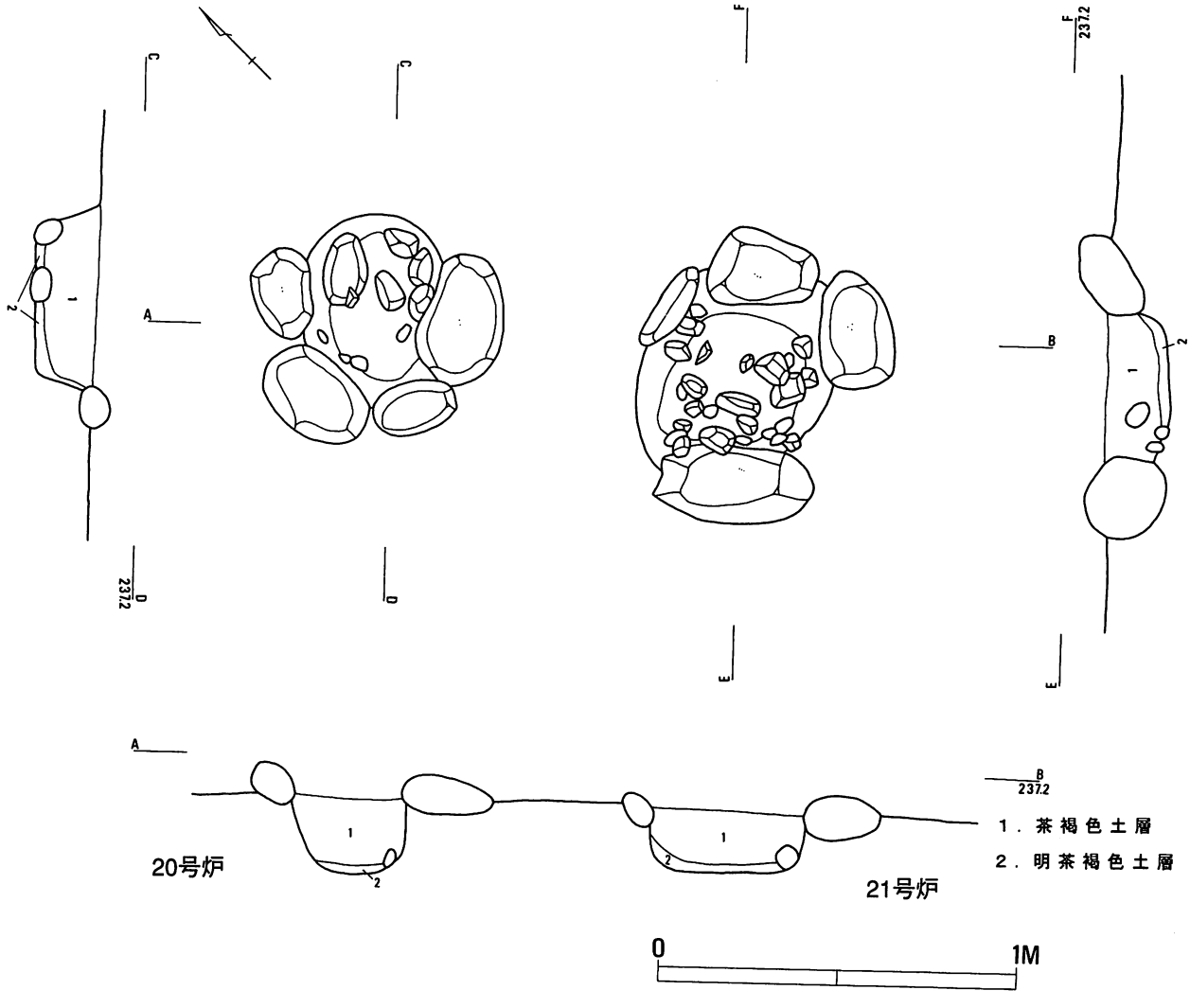
第105図　第18・19号炉

18号炉（第105図）

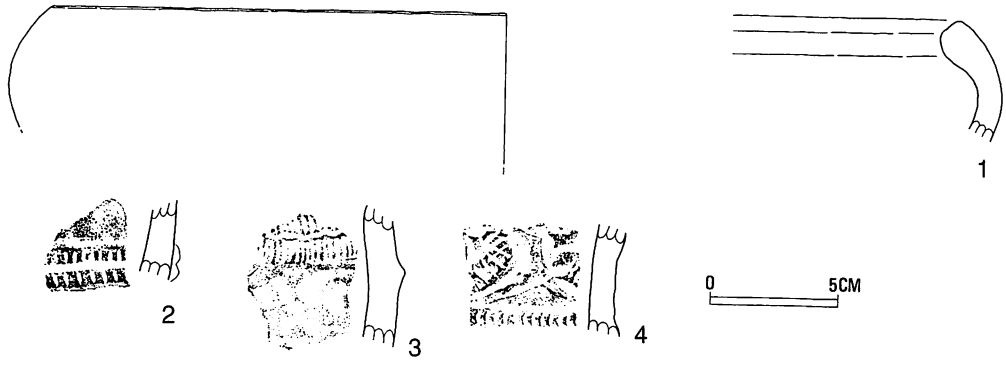
Q－17区において検出された。南西側の炉石が失われているものの他の部分には、33～56cmの被熱痕を持ち一部にクラックを生じている炉石が残存していた。それらから推測すると本炉の平面形は、５角ないし６角形を呈していたと思われる。規模は、長径92.1cm、短径83.8cm、深度38.5cmを計り、他の炉よりも深いことが特徴付けられる。底部には、河岸段丘形成時の２cm～拳大ほどの自然石が検出されている。また、覆土上層部より多くの炭化粒子が検出されたが土器類などの遺物の出土なかった。性格については、12号炉などと同様にその大きさ等から住居跡内にあった可能性があるようだが周囲の状態などの資料不足から現段階ではどちらともいえない状況にある。

19号炉（第105図）

K－21区において検出された。非常に残存状態が悪く周囲に炉石であったと思われる礫が周囲に散乱していた。炉の構造は、堀り方の壁際上方に20cm以下の自然石を巡らしていたと推測できるものである。平面形は、円形を呈し、直径約50.0cm、深度約17.0cmの規模を計るものと想定できる。炉石には、被熱の痕跡はほとんどみられず覆土中の焼土・炭化粒子の混入も認められなかった。なお、遺物などの出土もなかった。周囲に遺構などが検出されなかったため、屋外炉の可能性が強い。



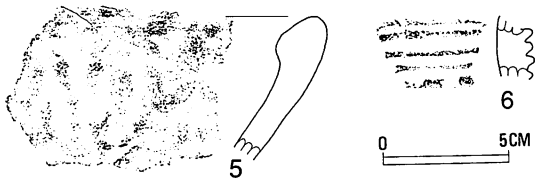
第106図　第20・21号炉



第107図　第20号炉出土遺物

20・21号炉（第106～108図）

20・21号炉は、S－8・T－8区に位置しており非常に近接した位置にある。また、形態や規模も類似した傾向がみられる。さらに先に性格付けをするならば、周囲に遺構などが確認されなかったため屋外炉の可能性が強いものといえよう。



第108図　第21号炉出土遺物

20号炉は、掌大の扁平な自然石を周囲に配した石囲炉である。堀り方はほぼ正円形を呈している。規模は、長径45.0cm、短径32.2cm、深度20.5cmを計る。遺物は、縄文時代中期に位置付けられる深鉢形土器の破片が4点出土している（1～4）。なお、焼土・炭化粒子は確認されなかった。

21号炉は、6号炉と並列した位置にあり、掌大より一回り大きな扁平な自然石を周囲に設置した石囲炉である。堀り方は、楕円形状を呈しており、その規模は長径69.5cm、短径52.1cm、深度17.3cmを計る。出土遺物は、縄文時代中期後半の深鉢形土器破片2点が炉内より検出された（5・6）。また、焼土および炭化粒子は認められなかった。

第5節　埋設土器

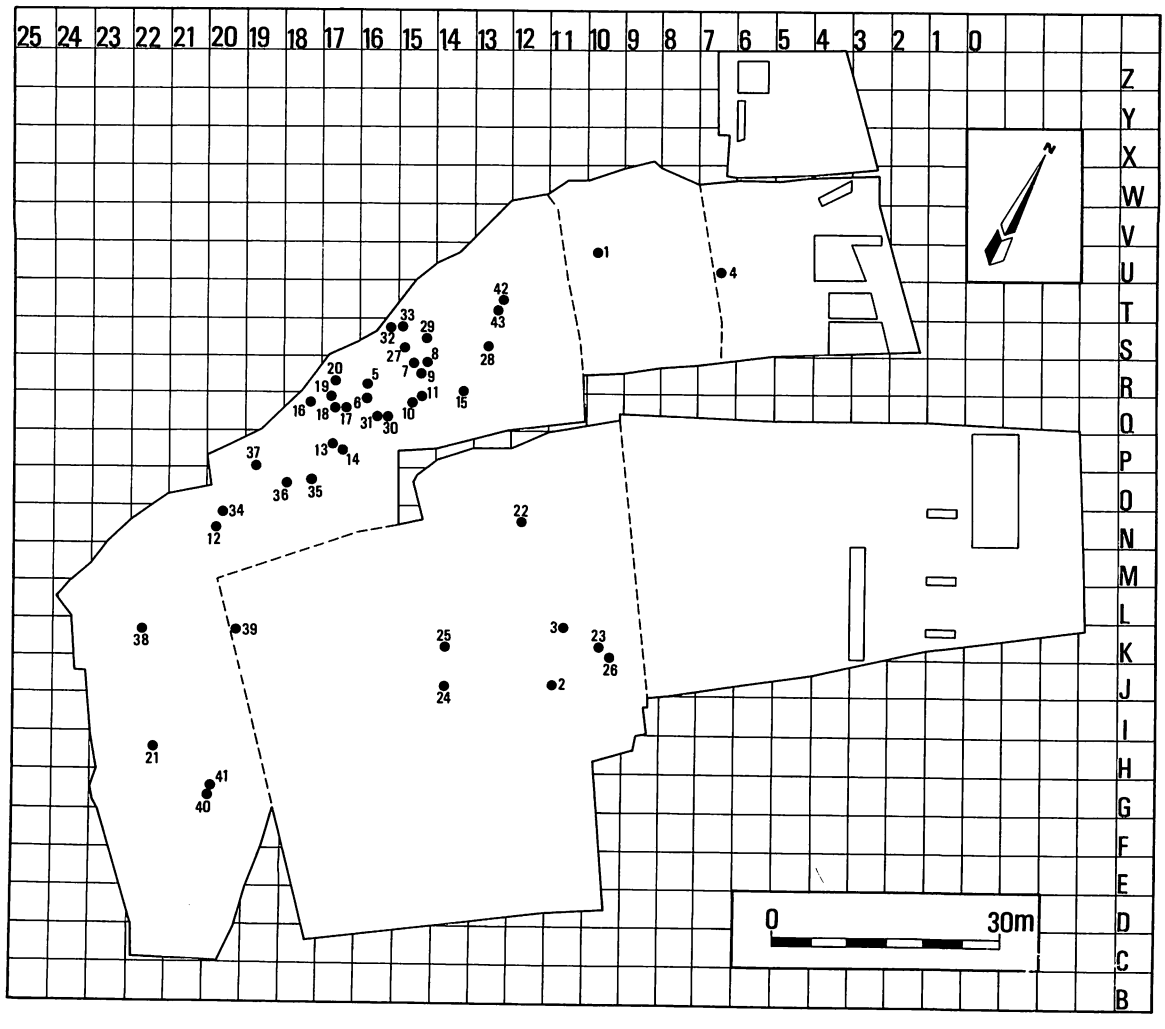
本遺跡より検出の遺構は、段丘上位からの土石流等によりかなりの割合で流出してしまっている。特に、炉と同様に埋設土器についても、住居に伴っていたと考えられるものもある。しかし検出時の状況から単体で調査されたものも少なくない。そこで、本報告書では混乱を防ぐため、それぞれを屋外埋甕など細分することなく埋設土器として取り扱うこととしたい。

1号埋設土器（第110・113図）

調査区北東の段丘縁辺部に近いU－10区に位置している。約30cmの非常に薄い耕作土直下の河岸段丘形成時に堆積したと考えられる礫床（遺構最終確認面）最上部より検出された。その設置状況は、礫床中の礫を長径38.4cm・短径33.5cm・深度17.9cmのほぼ正円に近い形状に掘り込み深鉢形土器の口縁部下寄りから胴部上半を正位に埋設してある。耕作土直下での確認であったため本来の埋設状況は深鉢形土器の口縁部まで残存させていたことも充分に想定できるものである。さらに、本埋設土器の特異な状況として140×70cm程の大型の自然石が背後になるように設置されていることも挙げられよう。土器（1）は、現存最大径33cmを計り、縄文時代中期中葉の新道期に位置付けられる。16～20号埋設土器と同様に屋外埋甕の可能性を強く感じさせるものである。

2号埋設土器（第110・113図）

J－11区に位置しており、周囲には、大小の自然石が散乱していた。長径32.6cm・短径27.4cm・深度10.9cmのほぼ円形に近い形状の掘り込みを持つ。掘り込み中には正位に深鉢形土器の胴部が設置されているが削平が著しく西方から南側にかけて土器の欠損がみられる。削平などの理由によって、検出された非常に浅い掘り込みは本来の形はより少し大きくさらに深度を有していたものと考えられる。設置されていた土器（2－1）は、無



第109図　埋設土器配置図

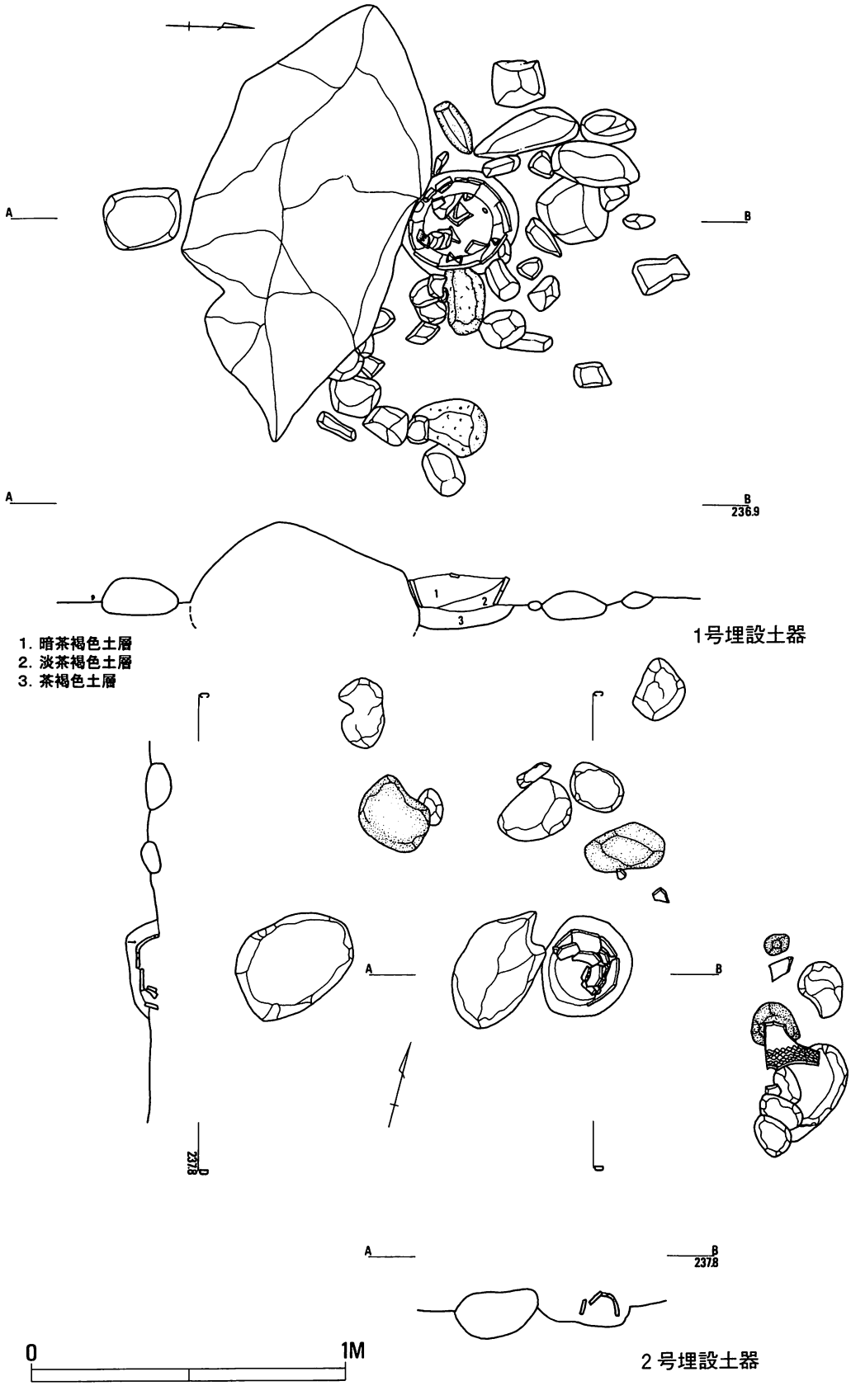
文の底部のみのため詳細な時期は不明であるが縄文時代中期後半代に位置付けられるものであろう。また、本埋設土器とは直接の関係はないと思われるが、近接した位置より縄文時代中期後半（曽利Ⅰ式期新段階）の深鉢形土器頸部の大型破片（2－2）が出土している。

3号埋設土器（第111・113図）

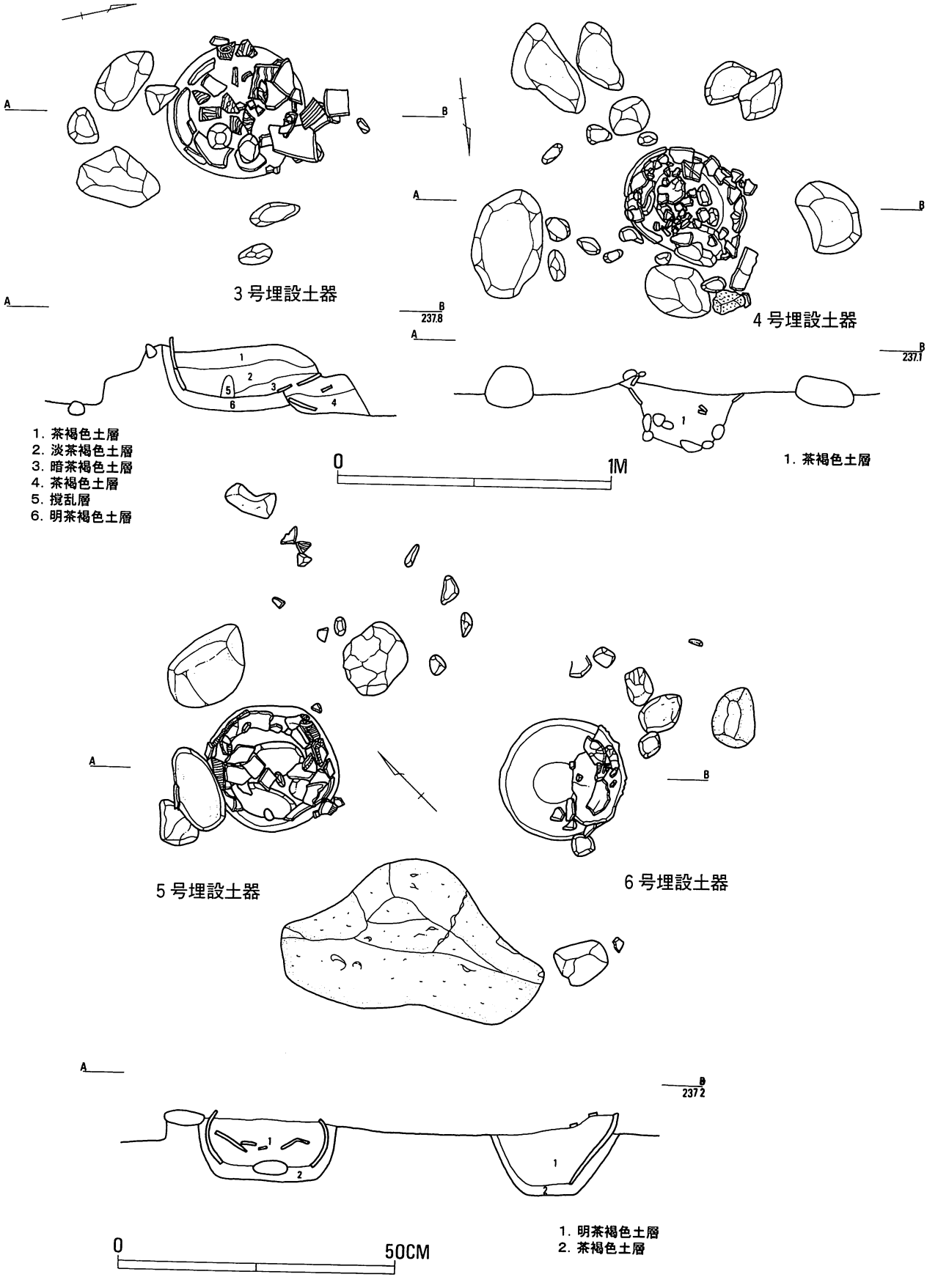
K－11区において存在が明らかとなった。この周辺は、攪乱等の理由から層位が不安定で、本埋設土器は精査を重ね掘り下げた段階で確認された。南側については設置された土器も垂直に近い状態で残存していた。しかし、北側においては南側からの外圧を受けたためか、外側に押し出された状態で土器片が検出された。残存部の法量は、長径49.8cm・短径47.5cm・深度26.3cmを計る。また、形状はほぼ円形に近いと考えられる。土器（3）は、直径約40cmの深鉢形土器で胴部のみが正位で設置されていた。時期は曽利Ⅱ式期に比定されよう。

4号埋設土器（第111・113図）

U－7区に位置している。長径45.0cm・短径35.5cm・深度22.0cmの楕円形状の掘り込みを持つ。土器は、上半のみに設置されており、下方には設置の痕跡は認められなかった。また、内部には本遺構に使用された土器の小破片が上層に約10cmの自然石が10石ほど底部付近に混入していた。土器（4）は、深鉢形土器あるいは鉢形土器の頸部から胴部上方付近と思われる部位のみを打ち欠き正位に置いており、残存部直径34.4cmを計る。時期は、曽利Ⅱ～Ⅲ式期に位置付けられよう。



第110図　第１・２号埋設土器



第111図　第３～６号埋設土器

5・6号埋設土器（第111・113図）

Q－16・R－16区にあり双方は約50cmと近接した位置取りをしている。周囲には100×50cm程の大型自然石や20cm内外の礫が散在しており、屋外埋甕の可能性を強めている。

5号埋設土器は、長径48.0cm・短径44.9cm・深度22.2cmの円形状の掘り込みを持つ。また、上縁部西側からは直径約30cmの扁平な自然石が検出されている。土器（5）は確認当初、深鉢形土器の胴部のみを正位に掘り込み内に設置したものと想定された。しかし、調査途中、内部から口縁部の破片が検出されたことから、本来の姿は、口縁部までもが存在していたことが判明した。また、特筆すべき点として掘り込み底部に扁平な自然石が置かれていたことが挙げられる。なお、土器の時期は勝坂式期に位置付けられる。

6号埋設土器は、長径46.2cm・短径43.4cm・深度29.9cmを測り、円形状の掘り込みを持ち、5号埋設土器と規模、形状ともに同一と考えて良いものであろう。土器（6）の遺存状態は良好とは言えず、口縁部と底部を欠いた深鉢形土器の約1/3程が正位の位置を留めていたに過ぎない。なお、時期は勝坂期に比定される。

7・8・9号埋設土器（第112・113図）

R－15区に位置しており、それぞれが1m前後と近接した位置関係を持っている。検出状況はともに同レベルの縄文時代中期と想定している層位から確認されたものである。周囲には、若干の自然石の散らばりがみられるが住居跡などの残骸ではなく、どちらかといえば屋外埋甕の性格が強く感じられる。

7号埋設土器は、長径35.7cm・短径34.2cmとほぼ正円形状の平面形を有する。掘り込みは、埋設されている深鉢形土器と同形に27.3cmの深度をを持たせている。内部から土器小破片や礫などの混入はみられなかった。土器（7）は、深鉢形土器の胴部から底部までの部位を正位に設置している。なお、残存部直径は29.2cmを測る。時期は、曽利Ⅳ式期に並行する加曽利E3式期に位置付けられる。

続いて8号埋設土器であるが掘り込みの周囲には、いくつかの土器の小破片や30～40cm程の自然石が4石検出されている。掘り込みの平面形は、不整楕円形を呈しており、長径28.3cm・短径26.1cmを計る。また、掘り込みの断面形は、設置されている土器の形状を考慮したものとなっているようで、深度は19.9cmを計る。土器（8）は、かなり破損しており調査時の状況では、深鉢型土器の胴部のみを正位に設置したものと考えられていたが内部より検出された破片の接合から口縁部まで存在していた可能性が強まった。時期は、曽利Ⅳ式期に比定されるものである。

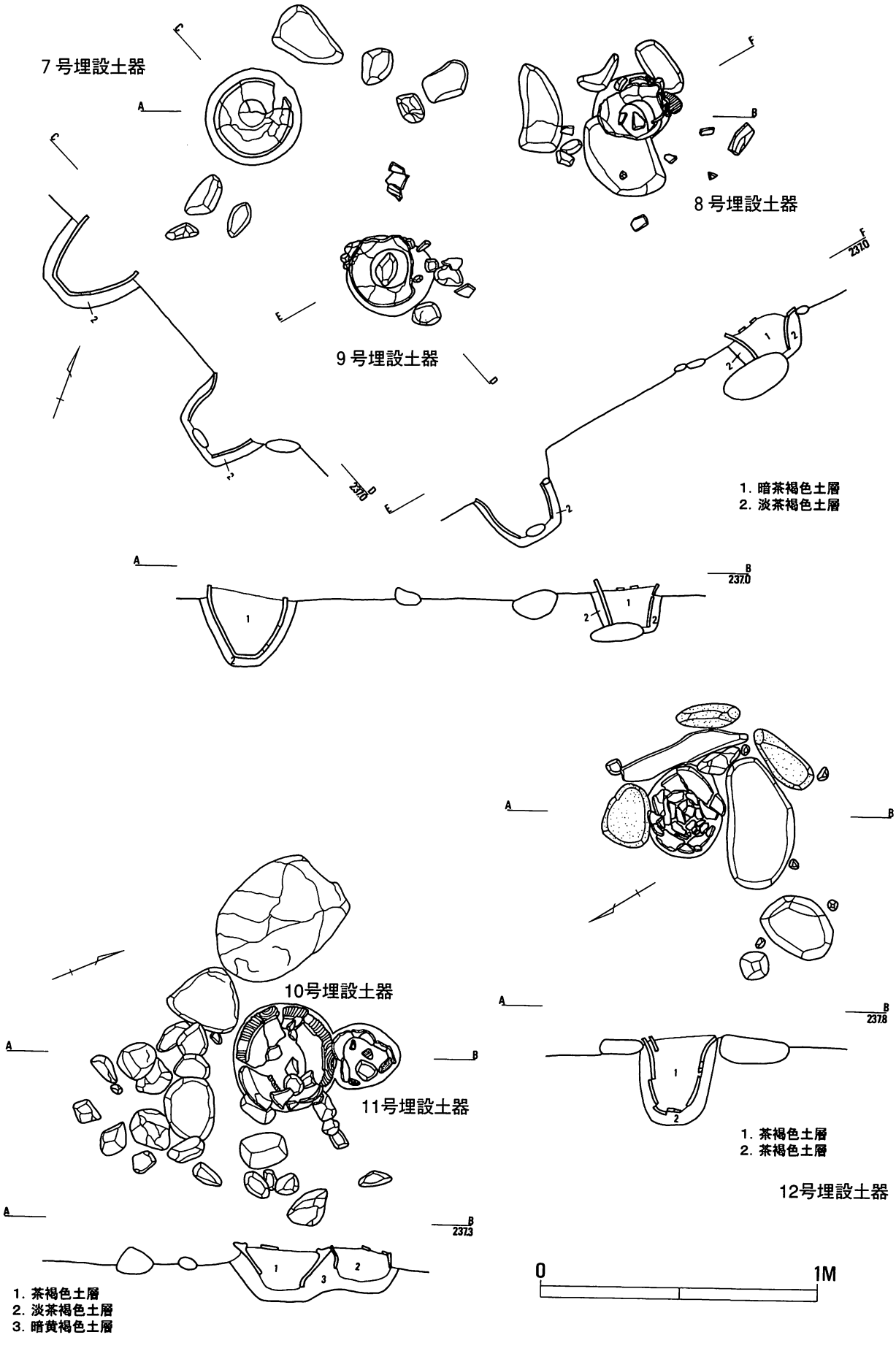
9号埋設土器は8号と同様に周囲にいくつかの土器小破片が散っており必ずしも良好な残存状況といえるものではなかった。掘り込みの上縁部には7点あまりの小礫がみられる。また、平面形は楕円形を呈しており長径32.3cm・短径28.3cmを計る。断面形は鍋底形状をみせている。なお、深度は、26.5cmを測る。そのほか、特筆すべき点として内部底面近くからは、土器の設置時に置かれたと想定できる直径約20cmほどの扁平な礫が検出されている。土器（9）は、口縁付近に破損がみられるものの深鉢形土器の胴部下半から底部を打ち欠いて正位に設置されていた。時期は曽利Ⅳ式期に位置付けられる。

10・11号埋設土器（第112・118図）

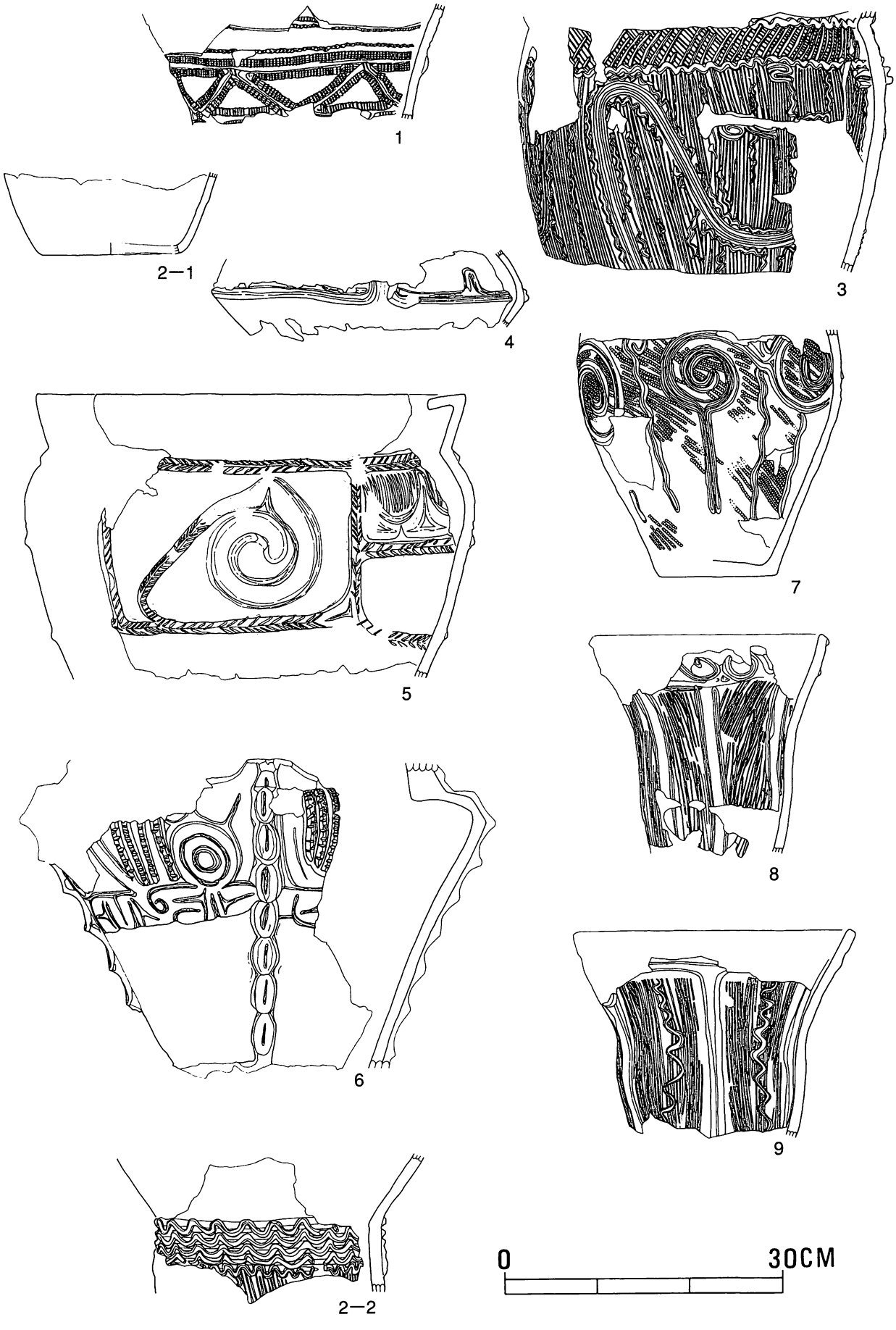
Q－15区に位置しており、ともに連結した形状を取っている。掘り込みは、それぞれの土器に沿う形でやや浅く造られている。平面形は、いわゆる瓢形を呈しており、長径62.2cmを測る。深度は最深部で20.0cmを計る。

10号埋設土器は、直径約40cmの深鉢形土器（10）を口縁部から頸部まで使用している。埋設方法は、基本的には正位といって良いだろうが2/5程を打ち欠き、その部分だけを逆にはめ込むという特異性がみられる。内部からは、接合可となる数片の土器片と小礫が検出されている。

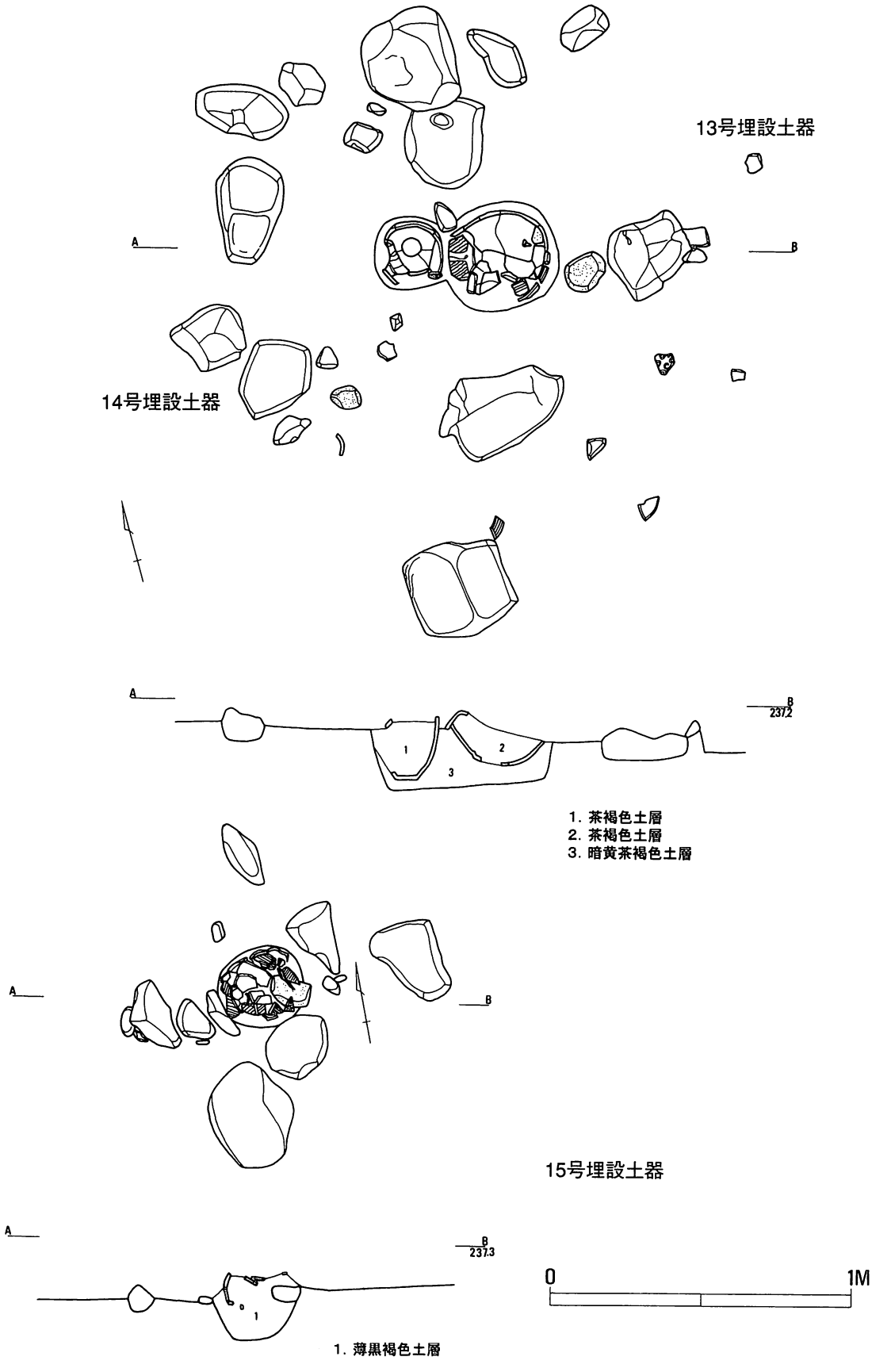
11号埋設土器は、10号にやや乗り掛かるように直径約21cmの深鉢形土器（11）の頸部から胴部上半を設置させている。時期については、双方ともに曽利Ⅱ式期に位置付けられるものと考えられる。また、本遺構の性格は、周囲を精査しピットなどが検出されなかった状況などから屋外埋甕の可能性が強い。



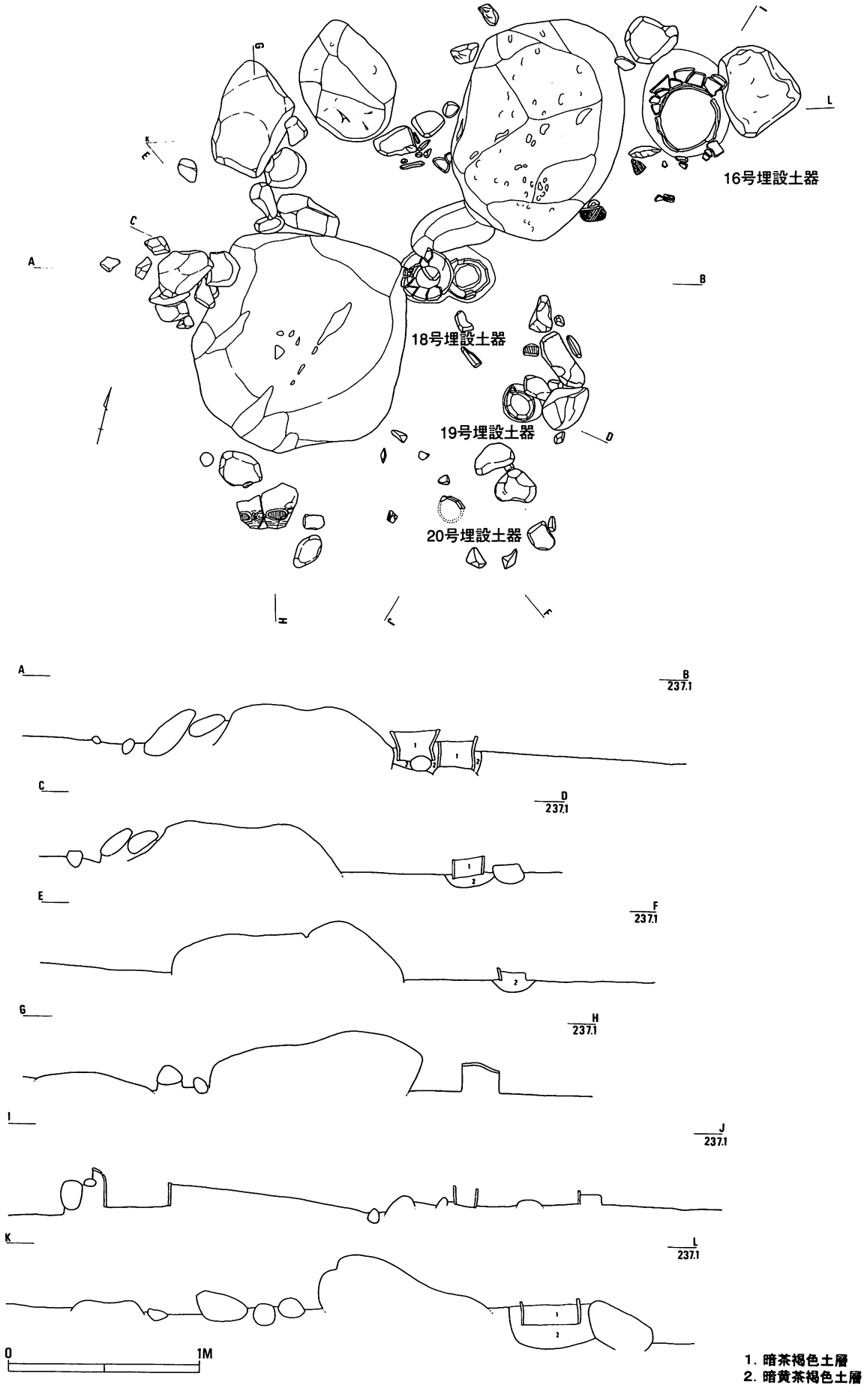
第112図　第7～12号埋設土器



第113図　第１～９号埋設土器



第114図　第13～15号埋設土器



第115図　第16～20号埋設土器

12号埋設土器（第112・118図）

Ｎ－20区に位置している。堀り込みの上縁部付近には、20～50cmの扁平な自然石が６石ほど密に検出されたため本来は住居跡に伴うものと想定できるが周囲よりピットや炉などの遺構が検出されなかったため埋設土器として扱うこととした。平面形は、楕円形を呈しており長径33.4cm・短径27.2cmを測る。深度は、33.7cmを測る。土器（12）は、口径28.1cm、高さ30.3cmの深鉢形土器が正位に完存した状態で設置されていた。しかし、元位置を保っているがかなり細かく破片化してしまっている。時期は、曽利Ⅳ式期に比定される。

13・14号埋設土器（第114・118図）

Ｐ－17区において連結した形で検出された。同時に、周囲からやや大型の自然石と思われる礫や土器の小破片が散っているのが確認されたがそれらとの関係や埋設土器の性格までは判断に苦しむものである。平面形は、瓢形を呈しており、長径62.3cm、深度28.5cmを測る。土器は、13（13）・14号（14）ともに残存状況はあまり良好ではなく所々で欠損がみられる。13号は胴部に最大径33.2cmを持つ深鉢形土器で口縁部と底部を欠いた状態で正位に設置されていた。時期は加曽利Ｅ３式期に求められる。また、14号は深鉢形土器の胴部のみを正位に設置している。時期は曽利Ｖ式期に位置付けられる。

15号埋設土器（第114・118図）

Ｑ－14・Ｒ－14区に跨って確認された。本遺構との関係はないと考えられるが、周囲には拳大から直径35cmあまりの自然石が認められる。掘り込みは、長径29.2cm、短径27.0cm、深度23.2cmの規模を持つ。掘り込み自体の検出作業は良好に行うことができたが、内部に設置されてる深鉢形土器（15）の状態は破片化が進行しており胴部から底部までが正位に置かれている様子が辛うじて理解できる状況であった。土器の時期においては曽利Ⅳ式期に位置付けられる。

16～20号埋設土器（第115・118図）

調査区北側の段丘縁辺部（Ｑ－17・18区）の遺構最終確認面直上の層位より５基が２石の直径1.2ｍを計る大型自然石の周囲に集中して確認された。検出状況からこれらの性格は、屋外埋甕の可能性が強く感じられる。

16号埋設土器は、グループ中でも東方に位置している。土器の大きさから比較すると大型の掘り込みを持ちその規模は、長径60.0cm、短径45.2cm、深度23.2cmを測る。三方を、それぞれ117.2cm、22.2cm、41.6cmを測る自然石が掘り込みを囲み南側のみ解放させている。土器（16）は、深鉢形土器の口唇部と胴部下半を欠損させ正位に配置されていた。時期は曽利ⅠからⅡ式期に位置付けられる。

17・18号埋設土器は、直径１ｍ以上ある２個の自然石間に連結した状態で検出された。掘り込みの形状は瓢形を呈しており、規模は、直径50.1cm、深度23.9を測る。土器は、ともに深鉢形土器の胴部下半を打ち欠いたものを正位に18号（18）を配した後に17号（17）を設置している。時期は、17・18号とも曽利Ⅲ式期に比定されるものである。

19号埋設土器は、他の近接する埋設土器の中でも最も小振りなもので掘り込みの規模は長径22.5cm、短径19.5cm、深度13.7cmを測る。掘り込み上縁部や近接した位置に幾つかの礫がみられるが係わりについては理解できない。土器（19）は、深鉢形土器の胴部のみが正位に設置された状態で検出されたが、本来は口縁部付近まで存在していた可能性もある。時期は曽利Ⅲ～Ⅳ式期に位置付けられる。

20号埋設土器においては検出状態が非常に悪く土器など図示し得ない状況であった。なお、規模は19号と同程度であったと推測される。

21号埋設土器（第116・118図）

Ｈ－23区において確認された。掘り込みは、長径47.1cm、短径42.0cm、深度28.5cmの規模を有する。底部にみられる礫は、遺構最終確認面にあたる河岸段丘形成時の自然礫層である。また、平面形状は正円に近い楕円形を呈している。土器（21）は、やや余裕を持たせた掘り込みの中に深鉢形土器の胴部下半から底部を正位に配

第116図　第21号埋設土器

置している。しかし、残存状態は良好とはいえず小破片化している。時期は、縄文時代後期に位置付けられるものであろう。本遺構の性格については、周囲に扁平な自然石などが検出されており、住居跡に付随していた可能性が強いが他に炉址などが確認されておらず再考の余地があるものと思われる。

22号埋設土器（第117・118図）

N－12区に位置している。周囲には、自然石や土器片などの散乱はほとんどみられない。長径30.5cm・短径26.6cm・深度22.2cmのほぼ円形に近い形状の掘り込みを持つ。掘り込み中には正位に深鉢形土器が設置されているが各所で破損が著しく見受けられる。掘り込みは、土器の形状に沿って掘り込まれており、本来は、もう少

し深度を有していたものと考えられる。また、内部からは、欠損した土器片に加えて５㎝程の自然石が検出されている。設置されていた土器（22）は、縄文時代後期前葉にあたる堀之内２式期に位置付けられるものである。本遺構の性格については、周囲の状況などから屋外の単独埋甕としておきたい。

23号埋設土器（第117・123図）

Ｋ－10区に位置している。南側約30㎝には、約17㎝と25㎝の扁平な自然石が直列に配置されているが本埋設土器との係わりについては不明である。当地点は、削平が進んでおりかなり下方での検出となった。このため本来は掘り込みの深度はさらに深かったと想定できる。法量は、長軸24.3㎝、短軸23.7㎝、深度18.2㎝を測る。前述の理由から土器（23）は、底部付近のみが正位に設置されていたに過ぎない。時期は曽利Ⅱ式期に位置付けられる。

24号埋設土器（第117・123図）

Ｊ－14区において検出された。当地区は土石流の影響を強く受けたためか礫の流入が激しく遺構検出が難しい地点であった。本遺構においても付近に多くの礫が点在しており、掘り込みのプランなどは確認しにくく土器が検出されてようやく埋設土器と認定できる有り様であった。このため掘り込みの形状や規模は不明である。土器（24）は、深鉢形土器の口縁部と底部を打ち欠き正位に設置されていた。時期は、曽利Ⅳ式期に位置付けられる。

25号埋設土器（第119・123図）

Ｋ－14区に位置している。北側には、30㎝あまりの自然石が検出されているが遺構に伴って配置された礫はなく土石流などで当地が流された際に流入したものと思われる。掘り込みの形状は楕円形を呈し、長軸24.4㎝、短軸20.4㎝、深度18.6㎝の規模を有する。内部には、当遺構とは関係ないと想定される土器片の混入がみられる。土器は、曽利Ⅳ式期に比定される深鉢形土器（25）を口縁部と底部を打ち欠いて正位に設置している。

26号埋設土器（第119・123図）

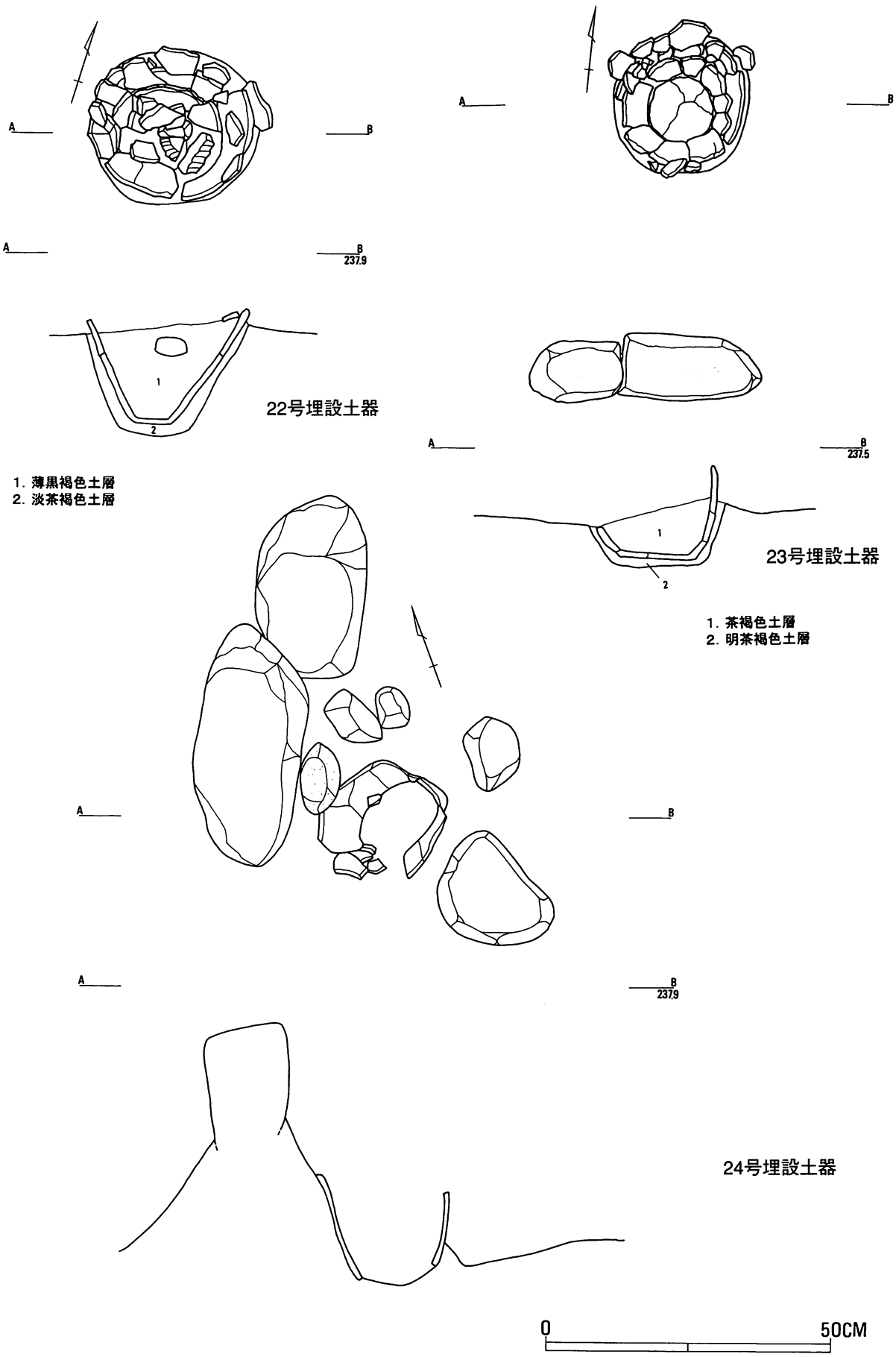
Ｊ－10とＫ－10グリッドに跨って確認された。平面形は、長軸27.5㎝、短軸26.5㎝とほぼ正円形を呈している。深度は、23.8㎝を計る。土器は、勝坂期に位置付けられる深鉢形土器（26）の胴部のみを正位に余裕を持たせながら設置している。内部からは、設置された土器の破片以外検出されなかった。なお、周囲からピットなどの遺構は確認されていない。

27号埋設土器（第119・123図）

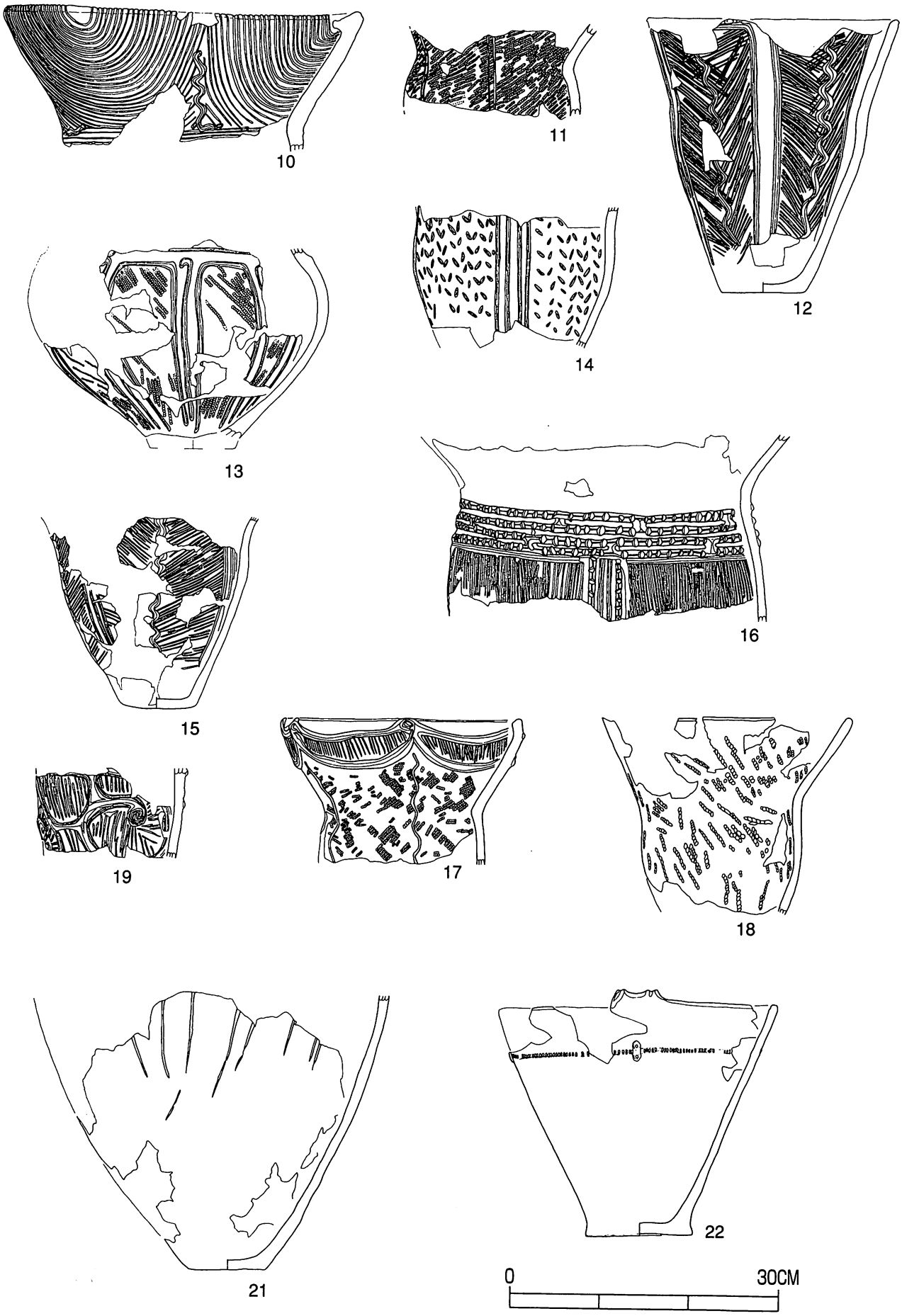
Ｓ－15区に位置している。北側30～50㎝と近接した位置に40～50㎝の大型自然石が直列して配されている。掘り込みは、27.0×25.4㎝とほぼ正円を呈する平面形を有し、約20㎝の深度を持つ。土器（27）は、深鉢形土器の胴部上半以上を打ち欠き正位に設置させている。本遺構の性格については、周囲にピットなどの遺構が検出されなかったことや大型自然石との関係などから屋外埋甕の可能性が強く感じられる。

28号埋設土器（第120・123図）

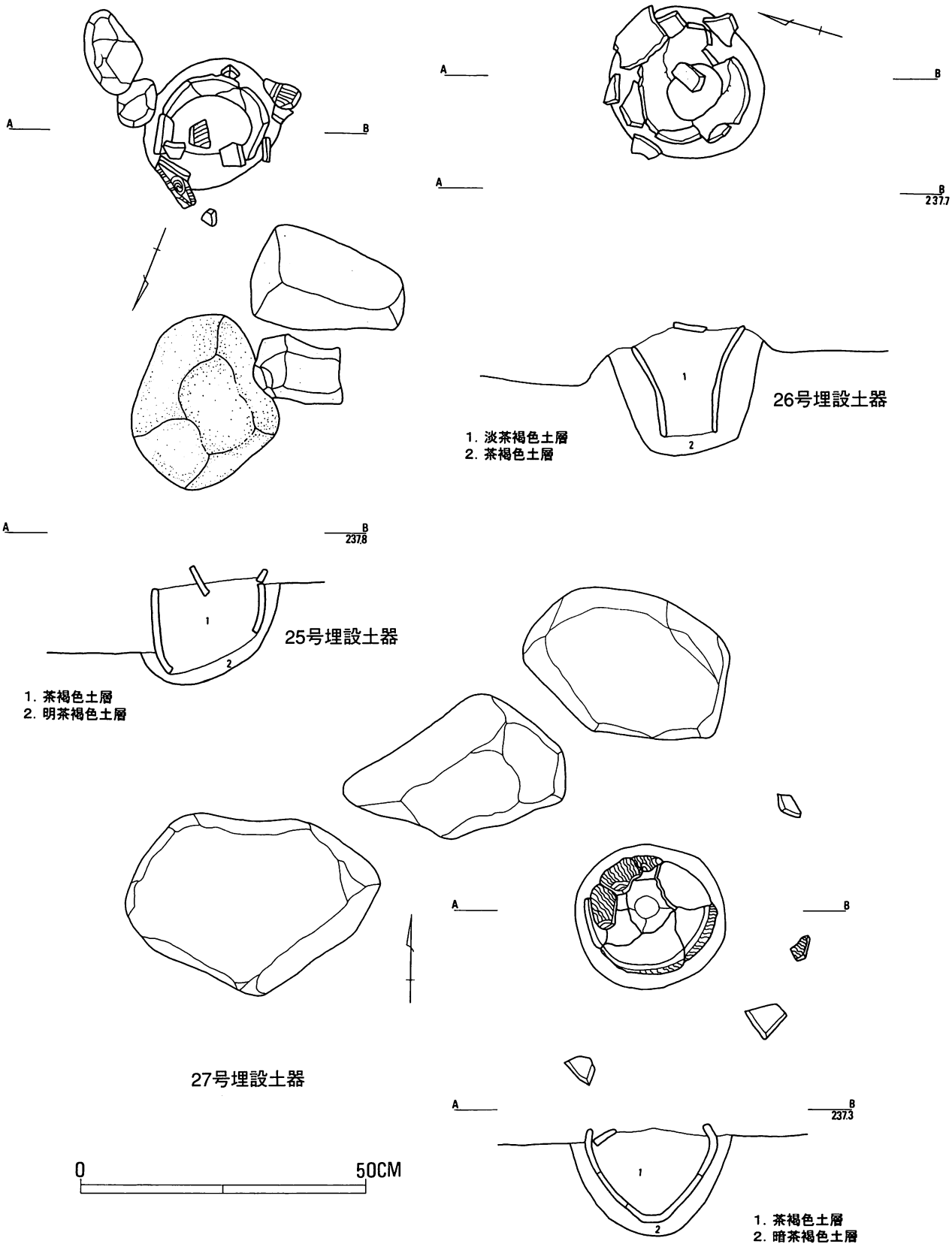
Ｓ－13区に位置している。近接した位置や掘り込みの上縁部などには、拳大から30㎝あまりの礫が検出されている。長軸43.3㎝、短軸31.0㎝の不整楕円形を呈する掘り込みの中央やや南東寄りに深鉢形土器（28）の胴部下半が正位に余裕を持たせて設置されている。また、深鉢形土器の底部は穿孔されていたと推測される。土器の時期は、縄文時代中期後半の曽利Ⅳ式期に位置付けられるものである。なお、掘り込みの内部からは当該土器の破片の他は小礫が数点検出されたのみである。



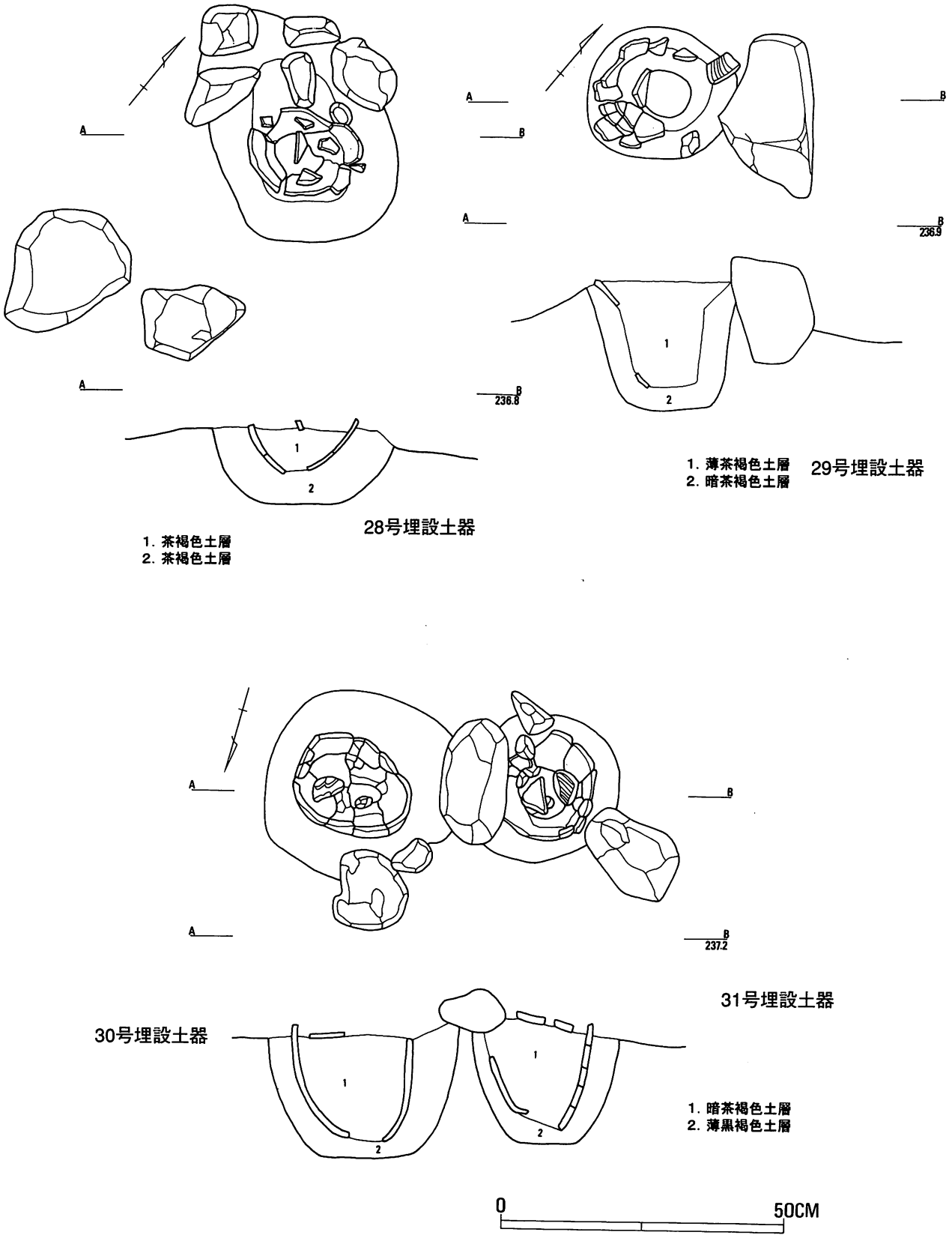
第117図　第22～24号埋設土器



第118図　第10～22埋設土器　　※　20は、欠番とする。



第119図　第25～27号埋設土器



第120図　第28～31号埋設土器

29号埋設土器（第120・123図）

Ｓ－15区において確認された。平面形は、楕円形を呈しており、長径27.3㎝、短径23.1㎝、深度22.8㎝の規模の掘り込みを有する。また、掘り込み上縁部に直径30㎝ほどの自然石が確認されているが係わりは不明である。土器（29）は、破損が激しく欠落している部分が非常に多く、深鉢形土器の胴部が正位に設置されていた。土器の時期については、曽利Ⅳ式期にあたるものである。

30・31号埋設土器（第120・123図）

Ｑ－16区において検出された。双方の距離は、約10㎝と非常に近接しており、長さ約22㎝の礫により連結されているように見受けられるが、掘り込み自体はそれぞれ構築されていて厳密にいえば連結はされていない。30号埋設土器の掘り込みは長径34.1㎝、短径32.9㎝、深度23.0㎝の規模を持つ。平面形は、不整楕円形を呈している。土器（30）は、余裕のある掘り込みの中に深鉢形土器の胴部以下を正位に埋納している。底部については、部分的に存在が認められてはいるが穿孔されていた可能性も捨て切れない。時期は、曽利Ⅳ式期に位置付けられる。

一方、31号埋設土器は、長径26.3㎝、短径25.7㎝とほぼ円形の形状を持つ。また、深度は22.0㎝を測る。30号と同様に余裕を持たせた掘り込みの中央に深鉢形土器（31）の胴部を正位に設置している。土器の時期は、曽利Ⅳ式期に位置付けられよう。

これらの性格については、周囲に関連するピットなどの遺構が検出されなかったことなどから屋外埋甕の可能性が強く感じられる。また、２つの土器の時期が同一であるため同時に存在していたことは間違いないであろう。

32・33号埋設土器（第121・123図）

Ｓ－15・16に位置している。土器は、いずれも正位に設置された深鉢形土器で、32号埋設土器（32）は、加曽利Ｅ式期に位置付けられ、胴部下半から底部付近が1/2程度残存している。33号埋設土器（33）においては、縄文時代中期中葉の勝坂式期に比定され、胴部のみが1/2程残存している。双方の土器に時期差があるため同時に存在していたとは考えられず33号が設置された後、偶然にも同地点に32号が設置されたとみて良いものだろう。形状は長楕円を呈し、規模は長径46.2㎝、短径27.1㎝、深度17.2㎝を測る。

34号埋設土器（第121・123図）

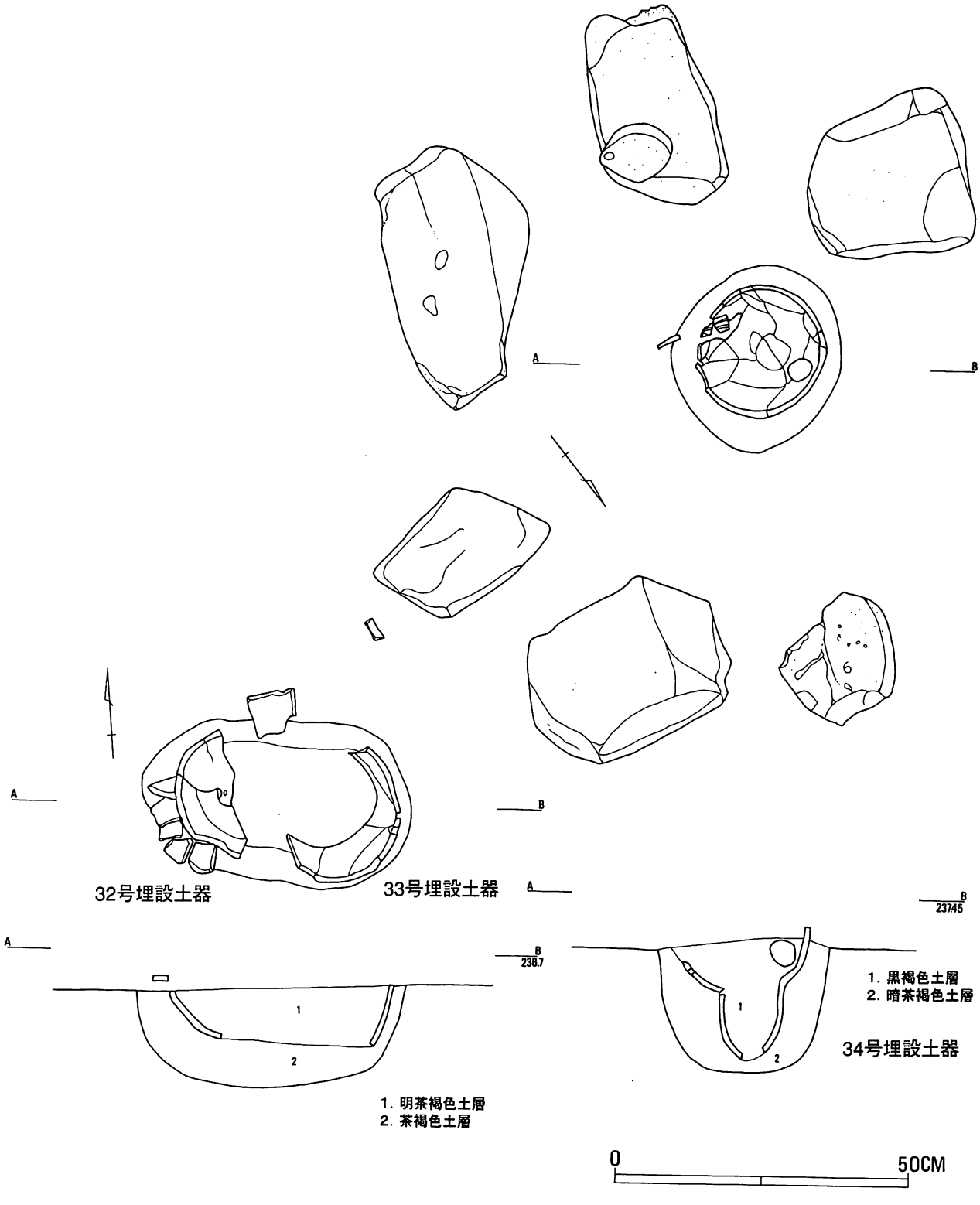
Ｎ－20区に位置している。掘り込みは、長径32.1㎝、短径29.1㎝、深度23.0㎝の規模を持つ。平面形は、ほぼ円形を呈している。掘り込みの周囲には直径20～40㎝の礫がほぼ等間隔に配されており、当埋設土器の特異性を示している。掘り込みの内部からは、拳大の礫が出土したほか何も検出されなかった。土器（34）は、深鉢形土器が正位に設置されており、底部が穿孔されている他は完形に近い。時期は、曽利Ⅳ式期に位置付けられるものである。

35号埋設土器（第122・123図）

Ｏ－18区において確認された。直径26.3㎝、12.6㎝の浅い深度を有する。掘り込みの底面には遺構最終確認面となっている礫層が露出している。土器（35）は、口径24.5㎝の深鉢形を呈する連弧文系土器で胴部下半を打ち欠いて正位の状態で掘り込み中央部に設置されていた。周囲には、大小の礫が多く遺構検出と同時に確認されているが直接の係わりを示す確証はあまりみられない。

36号埋設土器（第122・123図）

35号埋設土器と同じＯ－18区に位置している。20～30㎝前後の礫が散乱する中に長径28.0㎝、短径23.3㎝、深度16.1㎝の規模の掘り込みを持って確認された。平面形は楕円形を断面は底部が平坦な鍋底状を呈している。土器（36）は、深鉢形土器の胴部のみを正位に掘り込み中央に配している。内部の状態は、比較的良好にみら

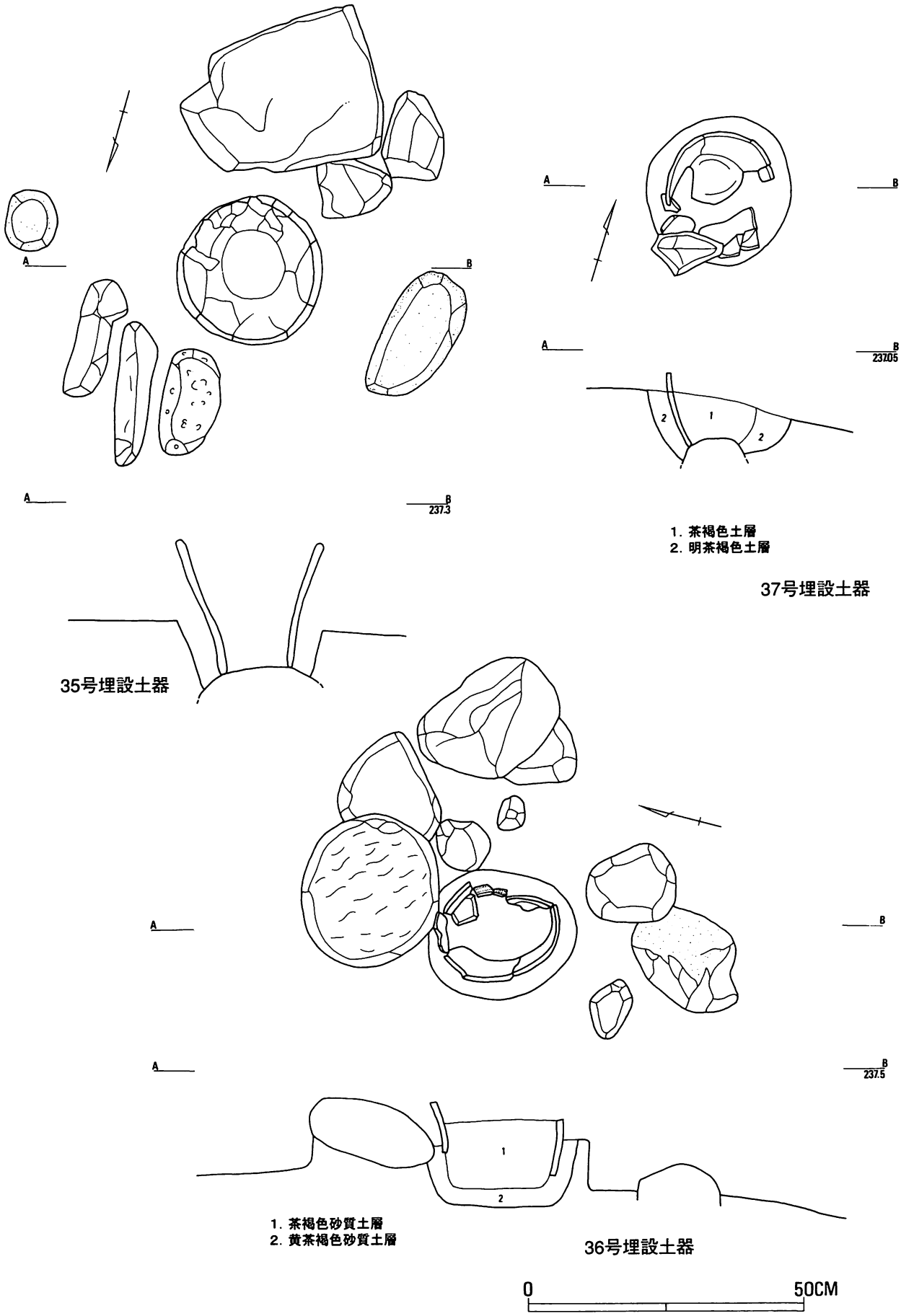


第121図　第32～34号埋設土器

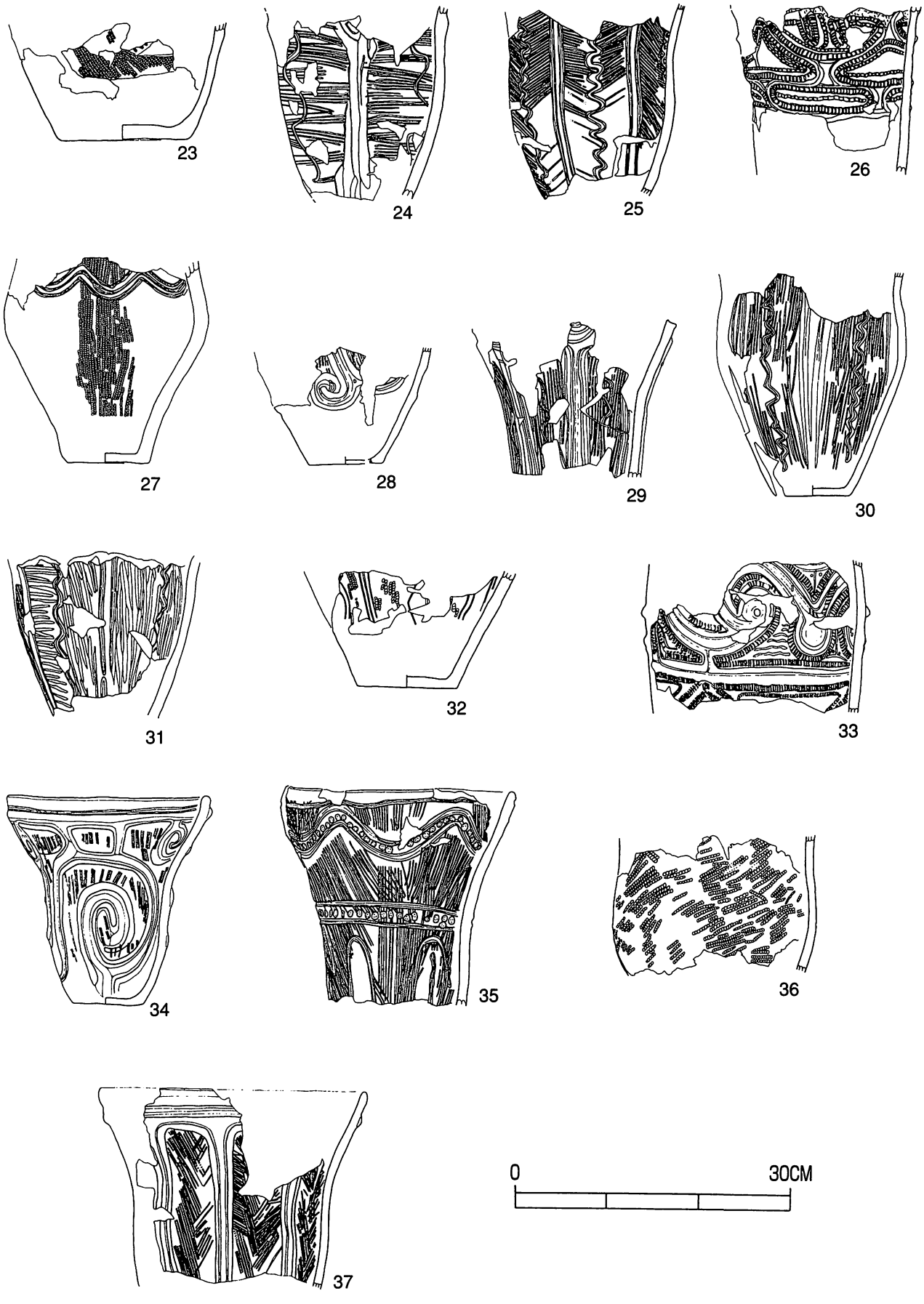
れたが埋設されていた土器に関しては、東側において破片化が著しく感じられた。なお、土器の時期は曽利Ⅱ式期と考えられるものであろう。

37号埋設土器（第122・123図）

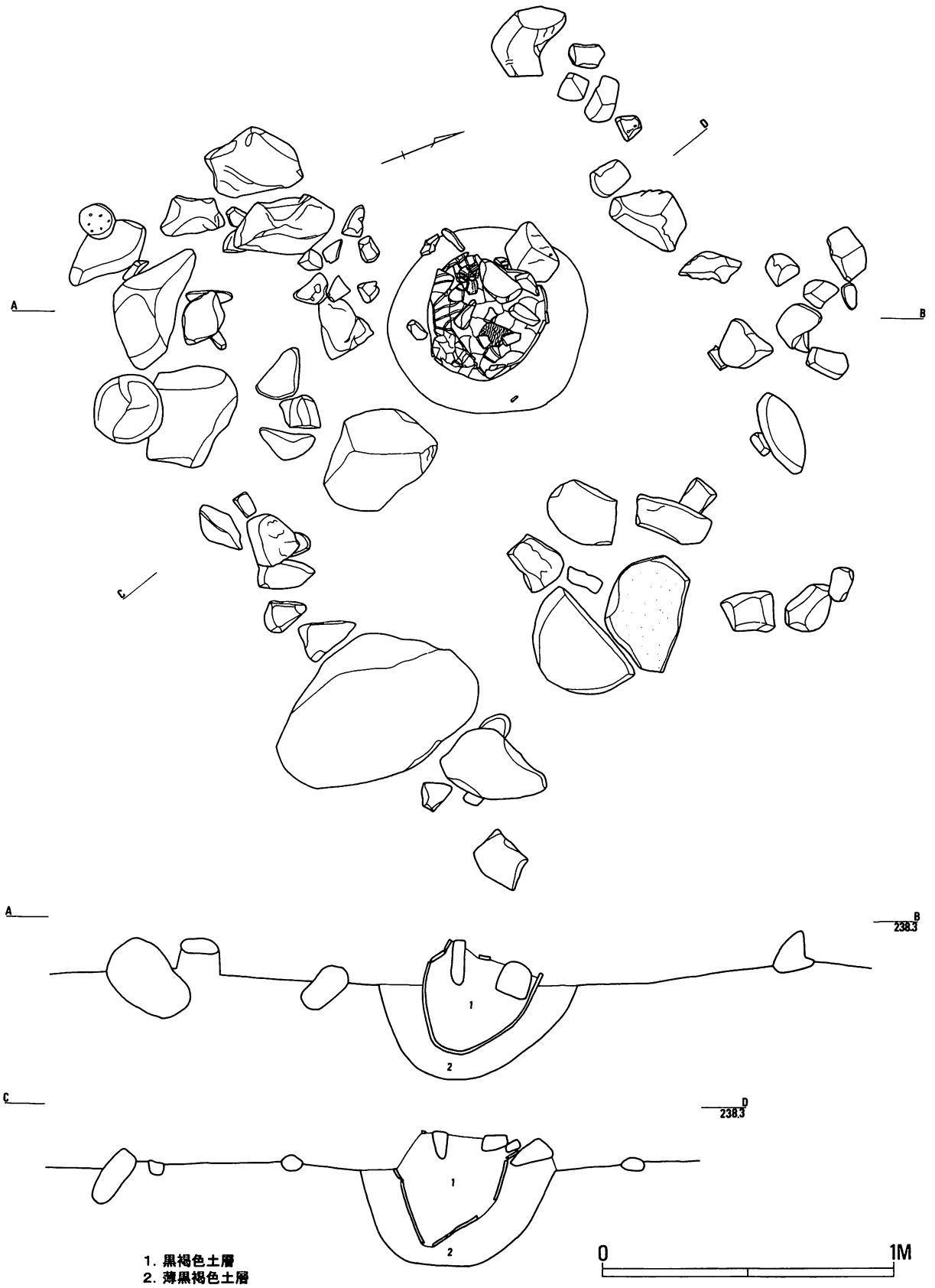
O－19・P－19に跨り確認された。円形に近い平面形を持ち、長径27.1cm、短径25.8cm、深度12.1cmの規模の掘り込みを有する。掘り込みの底面には、遺構最終確認面の礫層のものと思われるやや大振りの礫が検出され、この礫上に胴部下半を欠損させた深鉢形土器を正位に設置している。また、当遺構の検出状態はあまり良好と



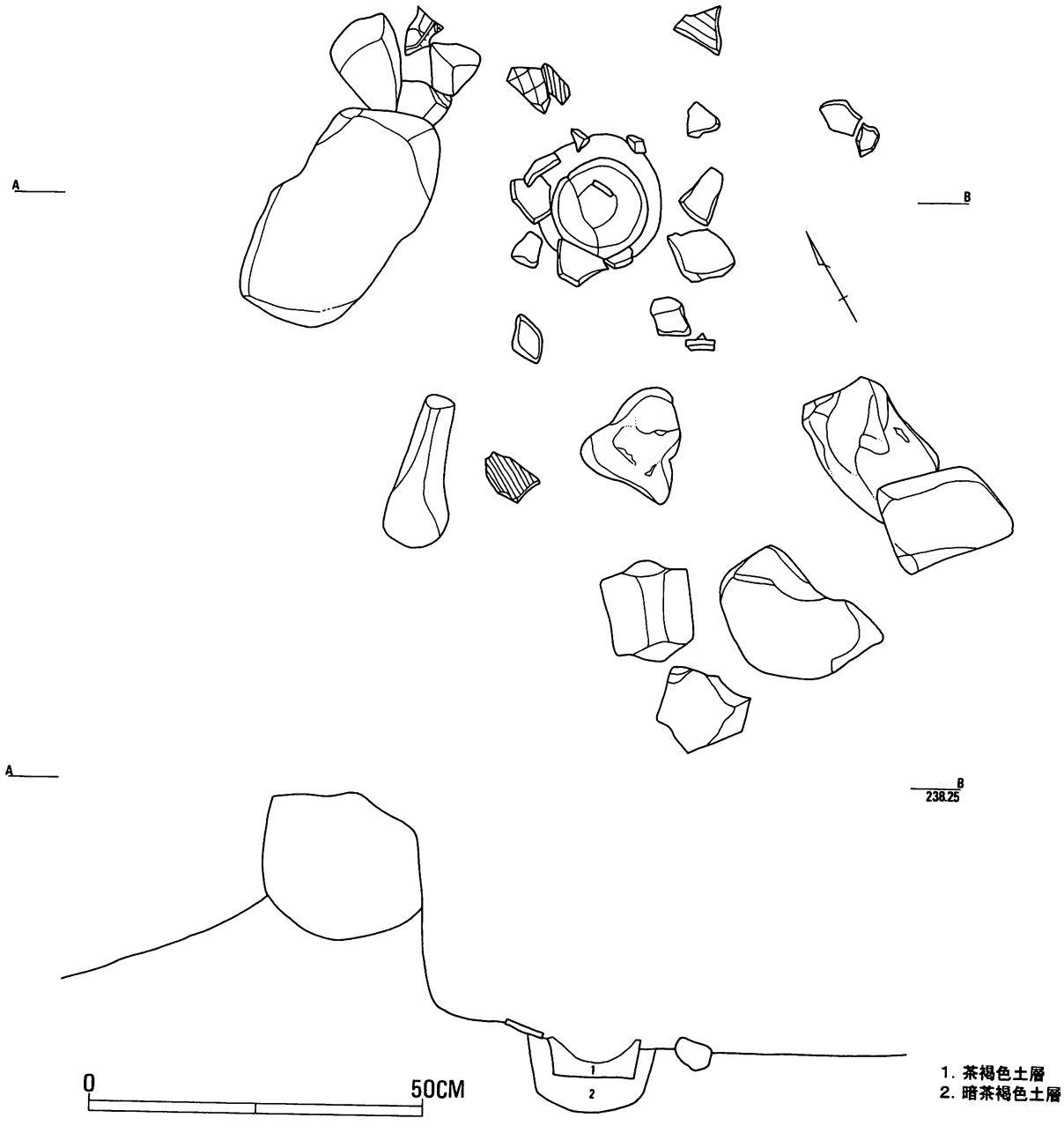
第122図　第35～37号埋設土器



第123図　第23～37号埋設土器



第124図　第38号埋設土器



第125図　第39号埋設土器

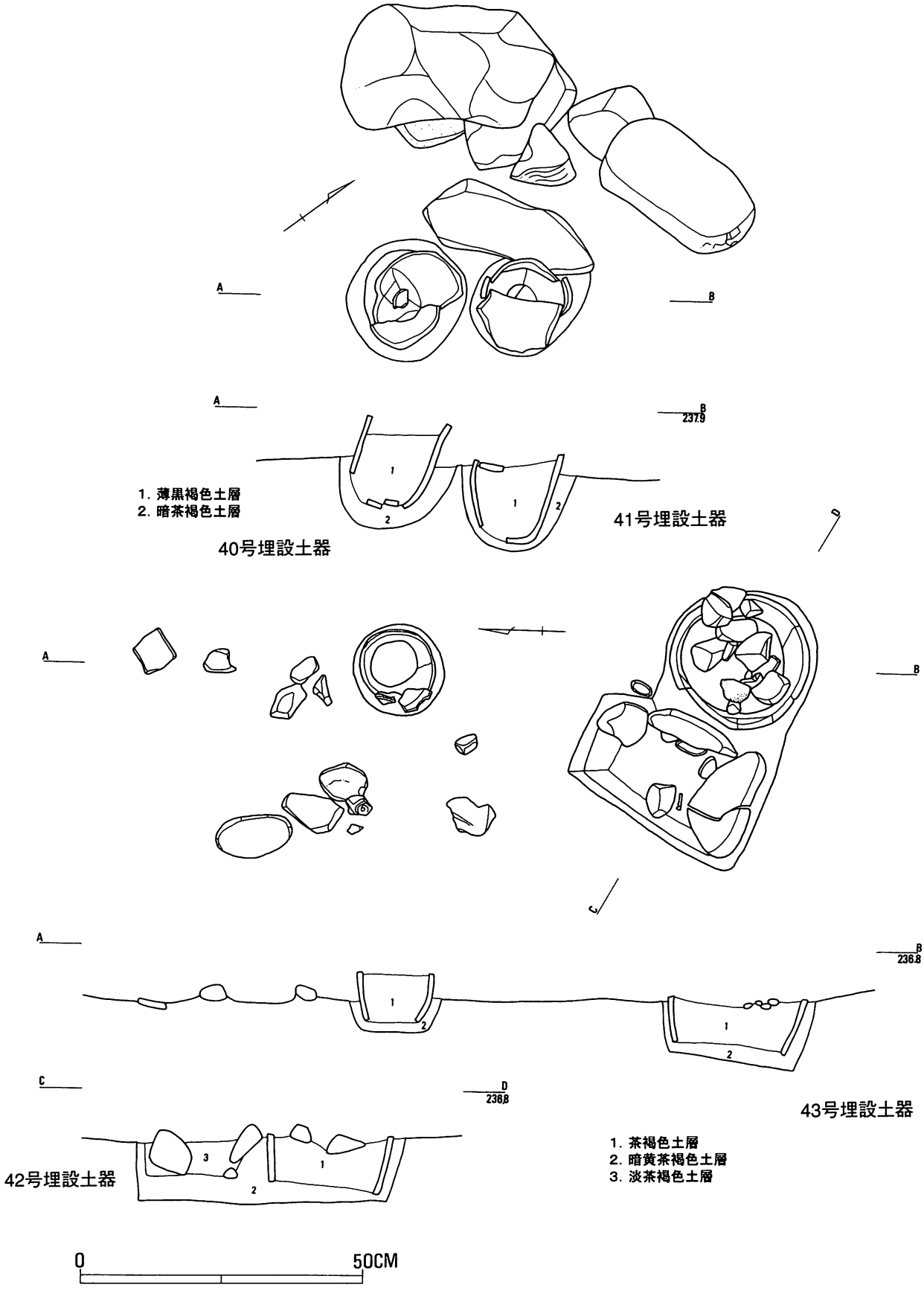
はいえず土器の破損も激しい。土器（37）の時期は、曽利Ⅳ式期に位置付けられよう。

38号埋設土器（第124・127図）

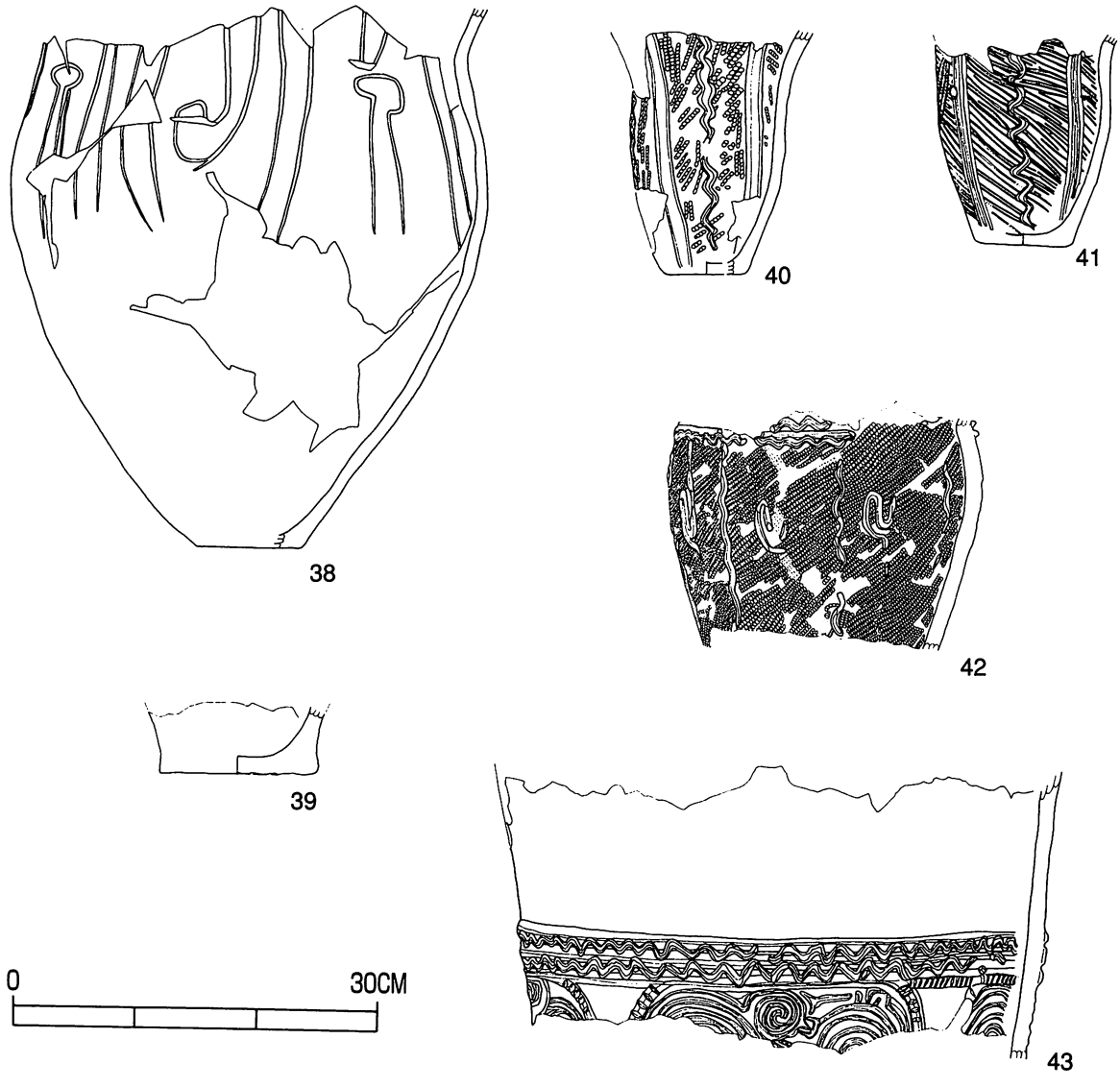
Ｋ－22区に位置している。長径70.0cm、短径68.3cm、深度46.0cmの規模を測る大型の掘り込みを持つ。平面形は正円形を呈している。土器（38）は、掘り込みの中央に正位ではあるがやや北側に傾く形で口縁部付近が欠落した状態で検出された。掘り込みの内部には、拳大ほどの礫の混入が幾つかみられる。この影響か土器も小破片化してしまっている。土器の時期については、縄文時代後期初頭の称名寺Ⅱ式期に位置付けられるものである。また、周囲に確認されている礫については、縄文時代後期以降に発生したと考えられる土石流によって流入してきたものと推測される。なお、当遺構の性格については、検出された層位などから縄文時代後期であることは間違いないであろう。

39号埋設土器（第125・127図）

Ｋ－20区に位置している。平面形はほぼ円形をしており長径22.2cm、短径19.4cm、深度12.2cmの規模を測る。



第126図　第40～43号埋設土器



第127図　第38～43埋設土器

土器（39）は、深鉢形土器の底部のみが正位に検出されたのみであった。周囲より検出された土器片などとの接合も無かったが、本来は胴部あたりまで存在していたと推測できる。土器の時期は、縄文時代中期に位置付けられるものとしか判断できない。

40・41号埋設土器（第126・127図）

G－20区において直列した状態で２基の埋設土器が検出された。北から東方にかけての近接した箇所には10～40cmの扁平に近い礫が同時に確認されている。

40号埋設土器は、長径21.8cm、短径19.8cm、深度16.5cmを測り、ほぼ正円形の平面形を持つ。掘り込みは、設置されている土器に対してやや余裕を持つように掘られている。内部の状態は、縄文後期以降の土石流の影響かやや荒れており、土器（40）は、口縁部付近と底部の一部を欠損させた深鉢形土器が北東方向に傾斜する形で検出された。時期については、加曽利Ｅ式期に位置付けられよう。

41号埋設土器は、40号埋設土器の北東側に位置した状況で検出された。また、掘り込みの上縁部には長径約30cmの礫が覆い被さる状態で確認された。長径22.0cm、短径17.8cm、深度16.7cmの規模を有し、楕円形状の平面形を持つ。掘り込みの内部は40号と同様に荒れており、設置されている土器の検出状態は必ずしも良好とはいえない状況であった。土器（41）は、曽利Ⅲ～Ⅳ式期に位置付けられる深鉢形土器が口縁部付近と底部の一部を欠損した状態で正位に設置されていた。

42・43号埋設土器（第126・127図）

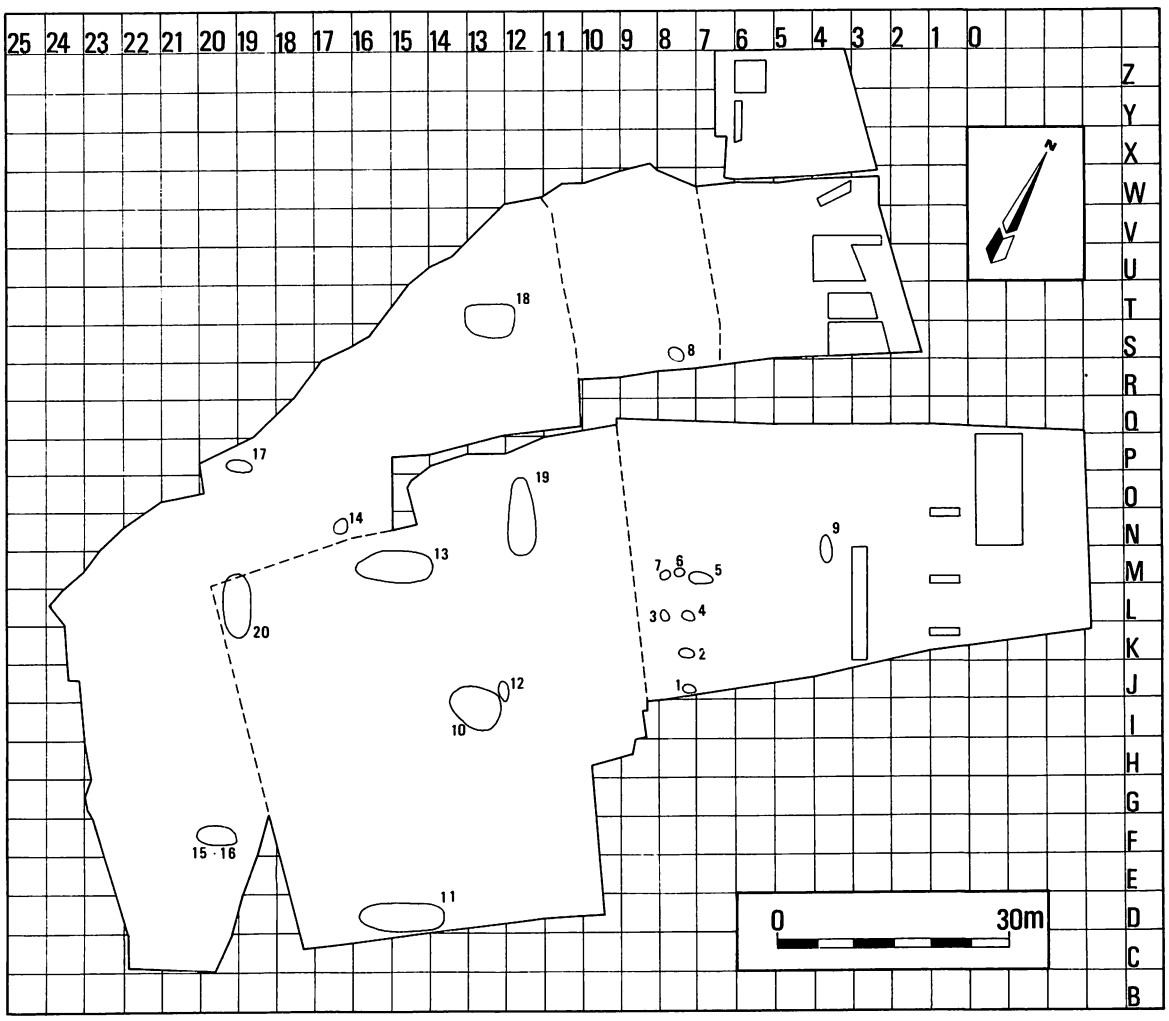
Ｔ－13区に位置している。

42号は非常に浅い位置で検出された埋設土器である。平面形はほぼ正円形を呈しており、長径16.8cm、短径15.9cm、深度10.2cmを測る。近接にした所に43号があることやわずかではあるが周囲に扁平な自然石があることから本来は43号を含めて住居跡であった可能性がある。しかし、ピットなどが確認されなかったため埋設土器とした。土器（42）は、口縁部と底部付近を欠損させた胴部のみを正位にほぼ直立させた状態で設置されている。

43号は、炉の残骸と接しており、堀り方を共有している。その規模は、長軸47.92cm、短軸26.8cm、深度12.8cmを測る。土器（43）は、曽利式期に位置付けられる深鉢形土器の頸部付近のみを正位に設置している。

第6節　配　　石

総数で20基が確認された。その分布状況はほぼ全域に渡っており、構築時期も縄文時代中期後半から後期と捉えられる。ここでは明確に配石と判断されたもののみを紹介することとする。



第128図　配石配置図

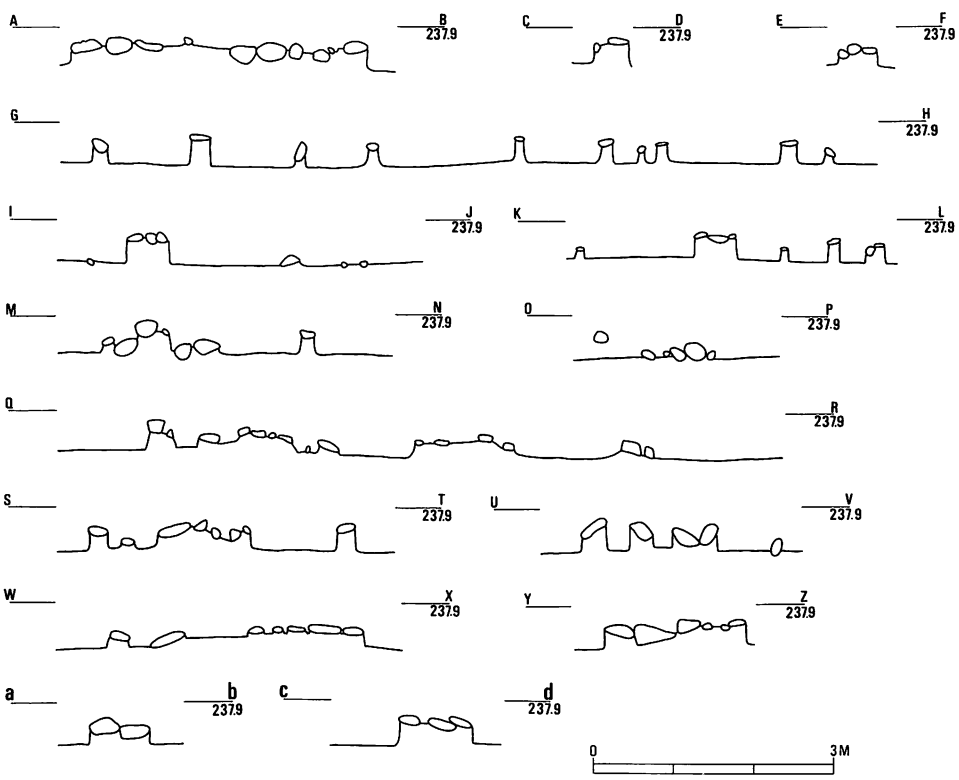
第１～７号配石（第129～131図）

Ｊ・Ｋ・Ｌ・Ｍ－８、Ｌ・Ｍ－７、８区を中心とした約10×20ｍの範囲の同一レベル上に数箇所の礫の集中がみられた。

１号配石

Ｊ－１区に位置している。エレベーションＡ－Ｂ・Ｃ－Ｄ・Ｅ－Ｆラインの範囲の中に直線状に礫が配置さ

第129図　第1～7号配石



第130図　第１～７号配石

れている。その長さは3.9mにおよぶ。礫は、それぞれ長軸となる部分を連結させるように意識して配置されている。遺物の出土はない。

２号配石

Ｋ－８区より検出された。エレベーションＩ－Ｊ・Ｋ－Ｌラインに示されるもので4.0×3.8mの範囲に礫が粗に配置されている。礫の大きさには、10～60cmとばらつきがみられる。特筆される点として範囲の中程に約１mの正円形に設置された礫があげられよう。この中心部からは版築の痕跡や炭化・焼土粒子の存在は見当たらなかった。また、土坑状の堀方も検出されなかった。遺物の出土はない。

３号配石

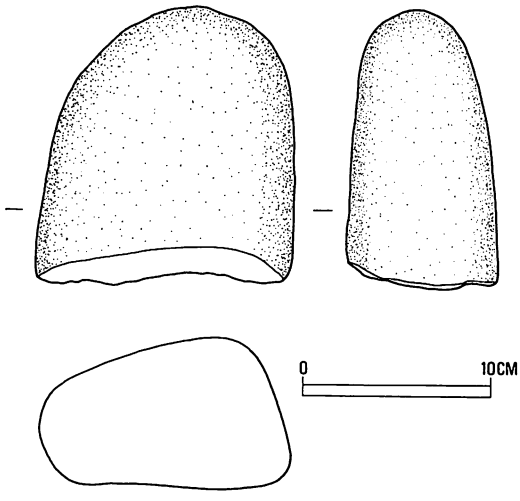
Ｌ－８区より確認されたものである。Ｍ－Ｎ・Ｏ－Ｐのエレベーションラインに示される1.5×1.8mの範囲より検出された。拳大から60cmの礫をやや粗に設置している。２本のエレベーションラインにトレースされる直線が本遺構の基本形となっているようである。遺物の出土はない。

４号配石

Ｌ－８区において検出された。図中のエレベーションＱ－Ｒ・Ｓ－Ｔ・Ｕ－Ｖラインに示される位置に存在が認められた。その範囲はおおよそ3.5×2.5mである。拳大から30cmの礫を使用していおり、近接している他の配石と比較するとやや小振りの礫を使用している感が拭えない。また、配置状況に規則性は認められない。遺物は、中央部分より磨石が１点出土している。

５号配石

Ｍ－７・Ｌ－７区に跨って位置している。１－４号配石に近接したＱ－Ｒ・Ｗ－Ｘのエレベーションラインで表されている約5.0×4.5mの範囲に位置している。Ｗ－Ｘラインに直線がみられるがそれ以外に規則性は認め



第131図　第４号配石出土遺物

られない。礫は、10～50cmの大きさのものが使用されている。遺物の出土はない。

６号配石

Ｍ－８区に位置している。Ｙ－Ｚ・ａ－ｂのエレベーションラインに示されている。1.8×0.7ｍの範囲に基本的に50～70cmの礫を使い短い直線を造っている。なお、遺物の出土はない。

７号配石

Ｍ－８区において検出された。非常に小型の形態を示すタイプである。ｃ－ｄのエレベーションラインに表される1.5×1.0ｍの範囲に検出された。30～40cmの自然石を７個使用して構築されている。本来は、近接する１－５号配石と接続いていた可能性もある。遺物の出土はない。

８号配石（第132図）

Ｓ・Ｒ－８区に位置している小型の配石である。長軸232.5cm、短軸132.5cmの規模を有し、高低差は約10cmを測る。平面形は扇形を呈している。構築状況は拳大から直径約40cmまでの扁平な礫を中心に弧の中心から端部に向かい開放させながら組み上げている。また、周囲には本配石との関わりは判断できないが大小の扁平な礫の散らばりも確認できる。遺物の出土はない。

９号配石（第133・134図）

Ｎ－４区とＭ－４区に跨って位置しており、長軸約３ｍ、短軸約１ｍの範囲に25cm～拳大以下の礫が平面的に集中していることが確認された。礫群は３つの小グループにより構成されていると現在のところ解釈しているがそれぞれ単独の可能性も捨てきれない。また近接した位置に集石土坑も検出されている。北側にあるものは長さ80cmの間に15～20cmの礫を４個２列に配し、隙間に小礫を充填させてある。中央には長さ110cmの間に10～20cmの礫を直線にやや間隔を開けて配置している。また、集石方向には10cm程の小礫が粗に散っている。南方にあるまとまりは直線のような規則性を持たず約10石の10～15cmの礫が隙間なく設置されている。それぞれのまとまりとの間隔は40～50cmで高低差はほとんどない。遺物は、土器が３点（1～3）出土している。時期はいずれも縄文時代中期後半曽利式期に位置付けられるものである。

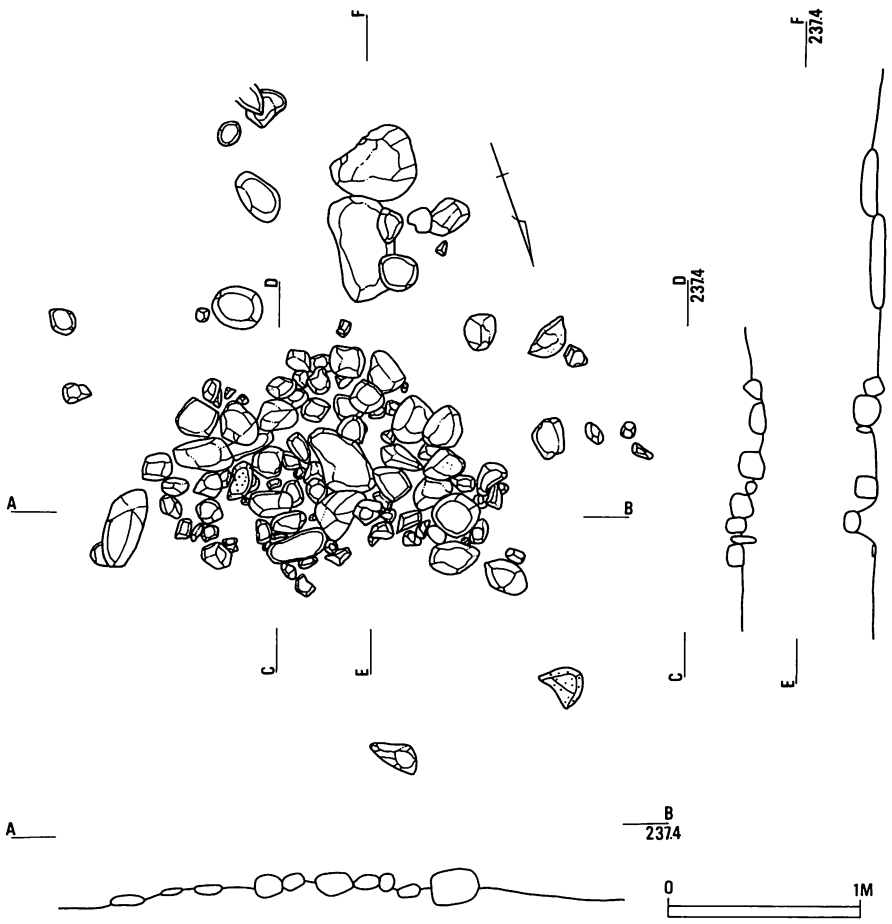
10号配石（第135図）

Ｉ－13・14、Ｊ－14区において検出された。約４×４ｍの中に４つのまとまりがみられるが非常に近接した位置にあるため１基の配石として報告することとする。北西側に位置するものは１×1.5ｍの範囲にまばらに拳大から20cm程の礫が存在している。高低差は約15cmを測る。中央やや南寄りに位置しているものは、１×1.5ｍの範囲に20～30cmの礫を1.1ｍの直線に配しその周囲に規則性なく５～25cmの礫を設置している。なお、高低差はほとんど感じられない。続いて南東方向にあるまとまりは、0.6×1.2ｍの範囲に15～25cmの礫が逆Ｌ字状に置かれている。また、付近にもまばらに礫が散っている。高低差はない。そのほか南西方向には８個程の礫がやや粗に高低差なく分布している。出土遺物は、図示し得ない曽利式期深鉢形土器の小破片が２点出土している。

この配石が構築された時期については周囲の状況や土坑の存在、出土遺物などから縄文時代中期後半から後期中葉以降に帰属するものと若干の幅を持たせておきたい。

11号配石（第136・137図）

Ｄ－14・15・16区において検出された。約５×２ｍの範囲の中に拳大から30cm程の扁平な自然石をやや粗に



第132図　第８号配石

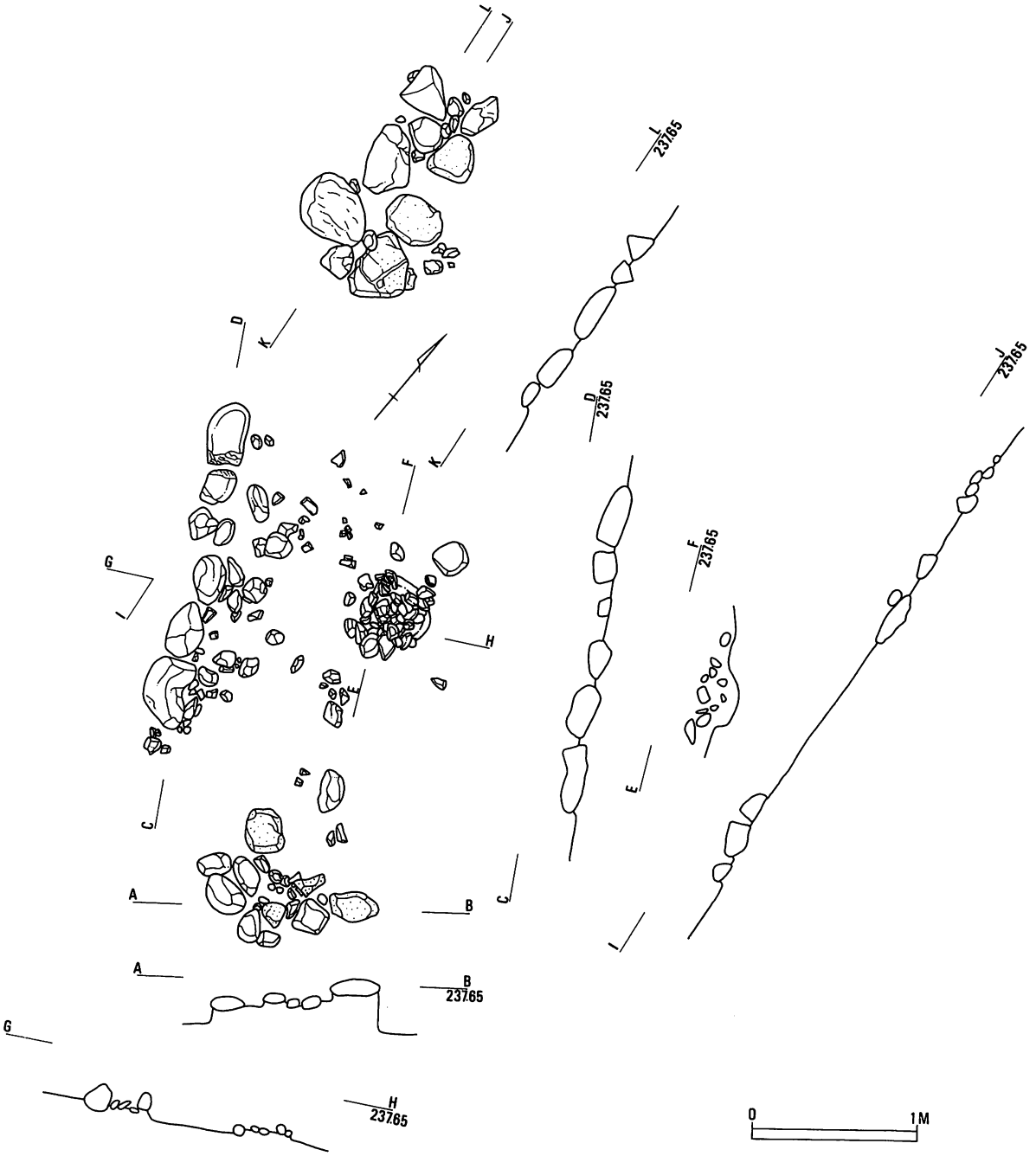
配しており、所々に溶岩の分布もみられる。礫のまとまりは２箇所に分かれるようである。また、部分的には直線もみられるが規則性はあまり感じられない。高低差はほとんどなく平面的である。出土土器は縄文時代後期のものである。第137図１～４は堀之内１式期、５は堀之内２式期に位置付けられる。また、６・７についても堀之内期式に比定されるものであろう。さらに、８・９は加曽利Ｂ１式期に帰属されるものである。

12号配石（第138図）

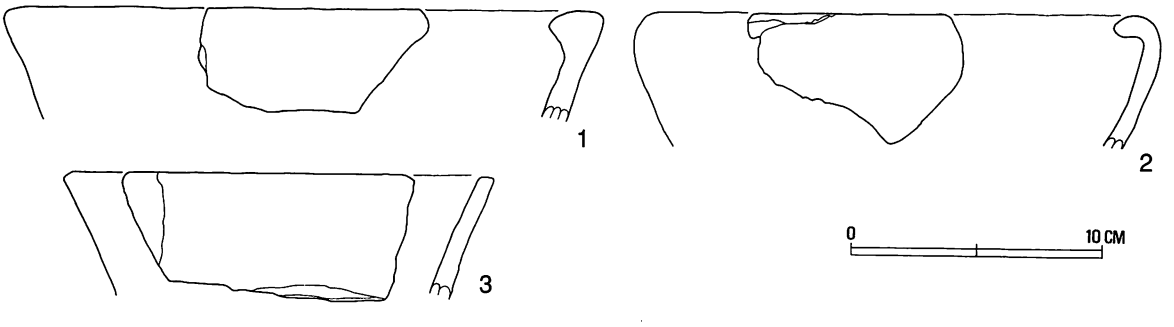
Ｉ－12・Ｊ－12区に位置している小型の配石である。1.5×1.6mの範囲に直径15～40cmの自然石を約20個程用いて構築されている。その形状は、礫を組み合わせた約１mの本体部分とその南側および南東側に延びる短い２本の直線を付帯さた部分とに分かれている。また、本体部分は縁にあたる部分は礫を立て、中央部は扁平な礫を寝かしていたと想定される。高低差は約15cmを測り、ほぼ平面的といって良いものである。図示し得る遺物は検出されてはいないが縄文時代中期後半代以降にその構築時期は求められよう。

13号配石（第139～141図）

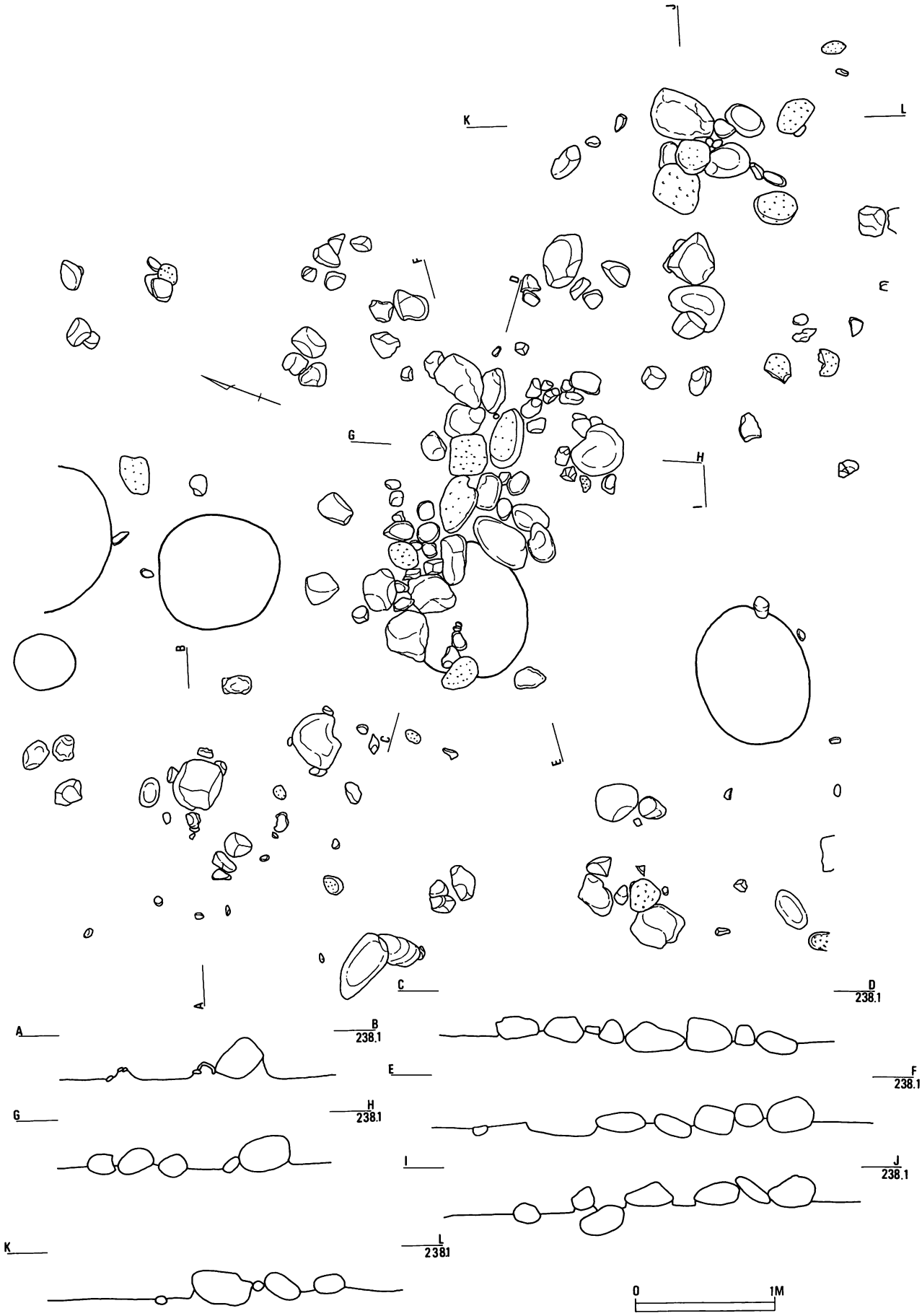
遺跡地のほぼ中心部となるＭ－15・16区に位置している。規模は、約４×４mの隅丸方形状を呈している。加えて東方に約3.5mと南東方向に約2.5mの直線に延びる石列を有している。この他、本体部分の南側には直径約50.0cm、深度10.0cmの石囲いのピットが１基設けられている。内部からは焼土・炭化粒子などは検出されていない。隅丸方形状の中央部には、礫の配置されていない空間（2.0×1.2m）があるが、版築やピットなどは検出されなかった。当配石の構築に当たっては、現地で調達が容易な拳大から約１mの自然石を利用しており、割石などの加工した礫の使用は認められない。また、礫は基本的に平面的に組み合わされている。なお、遺物の出土はない。



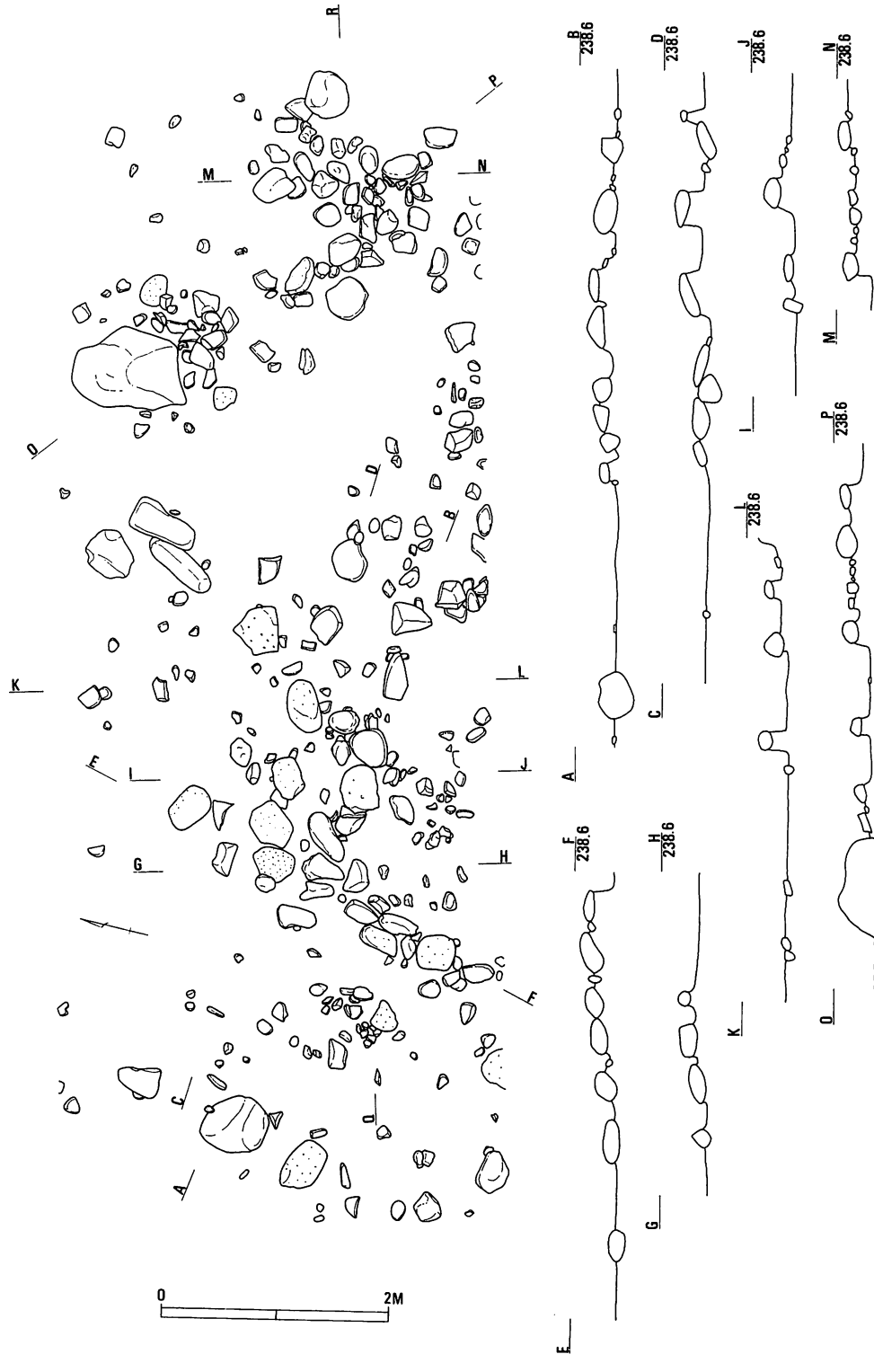
第133図　第９号配石



第134図　第９号配石出土遺物

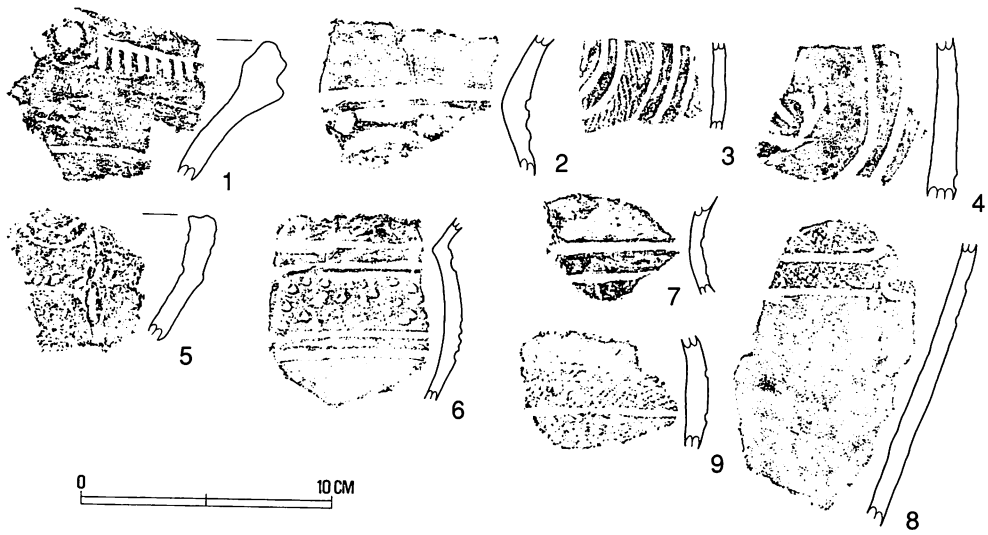


第135図　第10号配石



第136図　第11号配石

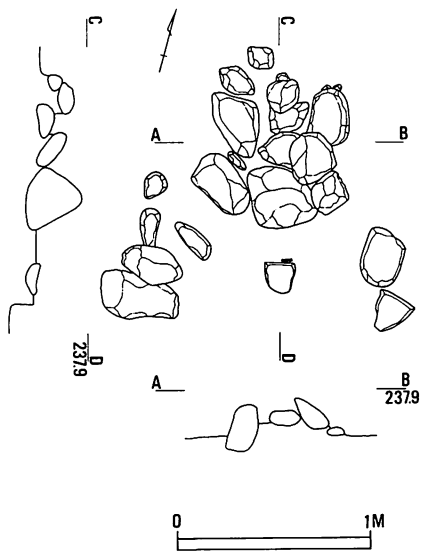
さらに特筆されるべき点として、北側に接続されるような形状で配石墓が３基検出されたことが挙げられよう。その規模はそれぞれ、１号配石墓：長径163cm、短径109cm、深度40cm、２号配石墓：長径156cm、短径83cm、深度27cm、３号配石墓：長径186cm、短径103cm、深度33cmを測り、主軸方向こそ違うものの同規模・同形状ということが分かる。礫の組み合わせ方法は、角と辺の中点に直方体に近い形状の自然石を立て、その間をやはり扁平な加工を施していない自然石を二枚重ねしたもので充当している。床面には、敷石や版築の痕跡は認められない。内部からは、後世に混入したと推測できる礫の混入がみられた。遺物の出土は１号配石墓では加曽



第137図　第11号配石出土遺物

利Ｂ１式期の深鉢形土器破片（１）、２号配石墓からは曽利式期とみられる深鉢形土器（２）と縄文時代後期の土偶脚部片（３）が検出された。なお、土偶脚部片については配石墓に伴う遺物とは考えにくく配石に伴うものと判断されよう。また、３号配石墓からは土器１点（４）と磨石１点（５）が出土している。土器については加曽利Ｂ２式期に位置付けられるものである。

配石と配石墓の関係については現状では詳しくは判断できない。構築時期については、出土遺物、層位、形態などから判断して縄文時代後期堀之内２式期終末から加曽利Ｂ１式期以降としておきたい。



第138図　第12号配石

14号配石（第142・143図）

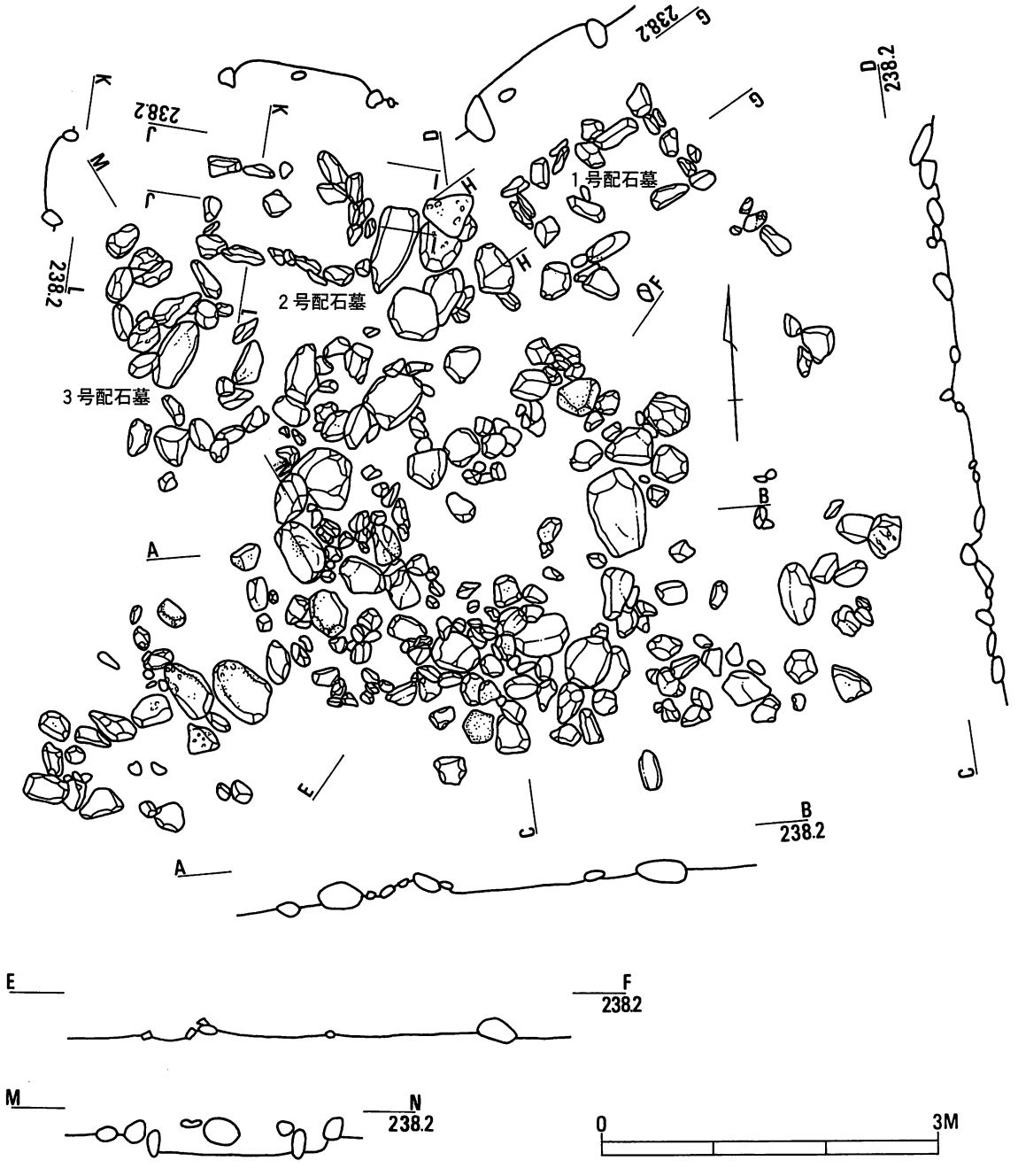
Ｎ－16区の縄文時代後期の確認面より検出された。今回、調査された配石の中でも特にはっきりとしたもののひとつである。その造りは非常に簡素であり、約１ｍの大型自然石を設置し、その周囲に拳大の円礫を2/3程巡らせているのみである。本来この拳大の礫は、全周していたものと思われるが土石流の影響から一部で欠損している。近接した位置からは石皿（１）、石皿未製品（２）、磨石（３）が検出されている。さらに、周囲には縄文時代後期の住居や扁平な自然石、石皿などもみられる。しかし、本遺構との関わりは判断しにくい。

15号配石（第144図）

Ｆ－20区に位置している。2.0×1.6ｍの範囲に10～40cmの礫を配置している。また、本遺構の下部からは深度約20cmを測る土坑が検出された。礫の配置はこの土坑の縁辺部付近に比較的大きい40cm程の礫を置き中心部分に10～20cmの小型の礫が配されている。礫の高低差はほとんどないが、２石ほど立った状態のまま検出されている。

16号配石（第144図）

Ｆ－20区、15号配石に約40cmと非常に近接した位置より検出された。双方の主軸方位もほとんど同一方向を向く。また、下部に浅い土坑を有する点など共通点が多い。礫の配置は、長楕円形にあり、拳大から30cmほどの自然石が使用されている。土坑は、深さ約25cmの鍋底形状を呈している。坑内からは焼土・炭化粒子などは



第139図　第13号配石

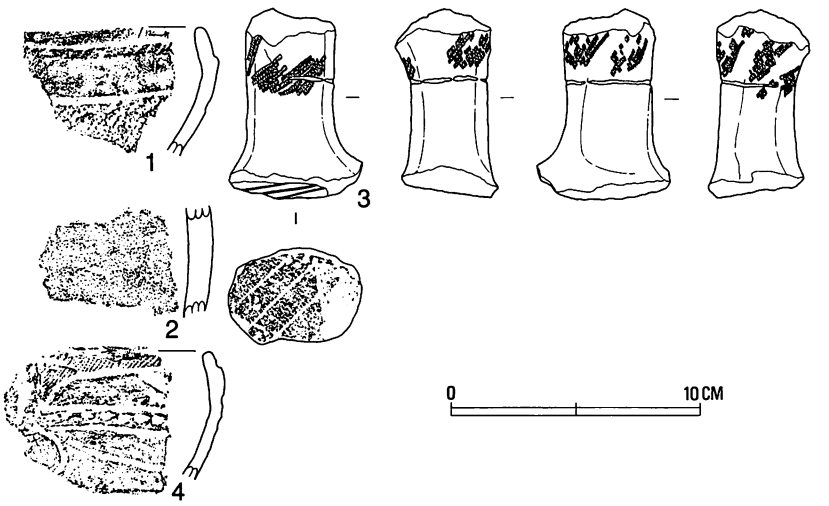
検出されていない。15号配石と同様に遺物の出土はみなかったが層位などの検討から本遺構も縄文時代中期後半代の構築と推される。

17号配石（第145～147図）

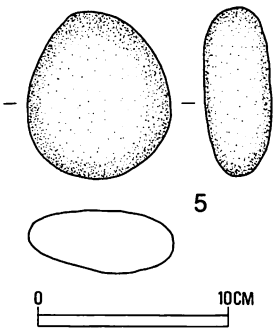
Ｐ－19・20区において検出された配石である。３×2.4mの範囲に拳大から40cm程の礫を集中させたものであり、配石に伴う埋設土器が１基確認されている。

礫の配置ははっきりしていないがエレベーションＡ－Ｂ・Ｂ－Ｃ・Ｆ－Ｇなどの直線の組み合わせが基本となっているようである。直線の組み合わせでできた中心の空間（約70×30cm）では、版築や焼土・炭化粒子の散らばりなどは確認されなかった。

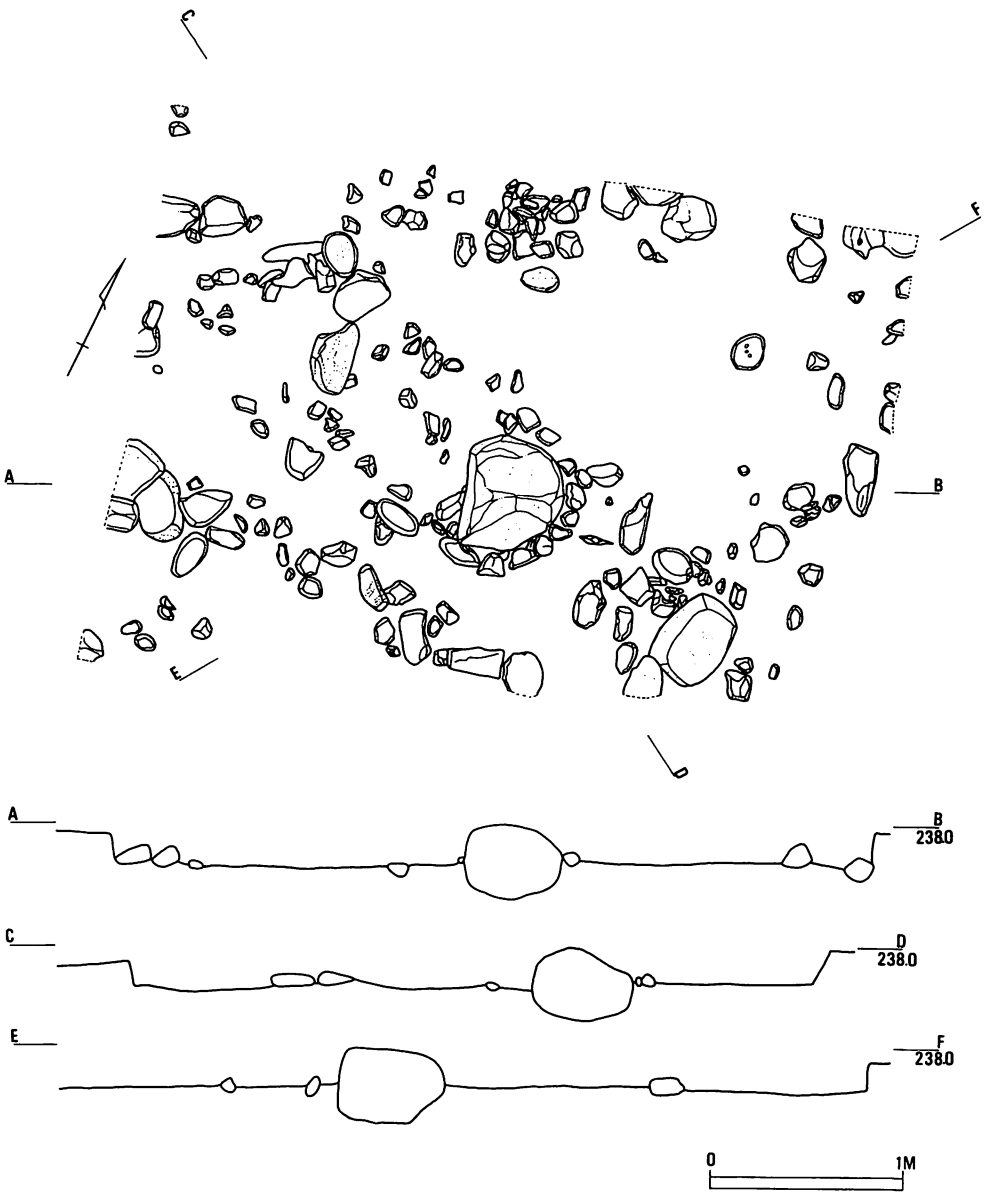
埋設土器は、Ｆ－Ｇライン上の位置から検出された。周囲の礫の配置は埋甕を意識しているのか他所と比べ



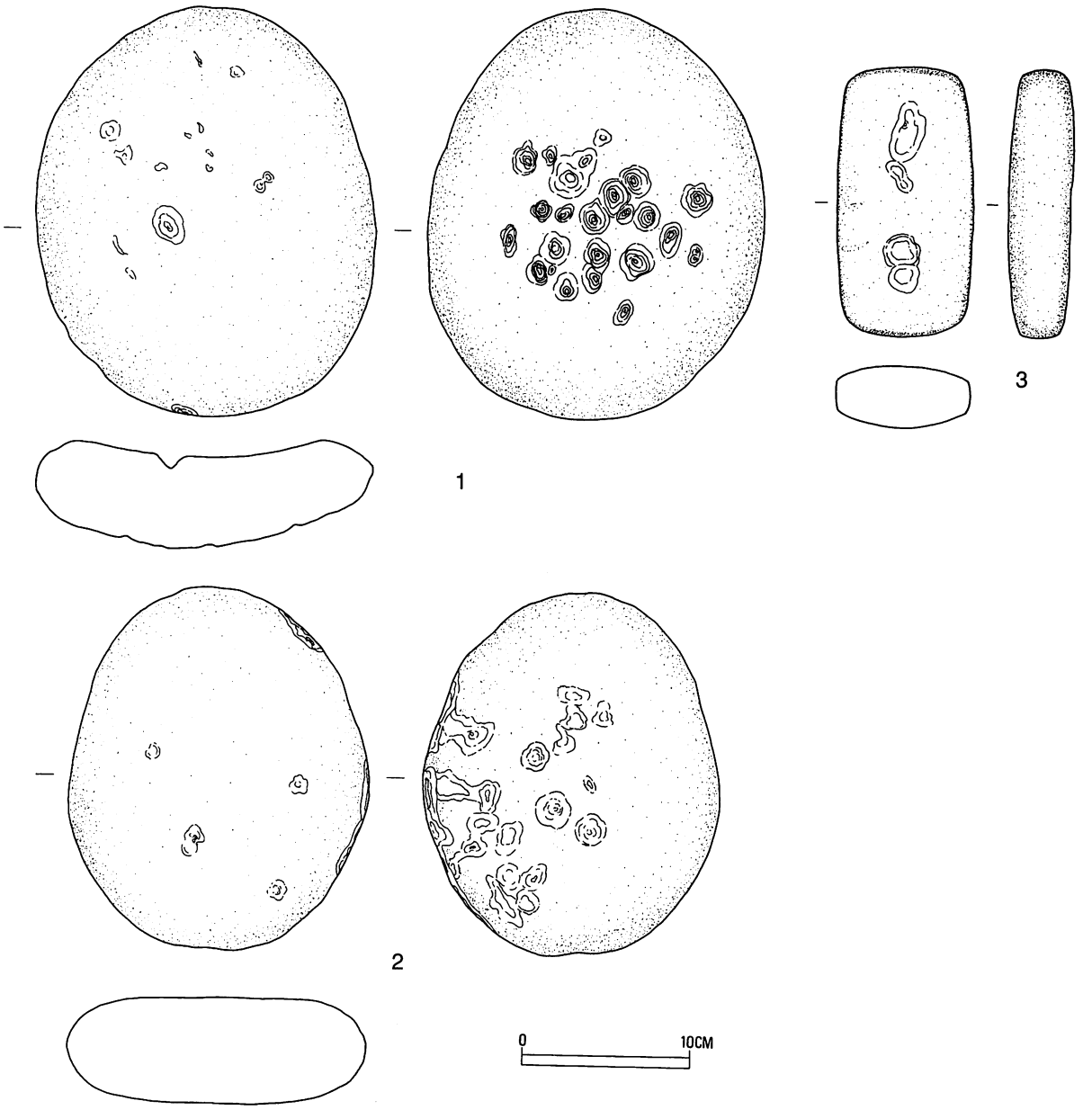
第140図　第１～３号配石墓出土遺物１



第141図
第３号配石墓出土遺物



第142図　第14号配石



第143図　第14号配石出土遺物

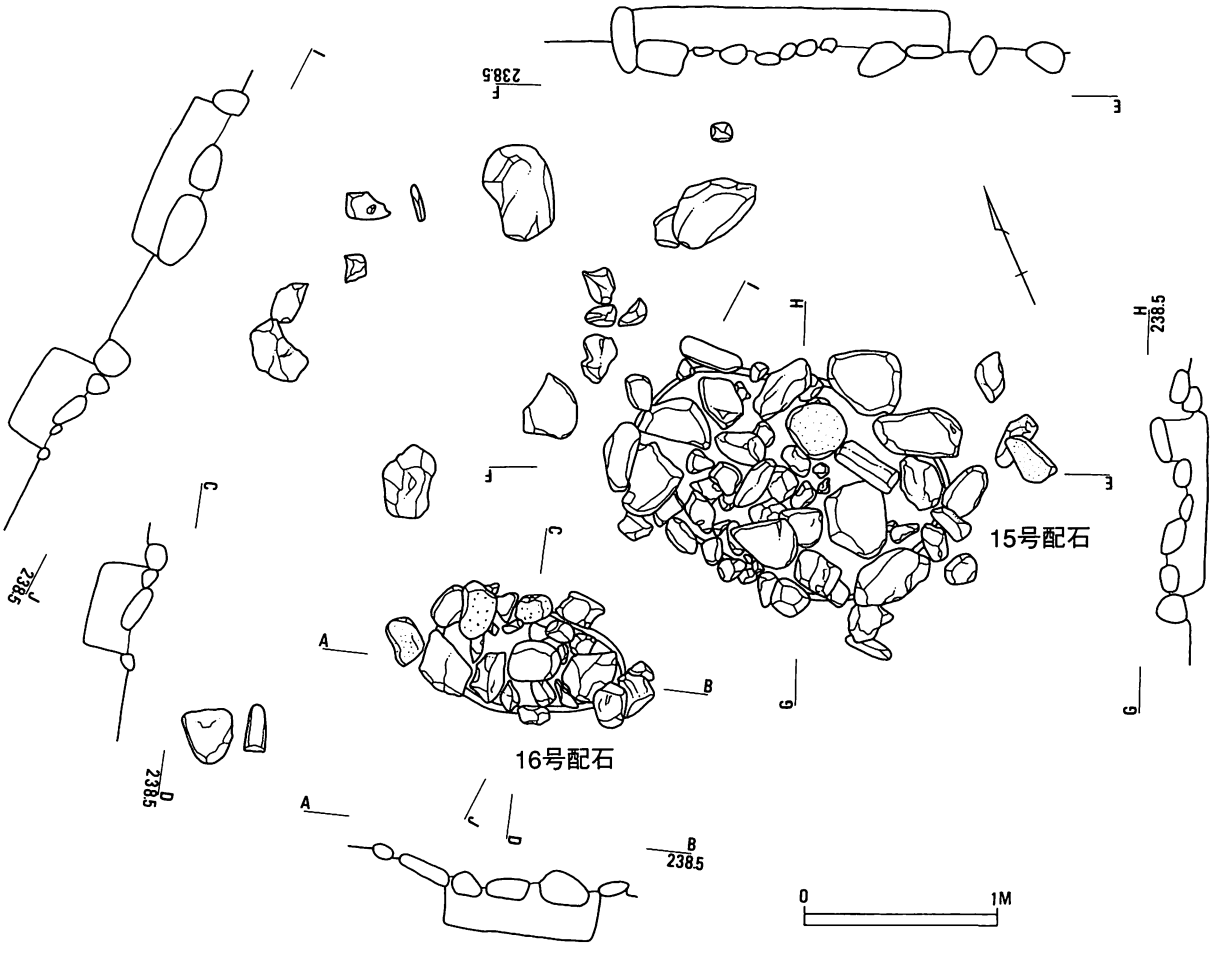
て密ではない。綾杉状に条線が施される曽利Ⅳ式期に位置付けられる直径約22cmの深鉢型土器（1）の口唇部と底部を打ち欠き正位の状態で設置されていた。なお、堀り方は土器に沿った形に掘り込まれている。

18号配石（第148図）

S－12・13・14区、T－12・13・14区と広域に渡り検出された。その範囲は6×7mを測る。使用されている礫は、約1mの大型から拳大まであり密度は非常に薄い。高低差はほとんどなく平面的である。なお、範囲内から埋設土器が検出されているが直接の関係は判断できない。

19号配石（第149図）

N－12・O－12区に位置しており、隣接した位置に敷石住居の入り口部（2号住居跡）のみが検出されている。礫の集中は約3.5×6.0mの範囲にみられる。本体と推される部分は3.0×2.3mの範囲に30～50cmの偏平な自然石を中心に中央に空間が開くように構築されている。その中央の空間には版築などはない。その他の附属される部分は拳大から50cm程の礫が不規則に配置されている。2号住居跡と同レベルにあることなどから現段階



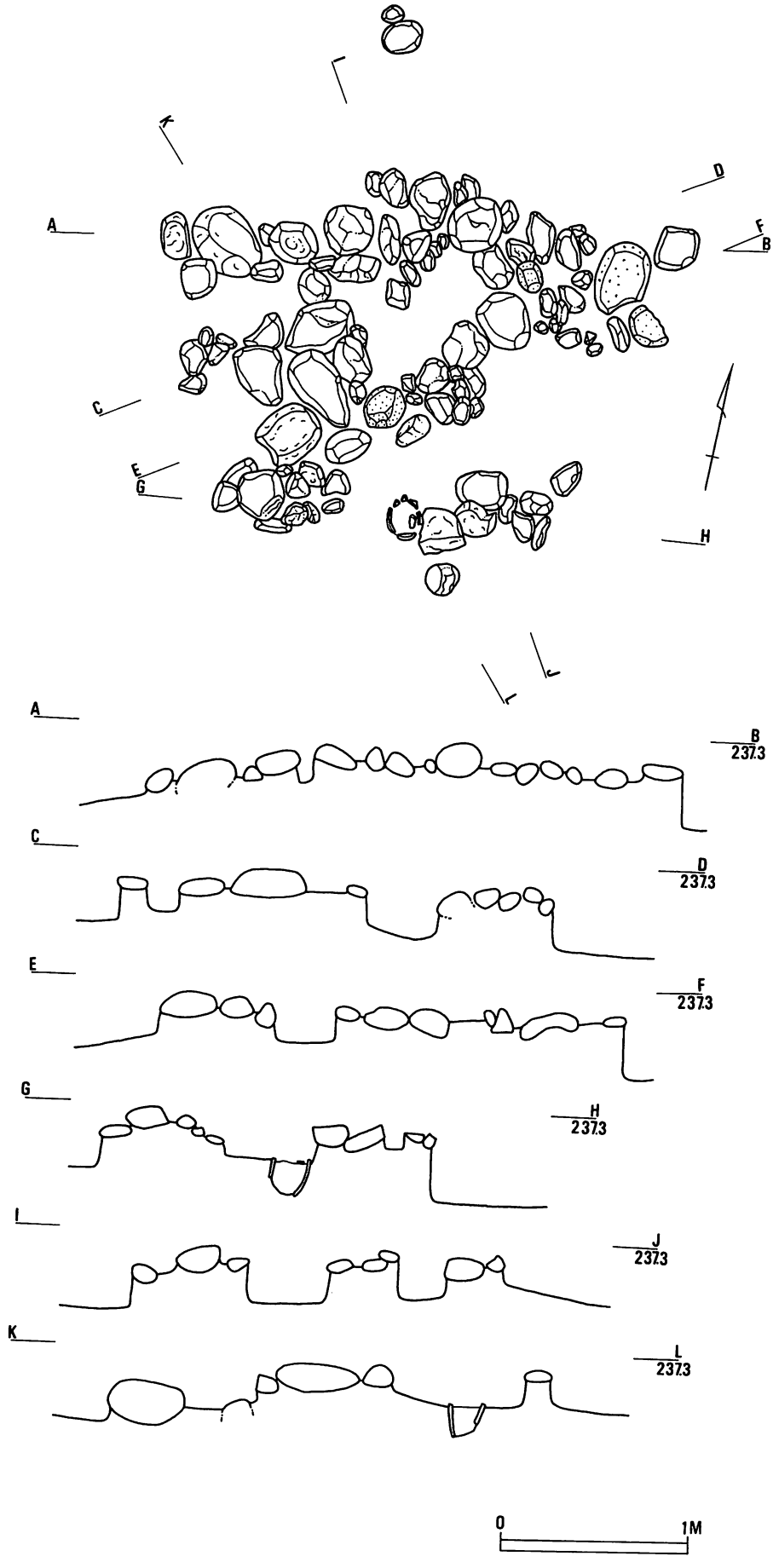
第144図　第15・16号配石

での本配石の構築時期は縄文時代中期後半代と考えられる。

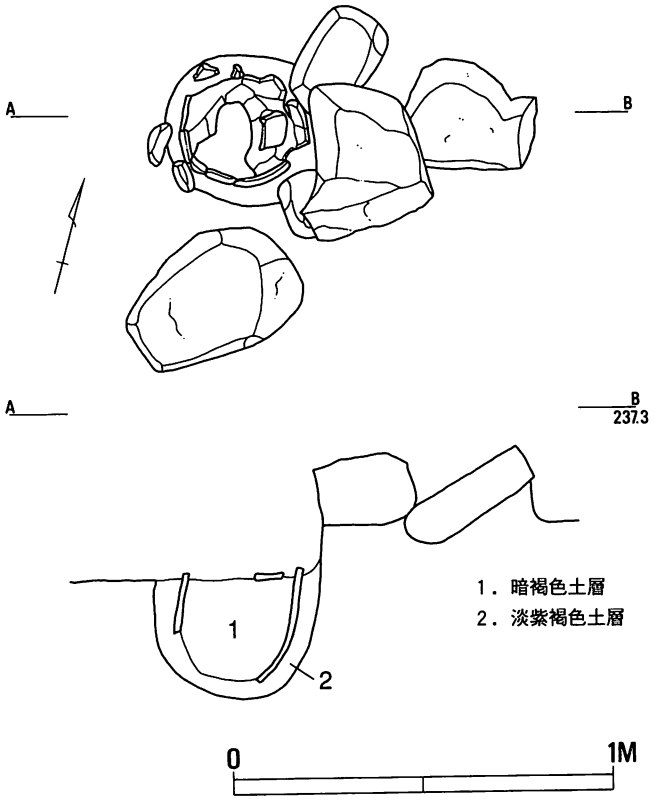
20号配石（第150～152図）

平成７年度と８年度の調査区境付近のＬ・Ｍ・Ｎ－19・20区に位置している。その範囲は、約５×2.5mと広い。遺構最終確認面である自然礫層のやや上方より検出された。検出時の土層などの状態から縄文時代後期以降の段丘上面よりの土石流でかなり破損していることが判明した。このためか、15～20cmの選別された扁平な自然石が規則性を持って敷設されている箇所が一部で検出されたがその全容は明らかにはできなかった。また、図中に示したラインが弧状になることから住居の可能性もあるが確証がないので配石扱いとした。構築された時期は検出された層位が後期と明らかに違うことから縄文時代中期後半代と考えられる。

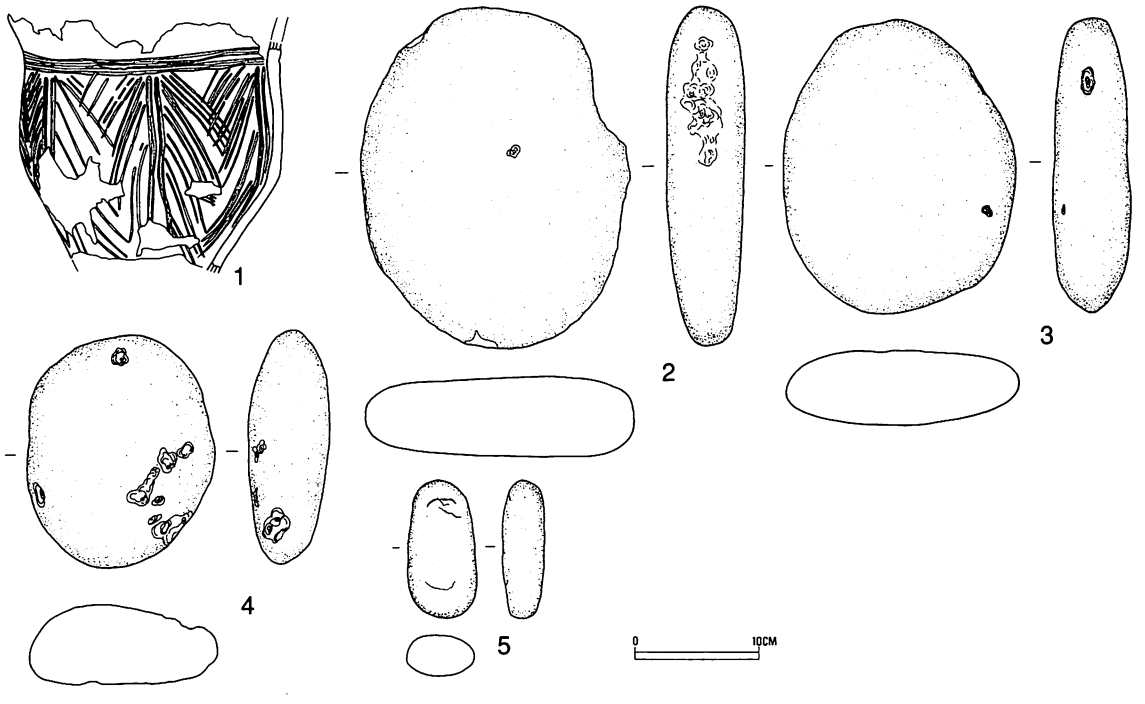
出土遺物には土器と石器・土製品がみられる。１・２－曽利Ⅳ式、３－加曽利Ｅ式、４の橋状把手は加曽利Ｅ４式、５・６－堀之内２式、７～12－加曽利Ｂ１式、13～15は加曽利Ｂ２式に帰属するものである。この中で注目に値するのが12である。本資料は、器形から復元するに南東北地方（福島県地方）から新潟県方面にかけての加曽利Ｂ式期並行期に深く影響を受けたであろう器形をしている。16・17は粗製土器である。16は堀之内２式期から加曽利Ｂ１式期に、17は堀之内２式期新段階に位置付けられる。18については詳細な時期区分は難しいが縦方向に条線が入る縄文時代後期の深鉢形土器であろう。また、19は縄文時代晩期に比定されよう。20・21は深鉢形土器の網代底である。続いて22は土錘である。縦方向に刻みを持ち5.00×2.85cmの大きさを持つ。重量は25.6ｇを測る。23・24は打製石斧である。25は石皿の未製品、26は石棒である。



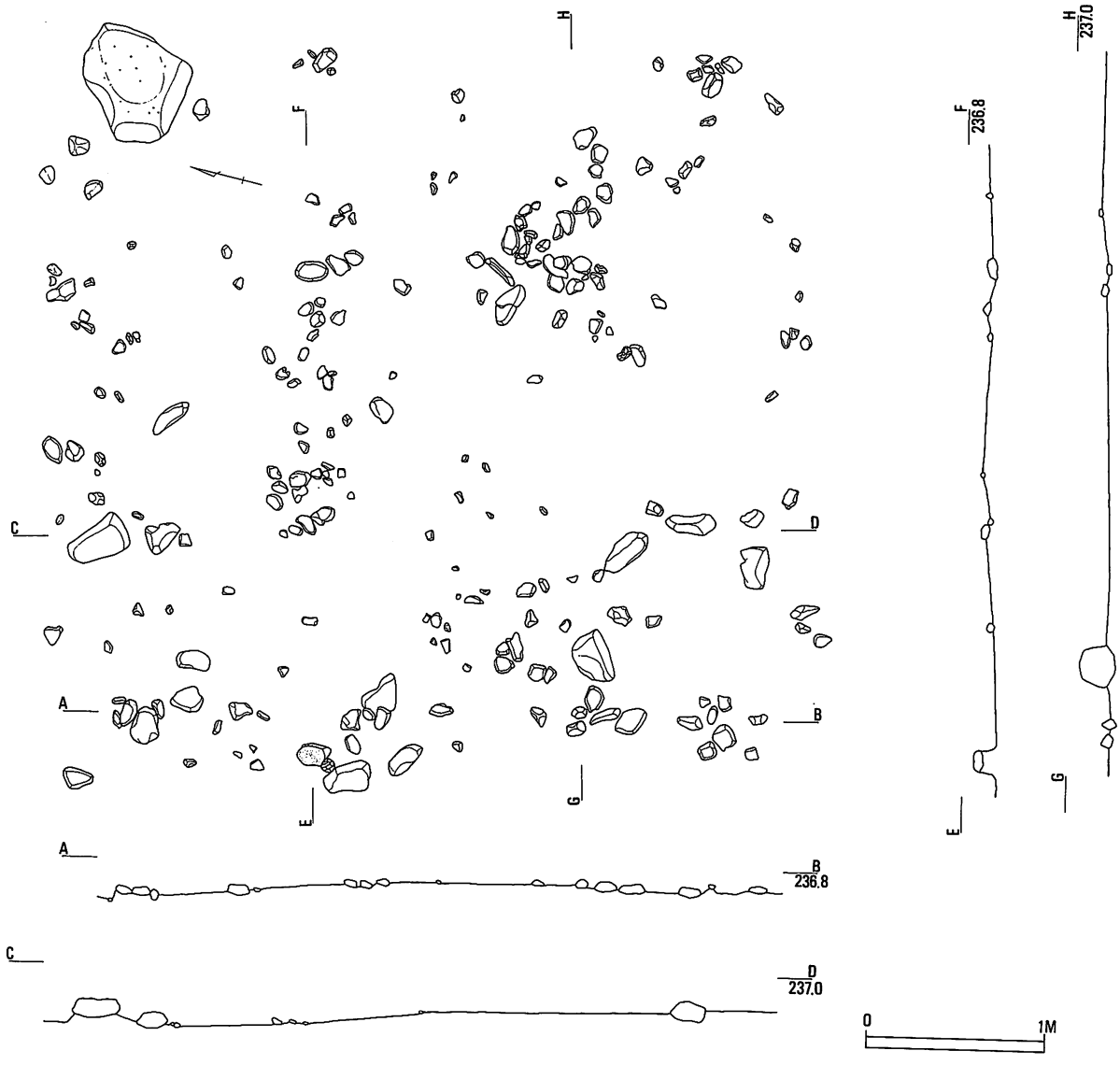
第145図　第17号配石



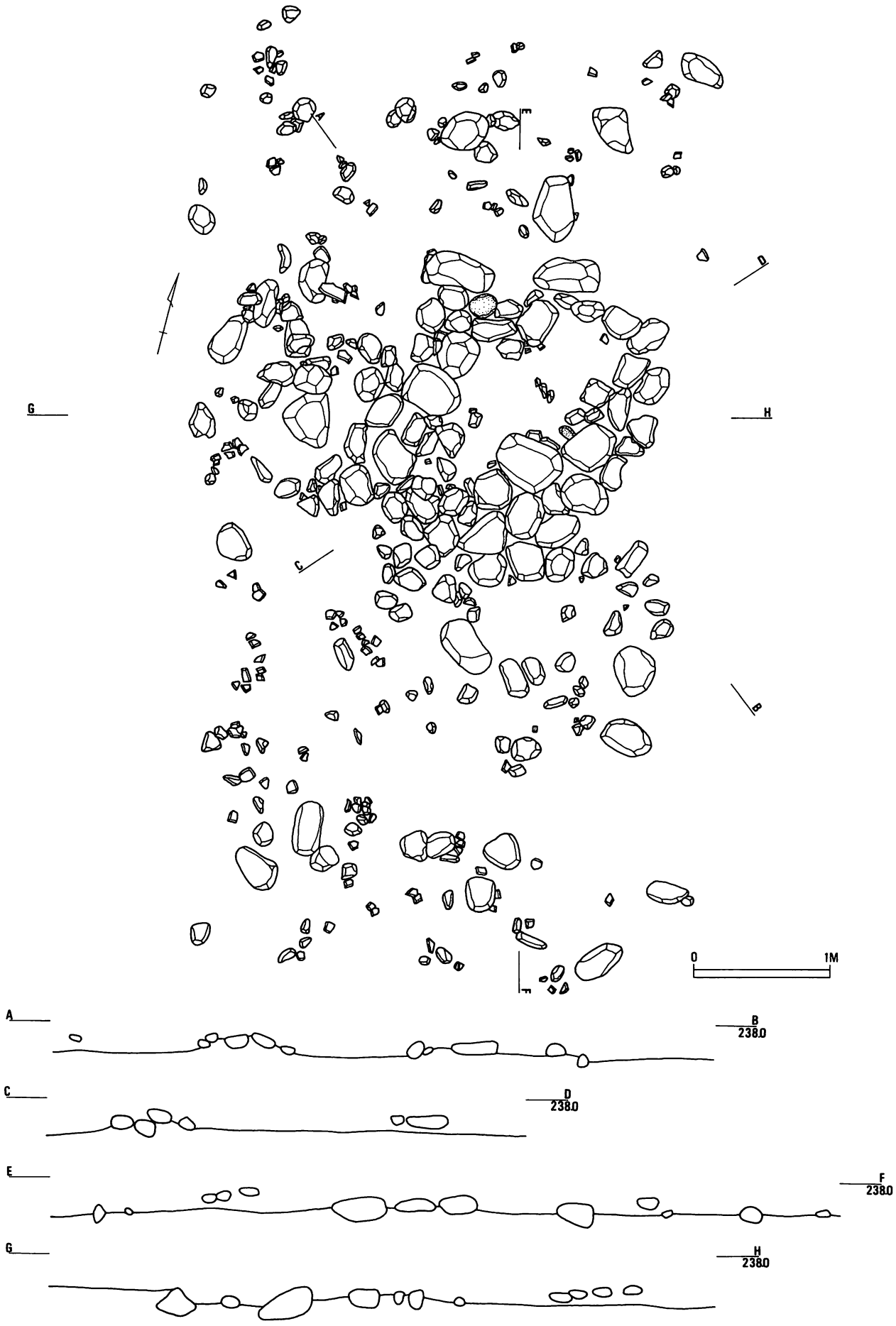
第146図　第17号配石内埋甕



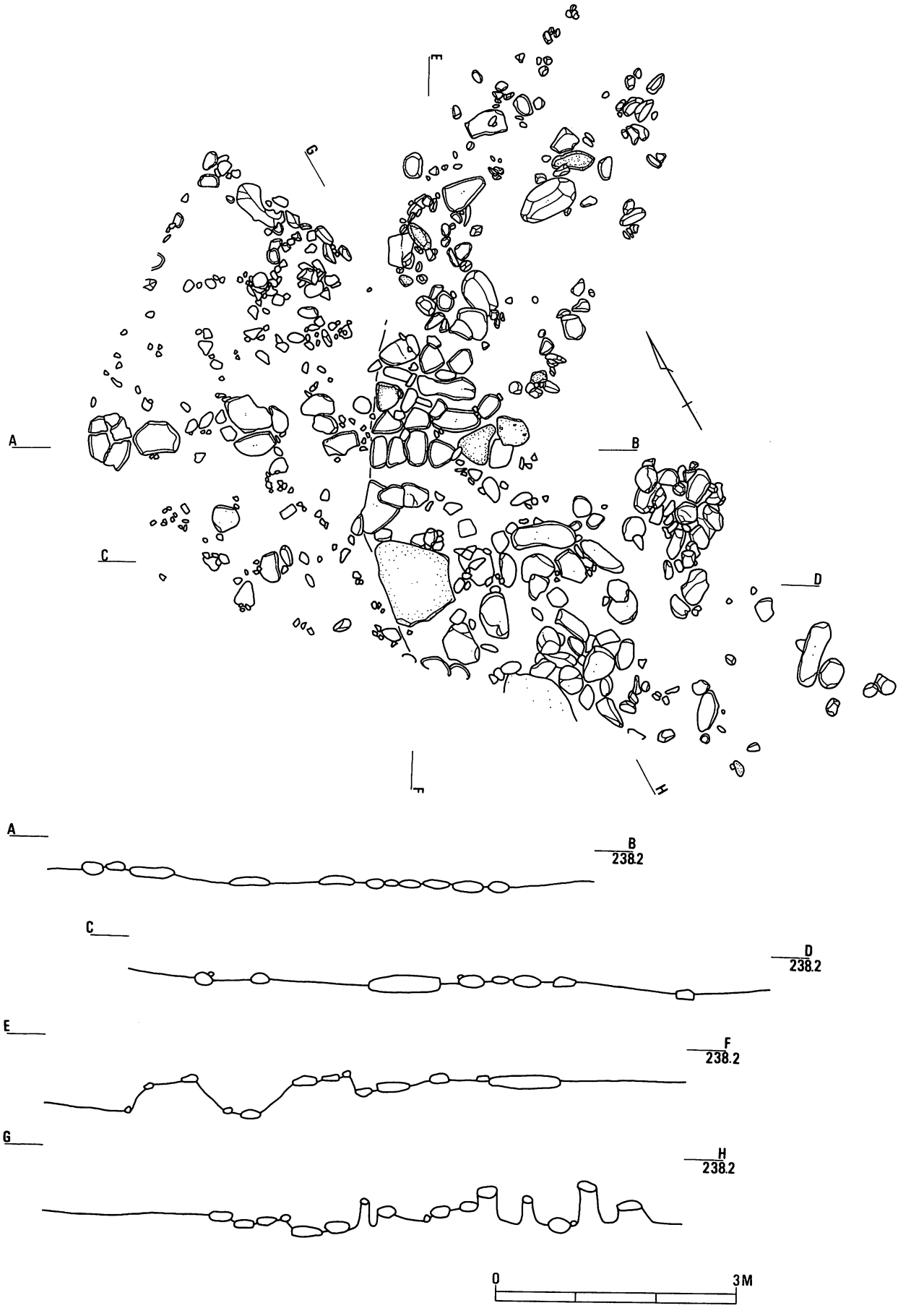
第147図　第17号配石出土遺物



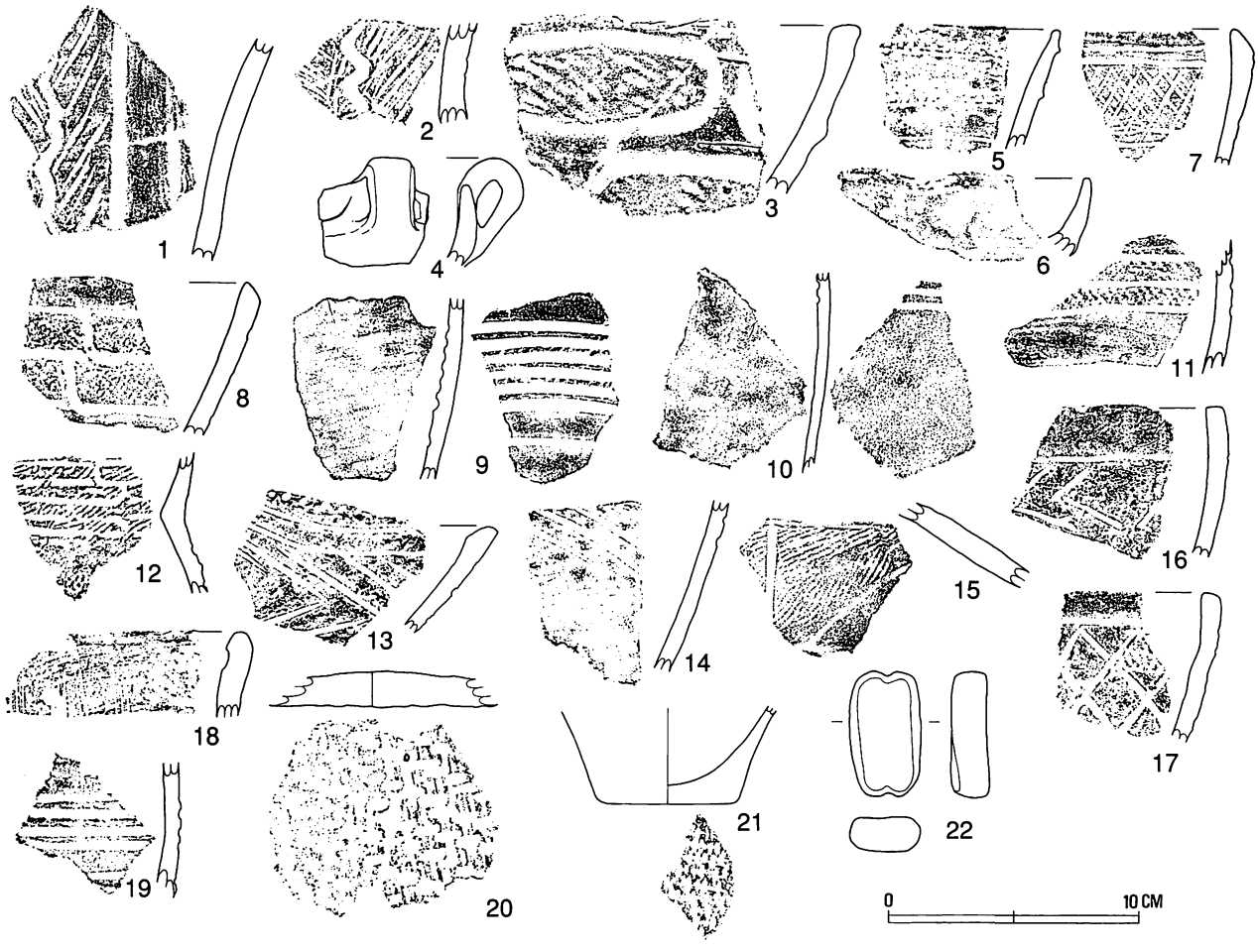
第148図　第18号配石



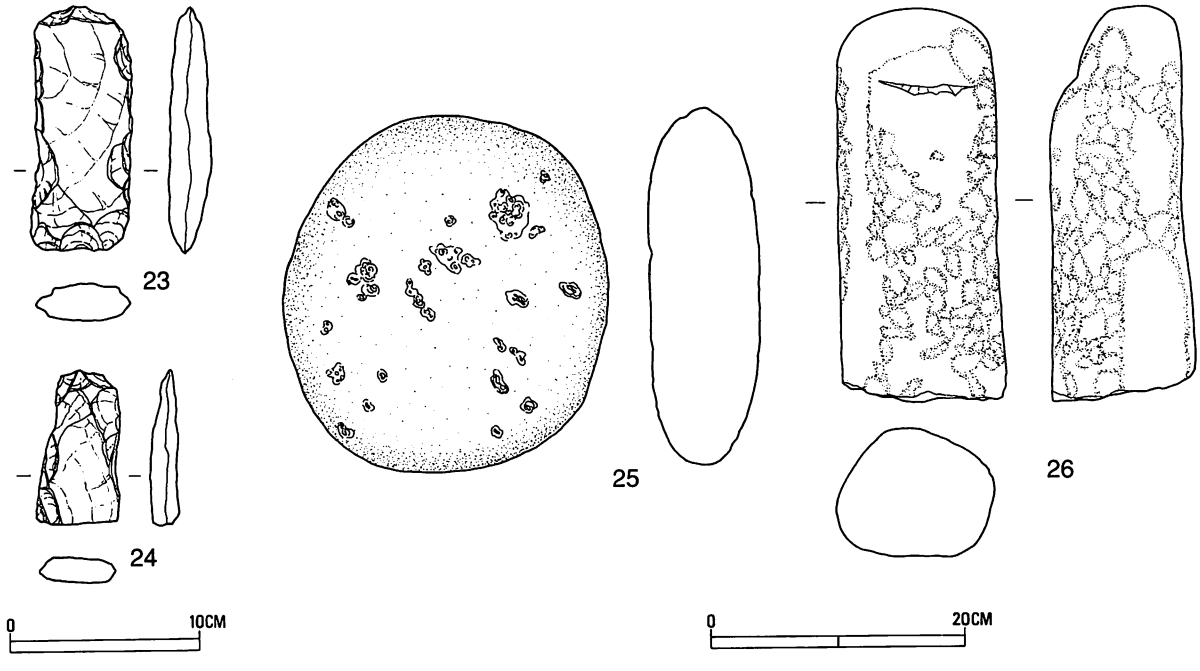
第149図　第19号配石



第150図　第20号配石

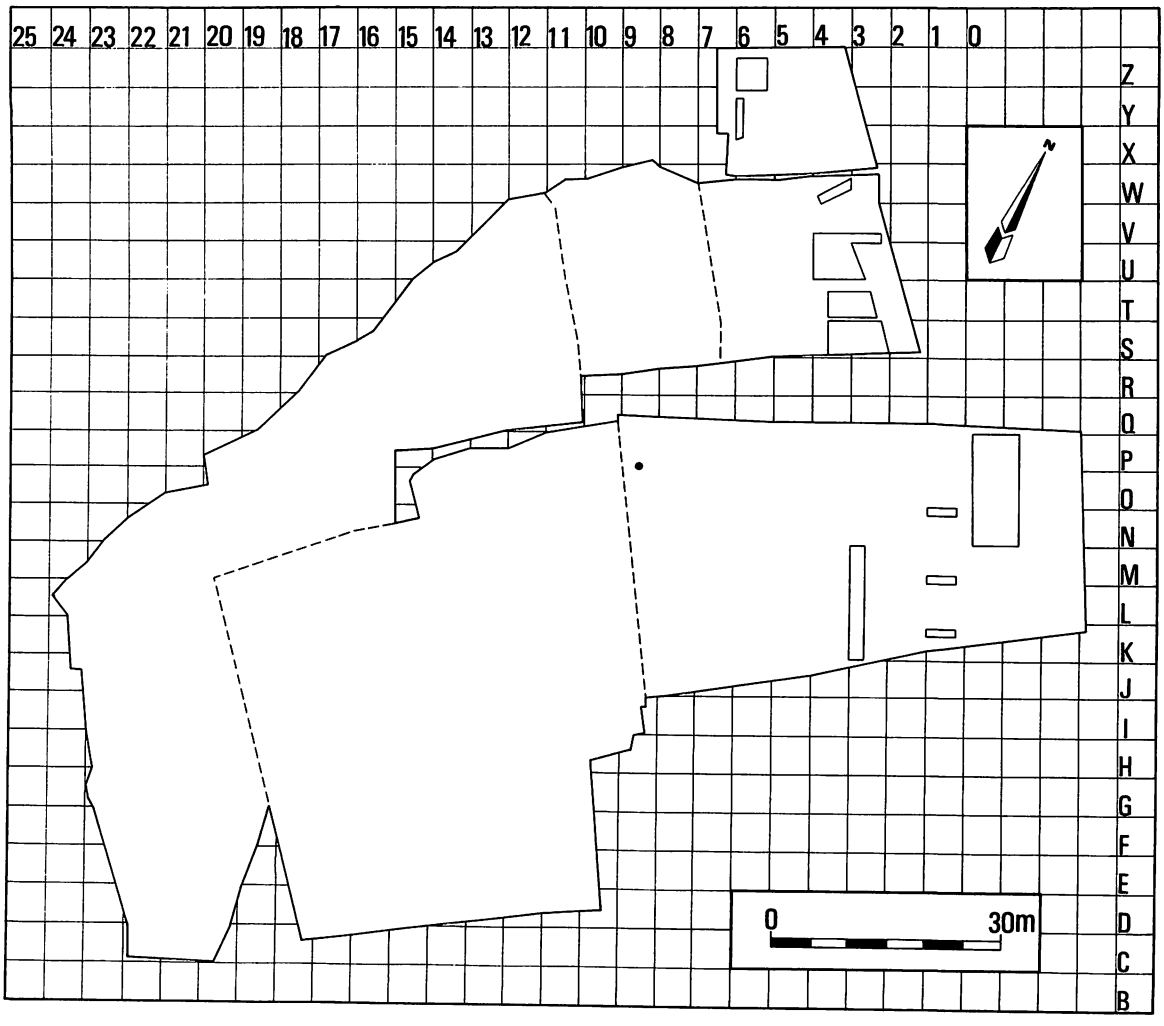


第151図　第20号配石出土遺物 1



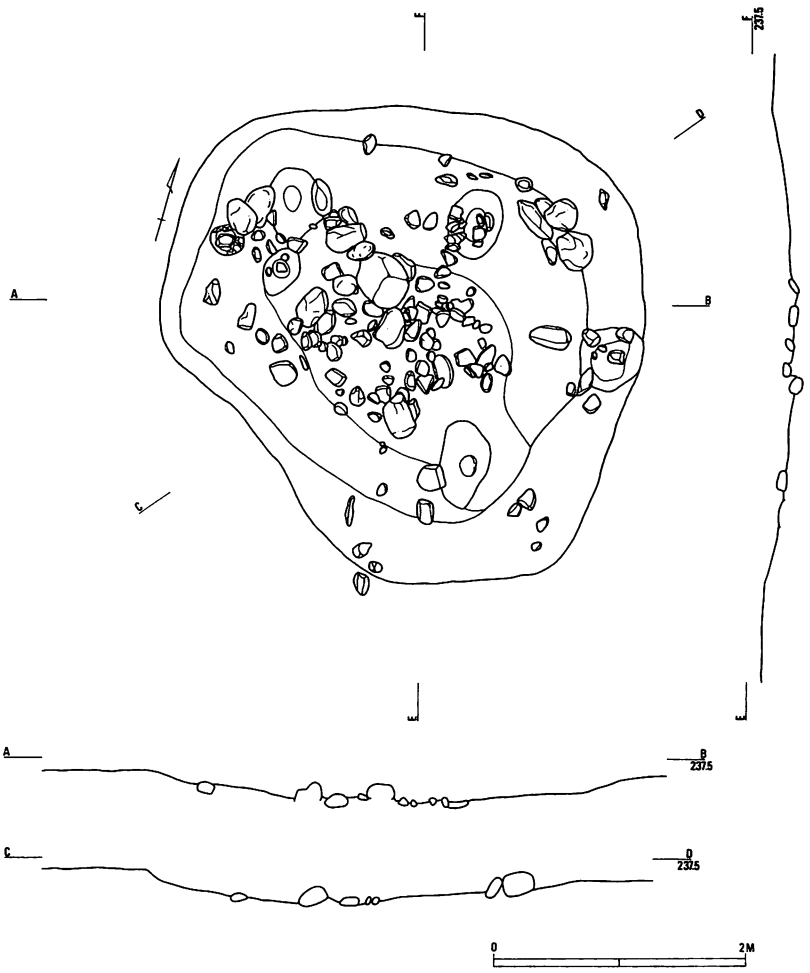
第152図　第20号配石出土遺物 2

第７節　石器製作址（第154～158図）



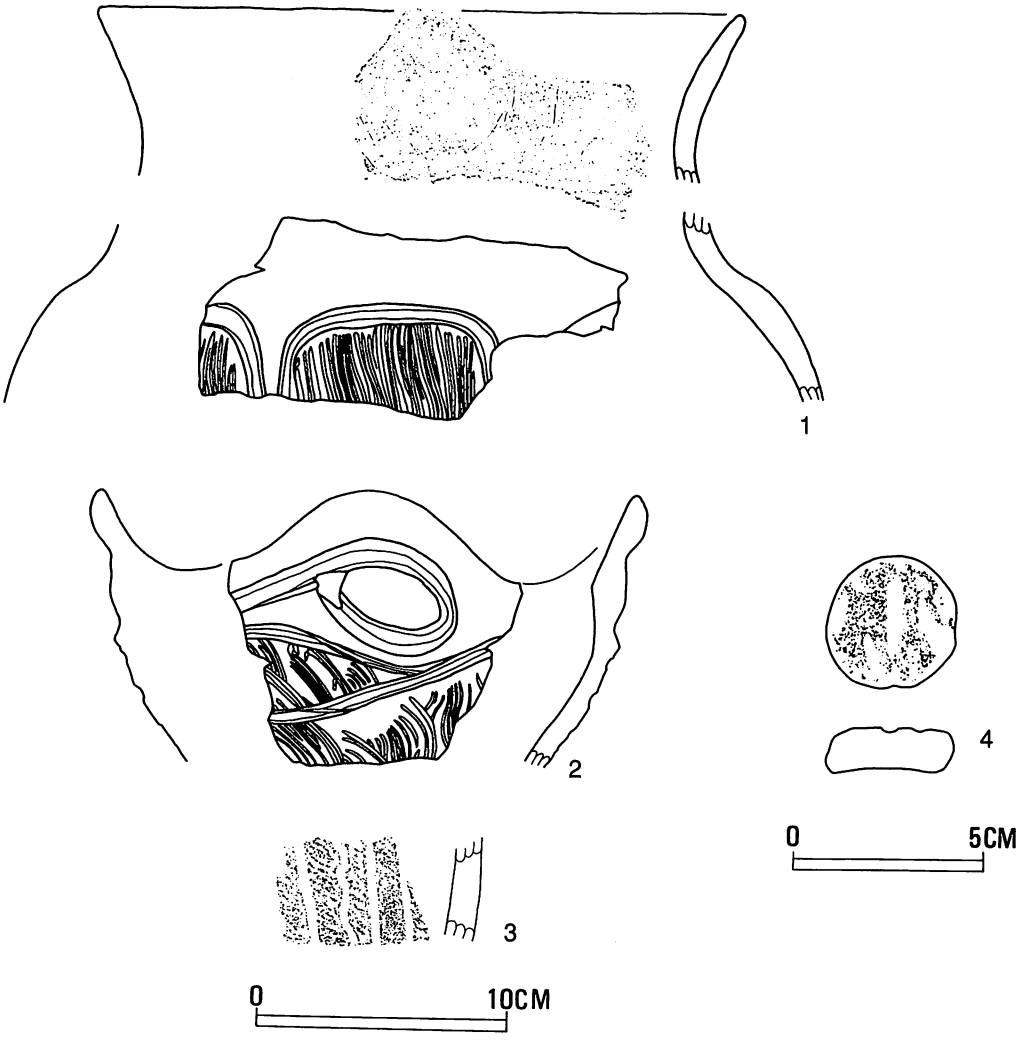
第153図　石器製作址配置図

Ｐ－９区において１基のみが検出された。当初は、約3.5mあまりの住居跡と考えて調査に当たっていたが、覆土に多量の黒曜石製チップなどレンズ状に堆積している様子が観察されたため石器製作址と認定した。その規模は、長径3.78m、短径3.76m、深度約30cmを測り、平面形は不正形、断面形は浅い皿状を呈している。遺構底面には浅いピットが数箇所で確認されているほか、他の遺構と同様に段丘形成時の自然石が数多く検出され、住居跡の平坦さとは明らかに異なった凹凸をみせる。出土遺物は加曽利Ｅ３式期の両耳壺（１）、深鉢形土器（２）、曽利Ⅳ式期深鉢型土器　、曽利Ⅴ式期土製円盤（４）のほか石器類としては石皿（５）、同未製品（６）、磨石（７～９）、石核（10・11）、打製石斧（12・13）、磨製石斧（14）、二次加工のある剥片（15）が出土している。

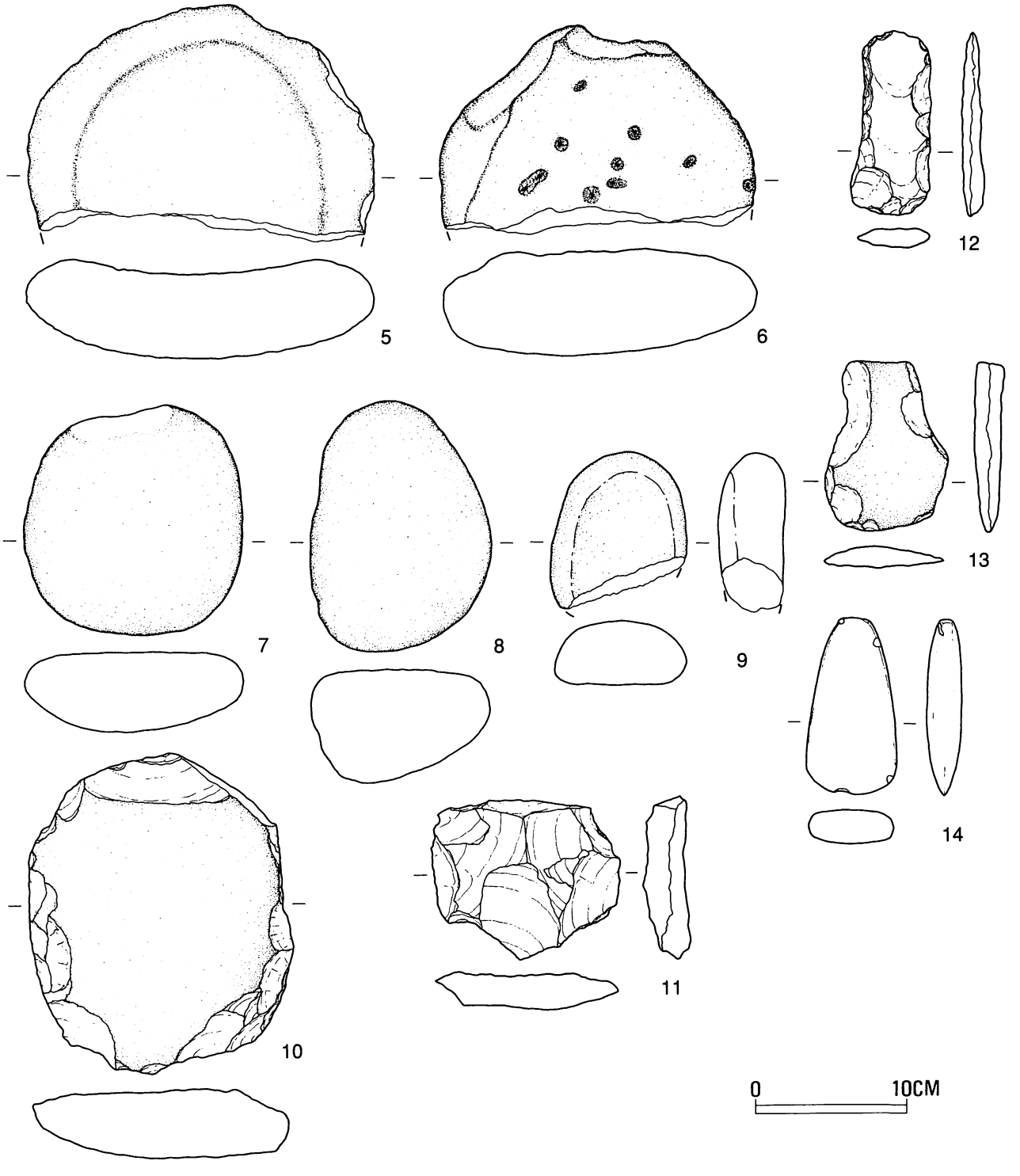


第154図　石器製作址１

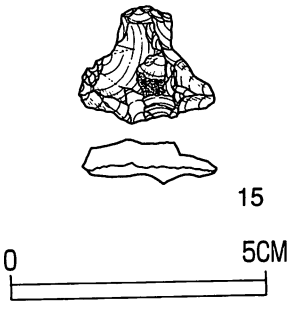
第155図　石器製作址２



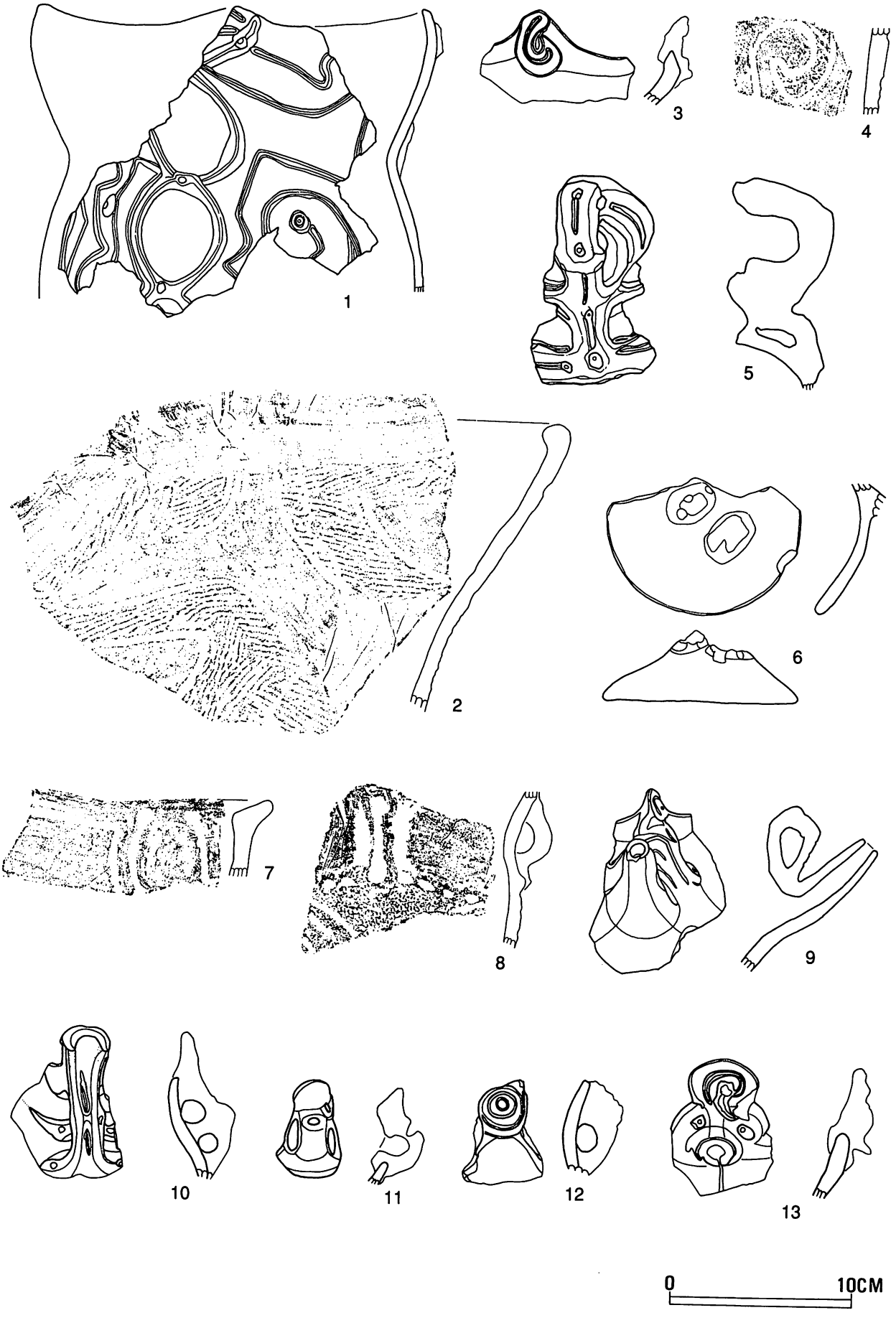
第156図　石器製作址出土遺物１



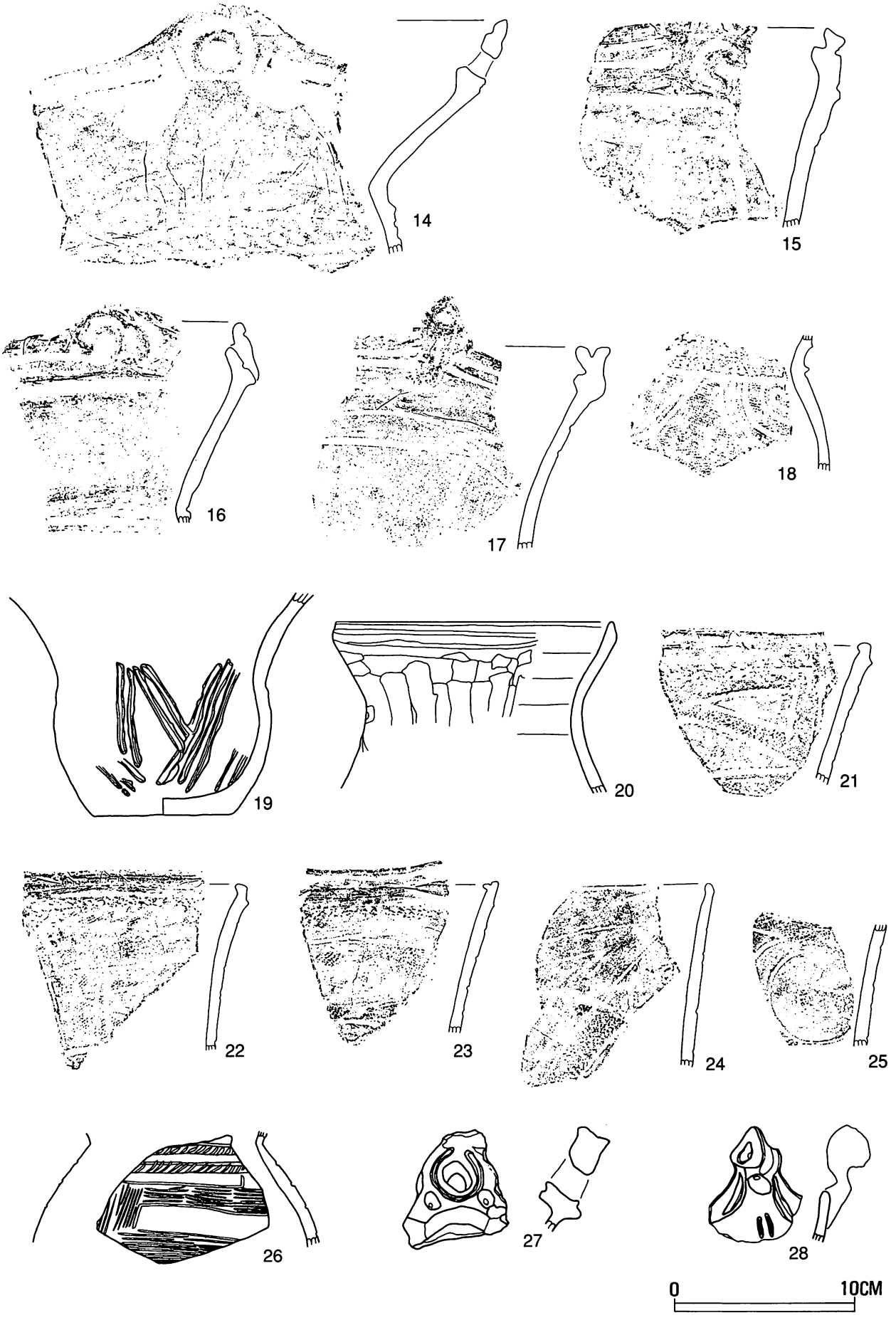
第157図　石器製作址出土遺物 2



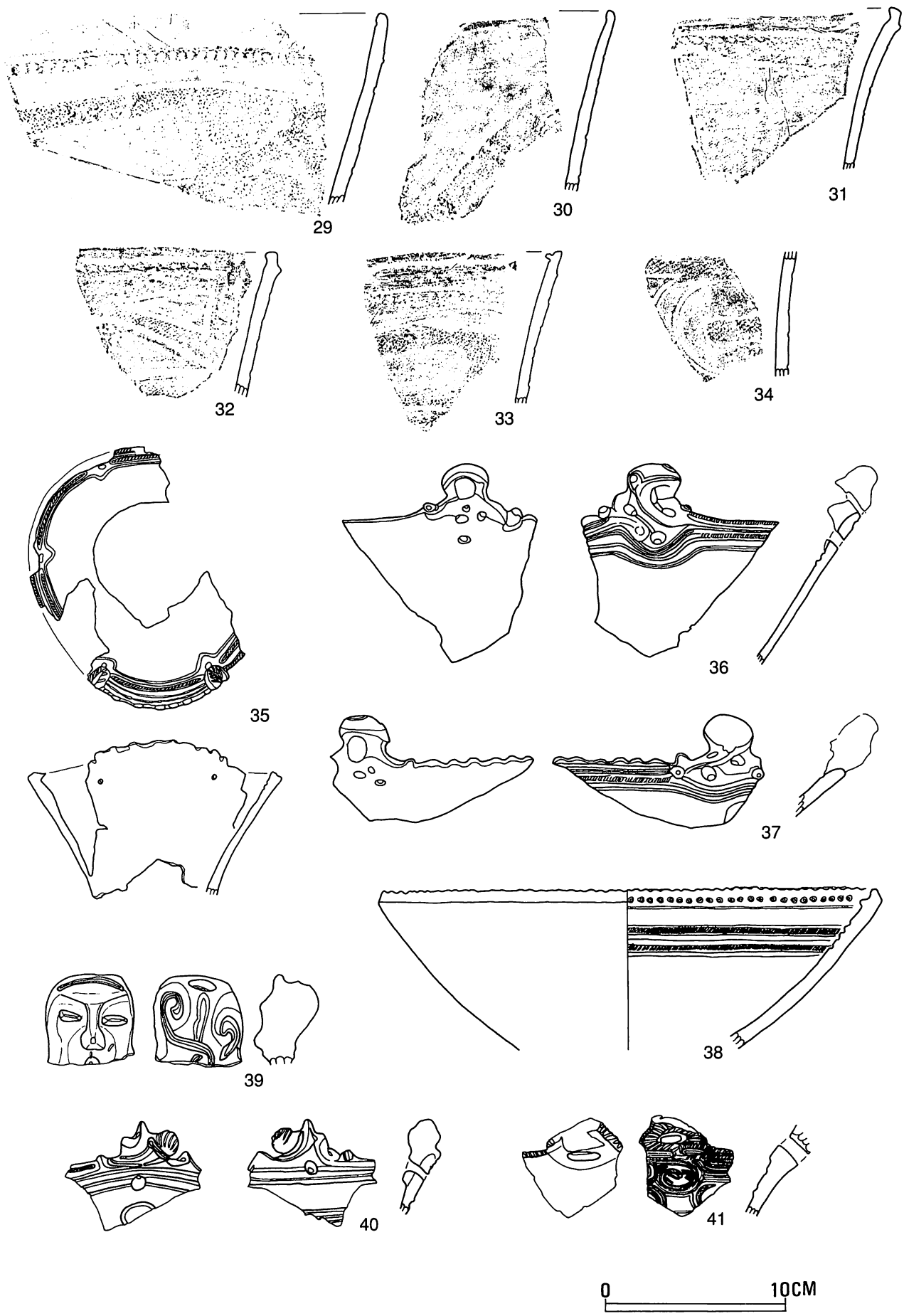
第158図　石器製作址出土遺物 3



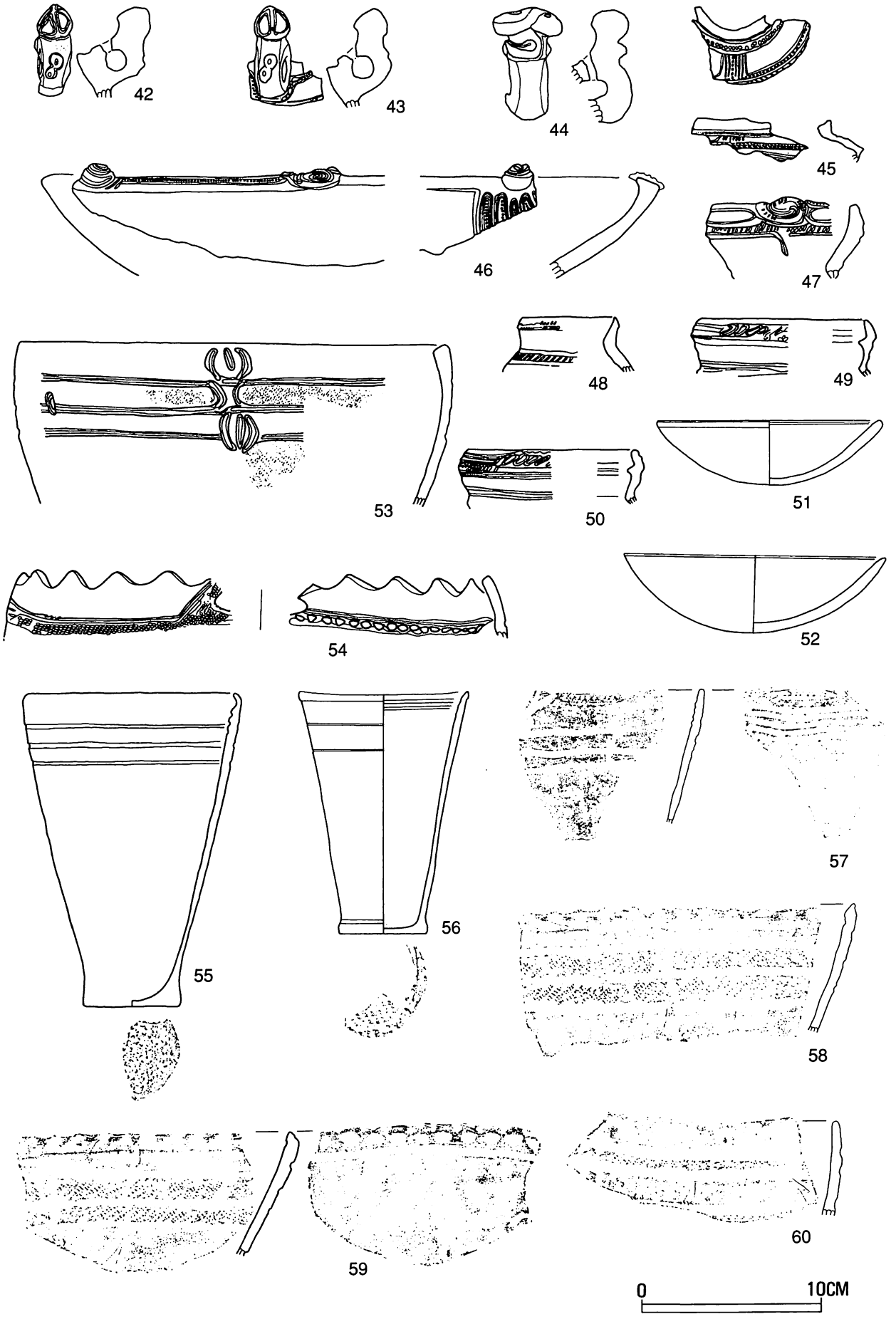
第159図　遺構外出土遺物１



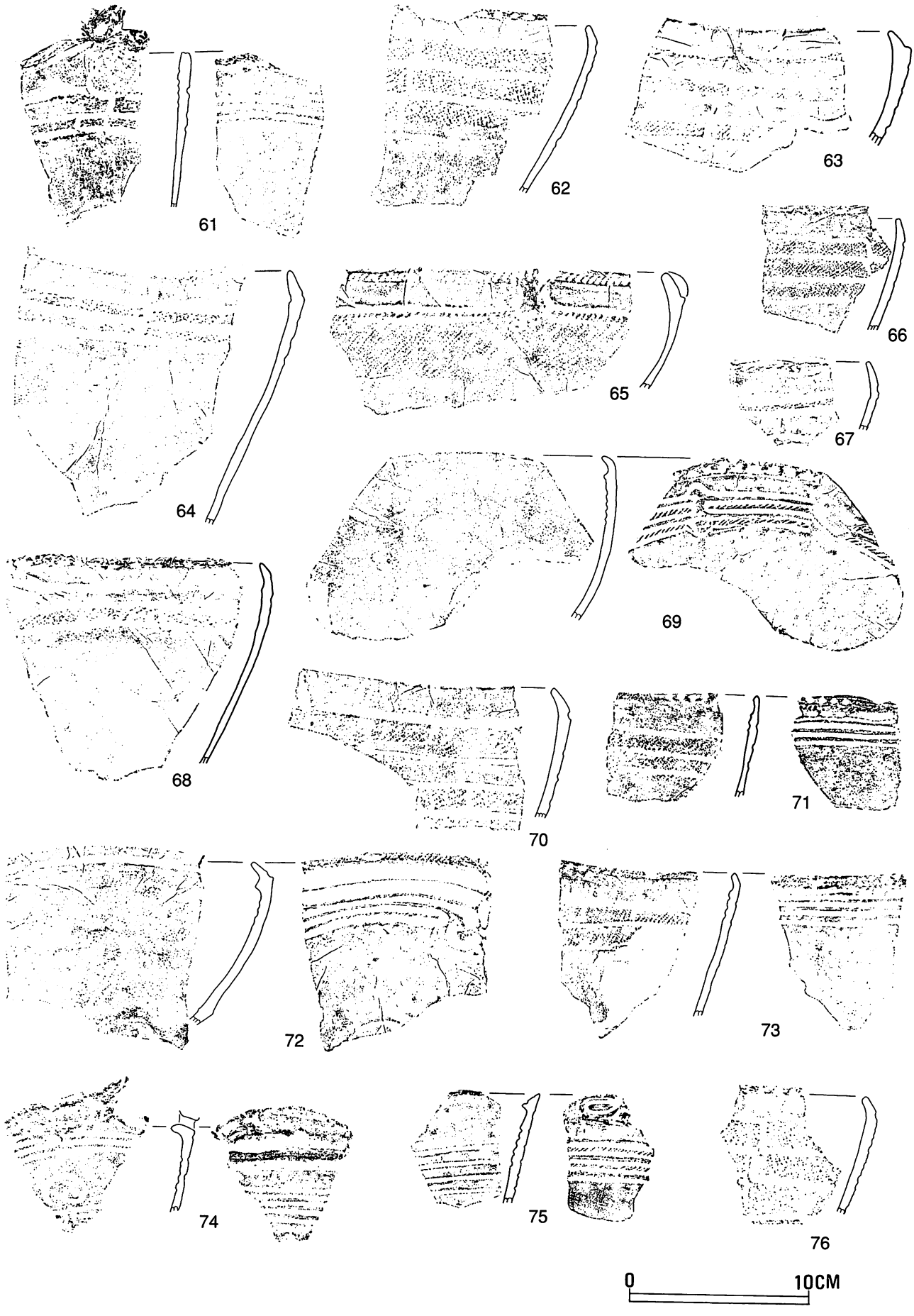
第160図　遺構外出土遺物２



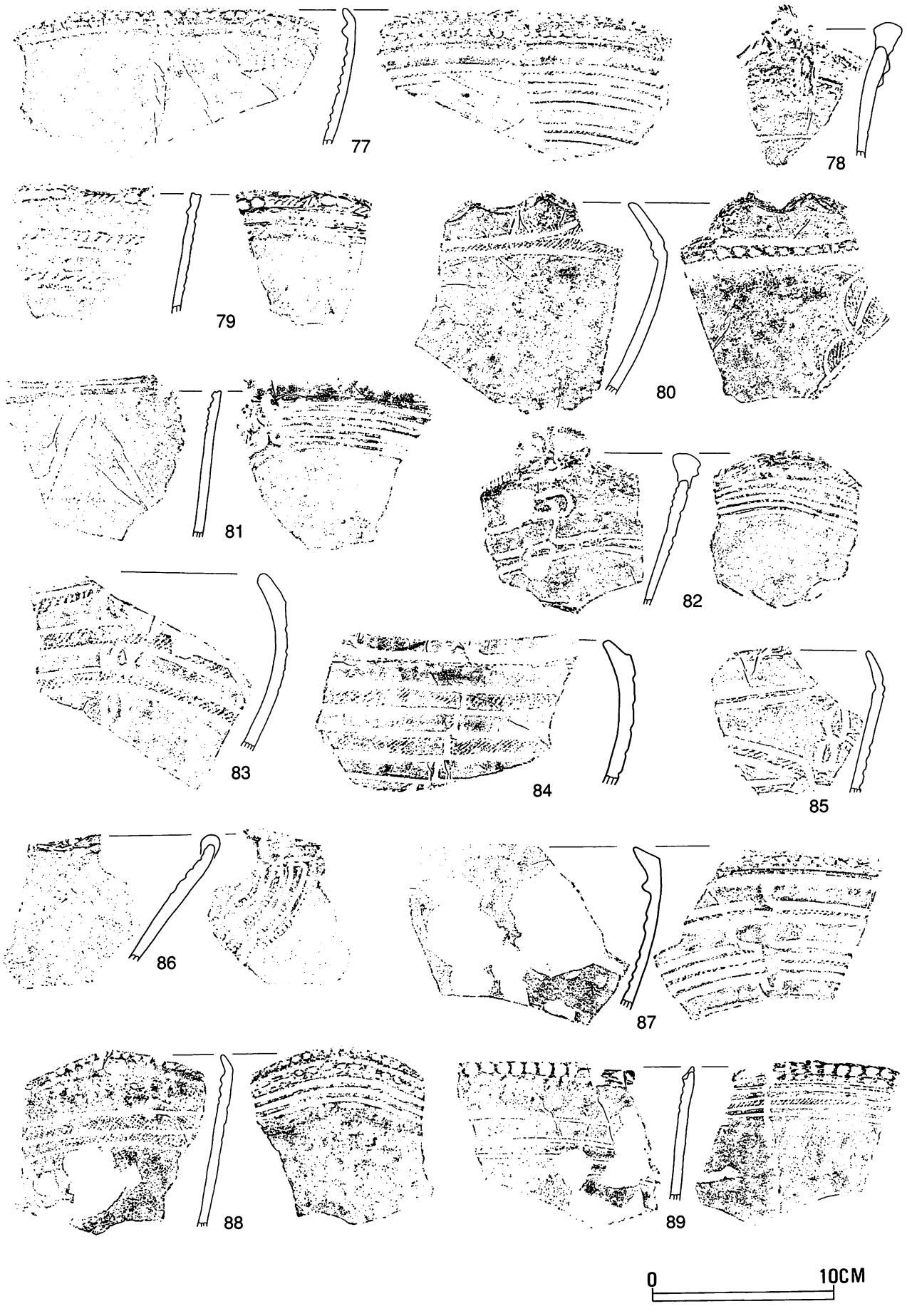
第161図　遺構外出土遺物 3



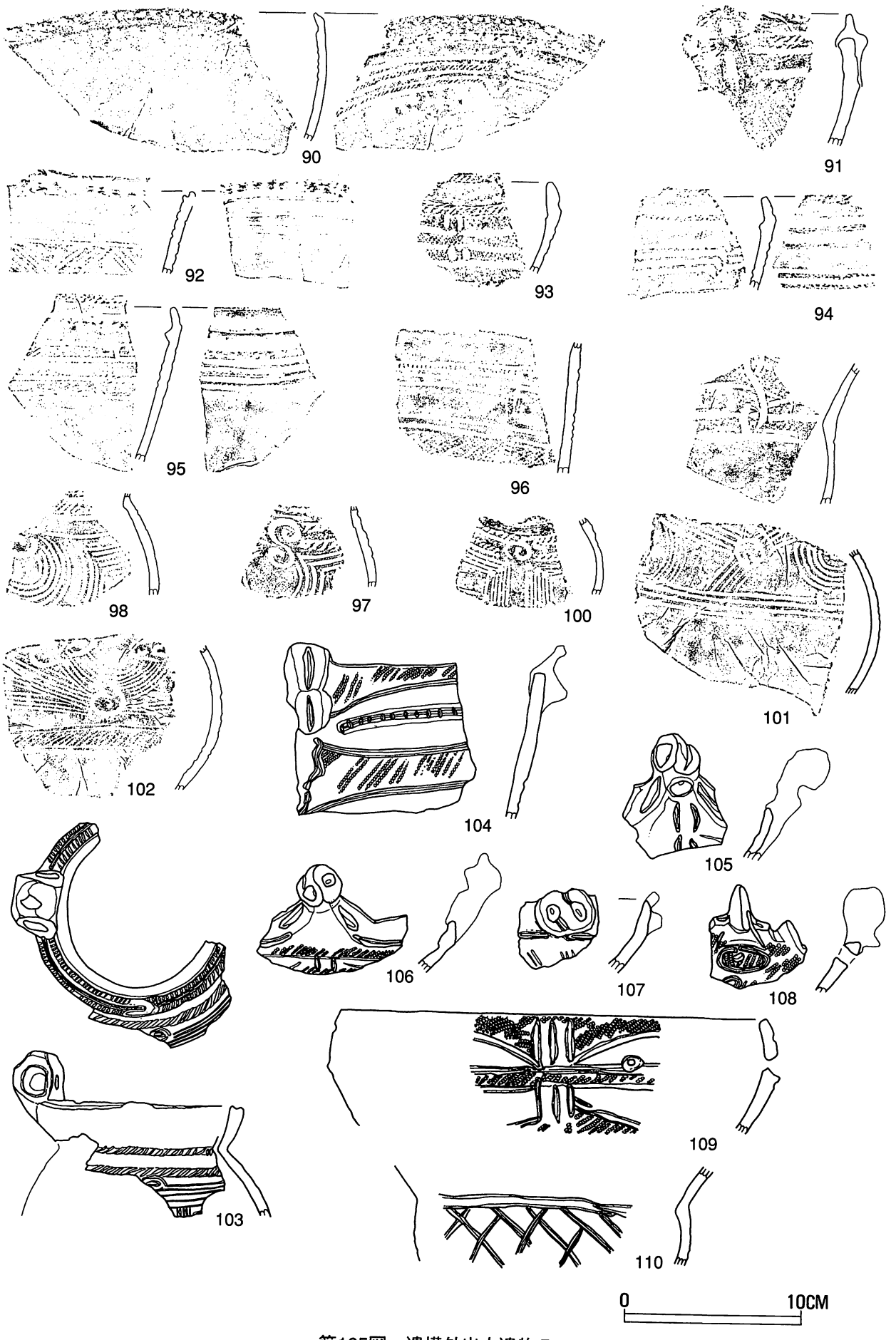
第162図　遺構外出土遺物 4



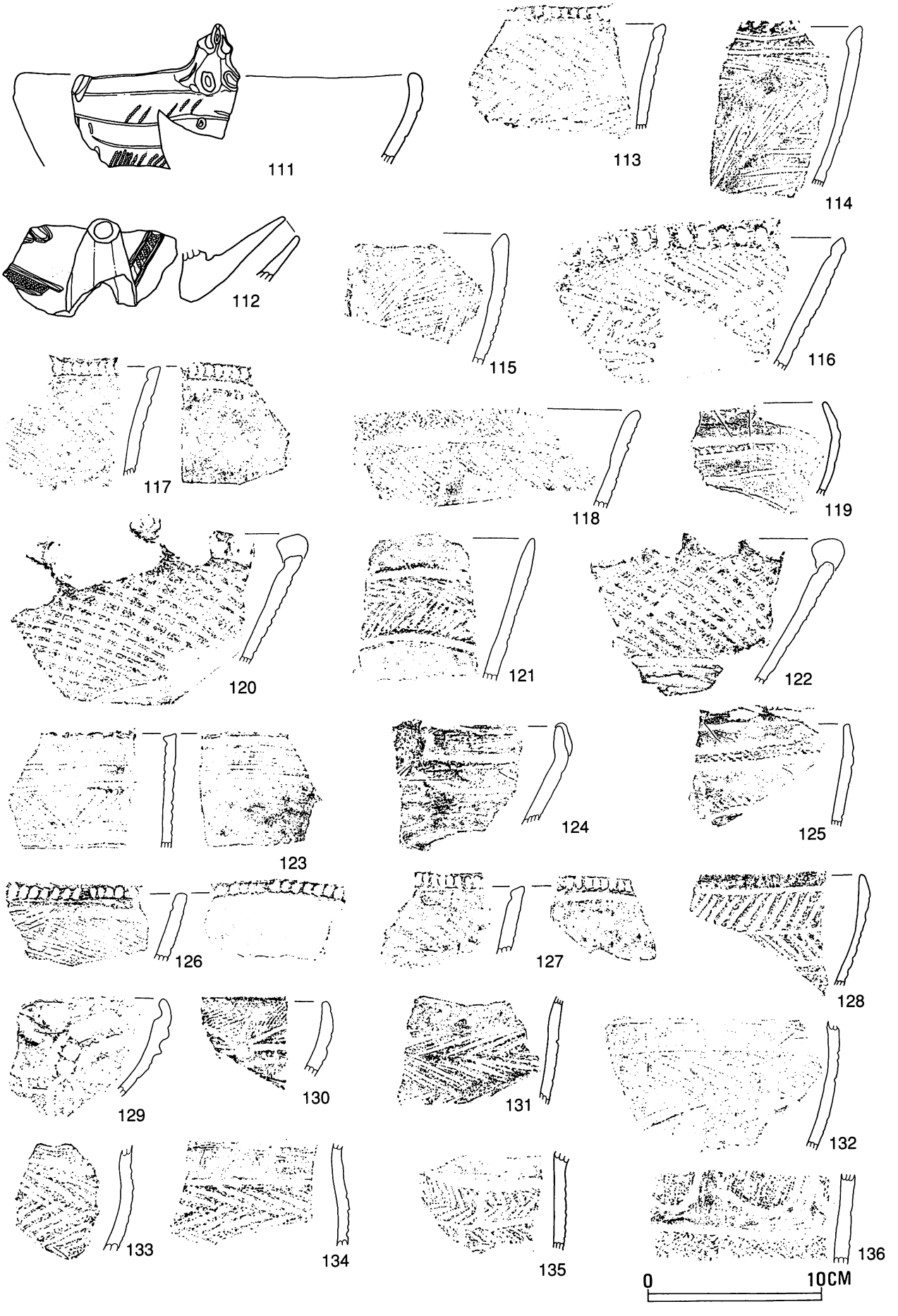
第163図　遺構外出土遺物５



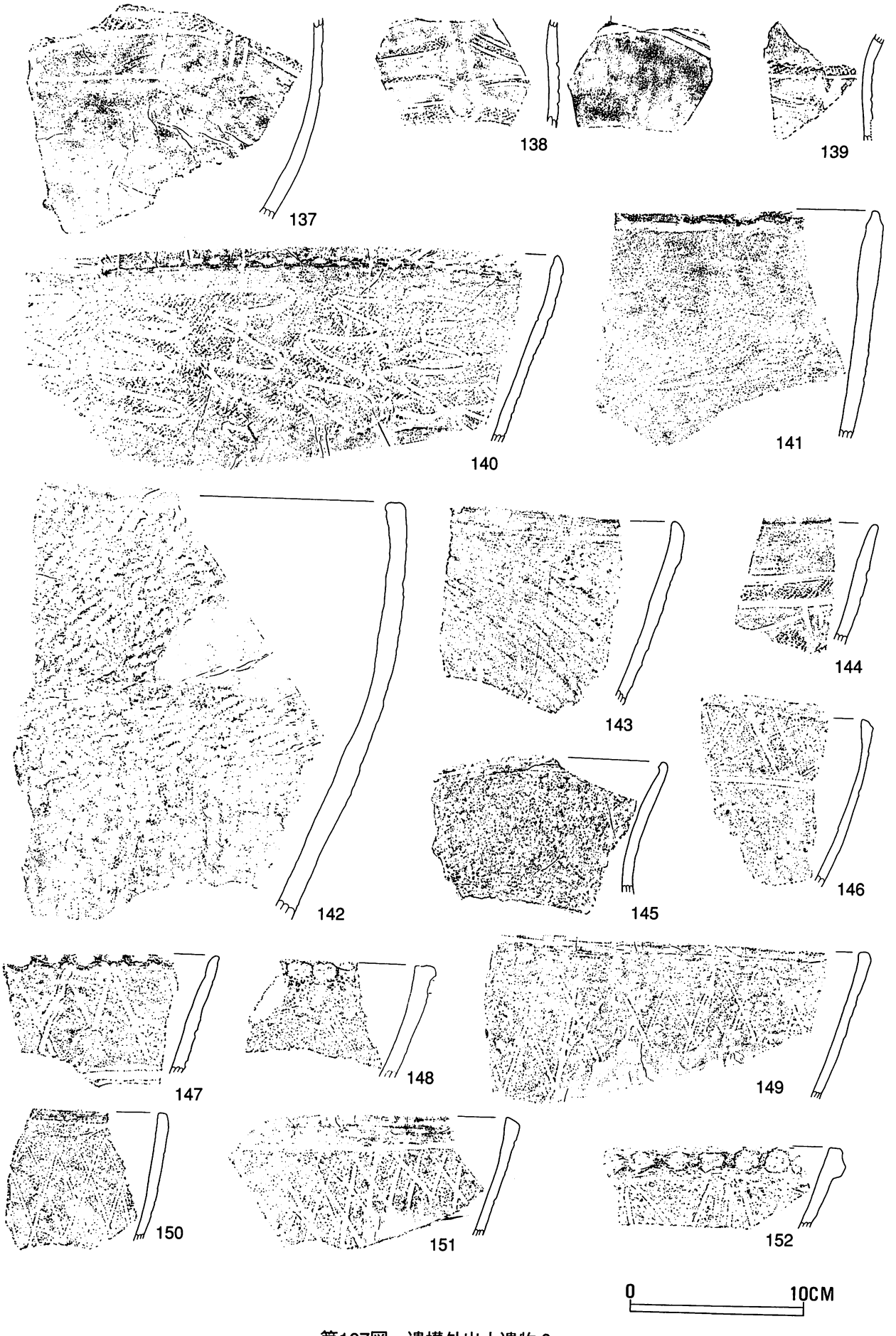
第164図　遺構外出土遺物 6



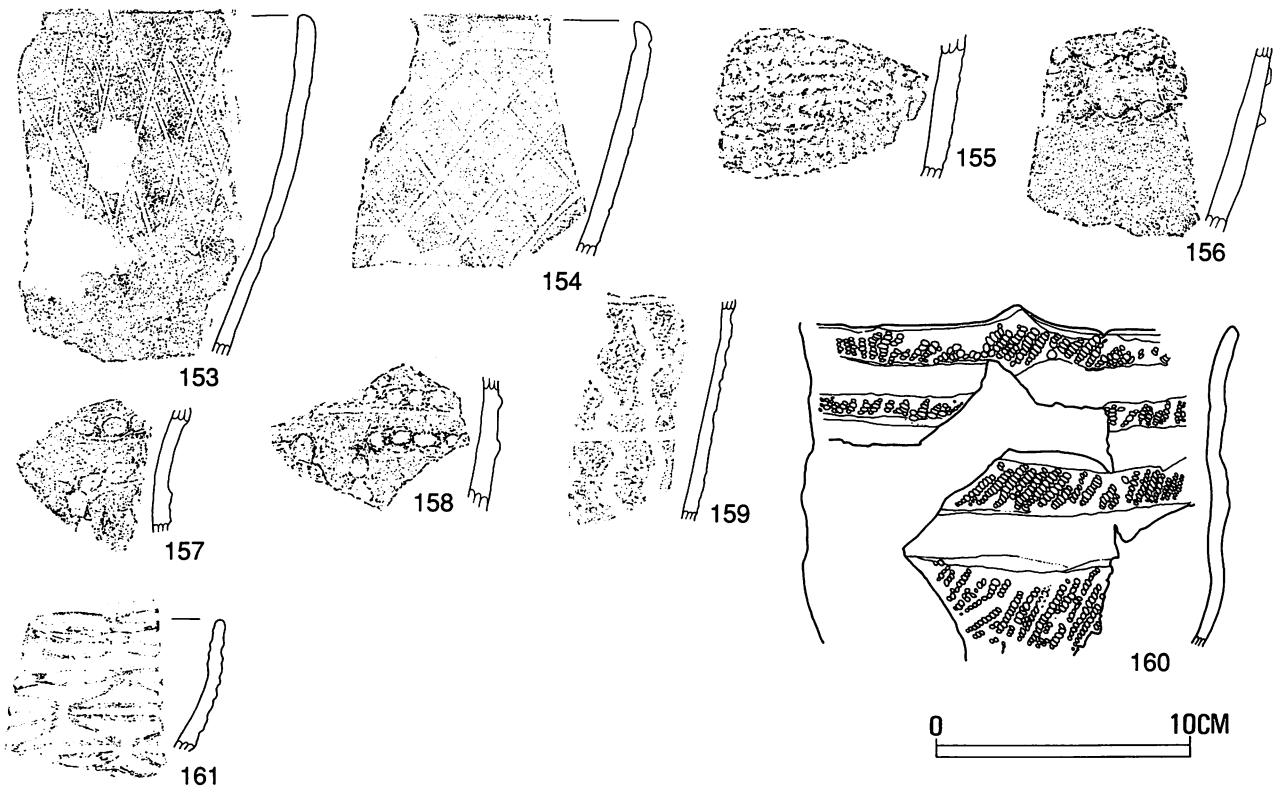
第165図　遺構外出土遺物７



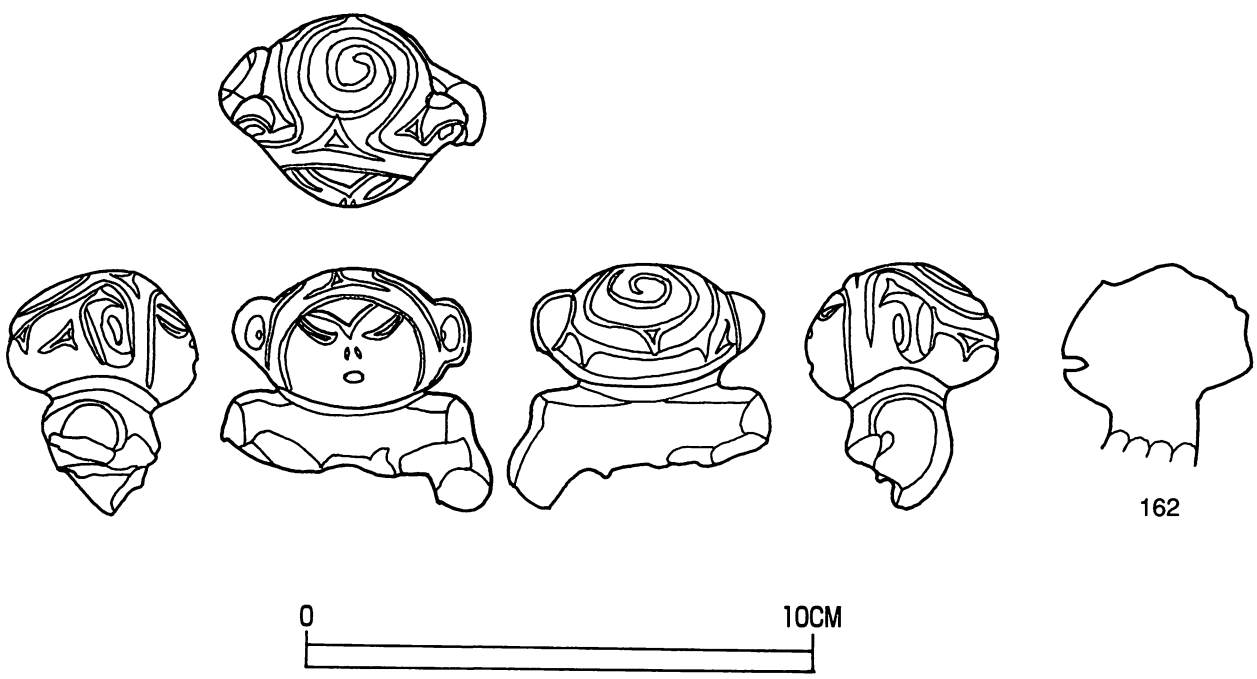
第166図　遺構外出土遺物 8



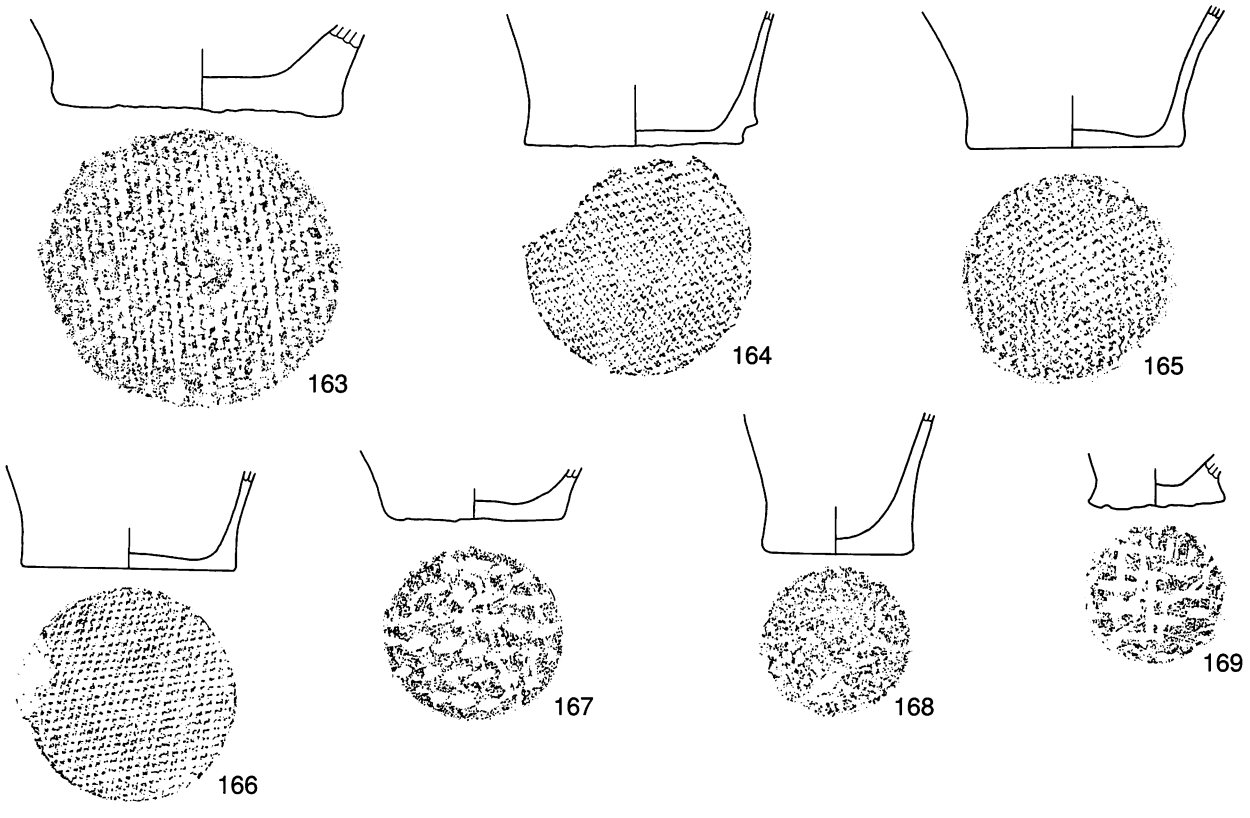
第167図　遺構外出土遺物 9



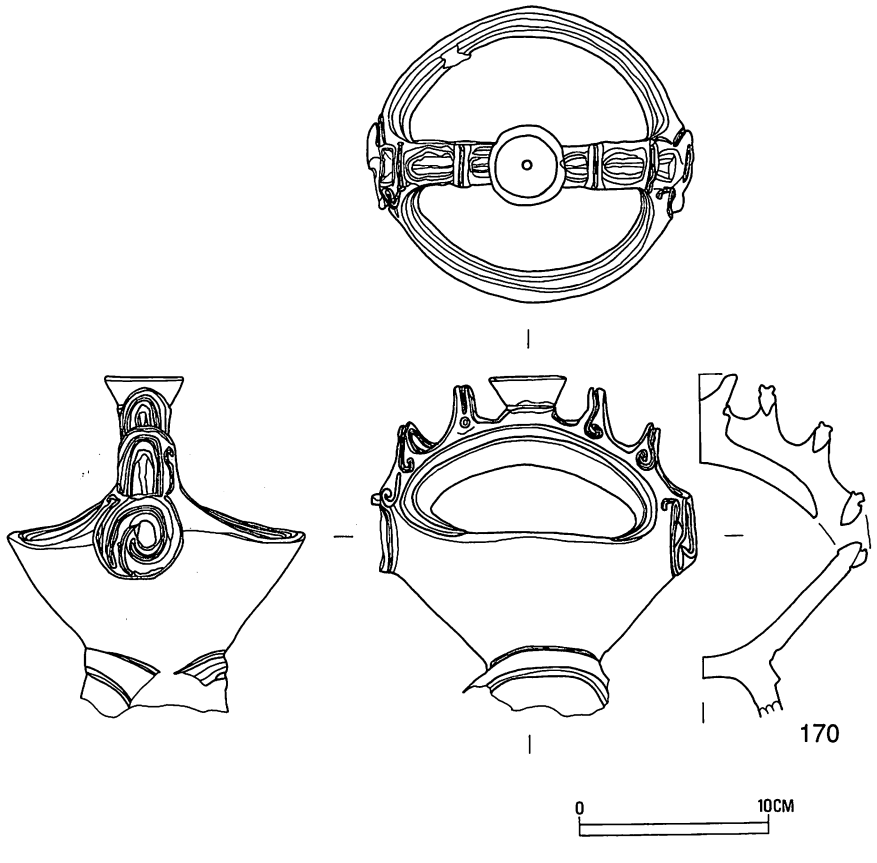
第168図　遺構外出土遺物10



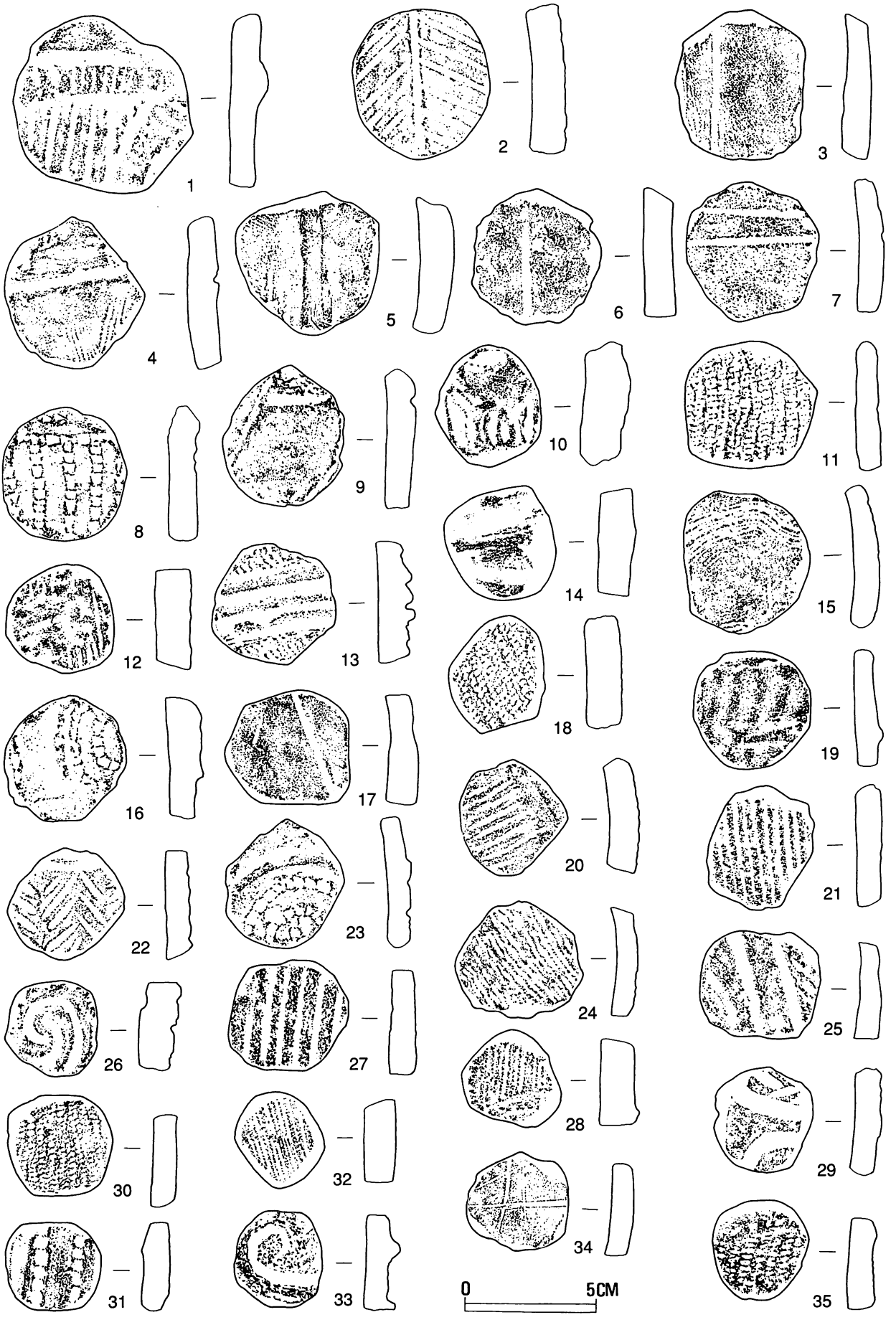
第169図　遺構外出土遺物11



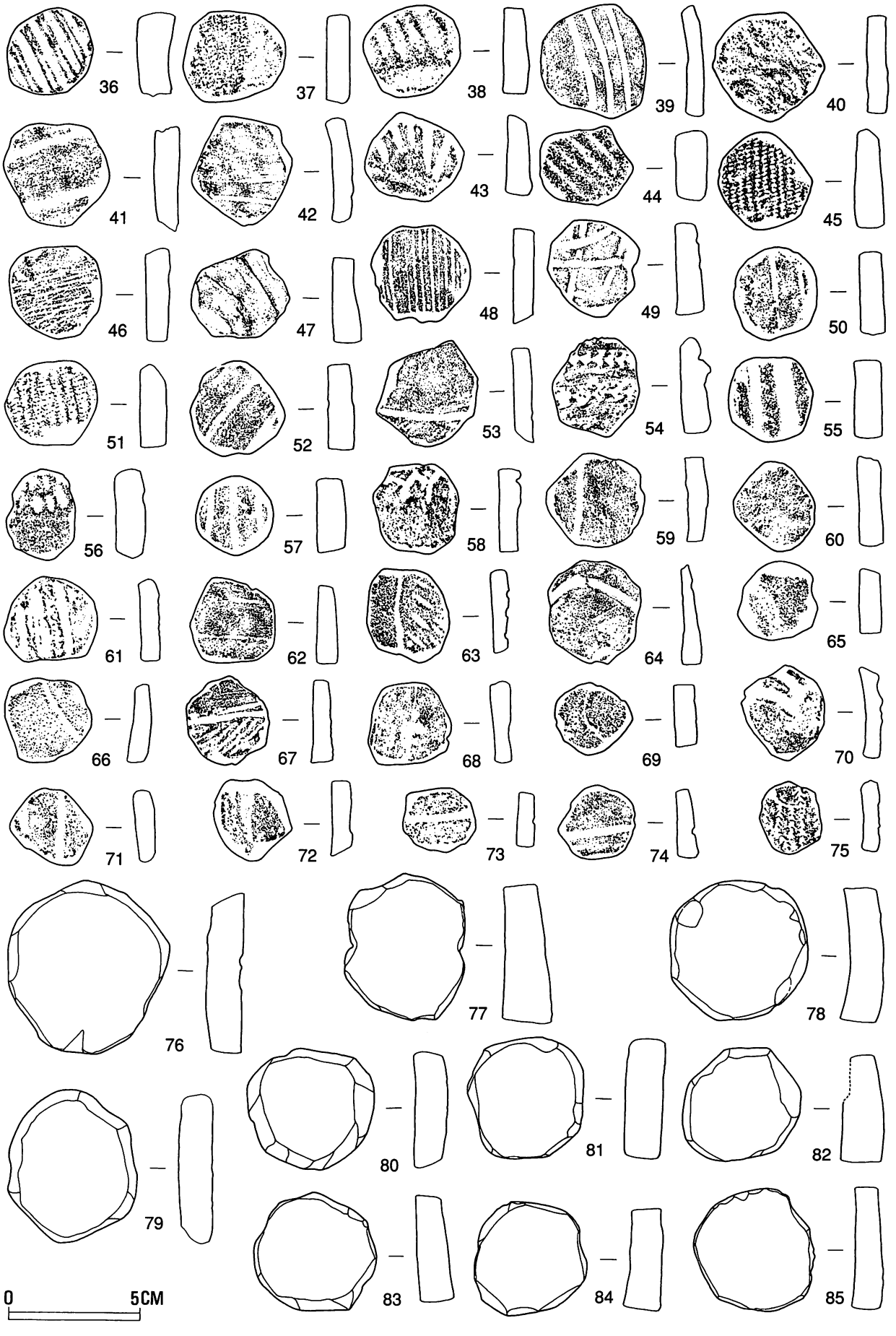
第170図　遺構外出土遺物12



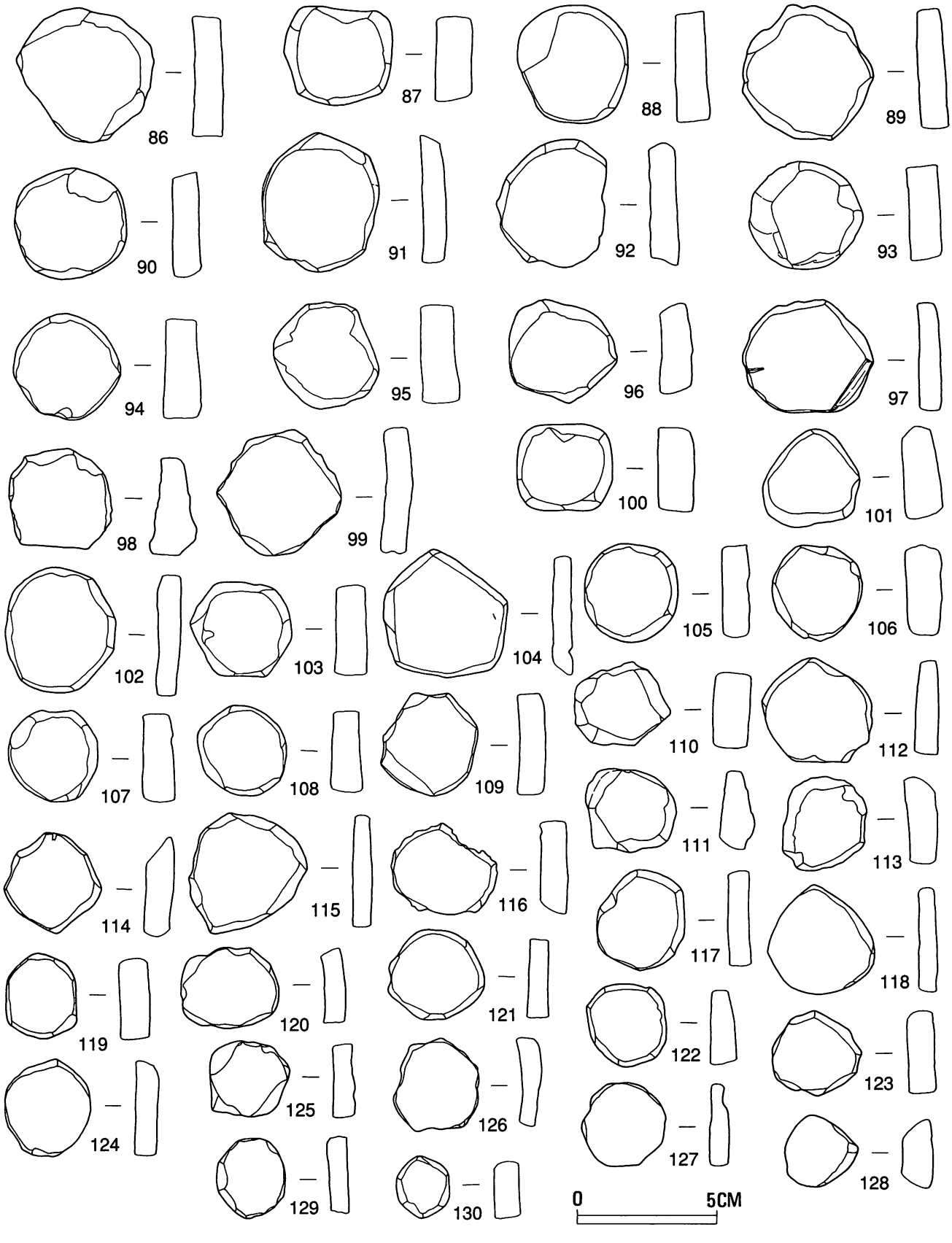
第171図　遺構外出土遺物13



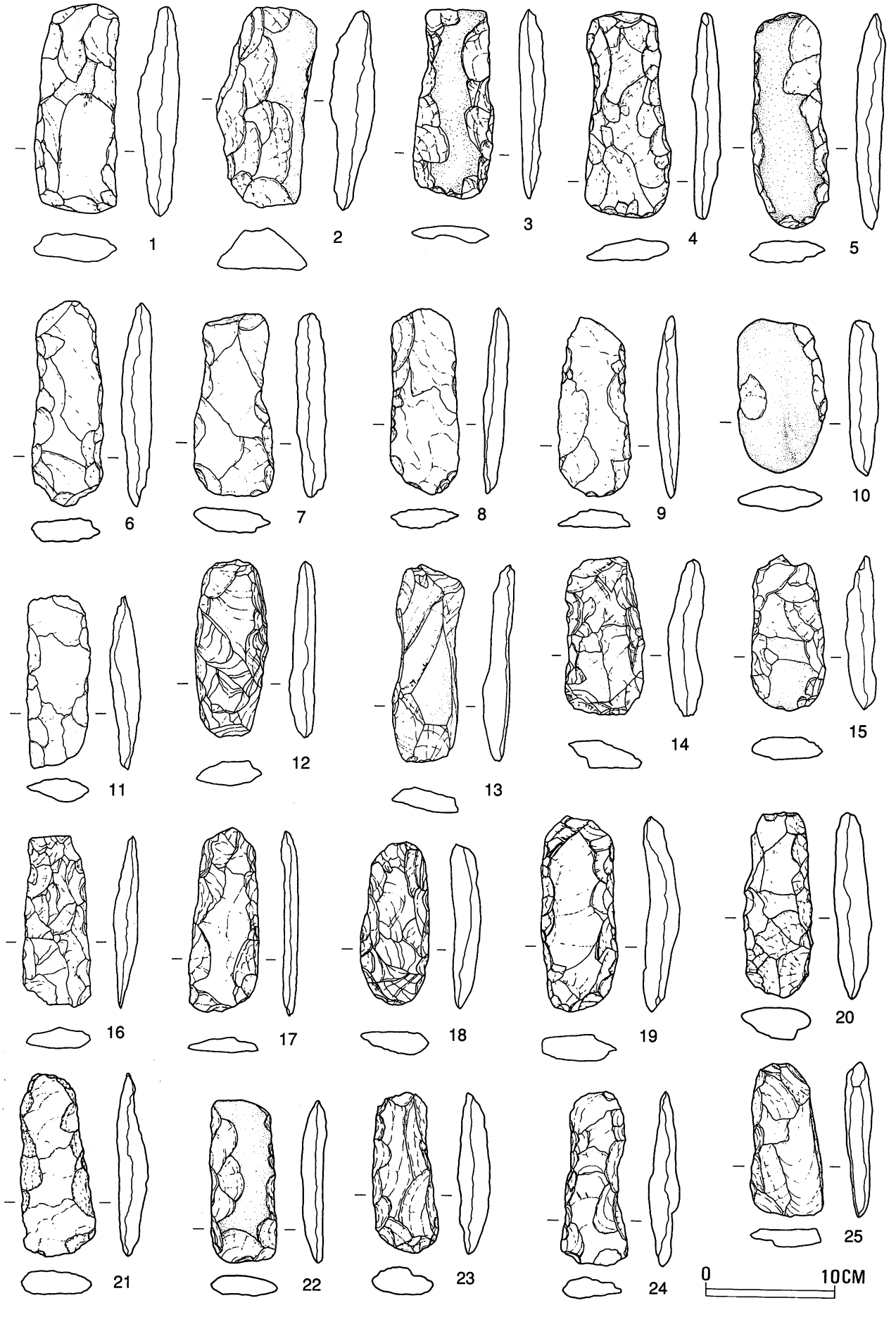
第172図　遺構外出土遺物14



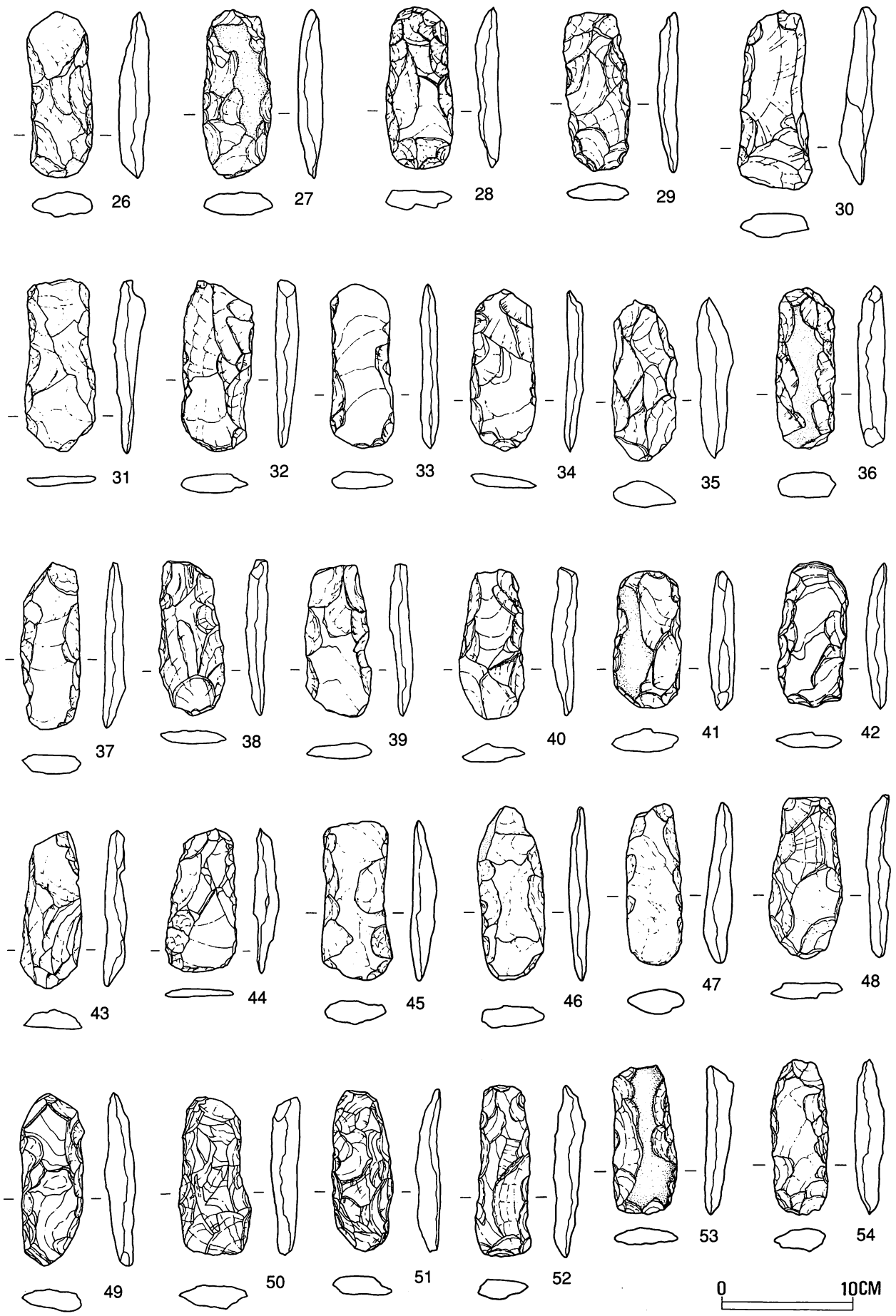
第173図　遺構外出土遺物15



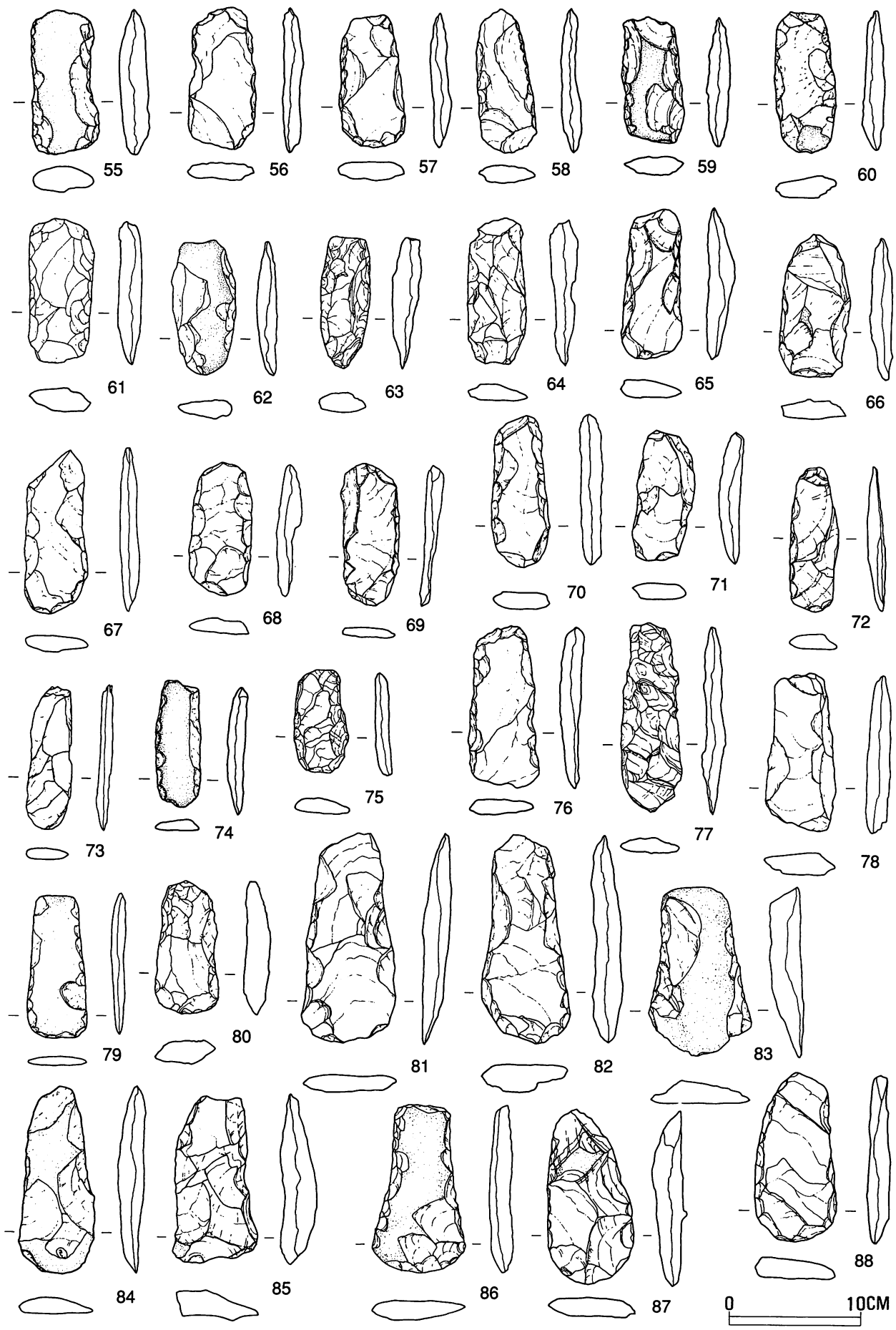
第174図　遺構外出土遺物16



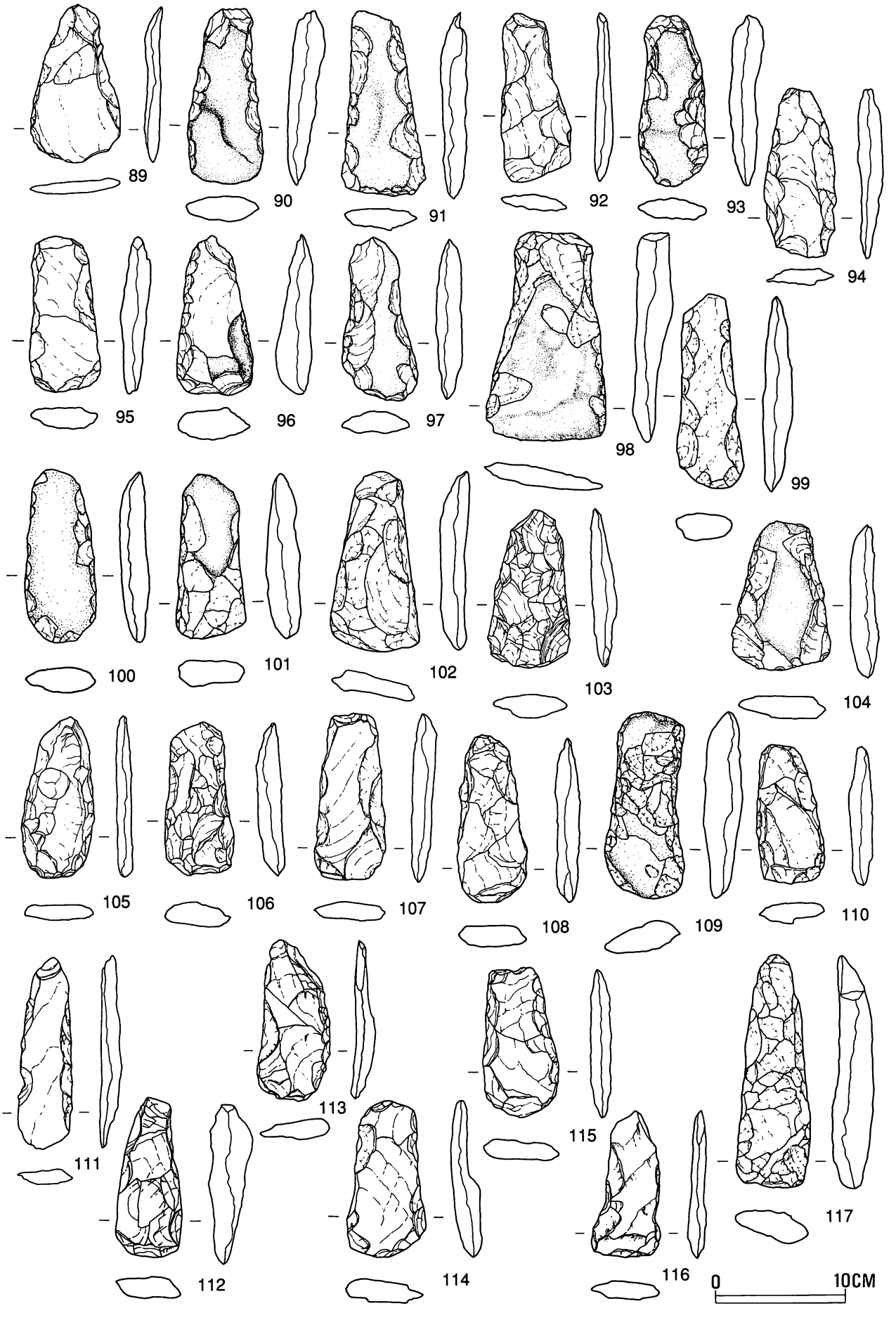
第175図　遺構外出土遺物17



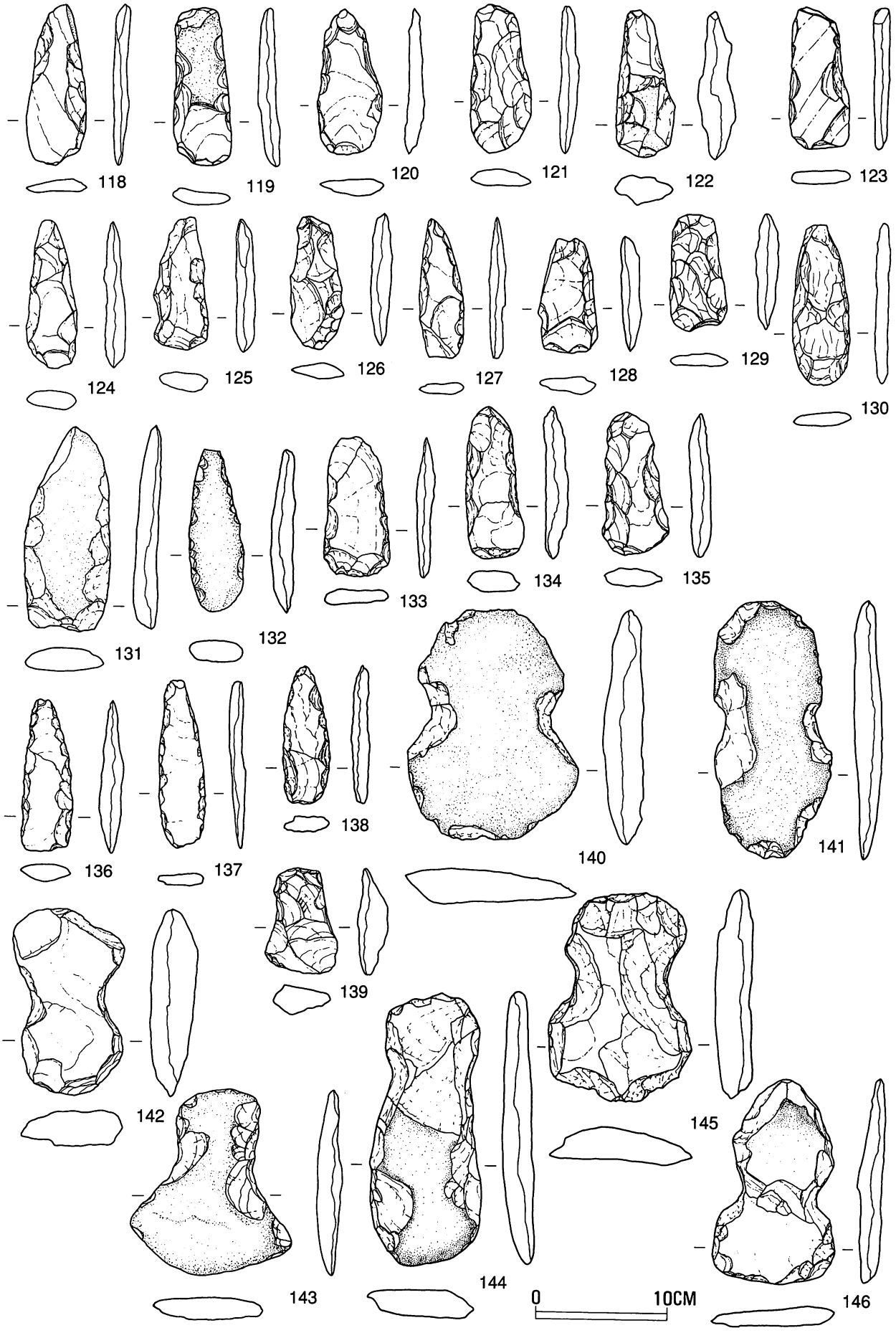
第176図　遺構外出土遺物18



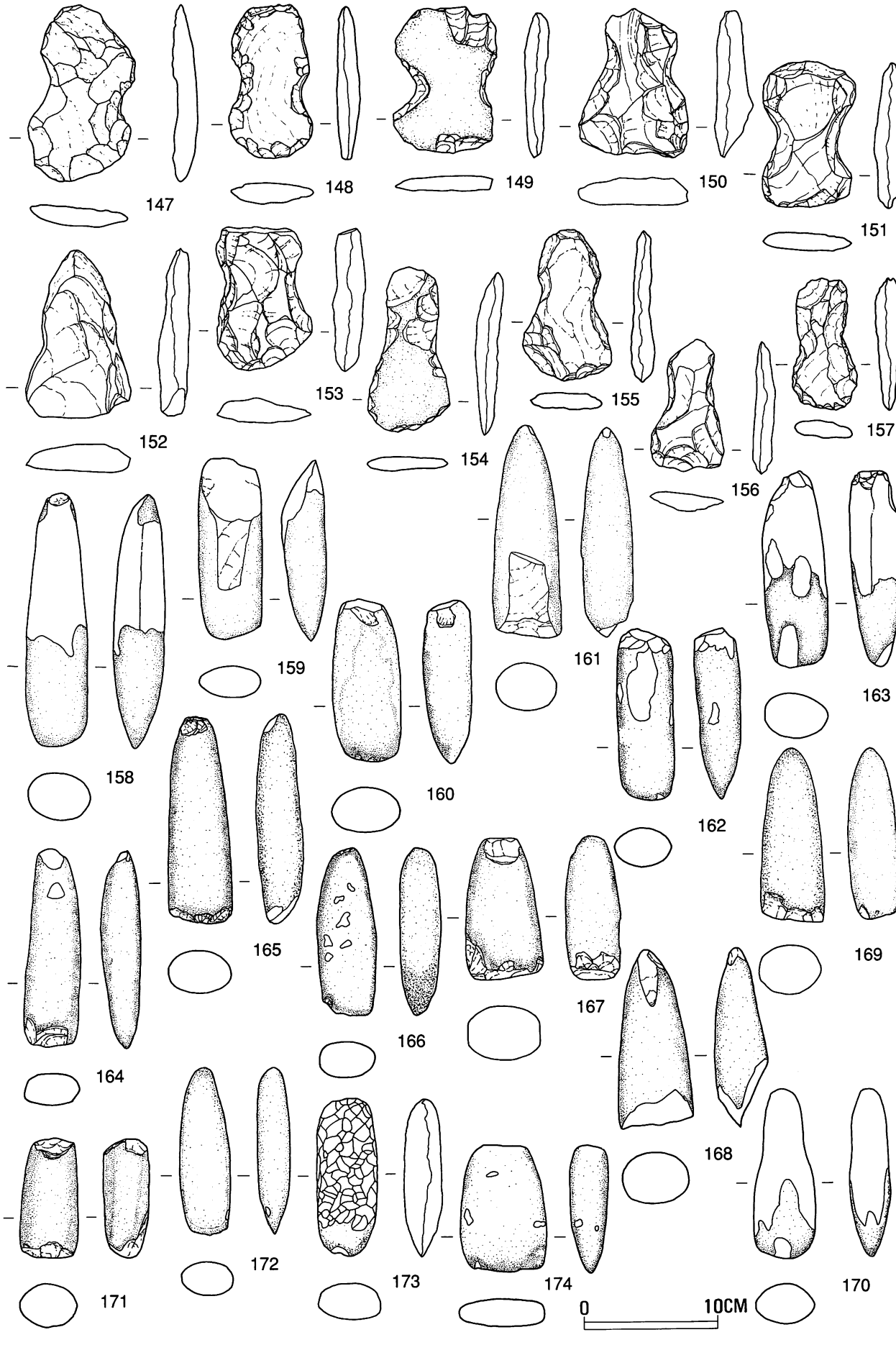
第177図　遺構外出土遺物19



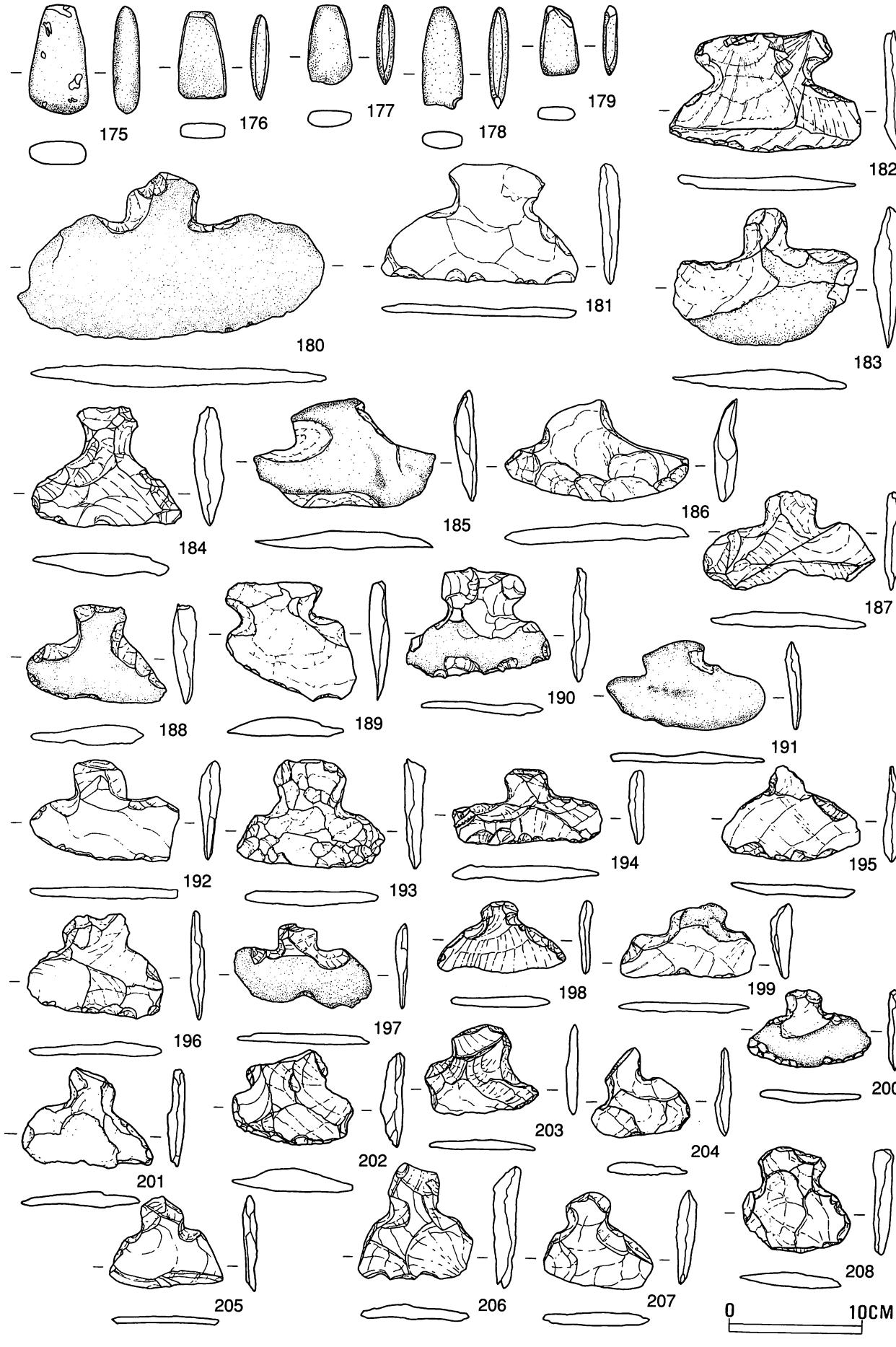
第178図　遺構外出土遺物20



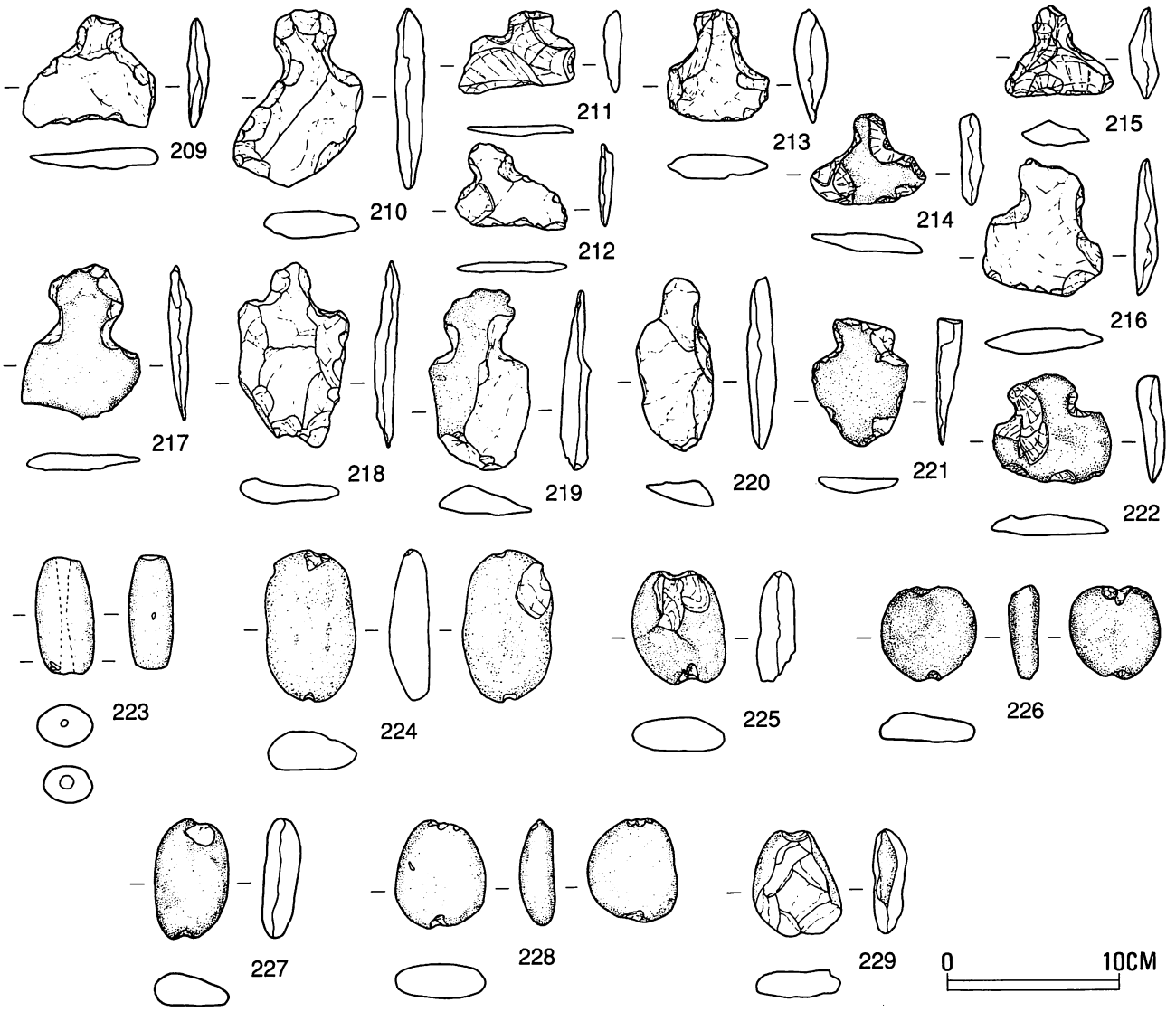
第179図　遺構外出土遺物21



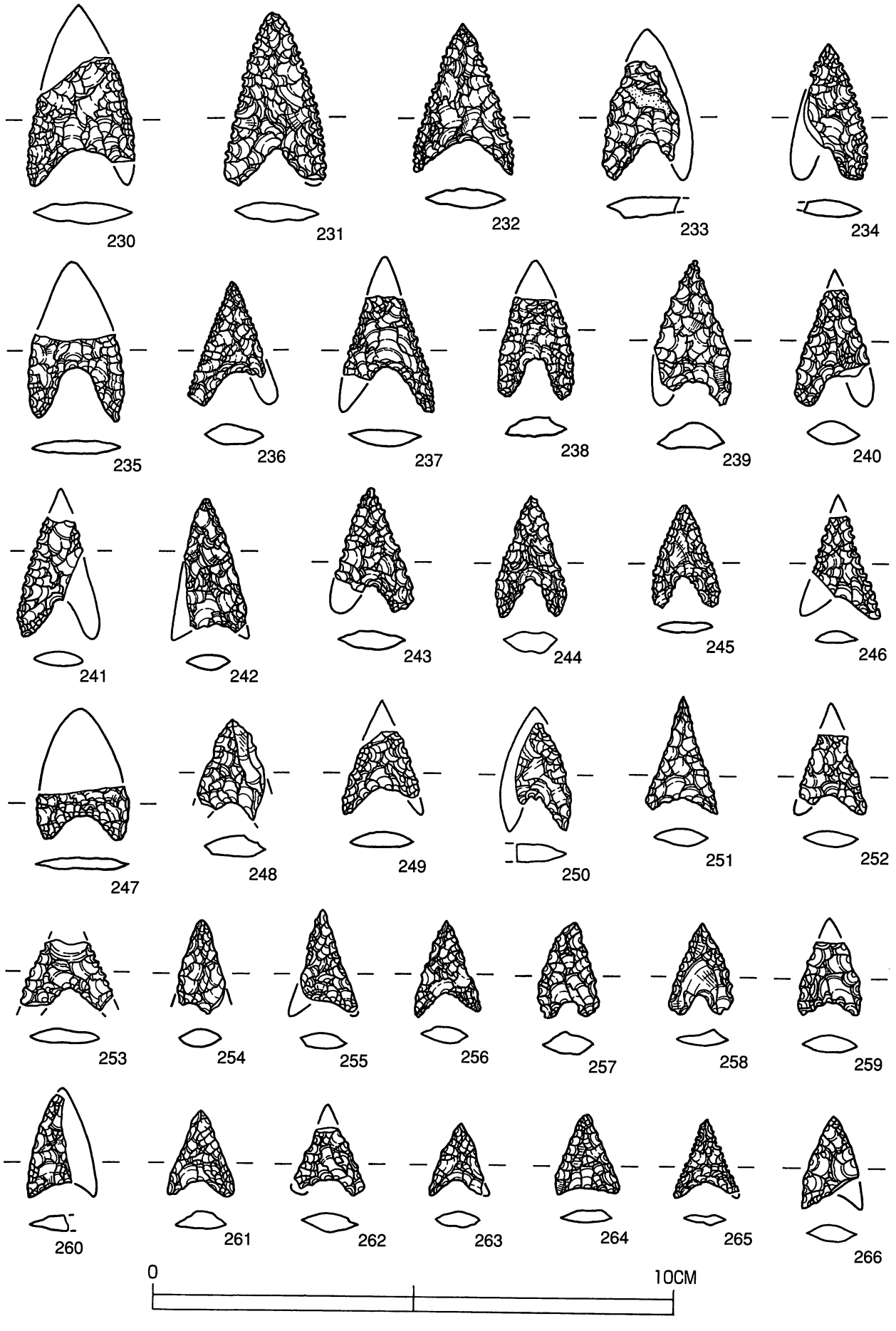
第180図　遺構外出土遺物22



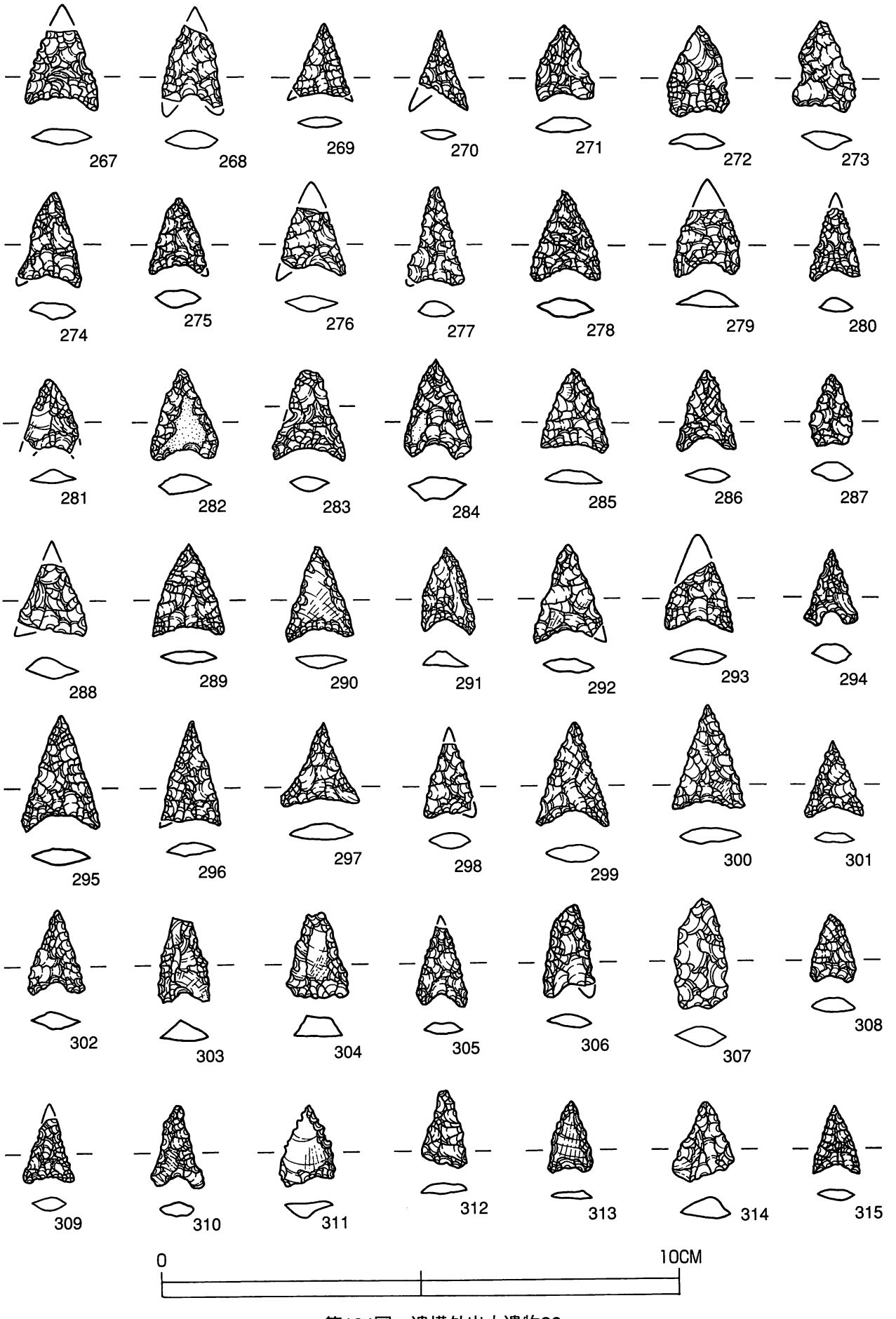
第181図　遺構外出土遺物23



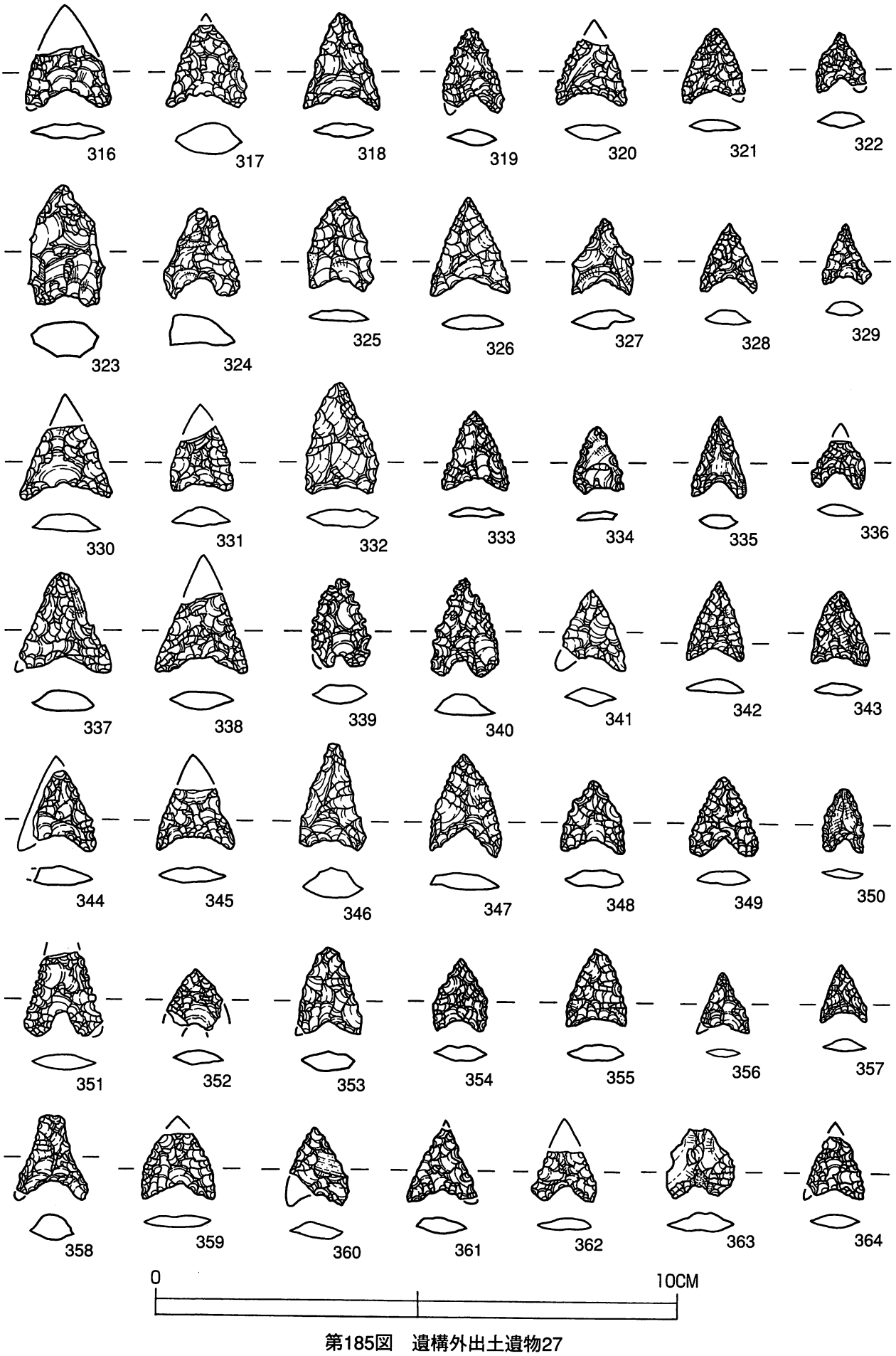
第182図　遺構外出土遺物24



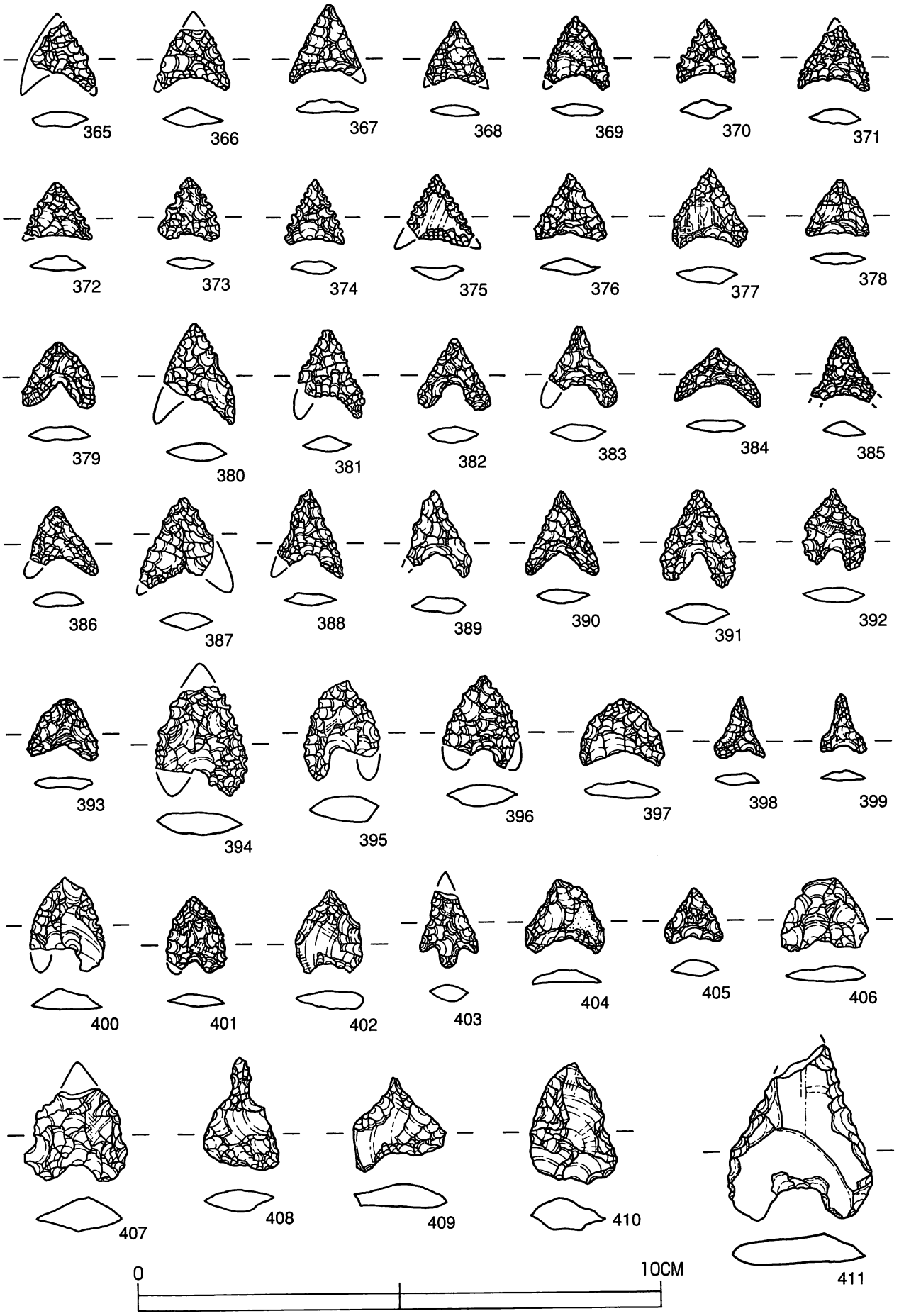
第183図　遺構外出土遺物25



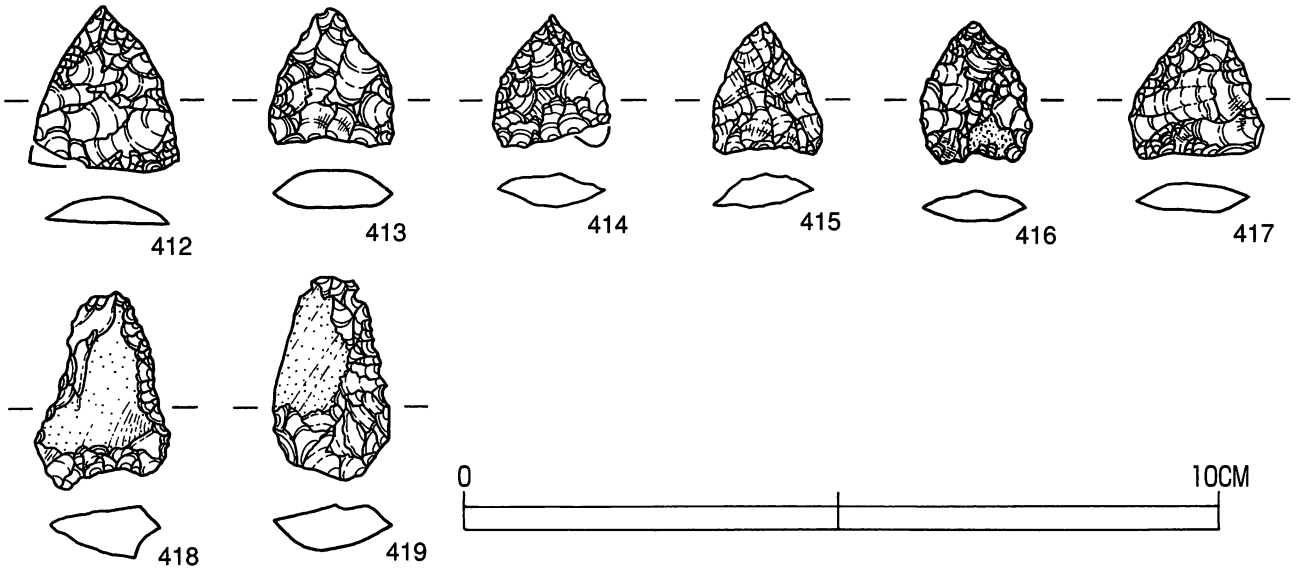
第184図　遺構外出土遺物26



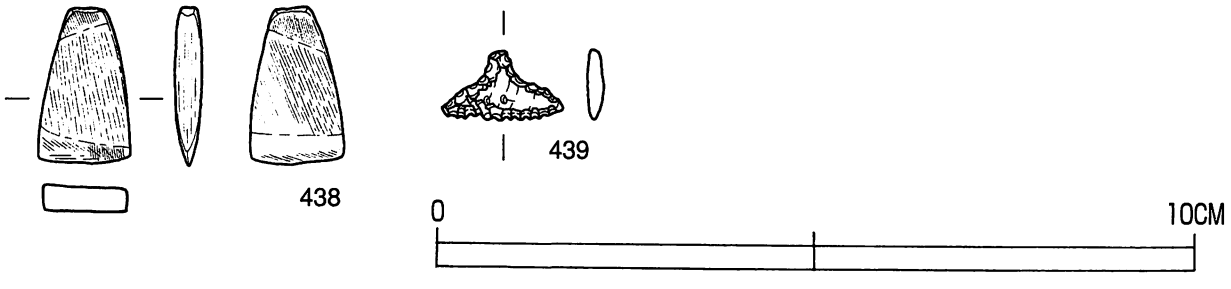
第185図　遺構外出土遺物27



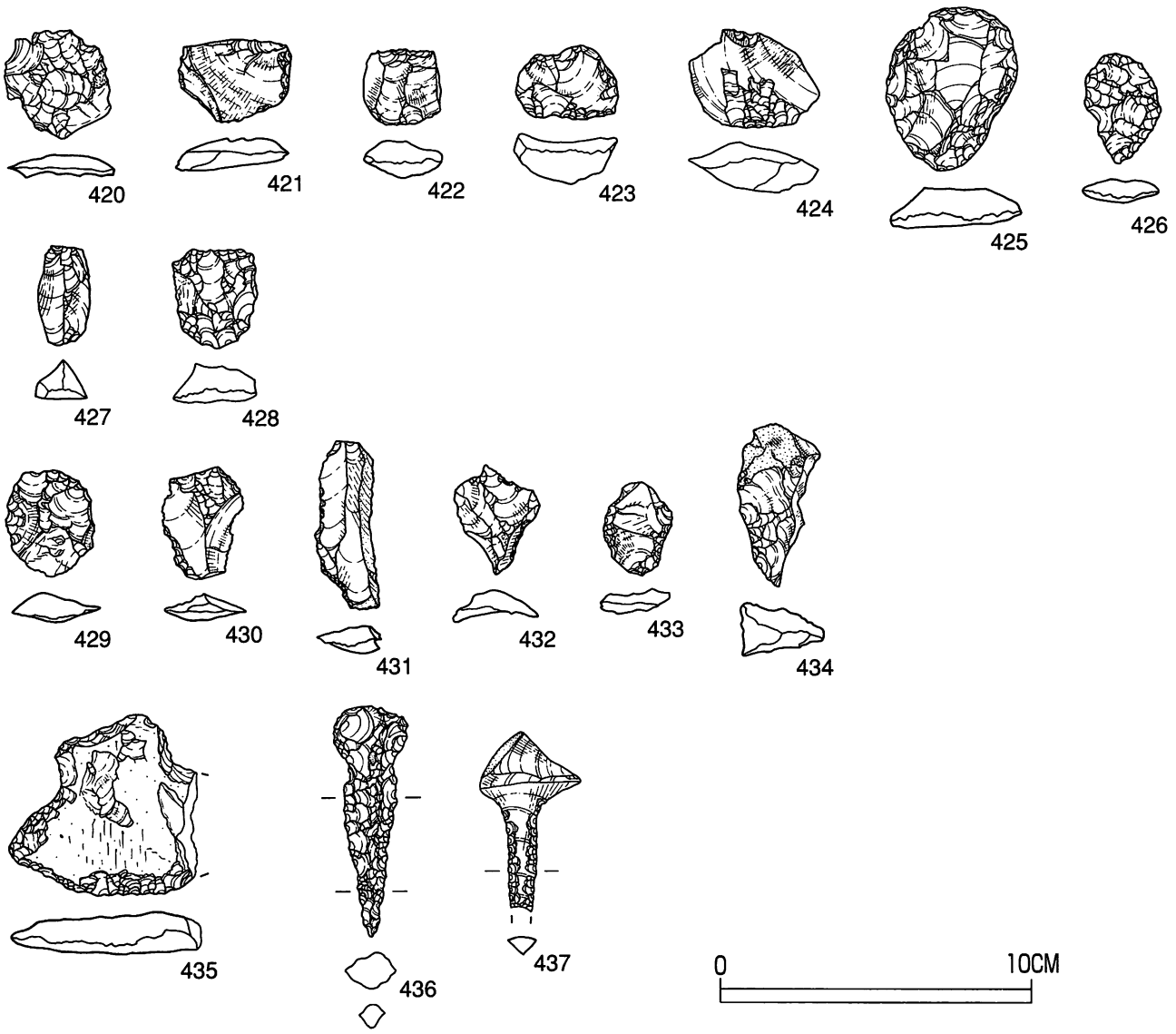
第186図　遺構外出土遺物28



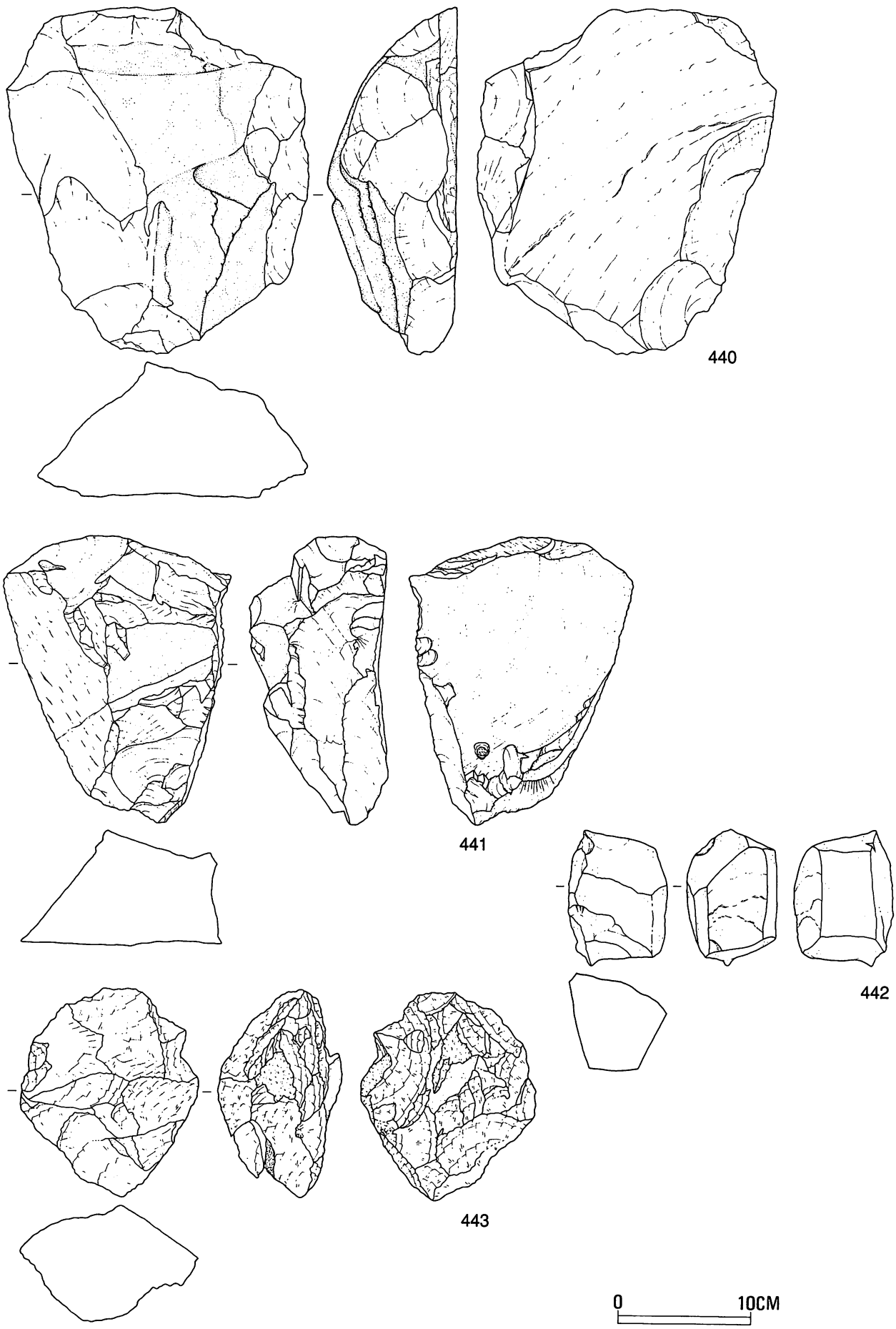
第187図　遺構外出土遺物29



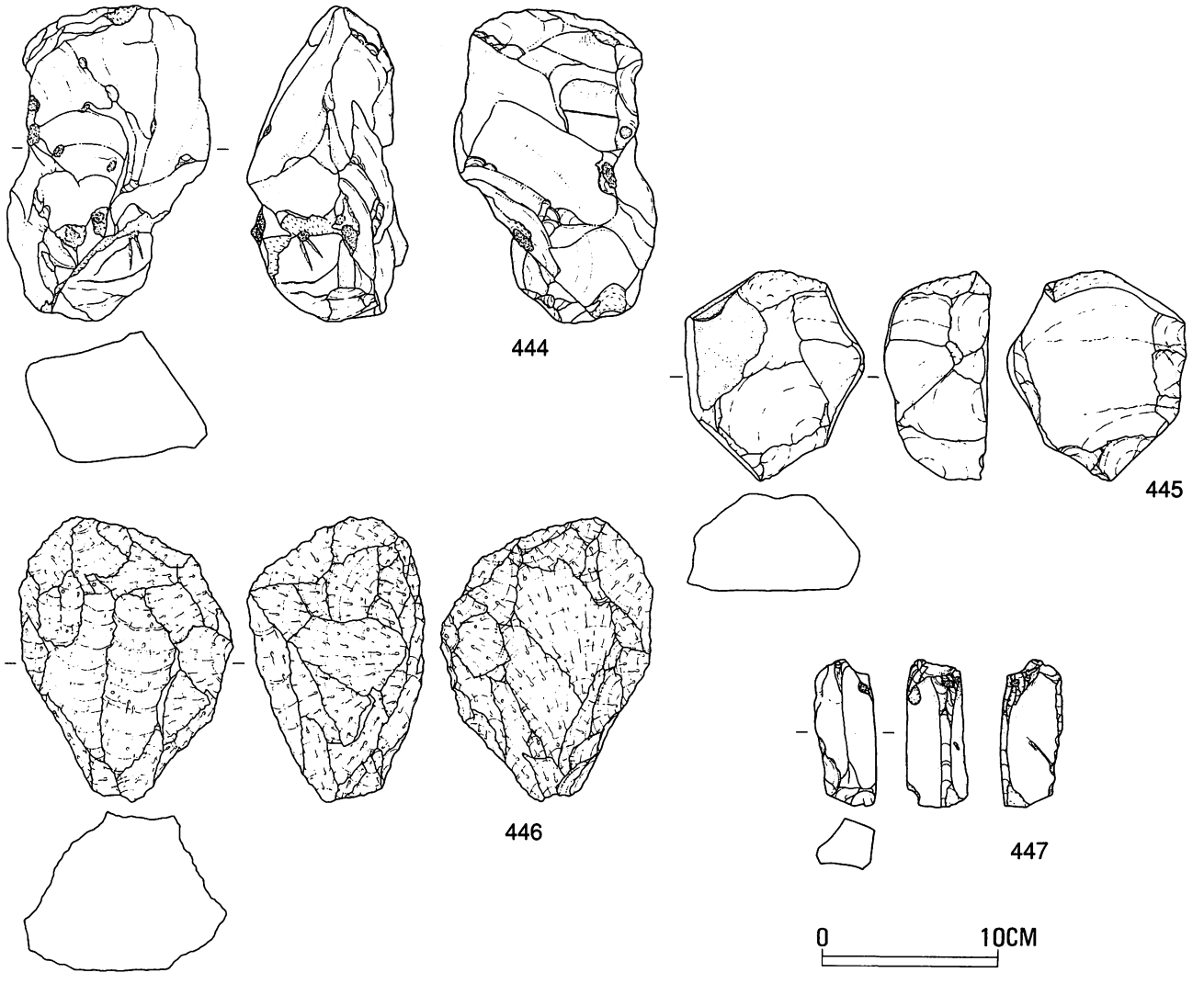
第188図　遺構外出土遺物30



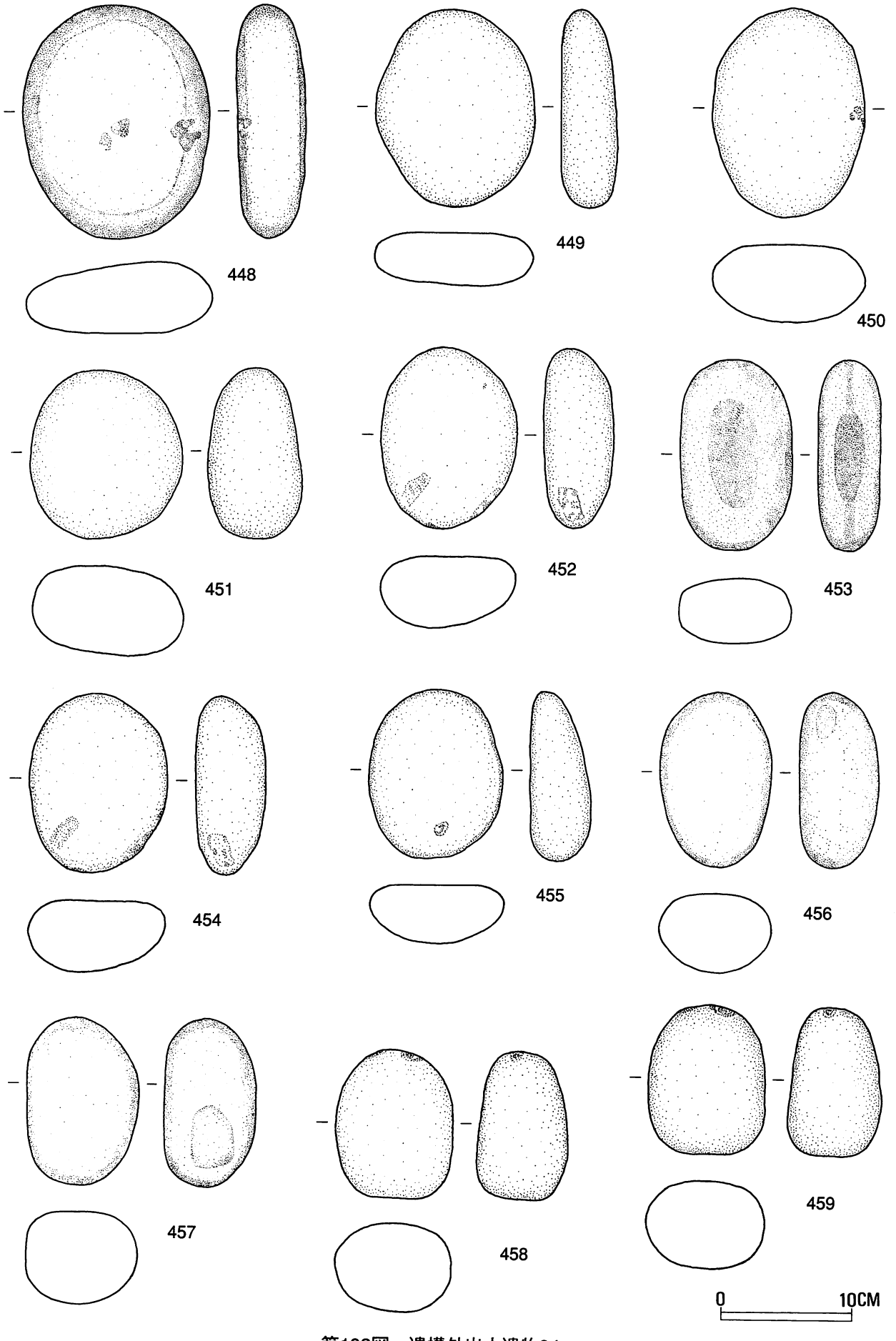
第189図　遺構外出土遺物31



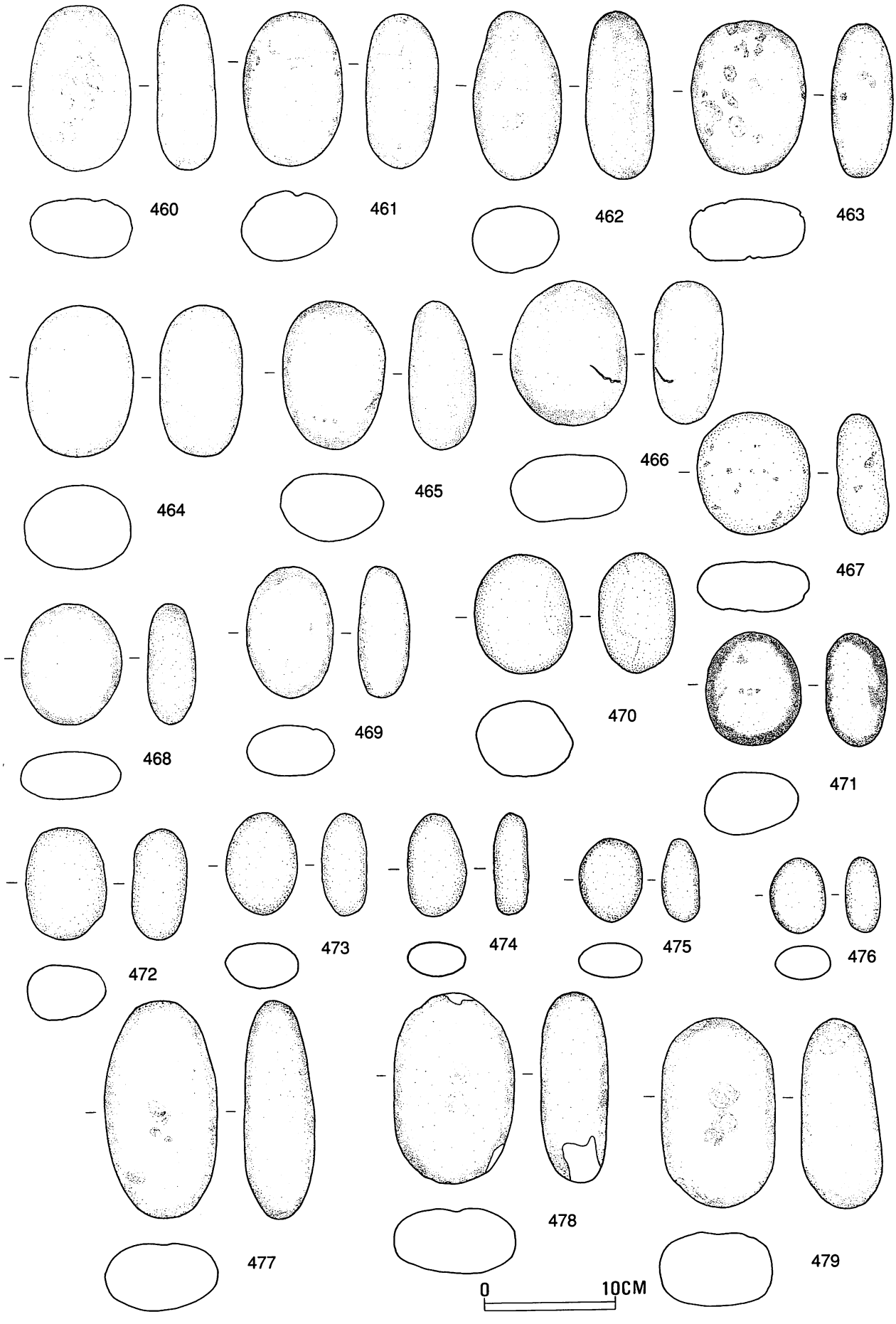
第190図　遺構外出土遺物32



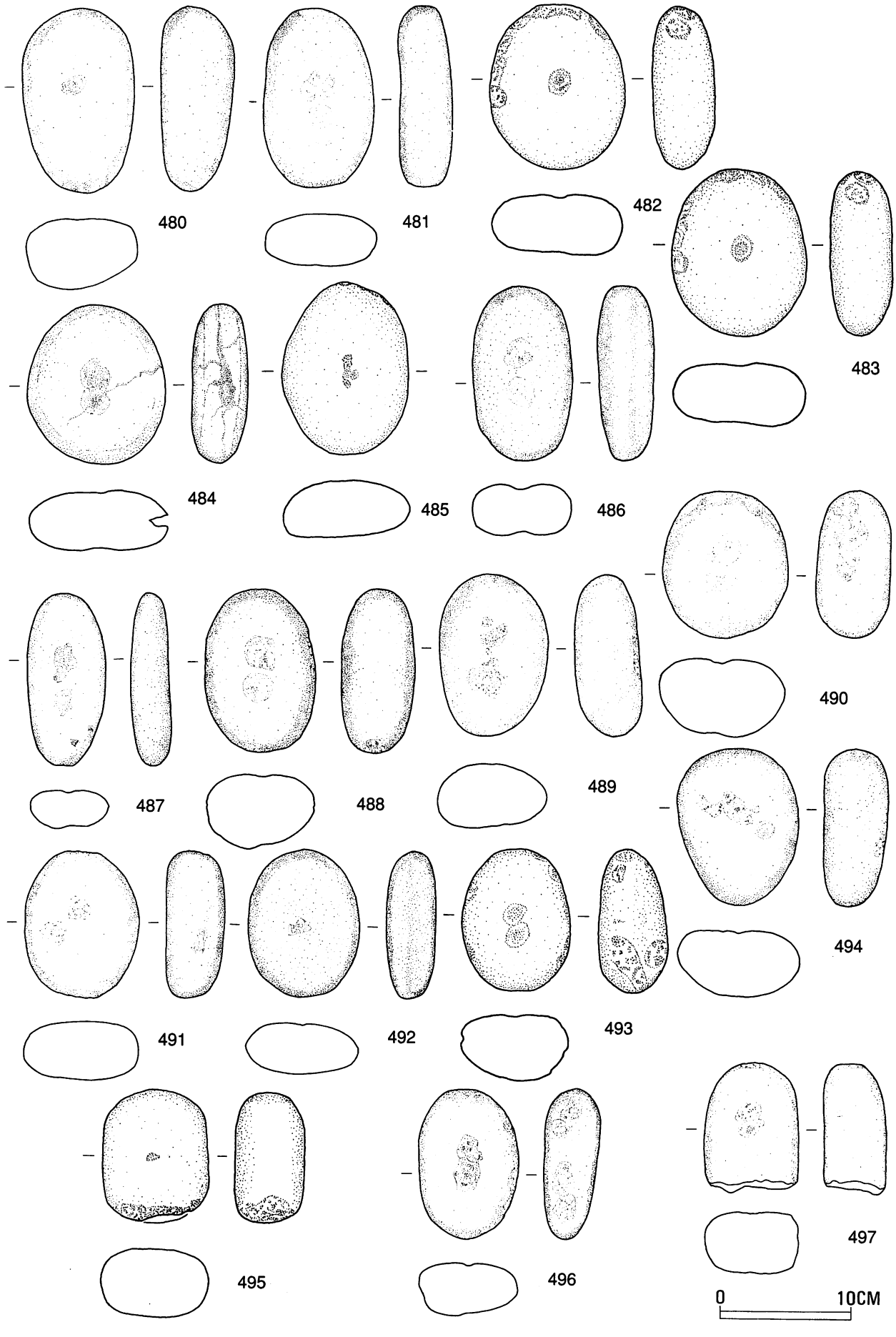
第191図　遺構外出土遺物33



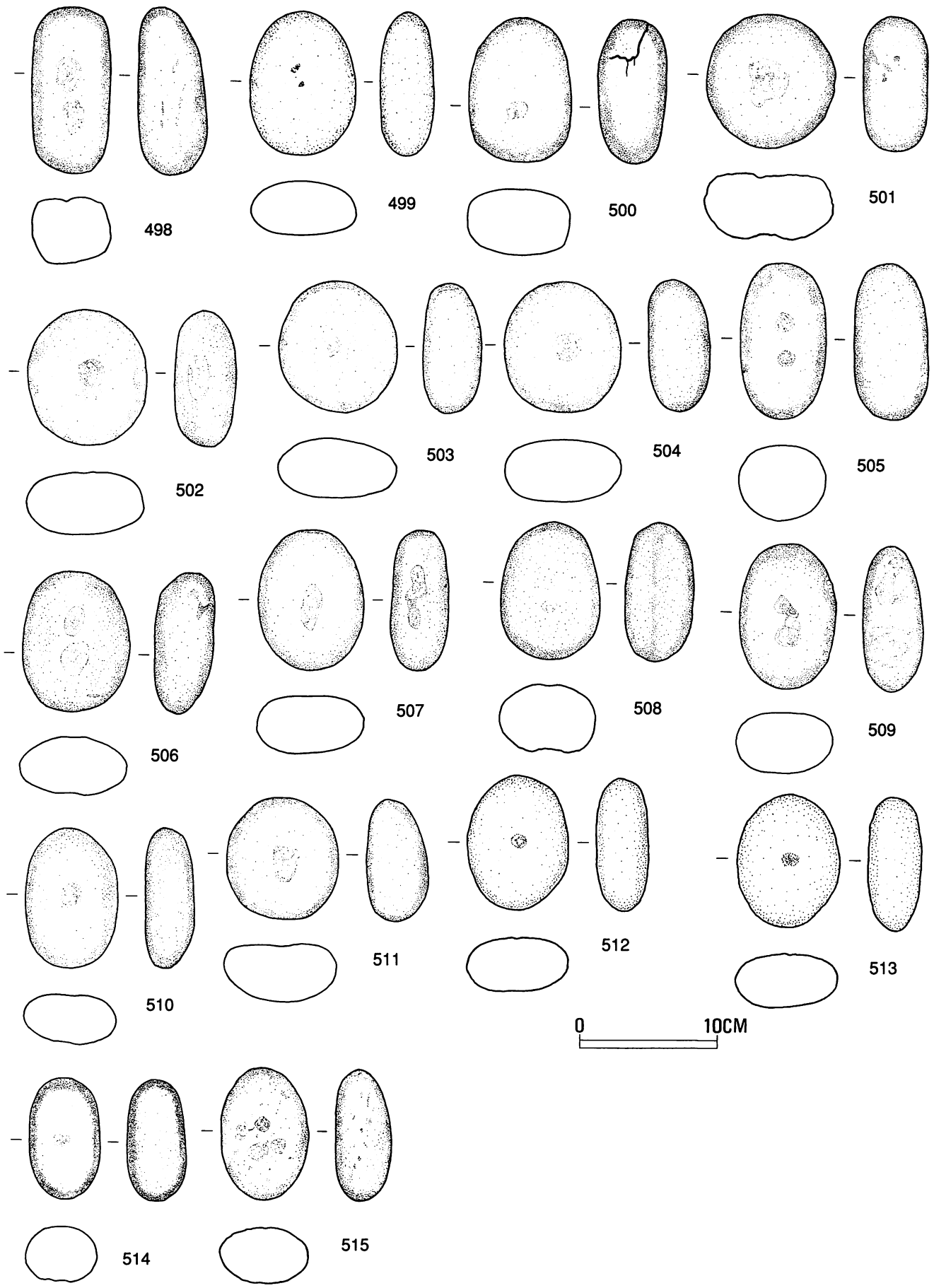
第192図　遺構外出土遺物34



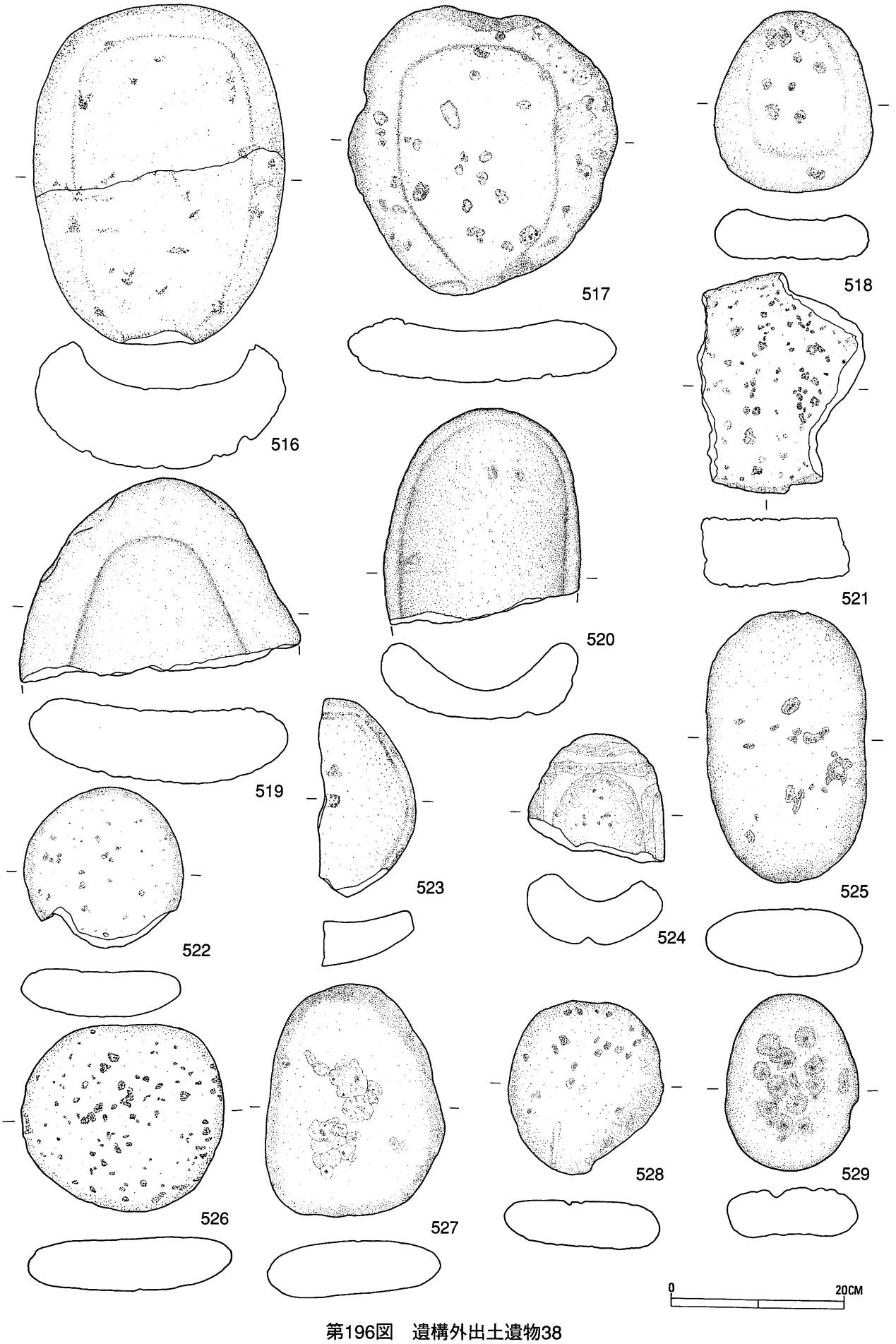
第193図　遺構外出土遺物35



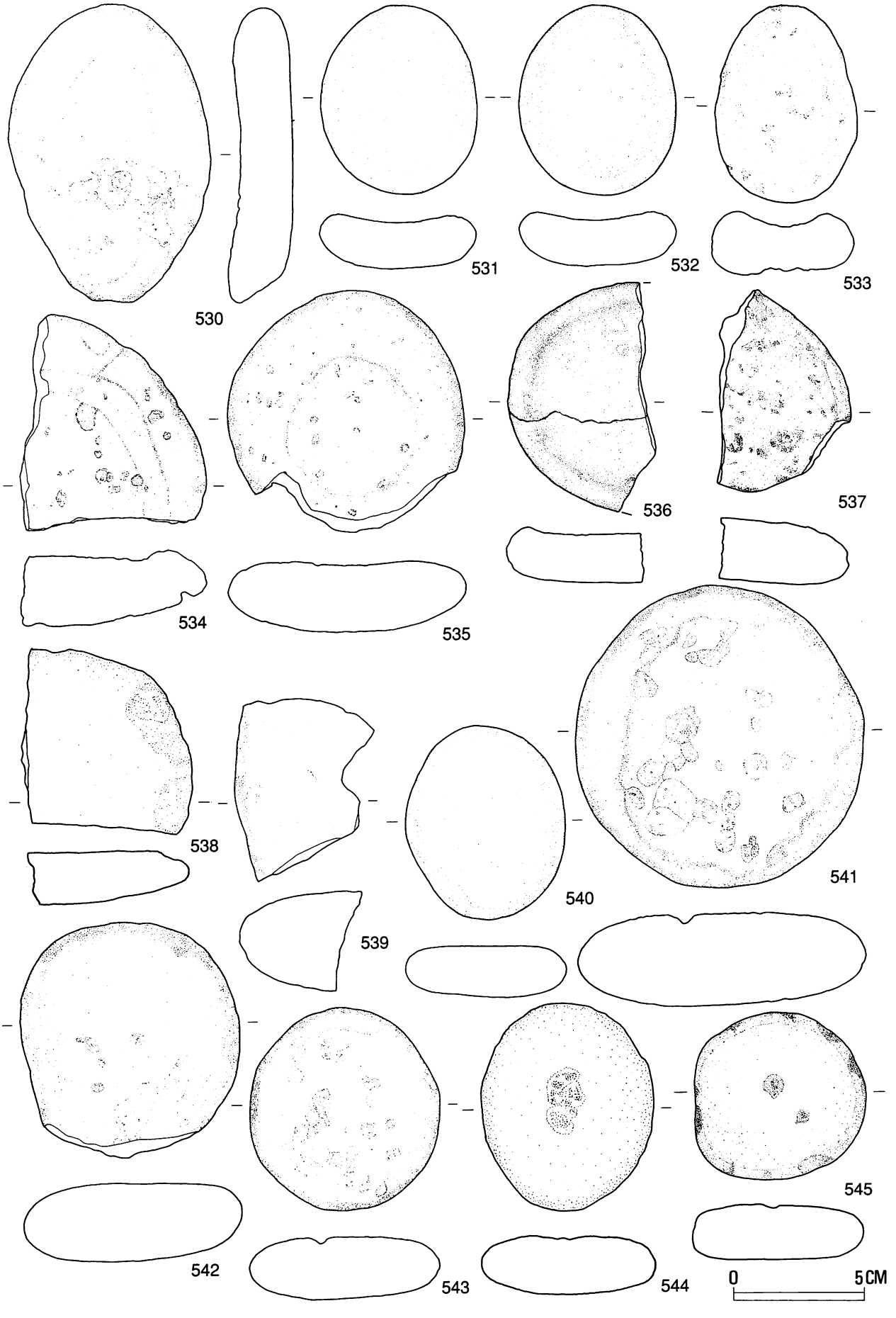
第194図　遺構外出土遺物36



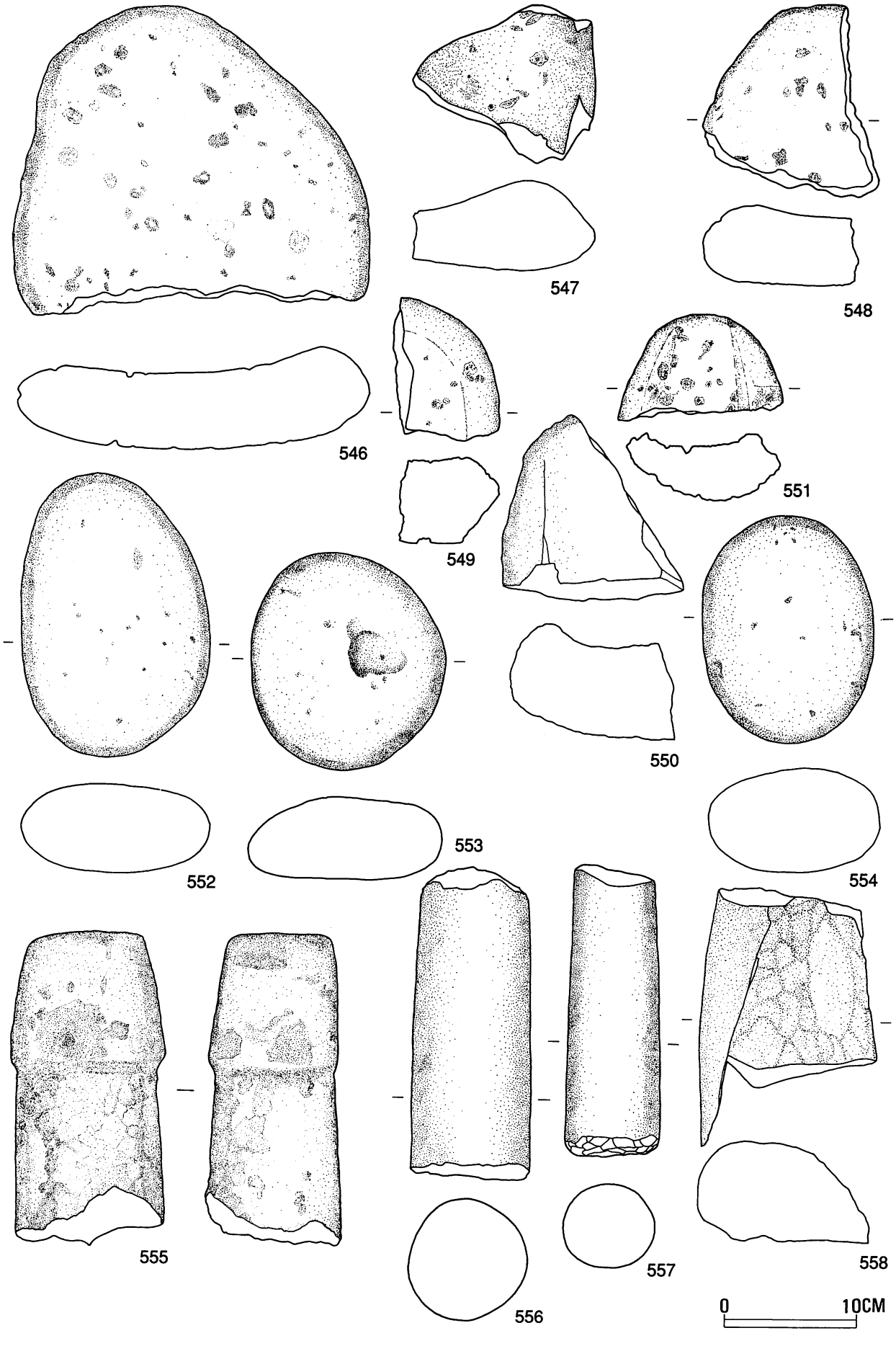
第195図　遺構外出土遺物37



第196図　遺構外出土遺物38



第197図　遺構外出土遺物39



第198図　遺構外出土遺物40

遺構外出土遺物一覧表（土器・土製品）その１

No	器　種	時　期	備　考
1	深鉢	称名寺	
2	深鉢	称名寺	
3	深鉢	称名寺	
4	深鉢	称名寺	
5	深鉢	称名寺	
6	蓋	称名寺	
7	深鉢	堀之内１古	
8	深鉢	堀之内１古	
9	注口土器	堀之内１古	
10	注口土器	堀之内１古	
11	注口土器	堀之内１古	
12	注口土器	堀之内１古	
13	深鉢	堀之内１古	
14	深鉢	堀之内１古	
15	深鉢	堀之内１古	
16	深鉢	堀之内１古	
17	深鉢	堀之内１古	
18	深鉢	堀之内１古	
19	深鉢	堀之内１新	
20	深鉢	堀之内１新	
21	深鉢	堀之内１新	
22	深鉢	堀之内１新	
23	深鉢	堀之内１新	
24	深鉢	堀之内１新	
25	深鉢	堀之内１新	
26	注口土器	堀之内２中	
27	深鉢	堀之内２中	
28	深鉢	堀之内２中	
29	深鉢	堀之内２中	
30	深鉢	堀之内２中	
31	深鉢	堀之内２中	
32	深鉢	堀之内２中	
33	深鉢	堀之内２中	
34	深鉢	堀之内２中	
35	深鉢	堀之内２新	
36	浅鉢	堀之内２新	
37	浅鉢	堀之内２新	
38	浅鉢	堀之内２新	
39	土偶	堀之内２新	
40	深鉢	堀之内２新	
41	深鉢	堀之内２新	
42	注口土器	堀之内２新	
43	注口土器	堀之内２新	
44	注口土器	堀之内２新	
45	注口土器	堀之内２新	
46	浅鉢	堀之内２新	
47	注口土器	加曽利Ｂ１	
48	注口土器	加曽利Ｂ１	
49	注口土器	加曽利Ｂ１	
50	注口土器	加曽利Ｂ１	
51	椀	加曽利Ｂ１	
52	椀	加曽利Ｂ１	
53	深鉢	加曽利Ｂ１	
54	深鉢	加曽利Ｂ１	
55	深鉢	加曽利Ｂ１	
56	深鉢	加曽利Ｂ１	
57	深鉢	加曽利Ｂ１	
58	深鉢	加曽利Ｂ１	
59	深鉢	加曽利Ｂ１	
60	深鉢	加曽利Ｂ１	
61	深鉢	加曽利Ｂ１	
62	深鉢	加曽利Ｂ１	
63	深鉢	加曽利Ｂ１	
64	深鉢	加曽利Ｂ１	
65	深鉢	加曽利Ｂ１	
66	深鉢	加曽利Ｂ１	
67	深鉢	加曽利Ｂ１	
68	深鉢	加曽利Ｂ１	
69	深鉢	加曽利Ｂ１	
70	深鉢	加曽利Ｂ１	
71	深鉢	加曽利Ｂ１	
72	深鉢	加曽利Ｂ１	
73	深鉢	加曽利Ｂ１	
74	深鉢	加曽利Ｂ１	
75	深鉢	加曽利Ｂ１	
76	深鉢	加曽利Ｂ１	
77	深鉢	加曽利Ｂ１	
78	深鉢	加曽利Ｂ１	
79	深鉢	加曽利Ｂ１	
80	深鉢	加曽利Ｂ１	

遺構外出土遺物一覧表（土器・土製品）その２

No	器　種	時　期	備　考
81	深鉢	加曽利Ｂ１	
82	深鉢	加曽利Ｂ１	
83	深鉢	加曽利Ｂ１	
84	深鉢	加曽利Ｂ１	
85	深鉢	加曽利Ｂ１	
86	浅鉢	加曽利Ｂ１	
87	深鉢	加曽利Ｂ１	
88	深鉢	加曽利Ｂ１	
89	深鉢	加曽利Ｂ１	
90	深鉢	加曽利Ｂ１	
91	深鉢	加曽利Ｂ１	
92	深鉢	加曽利Ｂ１	
93	深鉢	加曽利Ｂ１	
94	深鉢	加曽利Ｂ１	
95	深鉢	加曽利Ｂ１	
96	深鉢	加曽利Ｂ１	
97	深鉢	加曽利Ｂ１	
98	注口土器	加曽利Ｂ１	
99	注口土器	加曽利Ｂ１	
100	注口土器	加曽利Ｂ１	
101	注口土器	加曽利Ｂ１	
102	注口土器	加曽利Ｂ１	
103	深鉢	加曽利Ｂ２	
104	深鉢	加曽利Ｂ２	
105	深鉢	加曽利Ｂ２	
106	深鉢	加曽利Ｂ２	
107	深鉢	加曽利Ｂ２	
108	深鉢	加曽利Ｂ２	
109	深鉢	加曽利Ｂ２	
110	深鉢	加曽利Ｂ２	
111	深鉢	加曽利Ｂ２	
112	注口土器	加曽利Ｂ２	
113	深鉢	加曽利Ｂ２	
114	深鉢	加曽利Ｂ２	
115	深鉢	加曽利Ｂ２	
116	深鉢	加曽利Ｂ２	
117	深鉢	加曽利Ｂ２	
118	深鉢	加曽利Ｂ２	
119	深鉢	加曽利Ｂ２	
120	深鉢	加曽利Ｂ２	

No	器　種	時　期	備　考
121	深鉢	加曽利Ｂ２	
122	深鉢	加曽利Ｂ２	
123	深鉢	加曽利Ｂ２	
124	深鉢	加曽利Ｂ２	
125	深鉢	加曽利Ｂ２	
126	深鉢	加曽利Ｂ２	
127	深鉢	加曽利Ｂ２	
128	深鉢	加曽利Ｂ２	
129	深鉢	加曽利Ｂ２	
130	深鉢	加曽利Ｂ２	
131	深鉢	加曽利Ｂ２	
132	深鉢	加曽利Ｂ２	
133	深鉢	加曽利Ｂ２	
134	深鉢	加曽利Ｂ２	
135	深鉢	加曽利Ｂ２	
136	深鉢	加曽利Ｂ２	
137	深鉢	加曽利Ｂ２	
138	深鉢	加曽利Ｂ２	
139	深鉢	加曽利Ｂ２	
140	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
141	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
142	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
143	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
144	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
145	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
146	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
147	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
148	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
149	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
150	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
151	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
152	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
153	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
154	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
155	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
156	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
157	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
158	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
159	深鉢	加曽利Ｂ粗製	
160	深鉢	晩期	

遺構外出土遺物一覧表（土器・土製品）その３

No	器　種	時　期	備　　考
161	深鉢	氷	
162	土偶	晩期	表採
163	深鉢	後期	網代痕
164	深鉢	後期	網代痕
165	深鉢	後期	網代痕
166	深鉢	後期	網代痕
167	深鉢	後期	網代痕
168	深鉢	後期	網代痕
169	深鉢	後期	網代痕
170	釣手土器	曽利Ⅲ	

遺構外出土遺物一覧表（土製円盤）その１　cm・g

No	縦	横	厚	重量	備　考
1	6.8	6.7	1.4	69.3	
2	5.7	5.2	1.4	51.4	
3	5.7	4.9	1.1	42.1	
4	5.8	5.4	1.2	41.6	
5	5.5	5.5	1.4	36.5	
6	5.1	5.0	1.1	36.5	
7	5.3	5.0	0.95	35.8	
8	5.1	4.8	1.1	35.2	
9	5.4	4.6	1.1	35.0	
10	4.6	4.1	1.7	34.1	
11	4.8	5.0	0.9	31.5	
12	4.2	4.2	1.4	31.4	
13	4.6	4.7	1.4	31.0	
14	4.3	4.3	1.4	30.9	
15	5.5	4.8	1.0	30.8	
16	4.8	4.7	1.35	30.3	
17	4.3	4.8	1.2	29.8	
18	4.5	3.7	1.3	28.3	
19	4.5	4.4	1.0	25.9	
20	4.4	4.2	1.1	25.8	
21	4.8	4.1	1.0	24.8	
22	4.3	4.3	0.9	24.0	
23	4.9	4.5	1.0	23.8	
24	4.3	4.9	0.8	23.4	
25	4.0	4.6	0.9	23.1	
26	3.6	3.6	1.5	22.8	
27	4.2	4.5	1.1	22.6	
28	3.8	3.7	1.5	22.1	
29	4.0	3.8	1.0	21.1	
30	3.8	4.1	0.9	20.4	
31	3.4	3.7	1.1	18.8	
32	3.6	3.4	1.2	18.5	
33	3.7	3.4	1.3	18.5	
34	3.8	3.9	0.9	18.2	
35	3.8	3.7	1.1	18.1	
36	3.8	3.2	1.4	17.7	
37	3.4	3.9	0.9	17.2	
38	3.5	3.8	1.0	17.0	
39	4.3	4.0	0.7	16.6	
40	4.1	4.3	0.8	16.6	
41	3.9	4.0	0.95	16.5	
42	4.2	3.7	0.8	16.4	
43	3.8	4.8	1.0	16.1	
44	3.0	3.5	1.2	15.8	
45	3.7	3.6	1.1	15.7	
46	3.5	3.5	0.9	15.1	
47	3.3	3.8	1.1	14.9	
48	3.7	3.8	0.8	14.7	
49	3.7	3.6	1.0	14.3	
50	3.5	3.2	0.9	14.2	
51	3.2	3.1	1.0	14.2	
52	3.6	3.6	1.0	14.2	
53	4.0	3.9	0.7	14.0	
54	3.8	3.3	1.2	13.9	
55	3.7	3.2	1.1	13.8	
56	3.4	2.6	1.1	13.7	
57	3.0	3.0	1.1	12.9	
58	3.4	3.3	0.8	12.8	
59	3.5	3.8	0.9	12.6	
60	3.4	3.1	0.9	12.3	
61	3.2	3.5	0.7	12.1	
62	3.2	3.2	1.8	10.7	
63	3.5	3.7	0.7	10.5	
64	3.9	3.6	0.7	10.3	
65	3.0	3.6	0.8	9.6	
66	3.2	3.3	0.8	9.5	
67	3.8	3.6	0.8	9.3	

遺構外出土遺物一覧表（土製円盤）その２　cm・g

No	縦	横	厚	重量	備　考
68	3.1	3.2	0.8	9.0	
69	2.7	3.0	0.8	8.3	
70	3.6	3.2	0.7	7.9	
71	2.8	3.2	0.8	7.2	
72	3.1	3.0	0.8	7.1	
73	2.3	2.7	0.7	6.6	
74	2.8	2.9	0.8	6.1	
75	2.8	2.4	0.7	5.5	
76	6.5	6.1	1.4	69.5	
77	5.5	4.7	1.9	52.9	
78	5.3	5.2	1.4	52.7	
79	5.8	4.9	1.3	46.0	
80	4.6	4.8	1.2	42.2	
81	4.6	4.4	1.4	40.9	
82	4.3	4.4	1.6	37.4	
83	4.5	4.7	1.8	32.3	
84	4.4	4.3	1.4	31.6	
85	4.7	4.6	1.1	29.5	
86	4.8	5.0	1.0	29.3	
87	3.5	3.9	1.3	27.6	
88	4.2	4.0	1.2	26.7	
89	4.8	4.7	1.0	25.8	
90	4.0	4.0	0.9	24.8	
91	5.0	4.2	0.8	24.6	
92	4.6	3.9	1.0	24.5	
93	3.9	4.1	1.1	22.8	
94	3.8	3.9	1.4	22.6	
95	3.8	3.9	1.3	22.6	
96	3.7	3.9	1.2	21.9	
97	4.0	4.8	0.8	21.7	
98	3.5	3.8	1.5	21.5	
99	4.5	4.5	1.0	21.0	
100	3.1	3.4	1.3	20.4	
101	3.5	3.5	1.4	19.9	
102	4.5	4.0	0.9	19.7	
103	3.4	3.7	1.1	19.7	
104	4.6	4.5	0.7	17.8	
105	3.6	3.4	1.0	17.6	
106	3.5	3.3	1.4	17.1	
107	3.3	3.3	1.2	16.3	
108	3.2	3.2	1.2	16.3	
109	3.7	3.5	1.0	15.2	
110	3.0	3.4	1.3	14.8	
111	3.0	3.3	1.2	14.6	
112	3.7	3.9	0.9	13.1	
113	3.3	3.0	1.1	13.1	
114	3.6	3.6	1.0	12.6	
115	4.4	4.2	0.7	12.5	
116	3.2	3.8	1.0	12.4	
117	3.6	3.1	0.8	11.7	
118	3.9	3.8	0.7	11.3	
119	3.1	2.6	1.0	11.1	
120	2.9	3.5	0.7	10.8	
121	3.2	3.5	0.8	10.6	
122	3.0	2.8	0.9	10.2	
123	3.1	3.2	1.0	10.2	
124	3.5	3.1	0.8	9.3	
125	2.7	2.9	0.8	8.1	
126	3.4	3.1	0.8	7.9	
127	3.0	3.0	0.7	7.6	
128	2.6	2.6	2.1	7.5	
129	2.9	2.5	0.7	6.5	
130	2.3	1.9	0.9	4.9	

遺構外出土遺物（打製石斧）その１　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
1	16.1	6.4	3.2	安山岩
2	15.3	6.8	3.5	安山岩
3	14.5	6.0	2.0	ホルンフェルス
4	15.7	6.6	2.2	結晶片岩
5	16.6	5.8	2.1	ホルンフェルス
6	15.7	5.3	2.3	粘板岩
7	14.0	6.1	2.3	結晶片岩
8	14.3	5.3	1.7	結晶片岩
9	13.6	5.6	1.7	粘板岩
10	11.6	6.8	2.3	ホルンフェルス
11	13.0	4.9	2.2	粘板岩
12	13.5	5.7	1.9	結晶片岩
13	15.1	5.1	2.2	粘板岩
14	12.0	6.0	2.3	粘板岩

遺構外出土遺物（打製石斧）その２　　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
15	11.8	5.8	2.3	ホルンフェルス
16	13.1	5.0	1.9	ホルンフェルス
17	13.9	5.2	1.3	粘板岩
18	12.5	5.4	2.1	結晶片岩
19	15.0	5.8	2.4	ホルンフェルス
20	14.3	5.2	2.7	ホルンフェルス
21	13.9	5.4	2.3	結晶片岩
22	12.6	5.1	1.7	結晶片岩
23	12.3	4.7	2.5	粘板岩
24	13.5	5.2	2.4	結晶片岩
25	11.8	5.0	2.2	結晶片岩
26	12.6	4.8	2.3	結晶片岩
27	12.7	5.2	1.8	粘板岩
28	12.3	5.1	1.7	ホルンフェルス
29	12.0	4.8	1.4	粘板岩
30	13.5	5.5	2.2	粘板岩
31	13.0	5.3	2.0	粘板岩
32	12.5	5.3	1.8	粘板岩
33	12.1	4.9	1.3	粘板岩
34	12.2	5.0	1.3	ホルンフェルス
35	12.1	4.9	4.9	ホルンフェルス
36	12.2	4.4	2.0	結晶片岩
37	12.6	4.5	1.6	結晶片岩
38	11.6	4.8	1.6	結晶片岩
39	11.5	4.9	1.6	結晶片岩
40	11.4	4.8	1.8	ホルンフェルス
41	10.4	5.1	1.9	粘板岩
42	11.0	5.2	1.4	結晶片岩
43	11.2	4.6	1.7	ホルンフェルス
44	10.7	5.3	1.9	粘板岩
45	12.1	5.4	1.9	結晶片岩
46	13.2	5.0	1.5	結晶片岩
47	12.2	4.2	2.1	結晶片岩
48	12.3	5.6	1.8	結晶片岩
49	13.1	5.0	2.3	粘板岩
50	12.1	5.6	2.1	ホルンフェルス
51	12.1	4.6	1.9	粘板岩
52	13.0	4.2	2.4	結晶片岩
53	11.4	4.9	2.2	ホルンフェルス
54	11.8	4.4	2.3	粘板岩

No	長さ	幅	厚	石　材
55	11.0	5.0	2.2	ホルンフェルス
56	10.7	5.1	1.5	ホルンフェルス
57	10.0	5.1	1.7	ホルンフェルス
58	10.8	4.6	1.5	ホルンフェルス
59	9.5	4.8	1.8	粘板岩
60	10.6	4.6	1.6	ホルンフェルス
61	10.9	5.0	1.7	ホルンフェルス
62	10.2	4.8	1.5	粘板岩
63	9.9	3.8	2.1	ホルンフェルス
64	11.0	4.5	2.1	粘板岩
65	11.5	4.5	2.0	結晶片岩
66	10.8	5.0	1.7	ホルンフェルス
67	12.4	4.9	1.5	結晶片岩
68	10.0	4.7	1.7	結晶片岩
69	10.7	4.5	1.3	ホルンフェルス
70	11.4	4.5	1.6	結晶片岩
71	10..0	4.4	1.6	粘板岩
72	10.8	3.7	1.4	粘板岩
73	11.0	3.4	1.0	粘板岩
74	9.6	3.5	1.3	粘板岩
75	7.8	4.2	1.1	粘板岩
76	12.1	5.3	1.6	安山岩
77	14.2	4.6	1.5	結晶片岩
78	11.8	5.3	1.8	結晶片岩
79	10.6	4.5	1.1	ホルンフェルス
80	10.0	4.8	1.9	ホルンフェルス
81	16.0	7.2	2.1	結晶片岩
82	15.6	6.7	2.4	ホルンフェルス
83	12.8	7.9	2.4	粘板岩
84	14.3	5.6	2.1	結晶片岩
85	12.7	6.3	2.4	ホルンフェルス
86	12.7	7.2	1.7	粘板岩
87	13.3	6.6	2.4	粘板岩
88	12.8	6.2	1.7	ホルンフェルス
89	12.0	7.0	1.1	ホルンフェルス
90	13.4	5.9	2.6	ホルンフェルス
91	14.1	6.6	2.1	粘板岩
92	13.0	6.4	1.4	粘板岩
93	13.2	5.3	2.4	ホルンフェルス
94	12.8	5.6	2.0	粘板岩

遺構外出土遺物（打製石斧）その３　　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
95	11.7	5.5	2.0	結晶片岩
96	12.2	5.5	2.8	粘板岩
97	12.2	5.8	2.1	ホルンフェルス
98	16.0	9.2	2.7	ホルンフェルス
99	14.6	5.0	2.3	結晶片岩
100	13.2	5.6	2.0	結晶片岩
101	12.6	5.2	2.6	ホルンフェルス
102	13.9	6.8	2.2	結晶片岩
103	12.1	6.4	1.9	ホルンフェルス
104	11.6	7.6	2.2	粘板岩
105	12.2	5.4	1.3	結晶片岩
106	11.6	5.1	1.9	結晶片岩
107	12.8	5.5	1.7	結晶片岩
108	12.9	5.3	1.9	結晶片岩
109	14.3	5.9	2.8	粘板岩
110	10.6	5.1	1.9	粘板岩
111	14.4	4.2	1.5	結晶片岩
112	12.3	5.0	3.1	粘板岩
113	12.3	5.3	1.5	ホルンフェルス
114	12.0	6.1	2.1	結晶片岩
115	11.2	5.7	1.4	粘板岩
116	11.3	5.2	1.3	結晶片岩
117	17.9	5.6	3.2	安山岩
118	12.0	4.5	1.2	結晶片岩
119	11.8	4.4	1.4	結晶片岩
120	11.0	4.9	1.3	ホルンフェルス
121	11.2	4.6	1.3	結晶片岩
122	11.0	4.5	2.7	ホルンフェルス
123	20.6	4.5	1.2	結晶片岩
124	11.1	4.8	1.5	結晶片岩
125	9.8	4.1	1.4	粘板岩
126	9.8	4.1	1.5	ホルンフェルス
127	10.3	3.5	1.2	ホルンフェルス
128	8.5	4.3	1.4	結晶片岩
129	8.7	4.2	1.7	結晶片岩
130	11.9	4.3	1.1	結晶片岩
131	15.4	6.4	1.7	結晶片岩
132	12.1	4.1	1.6	ホルンフェルス
133	10.6	5.1	1.4	ホルンフェルス
134	11.4	4.4	1.7	結晶片岩
135	10.6	5.2	1.5	ホルンフェルス
136	11.6	3.7	1.7	ホルンフェルス
137	12.6	3.7	1.1	粘板岩
138	11.4	3.6	1.4	粘板岩
139	7.8	5.5	2.4	粘板岩
140	17.2	13.1	3.0	硬質砂岩
141	14.3	13.9	2.3	ホルンフェルス
142	14.0	8.4	3.5	結晶片岩
143	13.7	11.7	1.9	結晶片岩
144	20.4	8.4	2.2	結晶片岩
145	15.7	10.8	2.7	粘板岩
146	15.6	9.3	1.9	結晶片岩
147	12.9	7.8	1.6	結晶片岩
148	11.4	6.3	1.7	ホルンフェルス
149	10.9	7.8	1.7	凝灰岩
150	11.0	8.3	2.7	粘板岩
151	10.9	7.0	2.0	ホルンフェルス
152	12.5	8.0	2.3	結晶片岩
153	10.6	7.2	2.4	ホルンフェルス
154	12.2	6.1	1.7	結晶片岩
155	11.3	6.6	1.6	結晶片岩
156	9.7.	5.4	1.4	結晶片岩
157	9.7	4.8	1.8	硬質砂岩

遺構外出土遺物（磨製石斧）その１　　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
158	18.9	4.8	3.8	硬質砂岩
159	13.1	4.6	3.4	硬質砂岩
160	12.1	5.3	3.8	硬質砂岩
161	15.8	5.1	3.9	硬質砂岩
162	12.8	4.1	3.4	硬質砂岩
163	14.6	4.6	3.9	硬質砂岩
164	14.7	4.2	3.0	硬質砂岩
165	15.5	4.8	3.4	硬質砂岩
166	12.5	4.4	3.0	硬質砂岩
167	10.6	5.9	4.2	硬質砂岩
168	13.1	5.6	3.8	硬質砂岩
169	13.0	4.8	3.2	硬質砂岩
170	12.6	4.7	3.6	硬質砂岩
171	9.1	4.3	2.4	硬質砂岩

遺構外出土遺物（磨製石斧）その２　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
172	12.6	3.8	2.8	硬質砂岩
173	11.8	4.6	2.9	硬質砂岩
174	9.5	6.5	2.0	蛇紋岩
175	8.1	4.4	1.3	硬質砂岩
176	6.4	3.4	1.4	粘板岩
177	5.9	3.2	1.5	碧玉
178	7.4	3.1	1.5	蛇紋岩
179	5.1	2.9	0.9	蛇紋岩

遺構外出土遺物（石匙）　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
180	12.4	22.2	1.7	ホルンフェルス
181	8.7	15.0	0.7	結晶片岩
182	8.9	14.2	1.3	ホルンフェルス
183	10.2	13.4	2.1	ホルンフェルス
184	8.9	10.8	2.1	ホルンフェルス
185	8.0	13.7	1.5	結晶片岩
186	7.4	13.8	1.7	結晶片岩
187	5.7	13.0	1.3	粘板岩
188	7.0	9.4	1.8	ホルンフェルス
189	8.5	10.9	1.4	ホルンフェルス
190	7.8	11.8	1.2	結晶片岩
191	6.4	11.0	1.0	結晶片岩
192	7.5	10.8	1.6	結晶片岩
193	7.8	11.4	1.6	結晶片岩
194	5.4	10.4	1.2	ホルンフェルス
195	7.0	10.1	1.3	ホルンフェルス
196	7.6	10.1	1.0	結晶片岩
197	5.7	9.3	0.9	硬質砂岩
198	5.4	9.8	0.8	粘板岩
199	5.6	9.0	1.5	粘板岩
200	5.7	9.8	0.8	泥岩
201	7.2	9.2	1.3	結晶片岩
202	7.1	8.2	1.6	粘板岩
203	6.6	7.3	0.8	ホルンフェルス
204	6.6	8.5	1.1	ホルンフェルス
205	6.7	8.3	1.1	ホルンフェルス
206	8.7	8.2	2.0	ホルンフェルス
207	7.0	8.0	1.4	ホルンフェルス
208	7.9	7.6	1.4	粘板岩
209	6.0	6.7	1.3	結晶片岩
210	9.8	6.7	1.7	粘板岩
211	4.2	6.6	1.1	結晶片岩
212	4.9	6.3	0.8	ホルンフェルス
213	6.4	5.7	1.8	粘板岩
214	5.3	6.5	1.3	ホルンフェルス
215	5.1	6.2	1.6	泥岩
216	7.7	7.0	1.3	ホルンフェルス
217	8.8	6.7	1.2	硬質砂岩
218	10.0	6.4	1.2	硬質砂岩
219	10.3	5.8	1.6	ホルンフェルス
220	9.8	4.3	1.6	結晶片岩
221	7.3	5.4	1.4	硬質砂岩
222	6.2	6.8	1.3	ホルンフェルス

遺構外出土遺物（垂飾類）　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
223	6.6	3.4	2.6	凝灰岩

遺構外出土遺物（石垂）　cm

No	長さ	幅	厚	石　材
224	8.6	5.0	2.1	粘板岩
225	5.4	5.4	2.2	粘板岩
226	5.3	5.4	1.7	凝灰岩
227	6.8	4.2	2.0	粘板岩
228	6.4	6.1	2.0	凝灰岩
229	6.0	5.9	1.9	粘板岩

遺構外出土遺物（石鏃）その１　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
230	—	—	3.60	—	黒曜石
231	3.35	1.95	0.40	2.0	黒曜石
232	2.80	1.95	0.38	1.2	黒曜石
233	—	—	0.35	—	黒曜石
234	—	—	0.38	—	黒曜石
235	—	—	0.28	—	黒曜石
236	—	—	0.40	—	黒曜石
237	—	—	0.32	—	黒曜石
238	—	1.47	0.36	—	黒曜石
239	—	—	1.07	—	黒曜石

遺構外出土遺物（石鏃）その２　　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
240	—	—	0.48	—	黒曜石
241	—	—	0.31	—	黒曜石
242	—	—	0.48	—	黒曜石
243	—	—	0.34	—	黒曜石
244	2.30	1.40	0.39	0.7	黒曜石
245	1.90	1.28	0.18	0.3	黒曜石
246	—	—	0.24	—	黒曜石
247	—	—	0.22	—	黒曜石
248	—	—	0.40	—	黒曜石
249	—	—	0.30	—	黒曜石
250	—	—	0.34	—	黒曜石
251	2.08	1.33	0.30	0.5	黒曜石
252	—	—	0.39	—	黒曜石
253	—	—	0.25	—	黒曜石
254	—	—	0.36	—	黒曜石
255	—	—	0.29	—	チャート
256	1.76	1.34	0.28	0.4	黒曜石
257	1.77	1.20	0.43	0.7	黒曜石
258	1.69	1.25	0.27	0.5	黒曜石
259	—	1.21	0.31	—	黒曜石
260	—	—	0.26	—	黒曜石
261	1.60	1.27	0.31	0.4	黒曜石
262	—		0.35	—	黒曜石
263	—	—	0.33	—	黒曜石
264	1.49	1.20	0.25	0.4	黒曜石
265	1.42	1.22	0.22	0.2	黒曜石
266	—	—	0.30	—	黒曜石
267	—	—	0.25	—	黒曜石
268	—	—	0.35	—	黒曜石
269	—	—	0.22	—	黒曜石
270	—	—	0.19	—	黒曜石
271	1.40	1.09	0.34	0.4	黒曜石
272	1.68	1.15	0.29	0.5	黒曜石
273	1.65	1.21	0.32	0.4	黒曜石
274	—	—	0.35	—	黒曜石
275	—	—	0.33	—	黒曜石
276	—	—	0.29	—	黒曜石
277	—	—	0.41	—	黒曜石
278	1.75	1.36	0.37	0.6	黒曜石
279	—	—	0.35	—	黒曜石

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
280	—	0.95	0.29	—	黒曜石
281	—	—	0.24	—	黒曜石
282	1.70	1.35	0.37	0.6	黒曜石
283	1.72	1.40	0.30	—	黒曜石
284	1.90	1.32	0.49	0.8	黒曜石
285	1.50	1.30	0.23	0.3	黒曜石
286	1.55	1.15	0.24	0.4	黒曜石
287	1.36	0.83	0.37	0.4	黒曜石
288	—	—	0.48	—	黒曜石
289	1.77	1.39	0.24	0.4	黒曜石
290	1.75	1.32	0.20	0.4	黒曜石
291	1.63	1.03	0.28	0.4	黒曜石
292	—	—	0.23	—	黒曜石
293	—	1.33	0.30	—	黒曜石
294	1.44	1.05	0.38	0.3	黒曜石
295	2.20	1.52	0.28	0.3	黒曜石
296	—	—	0.30	—	黒曜石
297	1.53	1.49	0.34	0.4	黒曜石
298	—	—	0.29	—	黒曜石
299	2.00	1.39	0.36	0.5	黒曜石
300	1.95	1.37	0.25	0.4	黒曜石
301	1.40	1.14	0.20	0.2	黒曜石
302	1.60	1.13	0.28	0.3	黒曜石
303	1.58	0.95	0.37	0.5	黒曜石
304	1.64	1.17	0.39	0.7	黒曜石
305	—	1.00	0.22	—	黒曜石
306	—	—	0.26	—	黒曜石
307	2.12	1.02	0.40	0.7	黒曜石
308	1.26	0.84	0.35	0.3	黒曜石
309	—	1.01	0.24	—	黒曜石
310	1.55	1.04	0.26	0.3	黒曜石
311	1.45	1.06	0.28	0.4	黒曜石
312	1.42	0.96	0.20	0.2	黒曜石
313	1.27	0.80	0.17	0.2	黒曜石
314	1.55	1.18	0.38	0.5	黒曜石
315	1.29	0.91	0.19	0.2	黒曜石
316	—	—	0.31	—	黒曜石
317	1.57	1.55	0.56	0.9	黒曜石
318	1.76	1.46	0.26	0.5	黒曜石
319	—	—	0.29	—	黒曜石

遺構外出土遺物（石鏃）その３　　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
320	—	1.34	0.29	—	黒曜石
321	—	—	0.23	—	黒曜石
322	—	—	0.30	—	黒曜石
323	2.33	1.48	0.65	2.0	黒曜石
324	1.69	1.40	0.59	1.1	黒曜石
325	1.70	1.24	0.25	0.5	黒曜石
326	1.76	1.52	0.30	0.5	チャート
327	1.41	1.20	0.35	0.4	黒曜石
328	1.27	1.07	0.28	0.2	黒曜石
329	1.12	0.91	0.27	0.2	黒曜石
330	—	—	0.35	—	黒曜石
331	—	—	0.33	—	黒曜石
332	2.06	1.34	0.49	—	黒曜石
333	1.51	1.32	0.19	0.3	黒曜石
334	1.25	0.95	0.17	0.2	黒曜石
335	1.51	1.03	0.22	0.2	黒曜石
336	—	1.20	0.20	—	黒曜石
337	—	—	0.39	—	黒曜石
338	—	—	0.33	—	黒曜石
339	—	—	0.38	—	黒曜石
340	1.86	1.32	0.40	—	黒曜石
341	—	—	0.31	—	黒曜石
342	1.47	1.07	0.26	0.3	黒曜石
343	1.37	1.10	0.22	0.3	黒曜石
344	—	—	0.35	—	黒曜石
345	—	—	0.34	—	黒曜石
346	1.95	1.24	0.53	0.9	黒曜石
347	1.85	1.38	0.27	0.5	黒曜石
348	1.34	1.21	0.31	0.5	黒曜石
349	1.50	1.30	0.24	0.4	黒曜石
350	1.20	0.78	0.15	0.2	黒曜石
351	—	—	0.27	—	黒曜石
352	—	—	0.25	—	黒曜石
353	—	—	0.35	—	黒曜石
354	1.36	1.06	0.26	0.3	黒曜石
355	1.41	1.12	0.31	0.4	黒曜石
356	—	—	0.20	—	黒曜石
357	1.02	0.91	0.27	0.2	黒曜石
358	—	—	0.43	—	黒曜石
359	—	—	0.25	—	黒曜石

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
360	—	—	0.29	—	黒曜石
361	—	—	0.30	—	黒曜石
362	—	1.24	0.23	—	黒曜石
363	1.30	1.25	0.35	0.4	黒曜石
364	—	—	0.23	—	黒曜石
365	—	—	0.28	—	黒曜石
366	—	—	0.34	—	黒曜石
367	—	—	0.29	—	黒曜石
368	—	—	0.18	—	黒曜石
369	—	—	0.21	—	黒曜石
370	1.19	1.14	0.28	0.2	黒曜石
371	—	1.36	0.27	—	黒曜石
372	—	—	0.29	—	黒曜石
373	1.20	1.14	0.20	0.2	黒曜石
374	1.21	1.13	0.27	0.2	黒曜石
375	—	—	0.24	—	黒曜石
376	1.26	1.38	0.26	0.3	黒曜石
377	1.49	1.43	0.31	0.5	チャート
378	1.06	1.20	0.23	0.2	黒曜石
379	1.20	1.39	0.25	0.3	黒曜石
380	—	—	0.35	—	黒曜石
381	—	—	0.30	—	黒曜石
382	1.35	1.41	0.28	0.4	黒曜石
383	—	—	0.30	—	黒曜石
384	1.07	1.65	0.21	0.2	黒曜石
385	—	—	0.28	—	黒曜石
386	—	—	0.23	—	黒曜石
387	—	—	0.31	—	黒曜石
388	—	—	0.28	—	黒曜石
389	—	—	0.28	—	黒曜石
390	1.59	1.40	0.26	0.3	黒曜石
391	1.76	1.42	0.36	0.6	黒曜石
392	1.43	1.20	0.28	0.4	黒曜石
393	1.12	1.35	0.25	0.3	黒曜石
394	—	—	0.37	—	黒曜石
395	—	—	0.50	—	黒曜石
396	—	—	0.40	—	黒曜石
397	1.21	1.54	0.34	0.4	黒曜石
398	1.11	0.94	0.21	0.1	黒曜石
399	1.05	0.91	0.20	0.1	黒曜石

遺構外出土遺物（石鏃）その4　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
400	—	—	0.39	—	黒曜石
401	—	—	0.20	—	黒曜石
402	1.55	1.28	0.44	0.6	黒曜石
403	—	1.12	0.31	—	黒曜石
404	1.38	1.50	0.26	0.5	黒曜石
405	1.00	1.10	0.28	0.3	黒曜石
406	1.33	1.66	0.31	0.6	黒曜石
407	—	—	0.63	—	黒曜石
408	2.12	1.43	0.45	0.9	黒曜石
409	1.30	1.76	0.44	1.1	黒曜石
410	2.23	1.64	0.63	2.0	黒曜石
411	—	2.74	0.65	—	硬質砂岩
412	2.07	—	0.29	—	黒曜石
413	1.77	1.64	0.61	1.5	黒曜石
414	—	—	0.44	—	黒曜石
415	1.69	1.43	0.46	0.9	黒曜石
416	1.81	1.42	0.41	1.0	黒曜石
417	1.73	1.73	0.37	1.1	黒曜石
418	2.40	1.76	0.72	2.8	黒曜石
419	2.64	1.53	0.54	1.8	黒曜石

遺構外出土遺物（楔形石器）　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
420	2.30	2.28	0.48	2.2	黒曜石
421	1.79	2.44	0.58	2.5	黒曜石
422	1.60	1.71	0.74	1.8	黒曜石
423	1.59	2.26	1.02	2.8	黒曜石
424	2.13	2.87	0.91	4.3	黒曜石
425	3.46	2.73	0.85	8.0	黒曜石
426	2.36	1.65	0.42	1.5	黒曜石
427	2.15	1.16	0.94	2.2	黒曜石
428	2.13	1.80	0.73	2.7	黒曜石

遺構外出土遺物（二次加工のある剥片）　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石材
429	2.30	1.95	0.60	2.0	黒曜石
430	2.20	1.83	0.56	1.6	黒曜石
431	3.65	1.31	0.40	1.9	黒曜石
432	2.35	1.84	0.38	1.2	黒曜石
433	2.01	1.56	0.37	0.9	黒曜石
434	3.44	1.71	1.06	4.1	黒曜石

遺構外出土遺物（石匙）　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
435	3.86	—	0.89	—	黒曜石
					黒曜石

遺構外出土遺物（石錐）　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
436	4.92	1.62	0.86	4.1	黒曜石
437	—	2.16	0.92	—	黒曜石

遺構外出土遺物（小型磨製石斧）　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
438	2.06	1.20	0.35	1.4	硬質砂岩

遺構外出土遺物（原石・石核）　cm・g

No	長さ	幅	厚	重量	石　材
440	12.97	11.40	4.96	869.4	硬質砂岩
441	10.70	8.57	5.19	388.8	黒曜石
442	5.05	3.70	3.55	63.8	硬質砂岩
443	7.82	6.70	4.17	185.6	石英
444	9.30	6.04	4.30	205.5	黒曜石
445	5.98	5.12	2.95	90.2	硬質砂岩
446	8.12	6.11	5.10	234.6	黒曜石
447	4.28	1.95	1.50	15.1	黒曜石

遺構外出土遺物(磨石・凹石)その1　cm

No	長さ	幅	厚	備　考
448	17.7	14.2	5.4	
449	14.9	12.2	4.0	
450	15.7	11.4	5.9	
451	12.8	11.6	6.6	
452	13.7	10.5	5.3	
453	14.3	8.5	4.8	
454	13.5	10.5	5.4	
455	12.6	10.3	4.5	
456	13.2	8.4	6.0	
457	12.7	8.5	7.0	
458	11.3	9.0	6.7	

遺構外出土遺物（磨石・凹石）その２　　cm

No	長さ	幅	厚	備　考
459	11.3	8.8	6.7	
460	12.5	7.8	4.3	
461	11.7	7.5	5.3	
462	12.8	6.7	5.0	
463	11.7	8.7	4.7	
464	11.3	8.2	6.3	
465	11.2	7.8	5.1	
466	11.0	8.9	4.9	
467	9.2	8.5	3.5	
468	9.1	7.7	3.5	
469	9.8	6.6	3.8	
470	8.1	7.4	5.7	
471	8.7	7.2	4.7	
472	8.5	6.2	4.1	
473	7.7	5.4	3.5	
474	7.8	4.5	2.6	
475	6.4	4.8	2.6	
476	5.7	4.2	2.5	
477	16.6	8.6	5.2	
478	14.5	9.3	5.0	
479	14.5	8.6	5.6	
480	14.1	8.4	5.4	
481	13.5	8.5	3.9	
482	12.5	10.4	4.4	
483	12.6	10.2	4.6	
484	12.0	10.5	4.5	
485	13.0	9.7	5.2	
486	13.1	7.7	3.8	
487	13.1	6.0	3.9	
488	12.2	8.5	5.6	
489	11.0	8.4	4.8	
490	11.0	9.5	6.8	
491	11.8	9.1	4.9	
492	11.1	8.7	4.4	
493	11.2	8.5	3.8	
494	10.7	8.4	5.0	
495	9.9	8.0	5.2	
496	11.4	7.7	4.1	
497	—	7.2	4.7	
498	12.1	5.8	4.7	

No	長さ	幅	厚	備　考
499	10.5	7.7	3.9	
500	10.5	7.5	4.8	
501	9.8	9.4	4.7	
502	9.8	8.8	4.5	
503	9.4	8.7	4.3	
504	9.4	8.5	4.5	
505	11.3	6.2	5.5	
506	10.2	7.9	4.2	
507	10.2	7.7	4.1	
508	10.0	7.3	4.8	
509	10.6	7.0	4.4	
510	10.2	6.8	3.6	
511	8.8	8.1	4.1	
512	9.8	7.4	3.8	
513	9.7	7.5	3.9	
514	9.6	6.4	4.1	
515	8.8	5.2	4.0	

遺構外出土遺物（石皿）その１　　cm

No	長さ	幅	厚	備　考
516	39.0	29.0	9.2	
517	33.1	31.4	6.4	
518	20.8	18.0	5.6	
519	—	31.8	8.2	
520	—	24.8	7.0	
521	—	18.4	7.6	
522	—	—	5.2	
523	—	15.6	5.2	
524	—	18.4	6.8	
525	31.0	23.2	7.6	未製品
526	21.4	20.8	6.0	未製品
527	26.3	17.9	5.4	未製品
528	20.0	15.0	6.4	未製品
529	20.3	15.4	5.3	未製品
530	22.6	12.0	4.5	未製品
531	14.4	12.0	3.7	
532	14.5	10.8	3.6	
533	15.0	—	4.8	
534	—	—	5.3	
535	—	18.2	5.1	

遺構外出土遺物（石皿）その２　　cm

No	長さ	幅	厚	備　考
536	—	17.3	3.5	
537	—	—	4.7	
538	—	—	3.8	
539	—	—	7.5	
540	14.6	12.4	3.8	
541	23.1	21.9	6.9	未製品
542	—	16.8	6.1	未製品
543	15.5	14.6	4.7	未製品
544	15.8	13.2	4.4	未製品
545	12.2	13.0	4.2	
546	—	27.0	6.4	
547	—	—	6.6	
548	—	—	5.3	
549	—	—	6.4	
550	—	—	7.1	
551	—	12.0	4.1	
552	21.3	14.2	6.6	未製品
553	16.4	14.8	6.1	未製品
554	17.0	12.9	7.7	未製品

図版写真

写真1　調査地遠景　調査区域

調査地遠景
国道20号より寺下峠方向を望む

平成７年度調査区域

写真2　調査区域

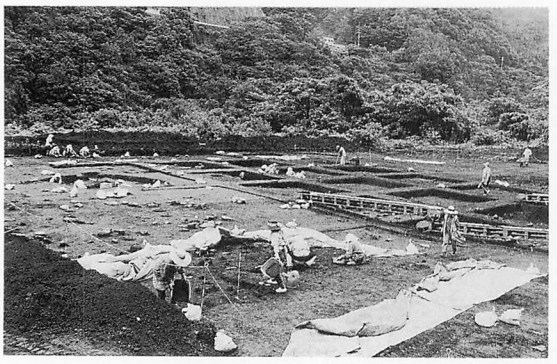
平成８年度調査区域

平成９年度調査区域

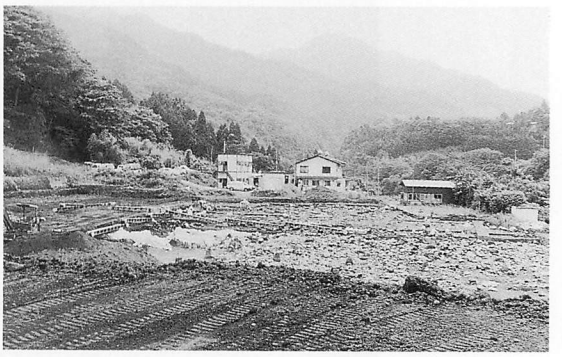
写真3　調査対象地　他

平成７年度調査対象地１

平成７年度調査対象地２



平成８年度調査対象地１

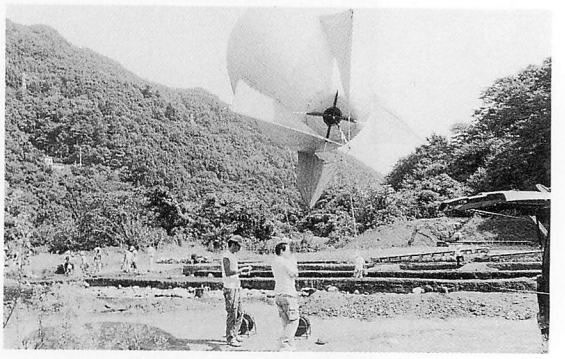


平成８年度調査対象地２

平成９年度調査対象地１

平成９年度調査対象地２

表土剥ぎ



写真測量

1 号住居跡

2 号住居跡

3 号住居跡

4 号住居跡

5 号住居跡

5 号住居跡堀方

5 号住居跡調査風景

5 号住居跡炉

5 号住居跡埋甕

写真5　住居跡

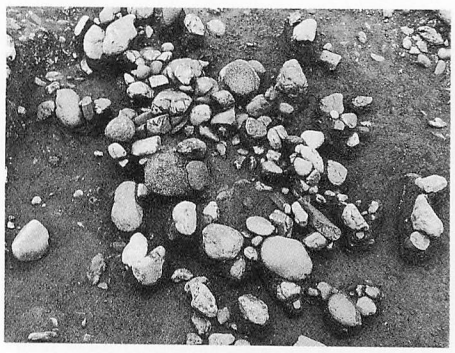
6号住居跡

6号住居跡敷石

6号住居跡炉

7・8号住居跡

7・8号住居跡炉



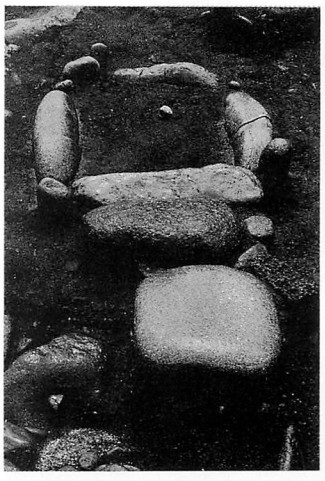
7・8号住居跡上配石

9号住居跡

9号住居跡際大型石棒出土状況

写真6　住居跡

10号住居跡

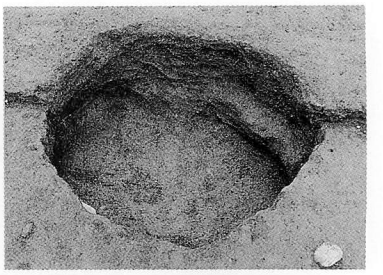


12号住居跡

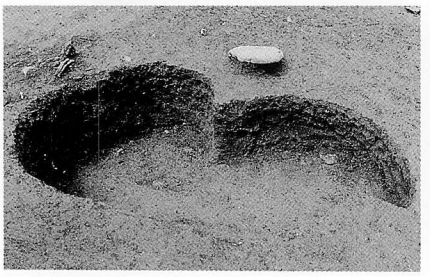
写真7　土坑

1・2・4号土坑

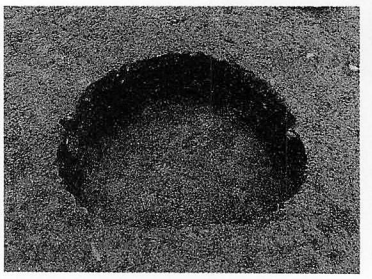
3号土坑



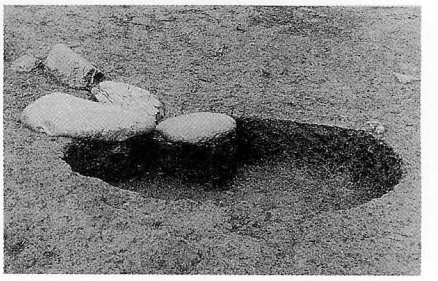
5号土坑



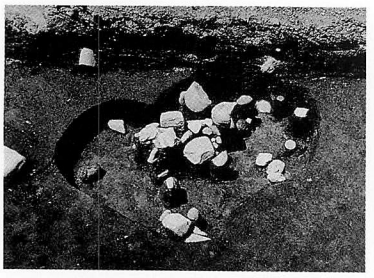
8・9号土坑



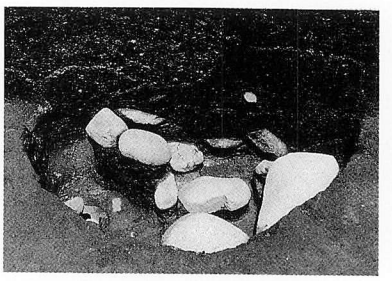
10号土坑



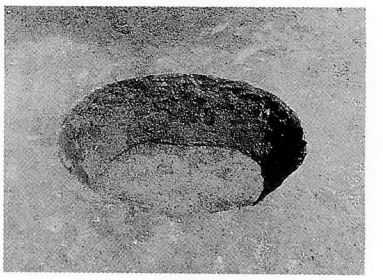
11号土坑



14・15号土坑



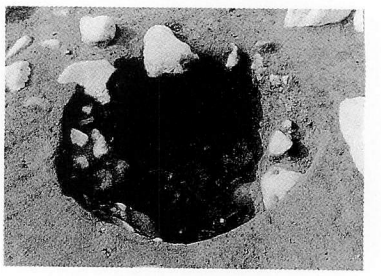
16号土坑



17号土坑

18号土坑

19号土坑



20号土坑

21号土坑

22号土坑

23号土坑

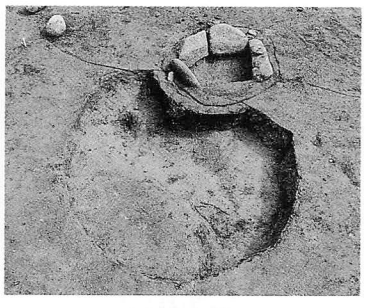
写真8　土坑

24号土坑

25号土坑

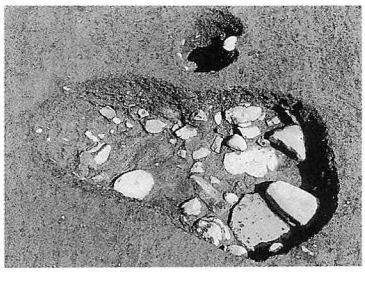
26号土坑

29号土坑


30号土坑

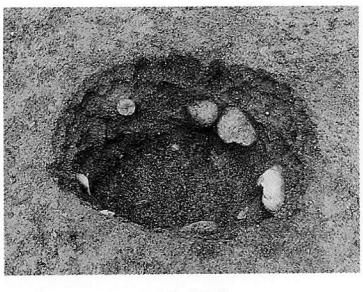
34号土坑

35号土坑

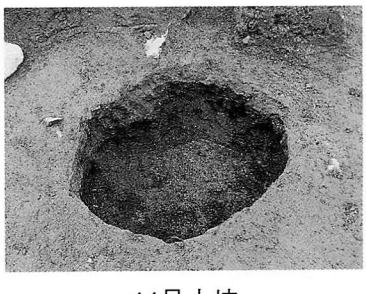

36・37号土坑

38号土坑

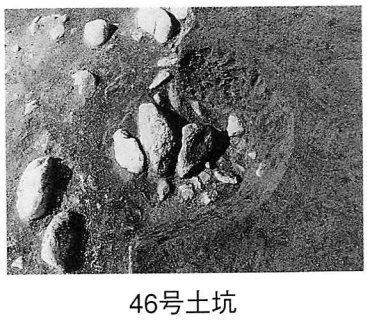
40号土坑


42号土坑

43号土坑


44号土坑

45号土坑

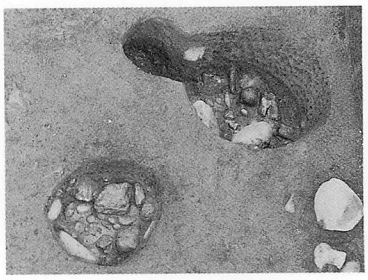

46号土坑

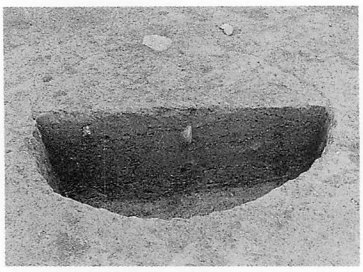
49・50号土坑

写真9　土坑

53号土坑

54号土坑

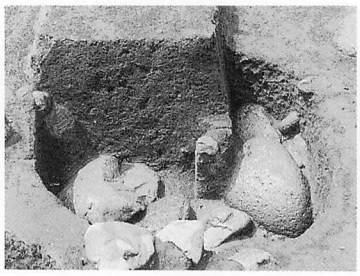

58・63号土坑

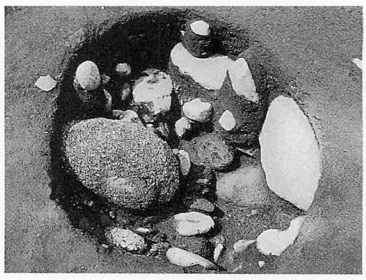

75号土坑

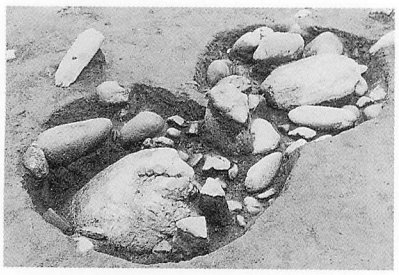
76号土坑

82－1・2号土坑

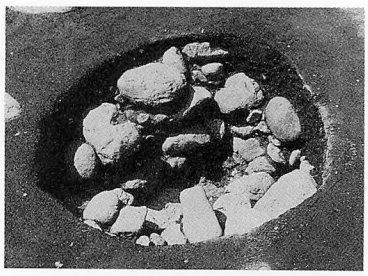
84号土坑

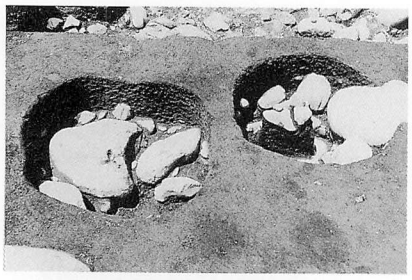

85号土坑


86号土坑


91・92号土坑

97号土坑


99号土坑


102・103号土坑

105号土坑

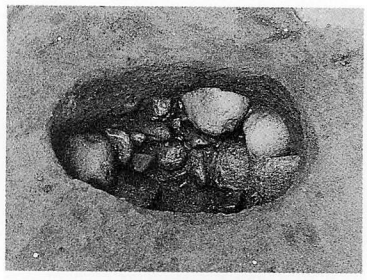
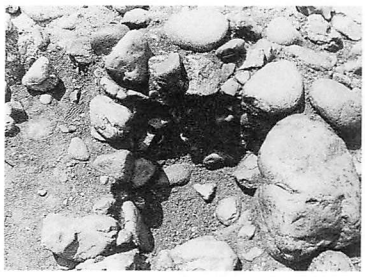

106号土坑

写真10　土坑　集石土坑　炉

107号土坑

108号土坑

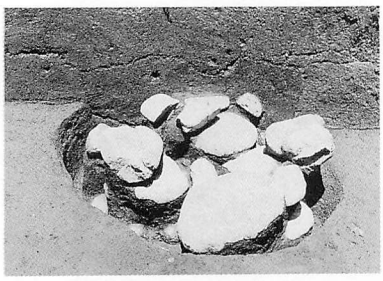


109号土坑

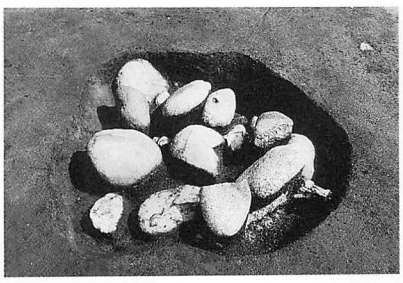
112号土坑

113号土坑

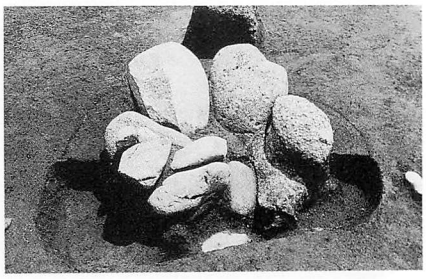
土坑調査風景



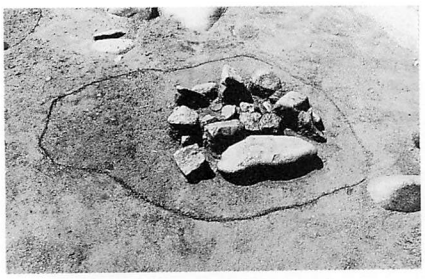
2 号集石土坑



3 号集石土坑



4 号集石土坑



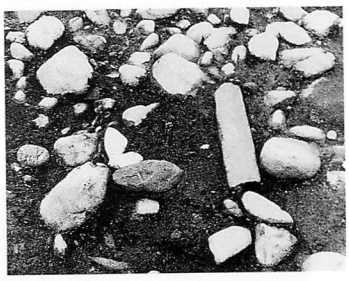
5 号集石土坑

1 号炉

2 号炉

4 号炉

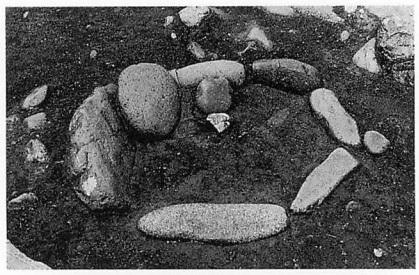
5 号炉



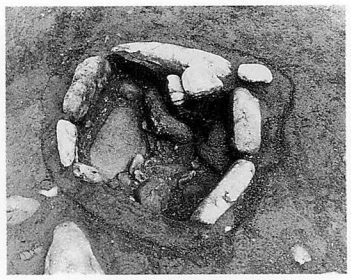
6 号炉

写真11　炉　埋設土器

10号炉



11号炉

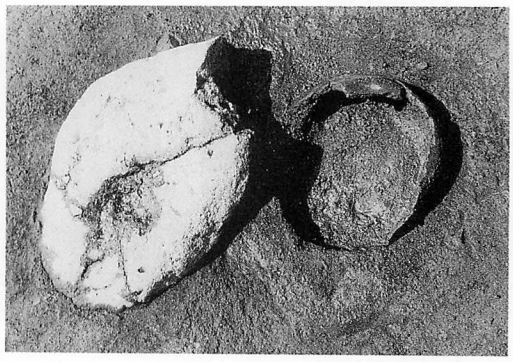


12号炉

13・14号炉

20・21号炉

1号埋設土器



2号埋設土器

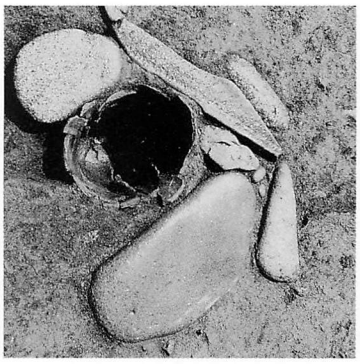
4号埋設土器

5・6号埋設土器

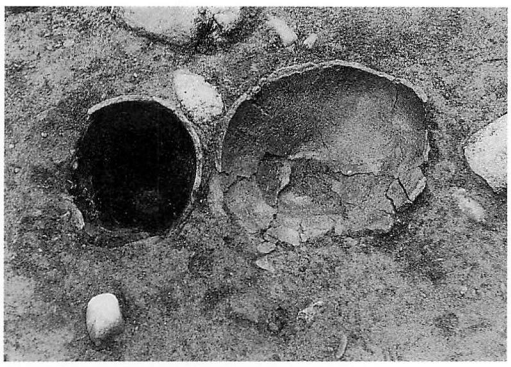
8号埋設土器

9号埋設土器

10・11号埋設土器



12号埋設土器



13・14号埋設土器

16～20号埋設土器

21号埋設土器

27号埋設土器

30・31号埋設土器

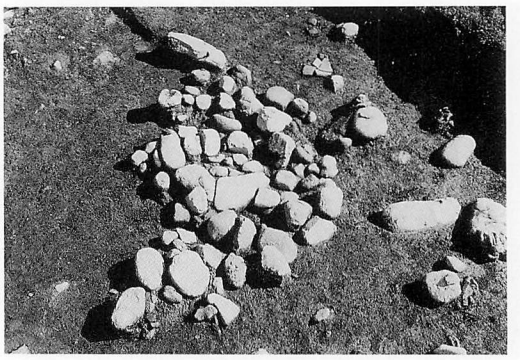
埋設土器の調査

写真13　埋設土器　配石

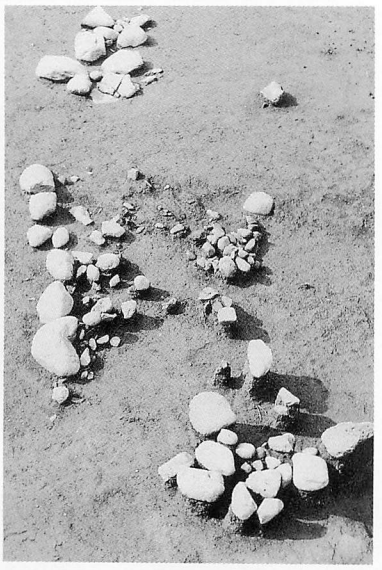
42・43号埋設土器

1・2号配石

3～7号配石



8号配石



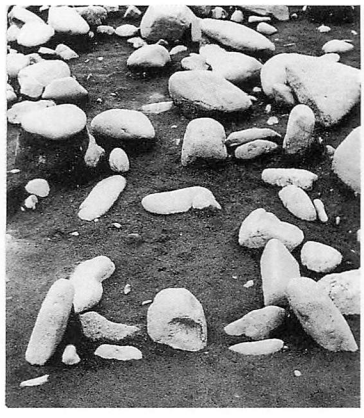
9号配石

10号配石

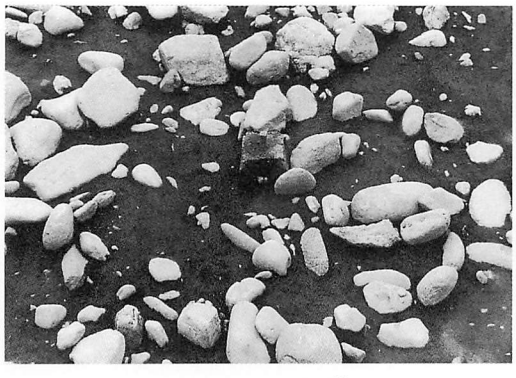
11号配石

写真14　配石　石器製作址

13号配石



1号配石墓



2・3号配石墓

14号配石

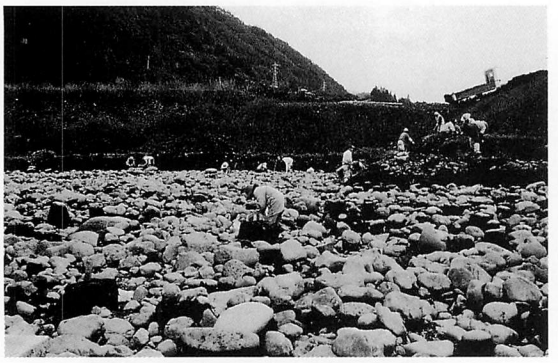
15・16号配石

19号配石

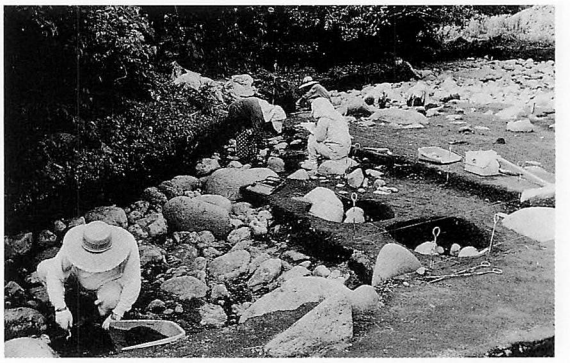
石器製作址その1

石器製作址その2

写真15　調査風景　他



調査風景その１



調査風景その２

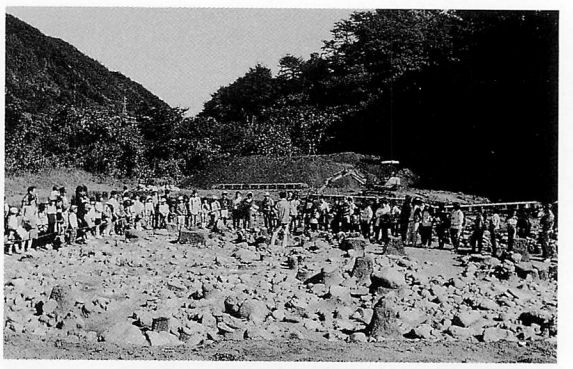
調査風景その３

調査風景その４

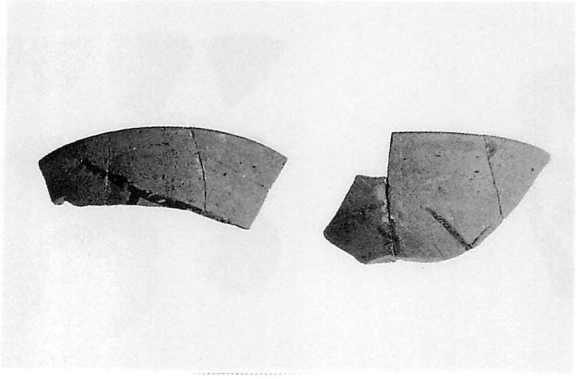
ズームイン朝　現場からの中継

ズームイン朝　中継後の記念撮影

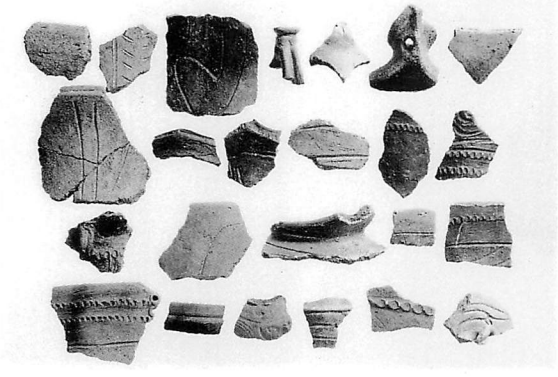
梁川中学校生徒による体験発掘



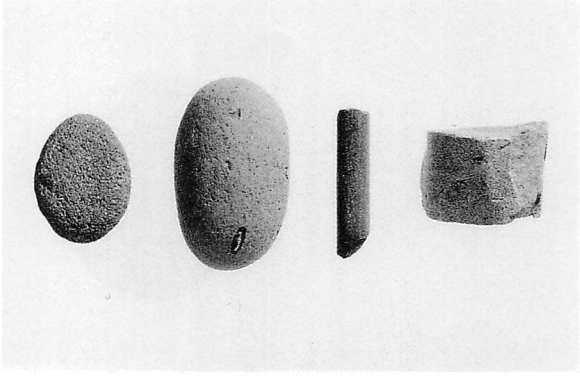
現場見学会



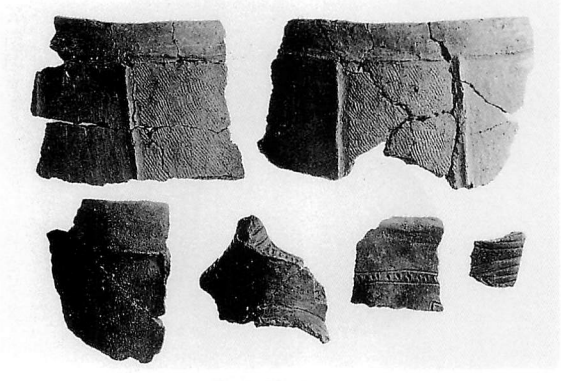
1号住居跡



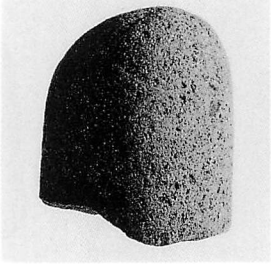
3号住居跡その1



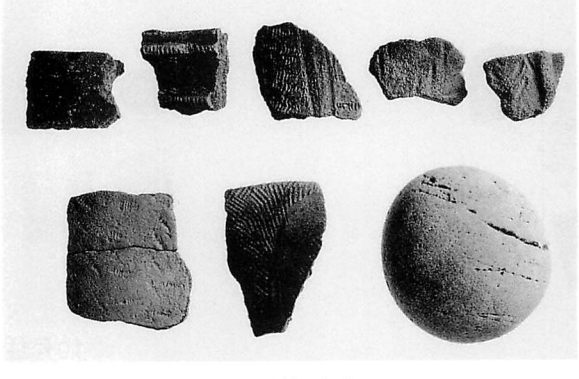
3号住居跡その2



4号住居跡その1

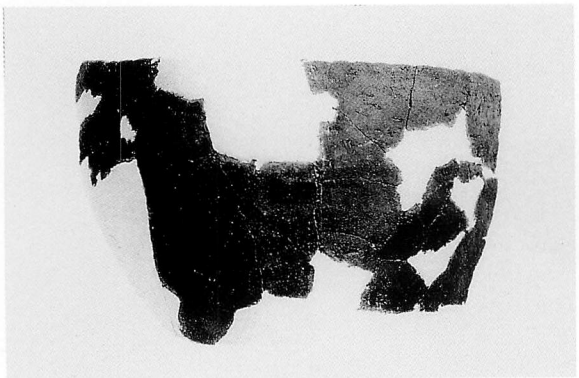


4号住居跡その2

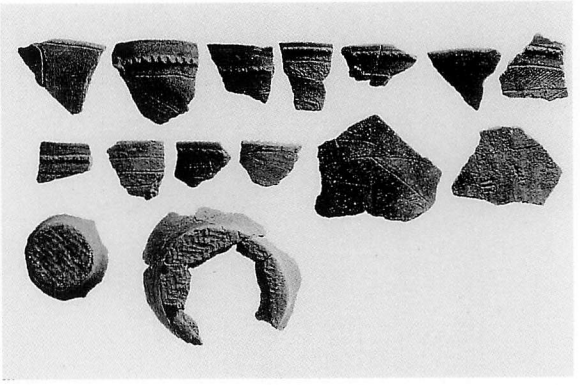


5号住居跡

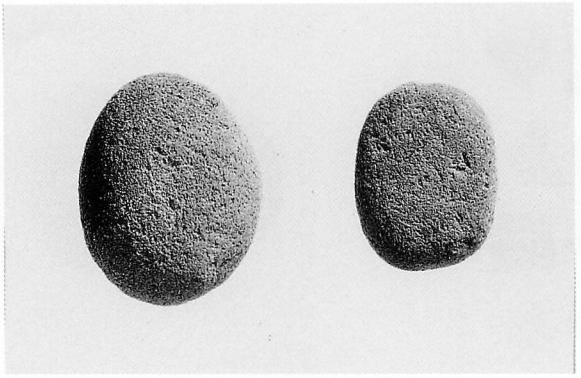
写真17　住居跡出土遺物



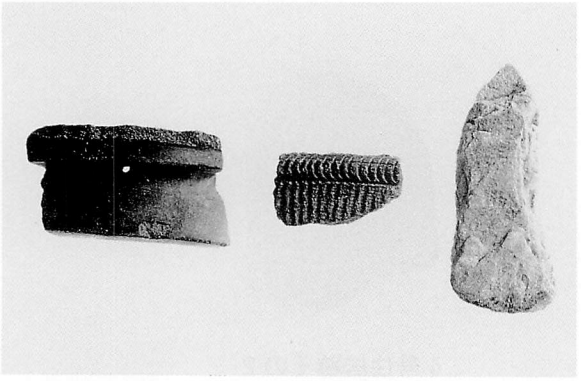
6号住居跡その1



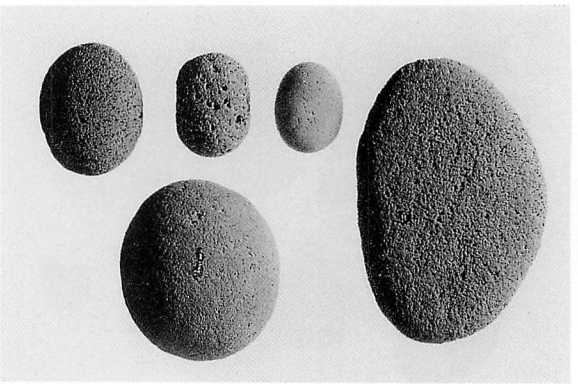
6号住居跡その2



6号住居跡その3

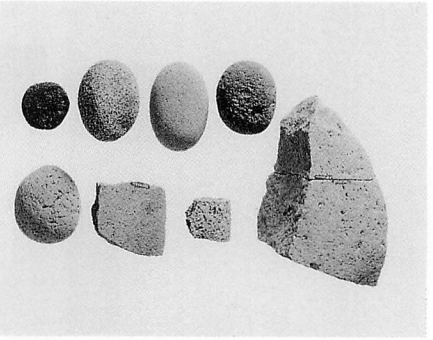


7・8号住居跡

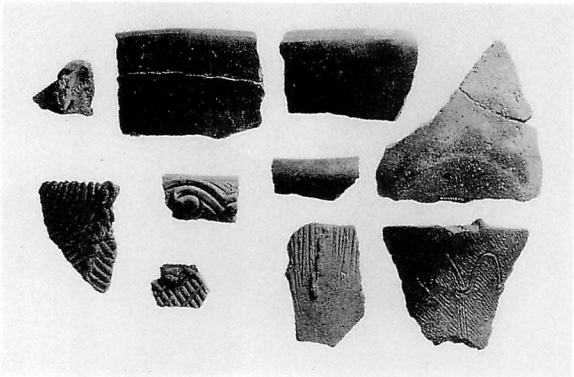


9号住居跡

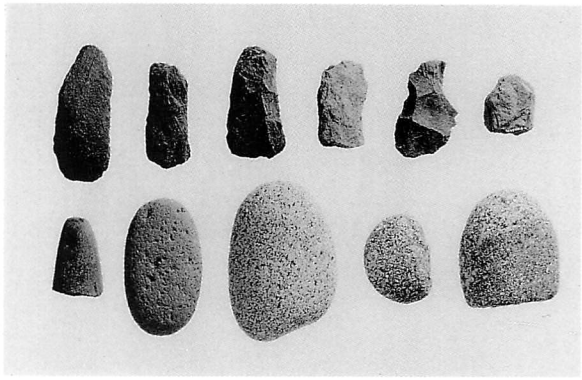
10号住居跡その1



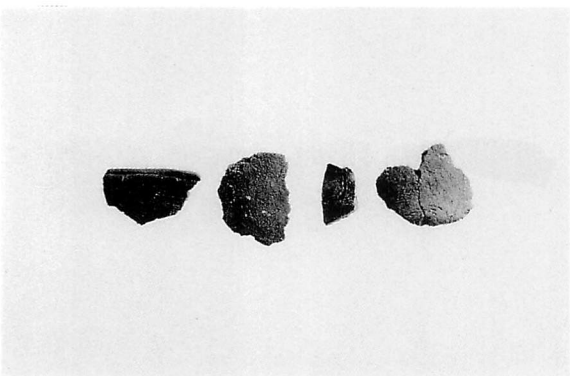
10号住居跡その2



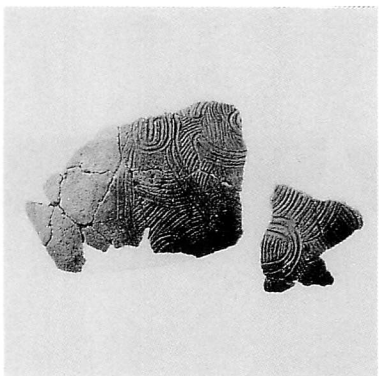
11号住居跡その１



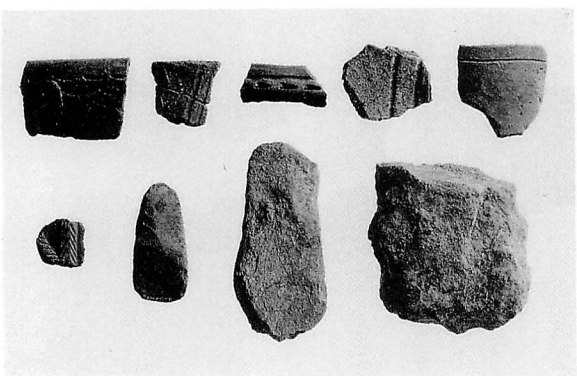
11号住居跡その２



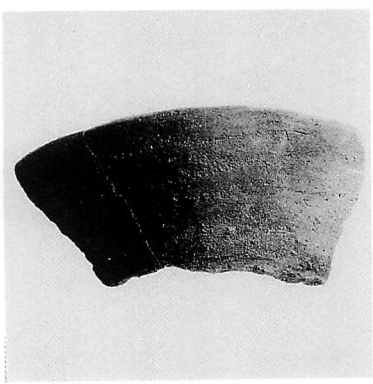
７号土坑



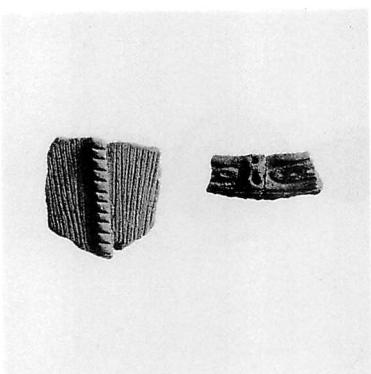
13号土坑



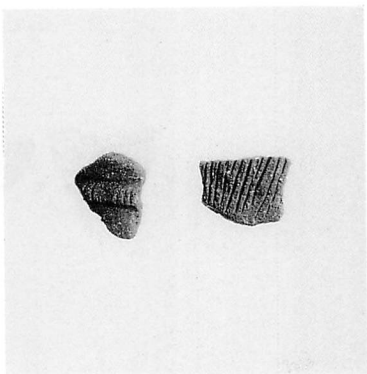
14・15号土坑



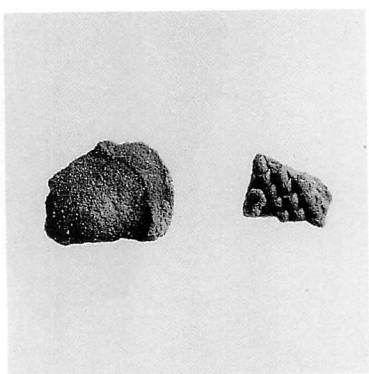
18号土坑



24号土坑

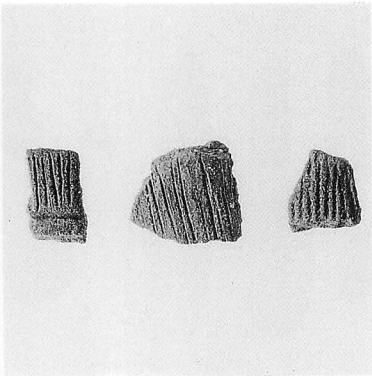


30号土坑



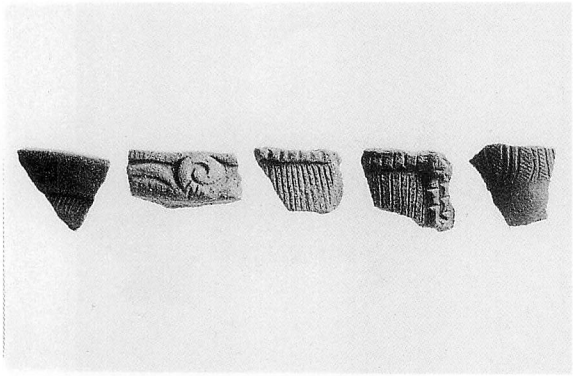
31号土坑

写真19　土坑　出土遺物

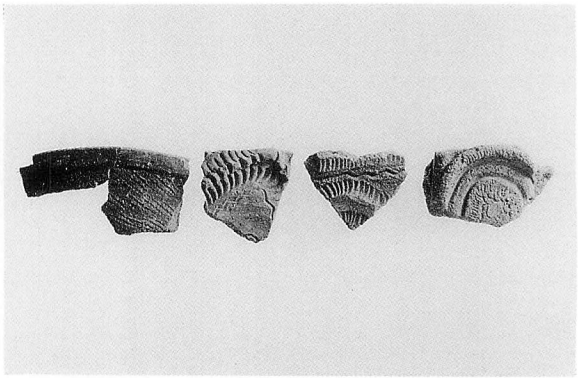


24号土坑

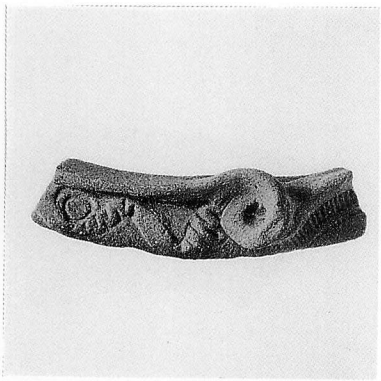
34号土坑その1



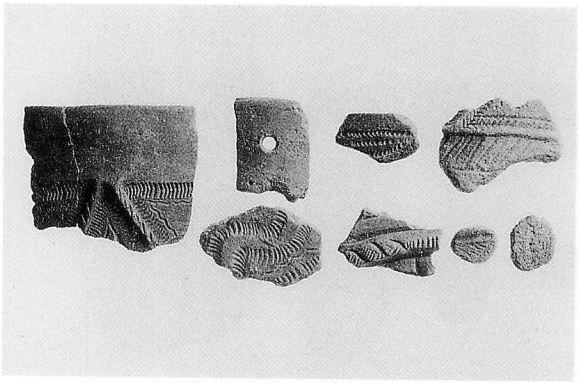
34号土坑その2



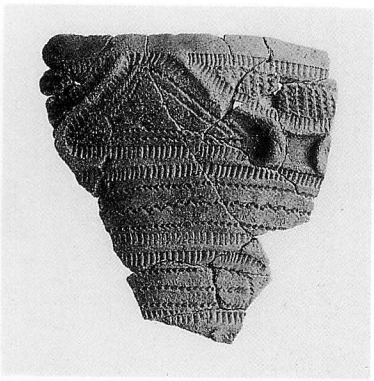
37号土坑



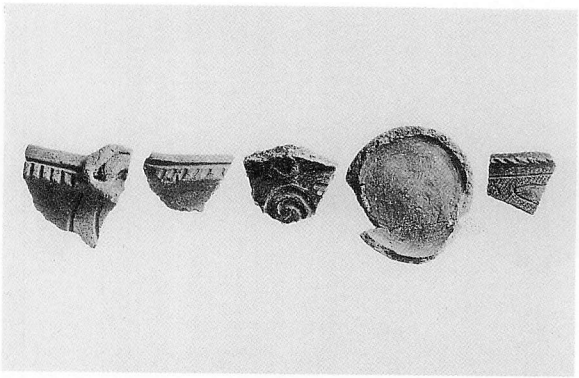
39号土坑



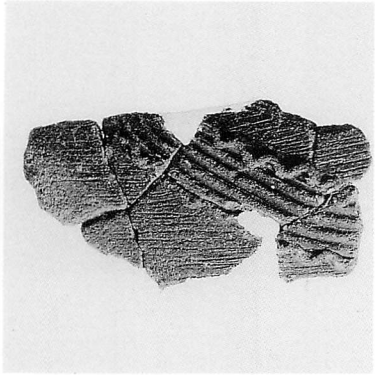
43号土坑



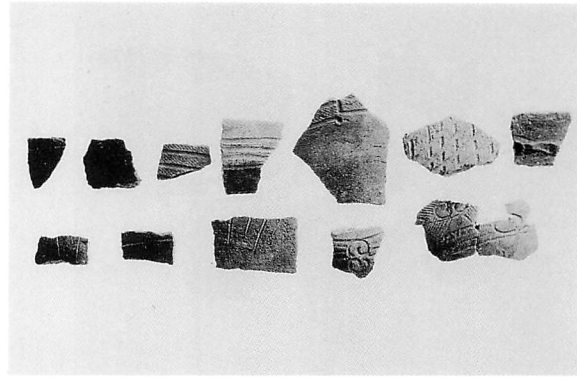
60号土坑



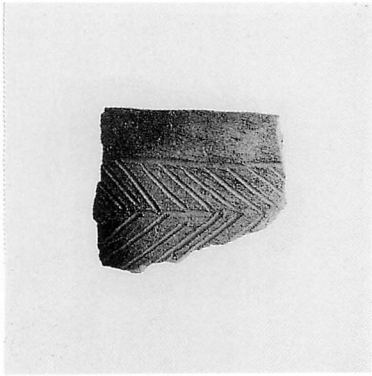
64号土坑



71号土坑

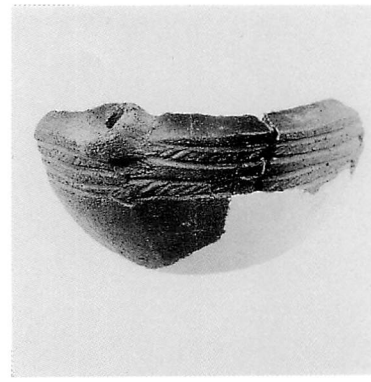


86～90号土坑

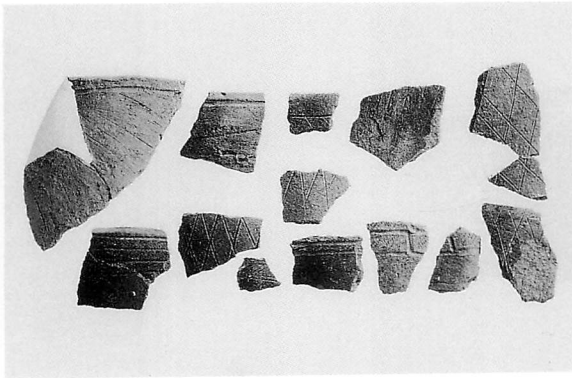


91号土坑

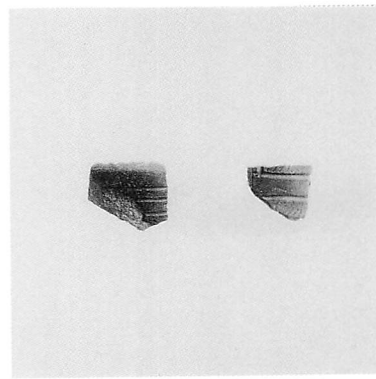
93号土坑



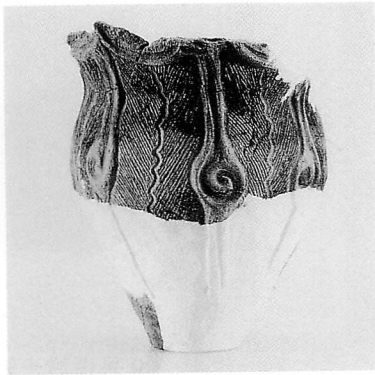
94号土坑



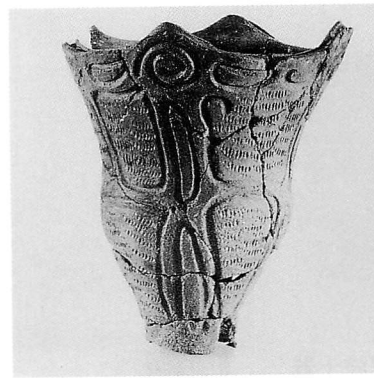
94・95号土坑



98号土坑



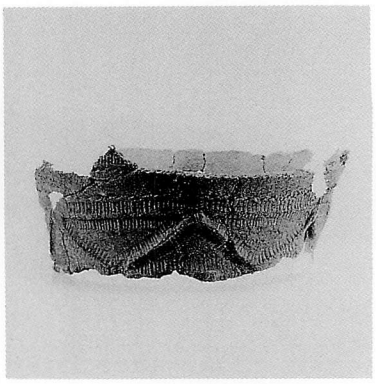
112号土坑



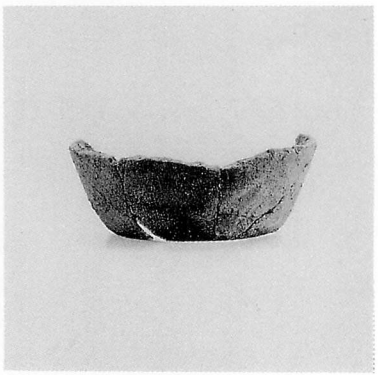
113号土坑

写真21　埋設土器

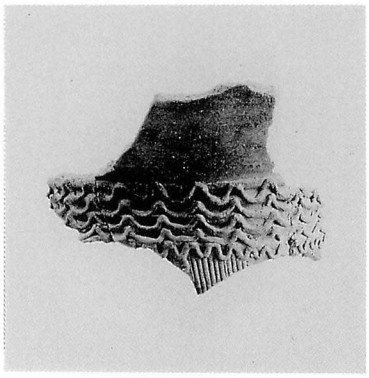
埋設土器



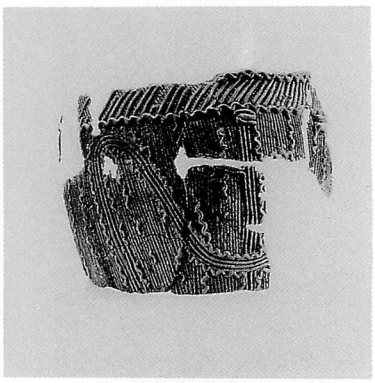
1号埋設土器



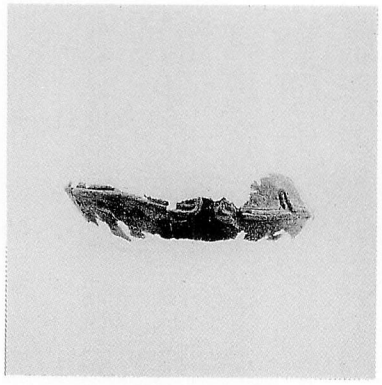
2号埋設土器その1



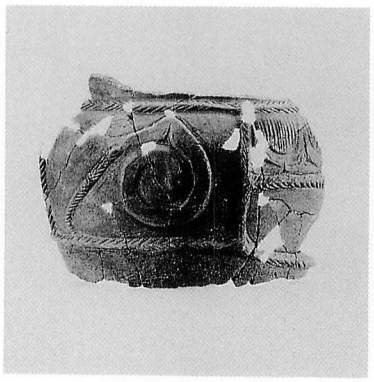
2号埋設土器その2



3号埋設土器



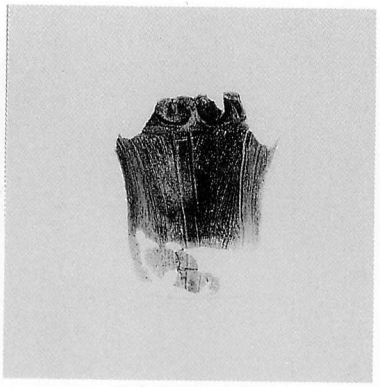
4号埋設土器



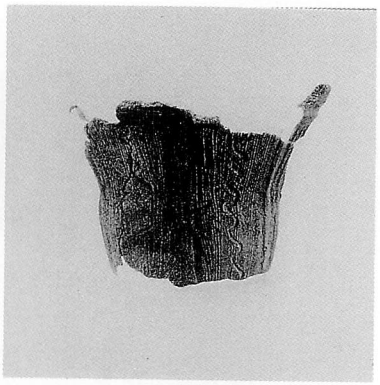
5号埋設土器

6号埋設土器

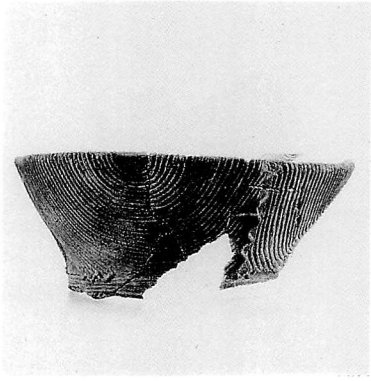
7号埋設土器

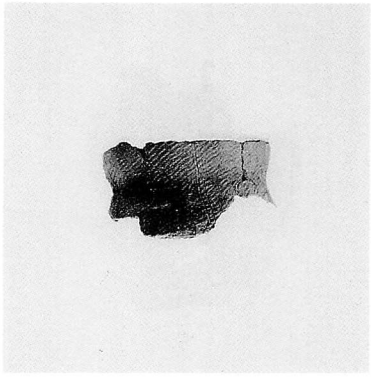


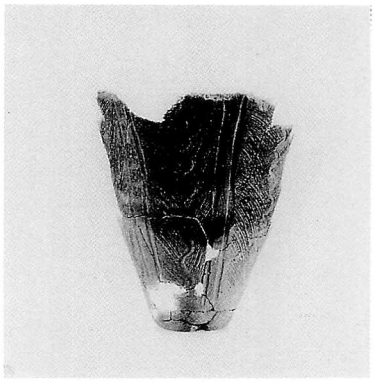
8号埋設土器

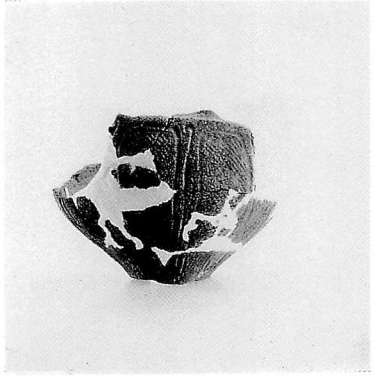


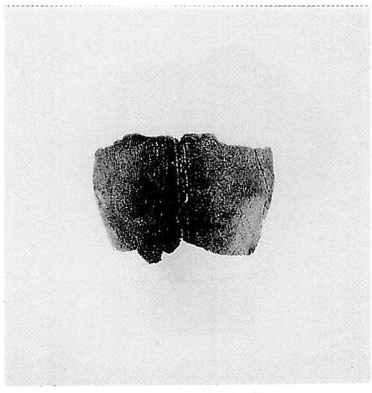
9号埋設土器


10号埋設土器

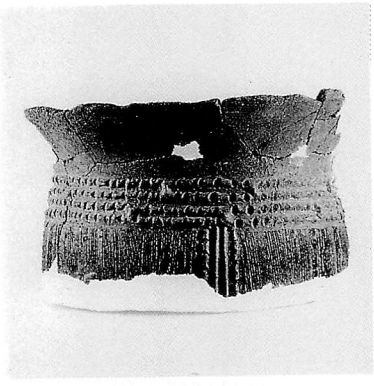

11号埋設土器

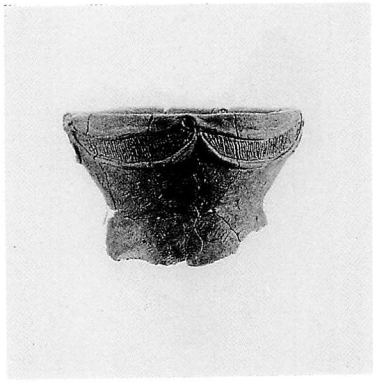

12号埋設土器

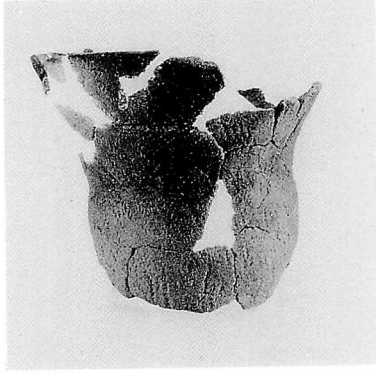

13号埋設土器


14号埋設土器

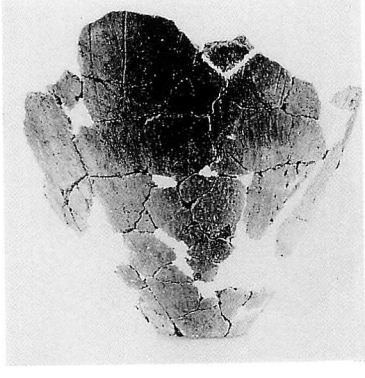
15号埋設土器


16号埋設土器


17号埋設土器


18号埋設土器

19号埋設土器


21号埋設土器

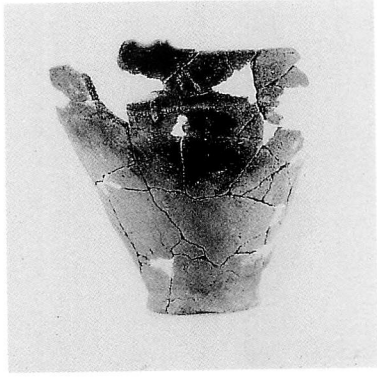
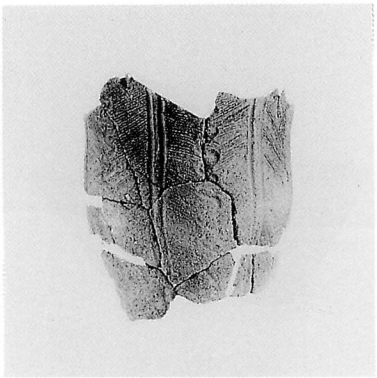
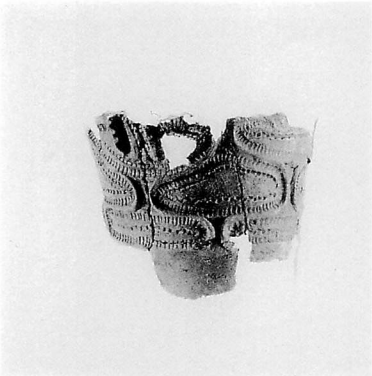

22号埋設土器

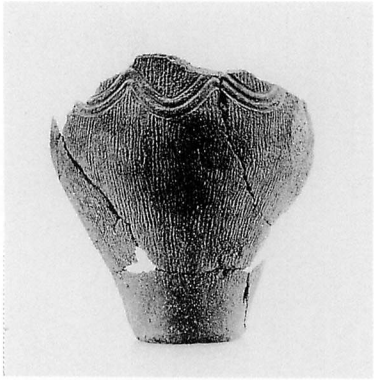
写真23　埋設土器

23号埋設土器

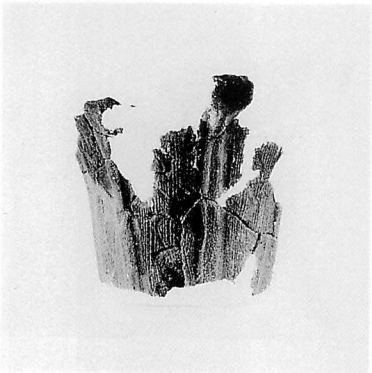
24号埋設土器

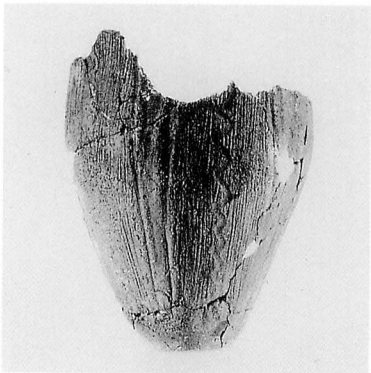

25号埋設土器

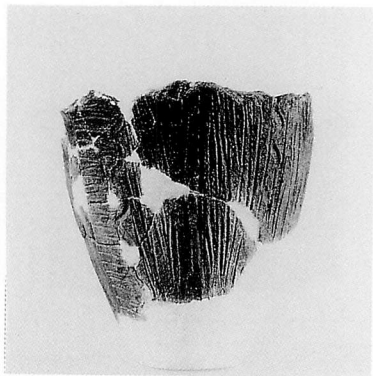

26号埋設土器

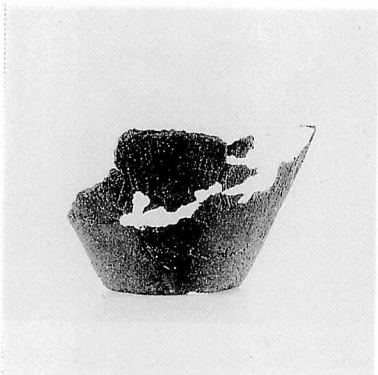

27号埋設土器

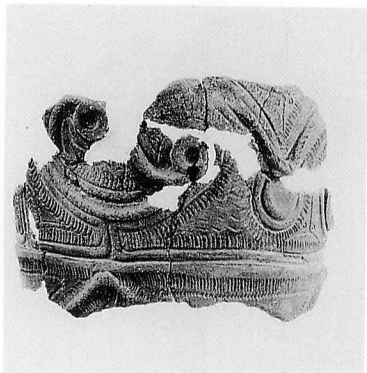
28号埋設土器


29号埋設土器

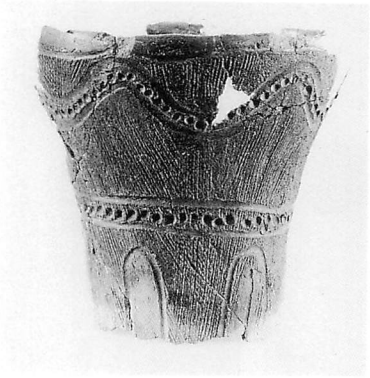

30号埋設土器

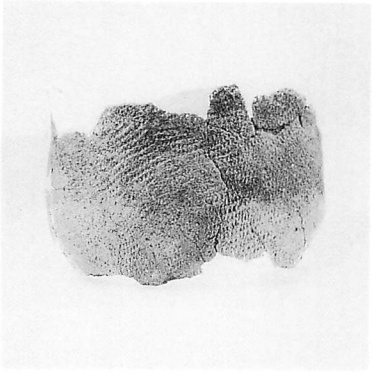

31号埋設土器

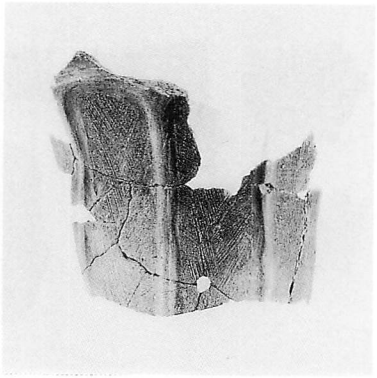

32号埋設土器

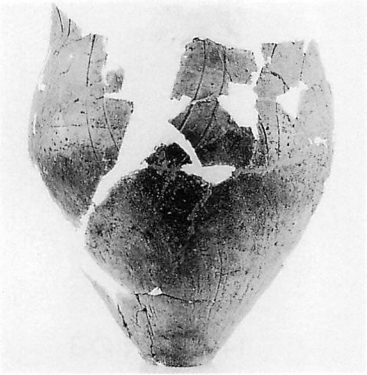

33号埋設土器

34号埋設土器

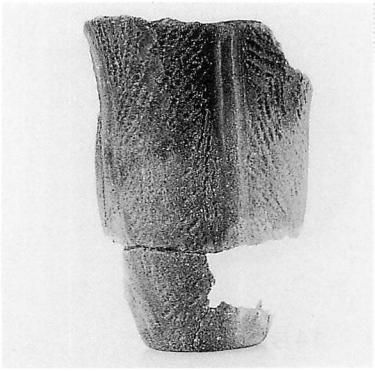

35号埋設土器


36号埋設土器

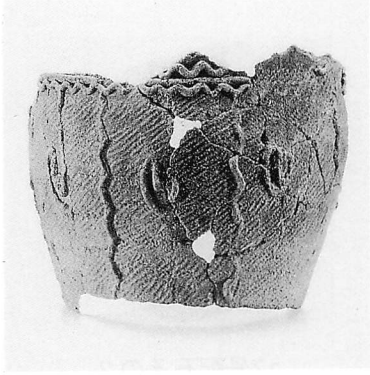

37号埋設土器


38号埋設土器

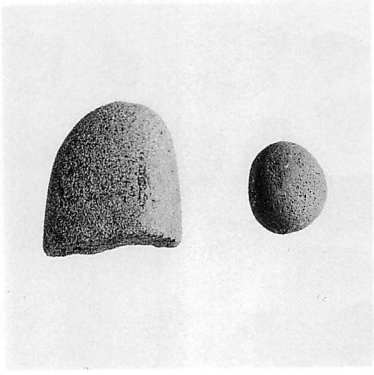
39号埋設土器


40号埋設土器

41号埋設土器


42号埋設土器

43号埋設土器


3・4号配石

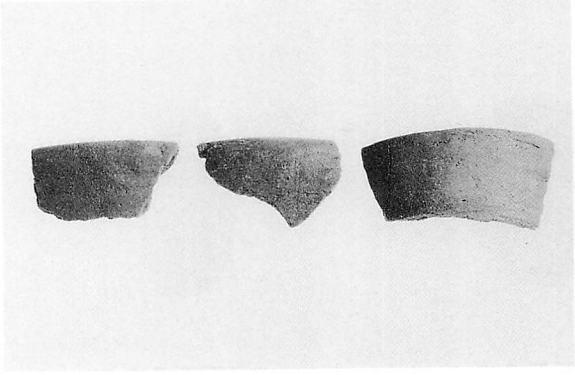
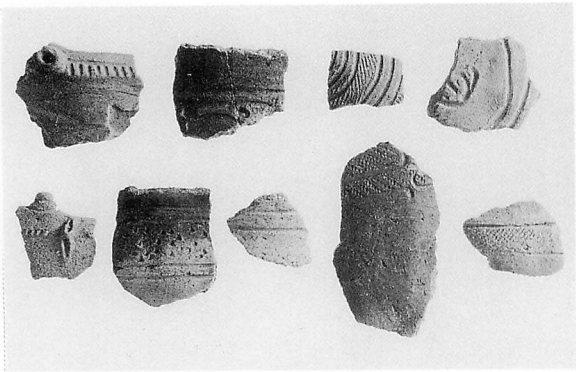
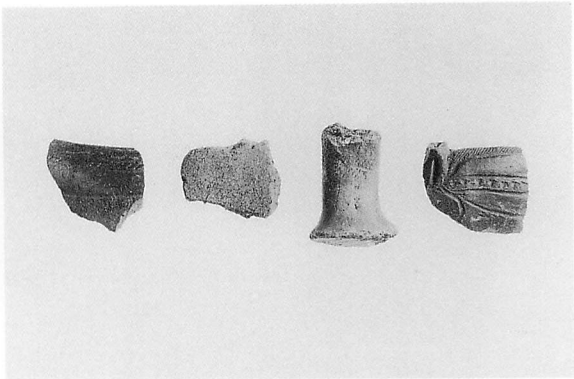

9号配石

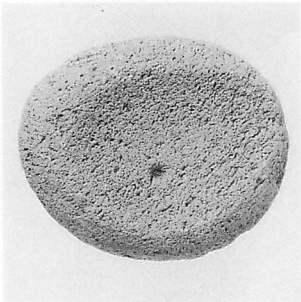
写真25　配石出土遺物



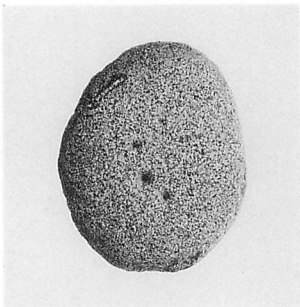
11号配石



1・2・3号配石墓

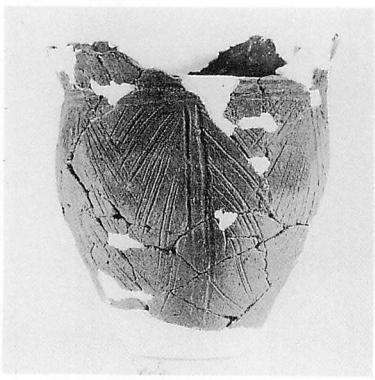


14号配石その1

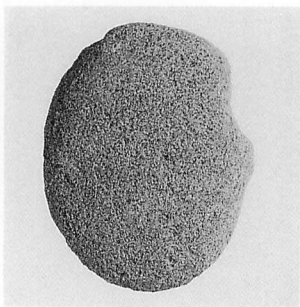


14号配石その2

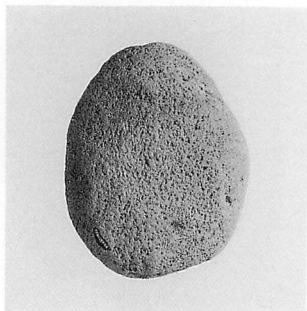
14号配石その3



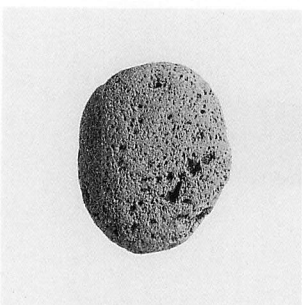
17号配石その1



17号配石その2

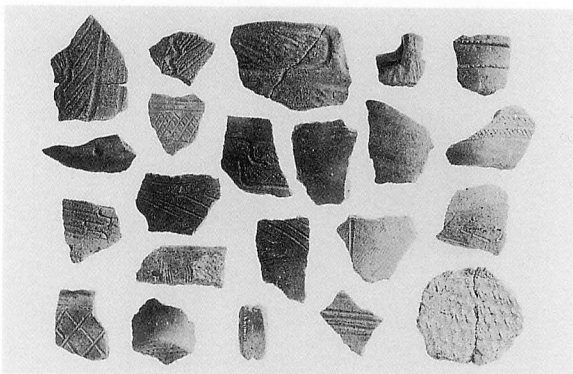


17号配石その3

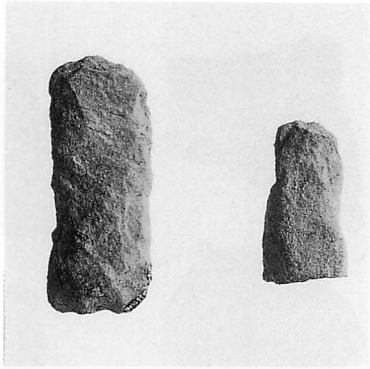


17号配石その4

17号配石その5

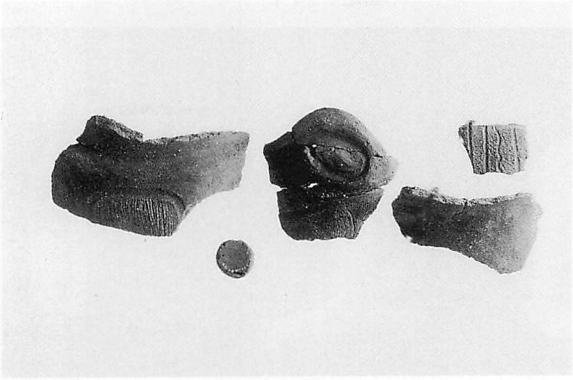


20号配石その1

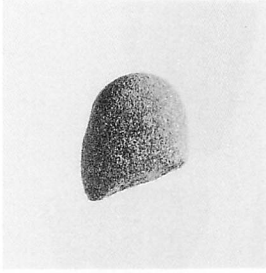


20号配石その２

20号配石その３



石器製作址その１

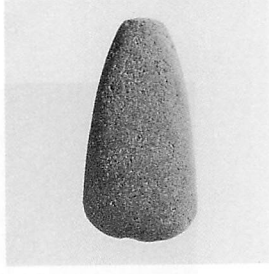


石器製作址その２

石器製作址その３

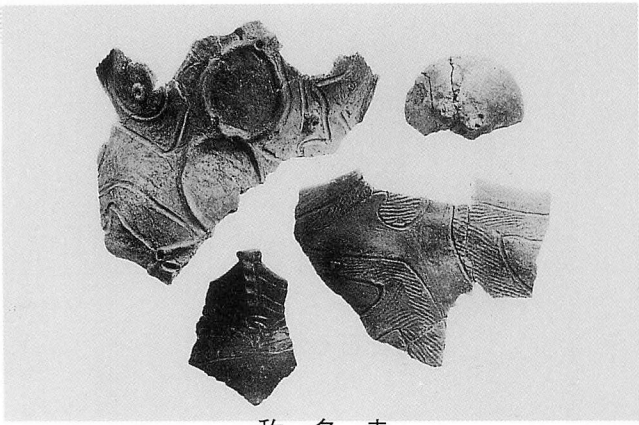
石器製作址その４

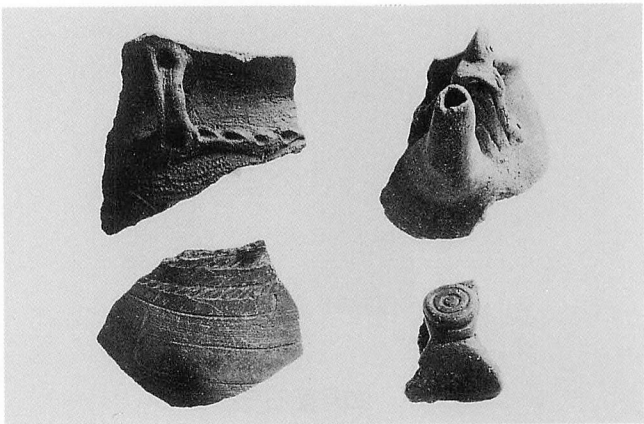
石器製作址その５

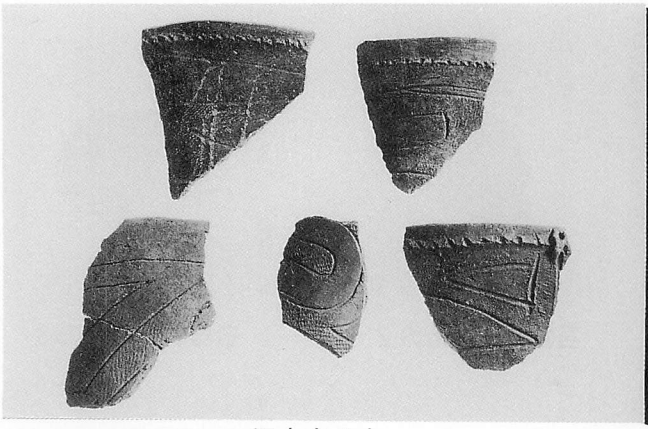


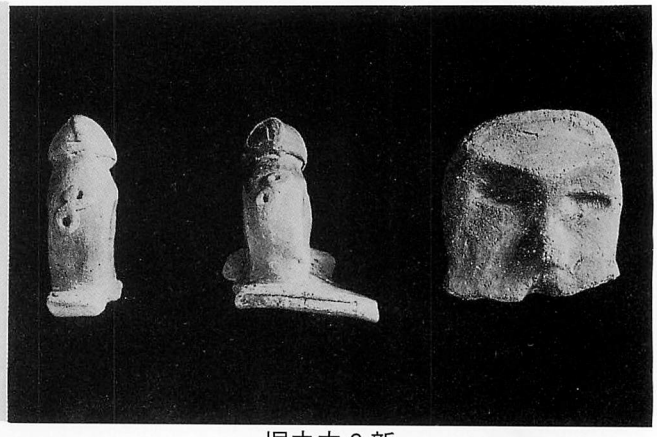
石器製作址その６

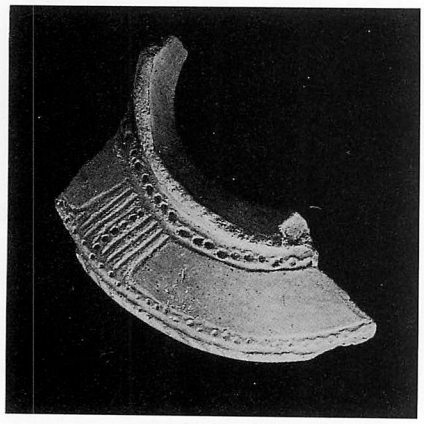
写真27　遺構外出土遺物

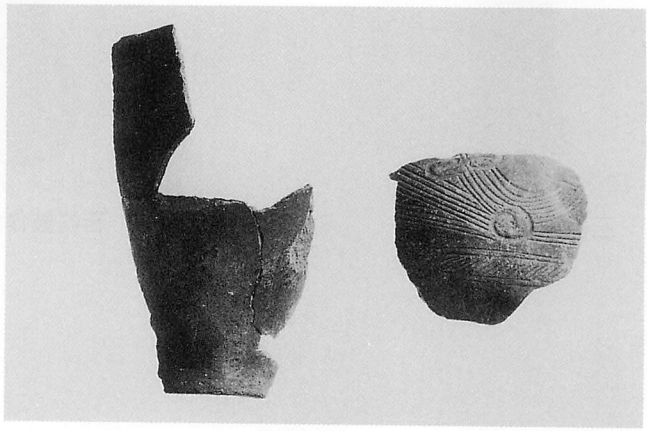

称　名　寺

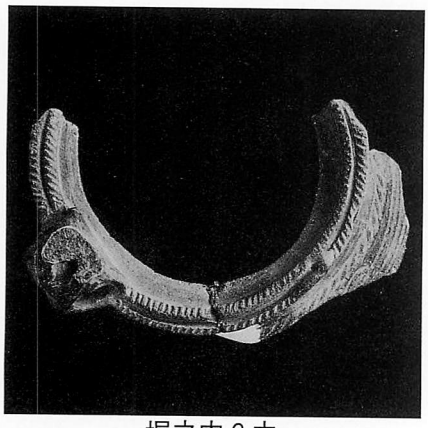

堀之内１古

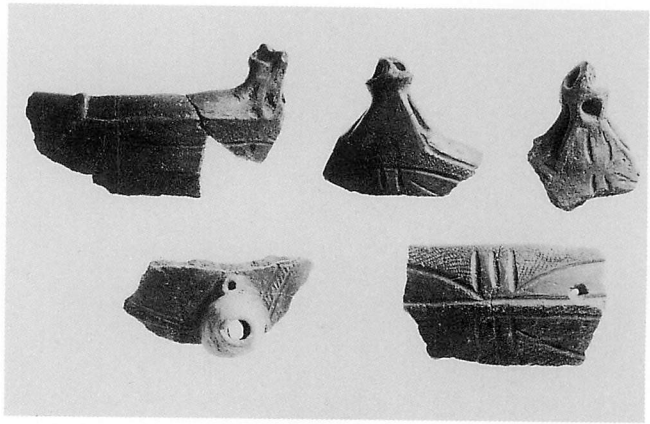

堀之内２中

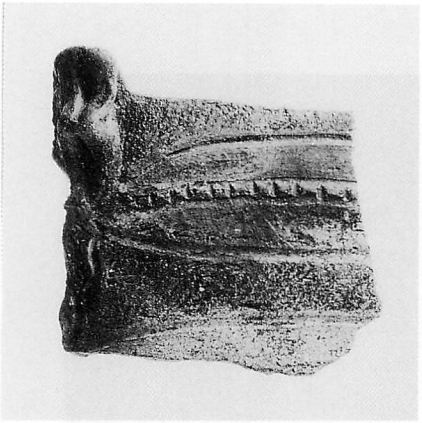

堀之内２新


堀之内２新

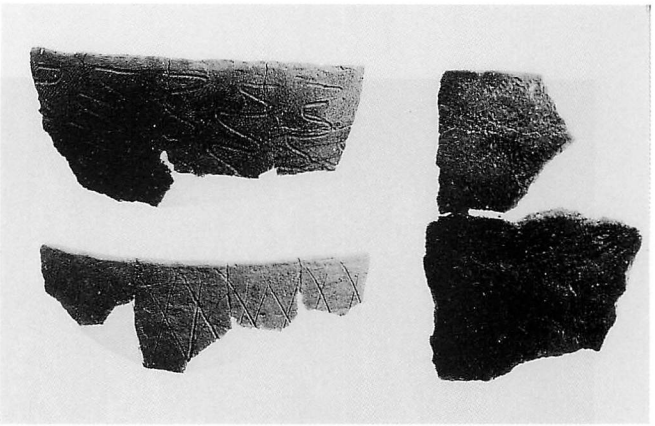

加曽利Ｂ１


堀之内２中

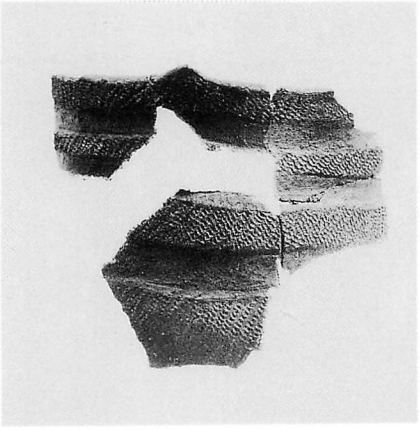

加曽利Ｂ２



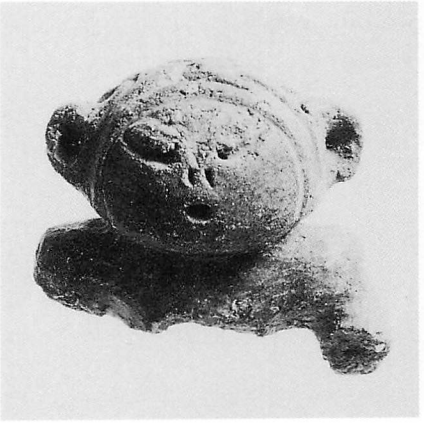
加曽利Ｂ２



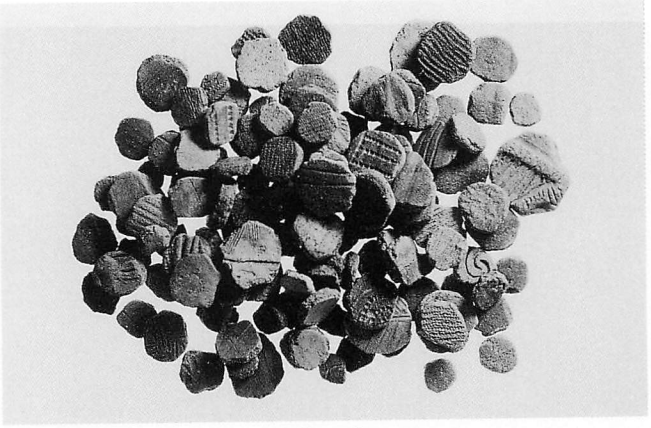
加曽利Ｂ粗製



晩　期

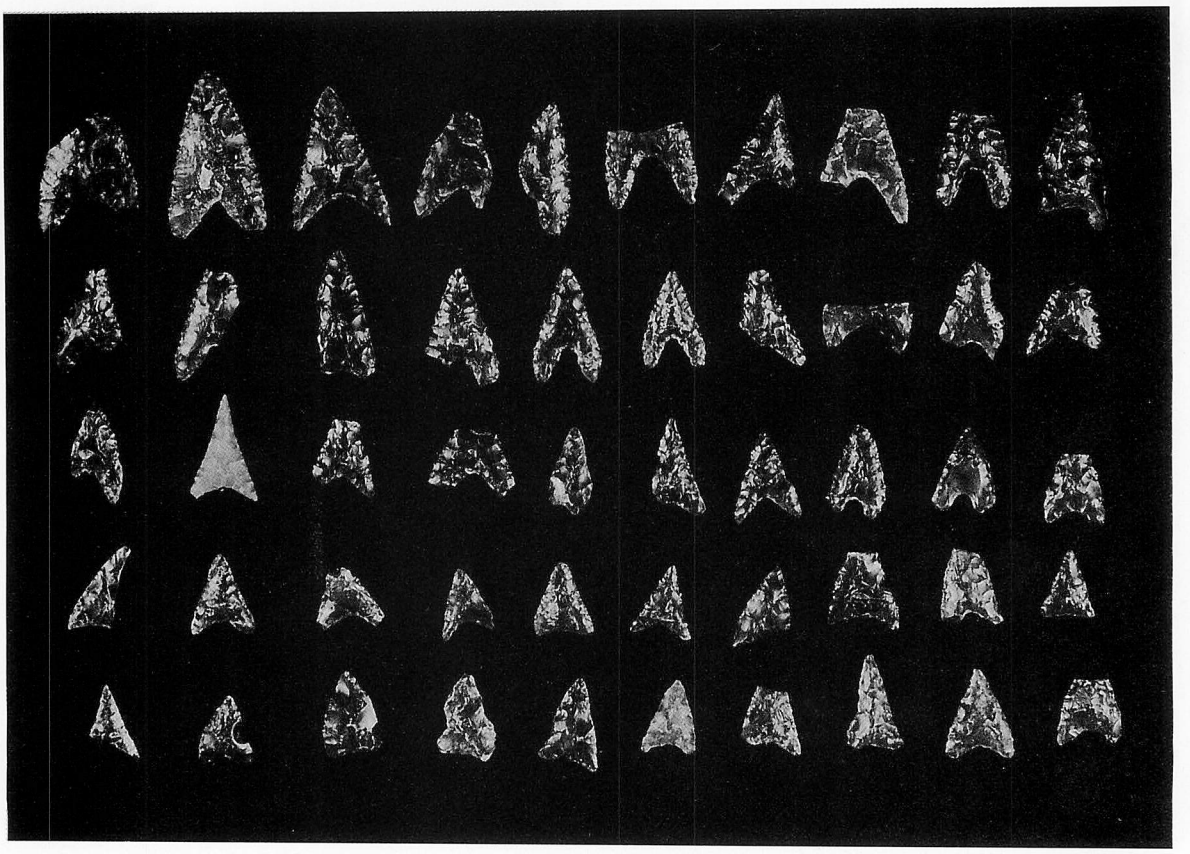


晩期土偶

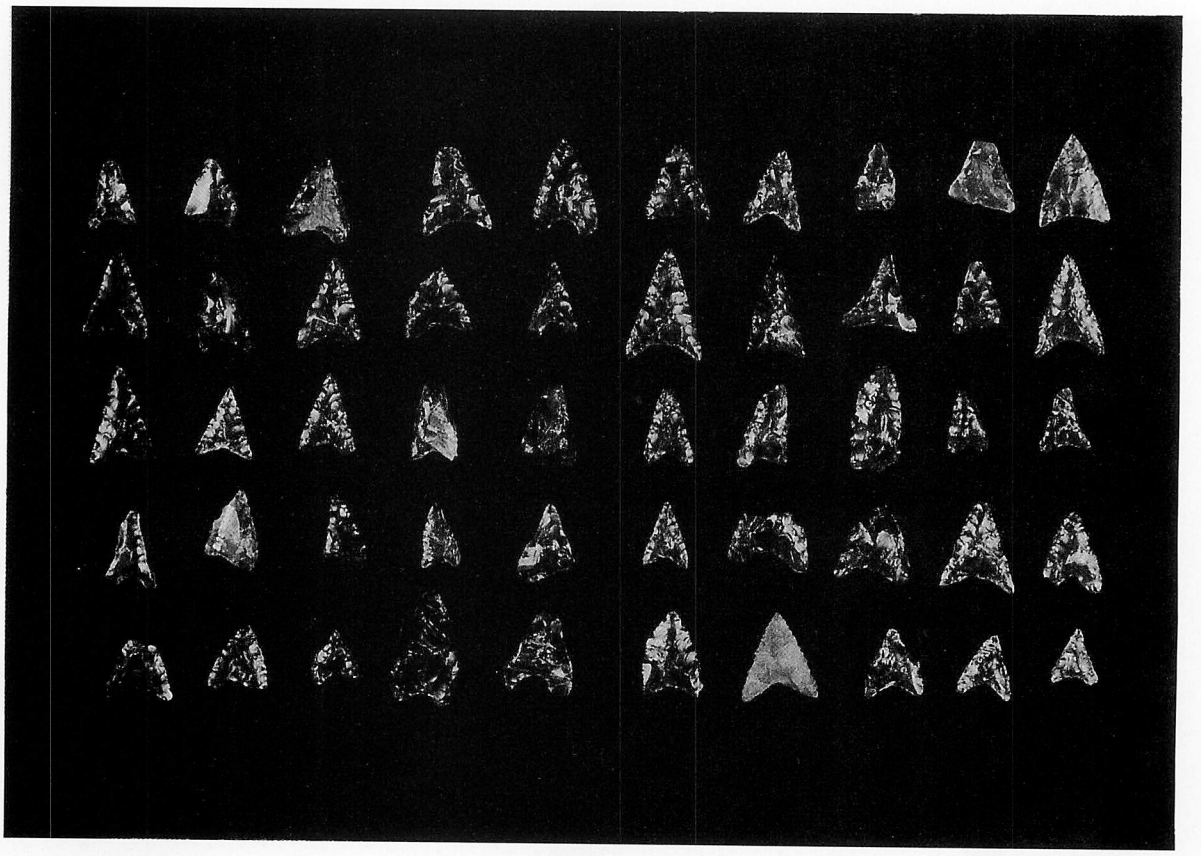


土製円盤

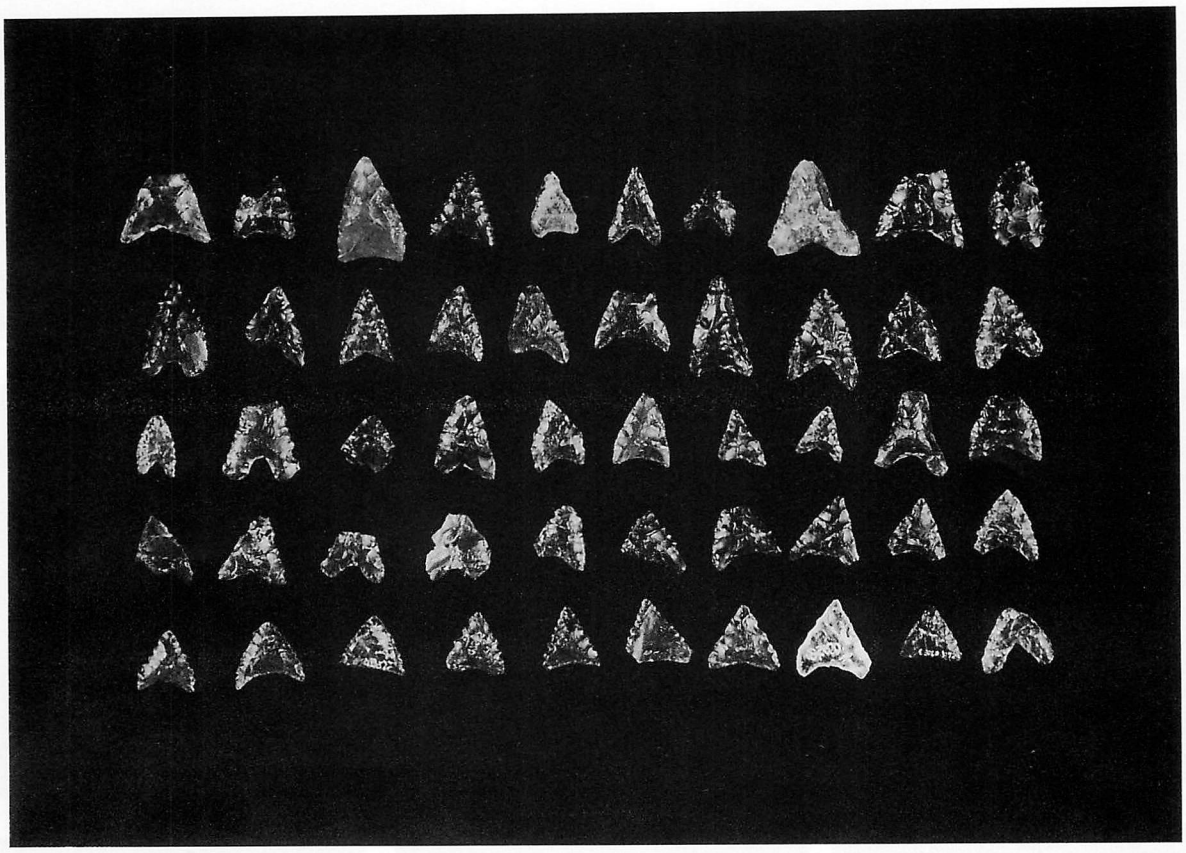
曽利Ⅲ式期釣手土器



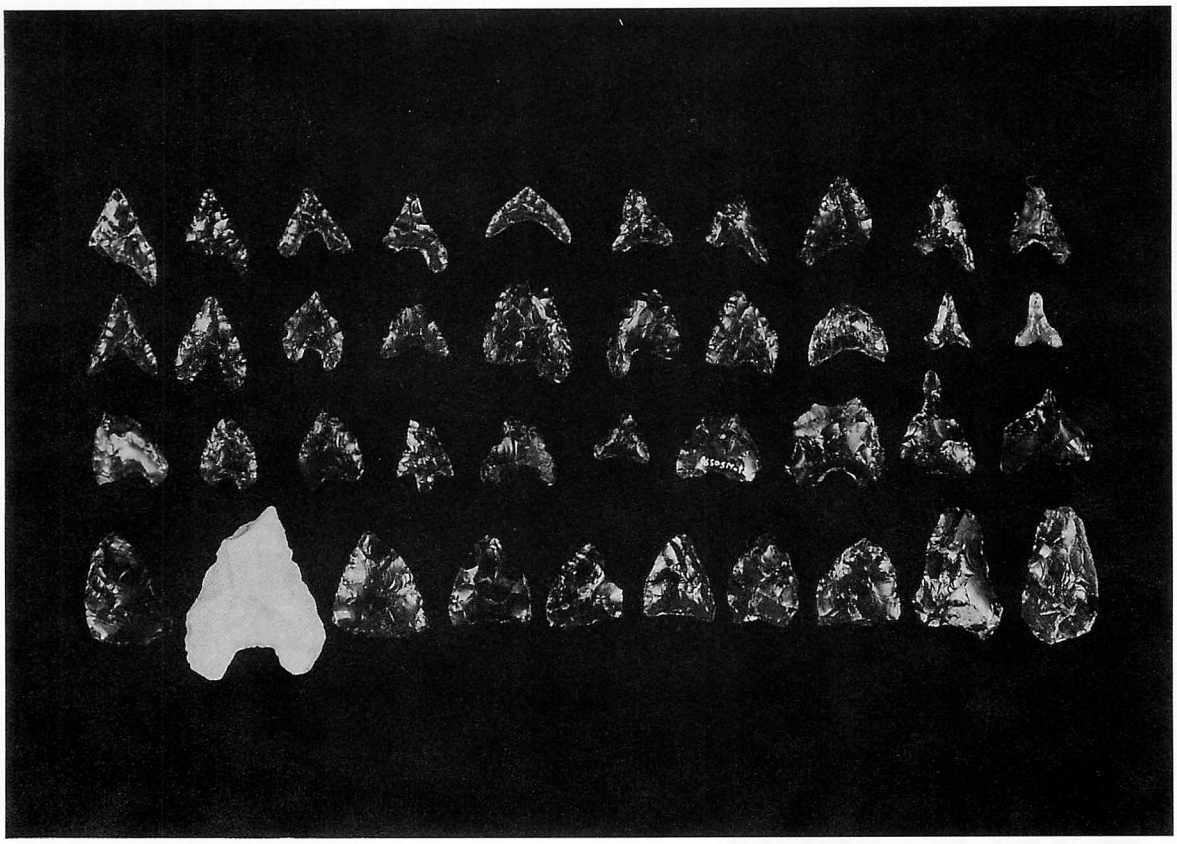
石鏃 1



石鏃 2

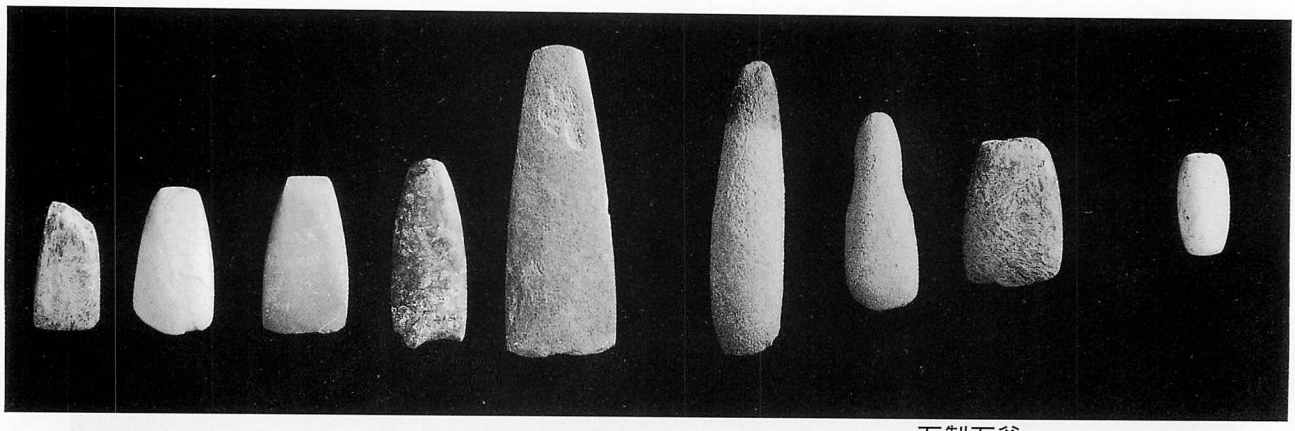


石鏃 3

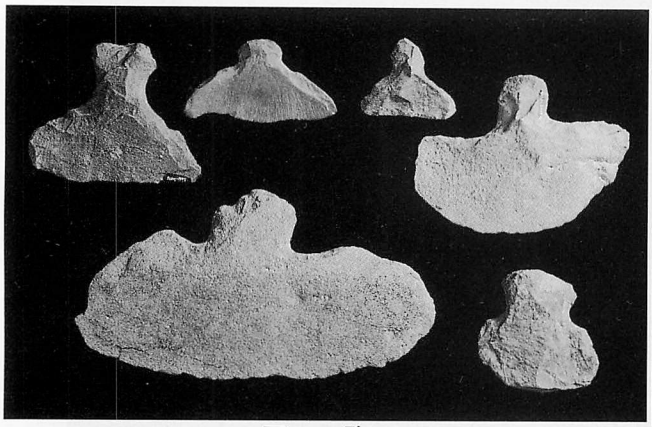


石鏃 4

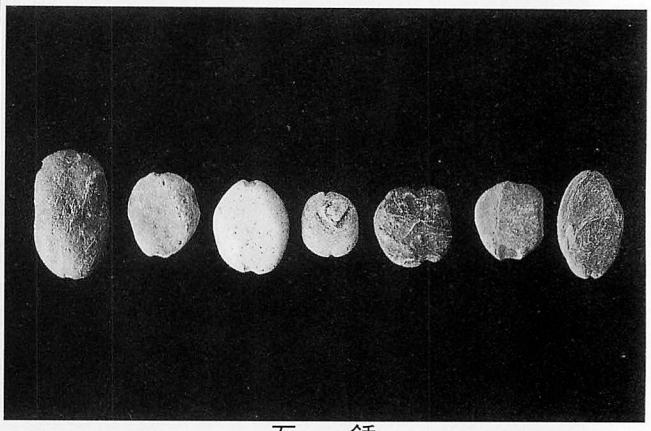
写真31　遺構外出土遺物



石製石斧

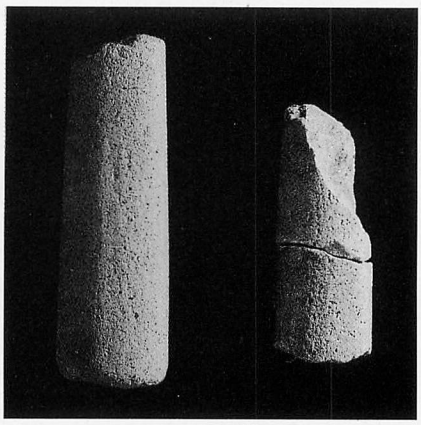


石　匙



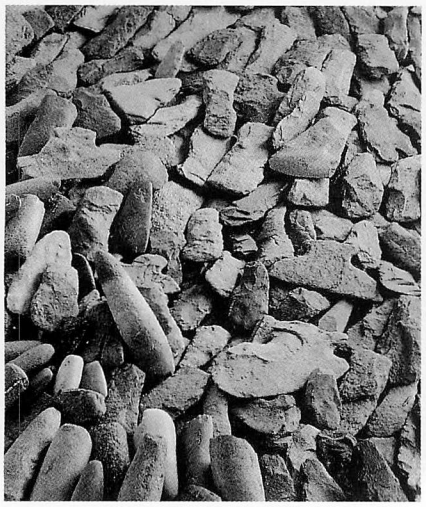
石　錘

大型石棒

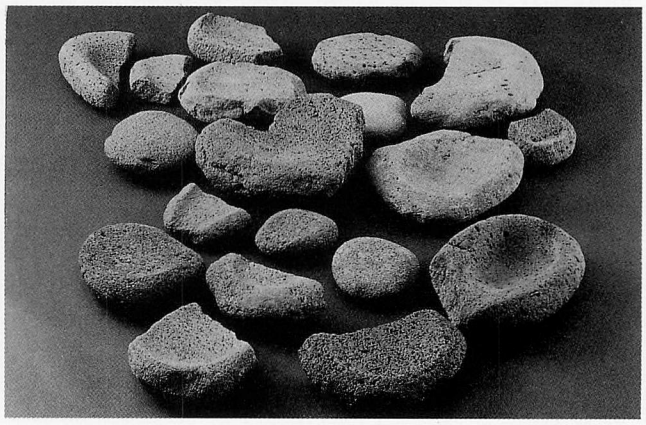


石　棒

小型石皿



打製石斧・石匙



石　皿

報告書抄録

ふりがな	しおせしたっぱらいせき
書名	塩瀬下原遺跡
副題	桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第185号
著者名	吉岡弘樹
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508　山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL055－266－3016
印刷所	㈱少國民社
発行日	2000．12

塩瀬下原遺跡概要

所在地	山梨県大月市梁川町塩瀬字下原地内
	25,000分の1地形図　上野原
	位置　東経　139°36′00″　北緯　35°03′15″　標高　237.5m
	市町村コード　19326
市町村コード	19206
調査原因	桂川流域下水道終末処理場建設に伴う事前調査
調査期間	1995年5月15日～1996年3月29日　1996年5月15日～12月26日 1997年4月22日～12月25日
調査面積	12,800㎡
縄文時代	
主な遺構 主な遺物	住居跡　埋設土器　土坑　集石土坑　屋外炉 土器類　石器類
特記事項	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第185集

2000年12月22日　印刷
2000年12月28日　発行

塩瀬下原遺跡

―桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査―

編集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL　055－266－3016
発行　山梨県教育委員会
山梨県土木部
印刷　株式会社　少国民社